

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第161集

な ご や じょうさん の ま る い せき
名古屋城三の丸遺跡Ⅷ

2008

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、今回で第8次となります。この広大な遺跡には名古屋城が築かれた江戸時代ばかりではなく、それ以前の戦国期の那古野城の築城があり、中世の寺院跡、古墳時代・弥生時代の建物跡や墓が検出されるなど、調査のたびに各時代の人々の暮らしの有り様が鮮やかに立ち現れてきます。

今回の調査でも、文字通り「新しい」発見がありました。第二次大戦時、おそらく終戦間際に陸軍により築造された幾つもの防空壕です。「爆撃の跡」といったような戦争の惨禍を直接に示す資料ではありませんが、残されていた当時のモノが伝える兵士の「日常性」に愕然とし、少なからずショックを受けました。「昭和」という考古学の世界では極めて新しい時代、しかも「戦争」の痕跡と向き合う貴重な機会であったと考えています。

戦後60年を過ぎた今日、これら大切な歴史を語る情報も大部分が伝聞による知識になりつつあります。こうした出土資料および掘り出された地点の歴史が伝える意味は、更に重要度を増すことになるでしょう。

調査にあたりまして、関係諸機関、周辺地域のみなさまから多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げます。

今回の調査成果が、地域の歴史理解と埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成20年3月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例　言

1. 本書は愛知県名古屋市中区丸の内に所在する名古屋城三の丸遺跡（なごやじょうさんのもるいせき：県遺跡番号 007027）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局營繕部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は計 1,089 m²である。
3. 発掘調査は平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月の期間で実施した。また、整理および報告書作成作業は、平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、朝日航洋株式会社の支援を受けて行い、池本正明（主査）・加藤博紀（調査研究員；現 県立津島東高等学校教諭）・武部真木（調査研究員）が担当した。なお、支援スタッフは第 1 章 1 に記す通りである。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、名古屋市教育委員会、国土交通省中部地方整備局營繕部、名古屋高裁・地方・簡易裁判所をはじめとして、多くの関係諸機関の協力を得た。
6. 本書の執筆は、鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭 剛・薩山誠一・川添和暉・武部真木が分担し、編集は武部が行った。なお自然科学分析結果は（株）パレオ・ラボの報告書を掲載した。
7. 整理作業は武部が担当した。作業にあたっては下記の方々、関係機関の助力を得た。

今田清美・時田典子・水野留香・塙田春美・小川かね、前田弘子・村上志穂子（以上整理補助員）
（株）パレオ・ラボ、（株）ティケイトレード・写真工房 遊、（株）東都文化財保存研究所
8. 本書に示す座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。表記は世界測地系を用いている。
9. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 写真および図面などの調査に関する記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

（財）愛知県教育・スポーツ振興財團 愛知県埋蔵文化財センター
〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24 (0567-67-4164)
12. 本書を作成するにあたり、下記の多くの方々から多大なご指導とご助言を得た。
記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

浅川範之 伊藤秋男 伊藤厚史 井上喜久男 大西雅広 金子健一 神戸聖吾
佐藤公保 仲野泰裕 中村隆雄、菊池 実 横崎彰一 服部 郁 藤澤良祐
森本伊知郎 山下峰司 渡辺 誠

目 次

第1章 調査の概要

1 調査の経緯と経過	(加藤)	1
2 周辺の自然環境	(鬼頭)	5
3 遺跡周辺の歴史的環境	(加藤)	8

第2章 遺構

1 遺構の概要と基本層序	(武部)	16
2 中世・戦国時代	(武部)	22
3 江戸時代	(武部)	26
4 近代以降	(武部)	33

第3章 出土遺物

1 出土状況の概要	(武部)	36
2 土器・陶磁器	(武部)	36
3 ガラス製品・その他	(鈴木・武部)	100
4 金属関連資料	(蔭山)	105
5 石器・石製品	(川添・武部)	113

第4章 自然科学分析

1 土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定	(株)パレオ・ラボ	115
2 動物遺体の同定 (戦国期・近世・近代)	(株)パレオ・ラボ	118

第5章 総 括

(武部) 126

付表

登録遺物一覧表

図版

基本平面図

写真図版 (遺構・遺物)

写真図版 目次

- 遺構 1
- 1 調査区南東隅（北西から）
 - 2 調査区全景（西から）
- 遺構 2
- 3 戰国期の堀（605SD ほか、北から）
 - 4 堀（605SD 北壁での断面、南から）
 - 5 堀（605SD ベルト断面、北から）
 - 6 溝（606SD-e 地点断面、南から）
- 遺構 3
- 7 上面 東半部分
(戦国期の堀・区画溝検出状況、北から)
 - 8 溝（東西にのびる 603SD、東から）
 - 9 溝（南北にのびる 606SD、南から）
 - 10 溝断面（603SD 東壁にて、西から）
 - 11 溝断面（606SD-a 地点、北から）
 - 12 溝断面（606SD-b 地点、南から）
- 遺構 4
- 13 下面完掘状況
(戦国期の堀・区画溝、北東から)
 - 14 溝断面（607SD、東から）
 - 15 堀断面（606SD-f 地点 北壁にて、南から）
 - 16 溝完掘状況（607SD、西から）
- 遺構 5
- 17 屋敷境の溝と柱穴列（北から）
 - 18 調査区北東隅壁面（南から）
 - 19 土坑完掘状況（085SK、北から）
 - 20 土坑遺物出土状況
(085SK ベルト南側部分、東から)
- 遺構 6
- 21 調査区北西部廃棄土坑群（西から）
 - 22 土坑遺物出土状態（492SK、北から）
 - 23 土坑断面（389SK、南東から）
 - 24 土坑完掘状況と調査区北壁
(387SK,492SK 付近、南から)
 - 25 土坑完掘状況と壁面
(389SK、南から)
- 遺構 7
- 26 土坑遺物出土状態と壁面（380SK、南から）
- 遺構 8
- 27 土坑検出状況
(413SK 上層掘削段階、南東から)
 - 28 土坑遺物出土状態
(413SK の棧瓦と焼土塊、北から)
 - 29 土坑完掘状況（413SK、東から）
 - 30 土坑遺物出土状態
(153SK 胎衣埋納遺構か、東から)
- 遺構 9
- 31 土坑遺物出土状態（387SK、南東から）
 - 32 土坑ベルト断面（387SK、東から）
 - 33 地下室断面（381SK、南から）
- 遺構 10
- 34 地下室完掘状況（381SK、南東から）
 - 35 下層遺物出土状態（381SK、東から）
 - 36 磁石を伴う土坑（460SK、北から）
 - 37 磁石を伴う土坑（120SK、北から）
 - 38 磁石を伴う土坑（326SK、南から）
 - 39 磁石を伴う土坑（412SK、東から）
 - 40 磁石を伴う土坑（460SK、北から）
 - 41 磁石を伴う土坑（408SK、南から）
 - 42 磁石を伴う土坑（409SK、東から）
 - 43 磁石を伴う土坑（495SK、北から）
- 遺構 9
- 44 版築状理土断面（196SK、手前が東）
 - 45 土坑最下層（196SK、上から）
 - 46 版築状理土（部分）と段削り出し
(196SK、南から)
- 遺構 10
- 47 土坑検出状況（196SK、北西から）
 - 48 版築状理土最下層（194SK 付近、南から）
 - 49 土坑断面（832SK、東壁にて）
 - 50 土坑最下層（553SK、西から）
- 51 溝完掘状況（026SD,027SD 重複、東から）
- 52 溝断面（東壁 026SD,027SD 付近、西から）
- 53 調査区南東隅壁面（西から）

54 調査区南壁面（606SD 付近、北から）	遺物 1 磁器染付碗類
55 石材廃棄 検出状況 （001SD,002SD、北西から）	遺物 2 磁器染付碗皿類
56 石材廃棄状況（001SD 部分、北から）	遺物 3 磁器染付・青磁・陶器
遺構 11	遺物 4 陶器碗類
57 防空壕埋土（090SD、西から）	遺物 5 陶器碗皿類
58 防空壕出入口スロープ（340SX、北から）	遺物 6 陶器碗皿類
59 防空壕完掘状況（090SD、西から）	遺物 7 陶器類（灯火具・その他）
60 防空壕と地下室（340SX と 381SK、北東から）	遺物 8 陶器類（その他）
61 防空壕と当時の掘削痕（340SX 周辺、北から）	遺物 9 陶器類（その他）
62 産業廃棄物の分別 （煉瓦、石材、コンクリート、鉄筋等）	遺物 10 陶器類（貯蔵・調理具）
遺構 12	遺物 11 土師質製品（鍋・釜・皿・その他）
63 上面完掘状況（南東から）	遺物 12 土師質製品（皿・その他）・玩具類
64 下面完掘状況（東半部分、北から）	遺物 13 玩具類・瓦・近代陶磁器・石器
遺構 13	遺物 14 近代陶磁器
65 下面完掘状況（中央部分、北から）	遺物 15 近代陶磁器
66 下面完掘状況（西半部分、北から）	遺物 16 歯ブラシ・近代陶磁器・金属製品
	遺物 17 金属製品
	遺物 18 ガラス製品

挿図 目次

図 1 愛知県の位置	1	図 36 389SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)	54
図 2 名古屋城域の発掘調査地点	2	図 37 381SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	55
図 3 調査区の位置	3	図 38 381SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	56
図 4 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図	6	図 39 381SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	57
図 5 調査地点層敷割推定図	8	図 40 381SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	58
図 6 1910年(明治10)の名古屋城	11	図 41 381SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	59
図 7 1921年(大正10)の名古屋城	11	図 42 381SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)	60
図 8 1945年(昭和20)の名古屋城	12	図 43 381SK 出土陶磁器 7 (S=1/3)	61
図 9 基本層序概念図	16	図 44 492SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	62
図 10 南壁土層断面図 (S=1/40)	17	図 45 492SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	63
図 11 東壁土層断面図 -1 (S=1/80)	17	図 46 492SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	64
図 12 東壁土層断面図 -2 (注記)	18	図 47 492SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	65
図 13 北壁土層断面図 -1 (S=1/80)	19	図 48 492SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	66
図 14 北壁土層断面図 -2 (S=1/80)	20	図 49 387SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	67
図 15 北壁土層断面図 -3 (注記)	21	図 50 387SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	68
図 16 北壁土層断面図 -4 (注記)	22	図 51 387SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	69
図 17 堀 605SD 断面図 (S=1/40)	23	図 52 387SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	70
図 18 区画溝 607SD・603SD・606SD-a 断面図 (S=1/40)	24	図 53 387SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	71
図 19 196SK 断面図 -1 (S=1/40)	26	図 54 413SK 出土陶磁器 (S=1/3)	72
図 20 196SK 断面図 -2 (S=1/40)	27	図 55 北西部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)	73
図 21 土坑 389SK・381SK 断面図 (S=1/40)	28	図 56 北西部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)	74
図 22 土坑 492SK 遺物出土状態 (S=1/30)	29	図 57 包含層(北西部土坑群)出土陶磁器 (S=1/3)	75
図 23 土坑 387SK 遺物出土状態 (S=1/30)	30	図 58 110SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	76
図 24 土坑 413SK 断面図 (S=1/30)	31	図 59 110SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	77
図 25 防空壕配置図	33	図 60 110SK 出土陶磁器 2 (S=1/2,1/3)	78
図 26 中世・戦国時代の陶磁器 (S=1/3)	37	図 61 085SK 出土陶磁器 (S=1/3)	79
図 27 466SE 出土陶磁器 1 (S=1/3)	45	図 62 北東部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)	80
図 28 466SE 出土陶磁器 2 (S=1/3)	46	図 63 北東部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)	81
図 29 466SE 出土陶磁器 3 (S=1/3)	47	図 64 包含層(北東部土坑群)出土陶磁器 1 (S=1/3)	82
図 30 466SE 出土陶磁器 4 (S=1/3)	48	図 65 包含層(北東部土坑群)出土陶磁器 2 (S=1/3)	83
図 31 389SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	49	図 66 包含層(北東部土坑群)出土陶磁器 3 (S=1/3)	84
図 32 389SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	50	図 67 その他の地点の出土陶磁器 (S=1/3)	85
図 33 389SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	51		
図 34 389SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	52		
図 35 389SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	53		

図 68 389SK 出土平瓦・丸瓦 (S=1/4)	86	図 83 その他の素材の製品 (S=1/3)	105
図 69 389SK 出土軒丸瓦・丸瓦・軒棧瓦 (S=1/4)	87	図 84 金属製品 1 (S=1/3)	107
図 70 381SK 出土軒棧瓦 (S=1/4)	88	図 85 金属製品 2 (S=1/3)	108
図 71 380SK・492SK・413SK 出土軒棧瓦 (S=1/4)	89	図 86 金属製品 3 (S=1/3,1/4)	109
図 72 飾り瓦・刻印 (S=1/4)	90	図 87 金属製品 4 (S=1/4)	110
図 73 近代 出土陶磁器 1 (S=1/3)	93	図 88 寛永通宝拓本 (S=1/1)	112
図 74 近代 出土陶磁器 2 (S=1/3)	94	図 89 勝川遺跡出土鐵 (S=1/4)	112
図 75 近代 出土陶磁器 3 (S=1/3)	95	図 90 石器 (S=1/2,1/3)	113
図 76 近代 出土陶磁器 4 (S=1/3)	96	図 91 石製品 (S=1/3)	114
図 77 近代 出土陶磁器 5 (S=1/3)	97	図 92 曆年較正結果	117
図 78 近代 出土陶磁器 6 (S=1/3)	98	図 93 検出された貝類	123
図 79 近代 出土陶磁器 7 (S=1/3)	99	図 94 検出された魚類骨	124
図 80 各遺跡ガラス瓶組成	101	図 95 検出された爬虫類と哺乳類骨	125
図 81 ガラス製品 1 (S=1/3)	102	図 96 中世・戦国期主要遺構の変遷	126
図 82 ガラス製品 2 (S=1/3)	103	図 97 武家屋敷南辺境界の推定図	128
		図 98 屋敷地 1・2 境界の推定図	129

挿表 目次

表1 調査日誌抄	3	表11 近世陶磁器組成表（387SK）	42
表2 調査担当者	3	表12 名古屋城三の丸遺跡のガラス製品組成表	104
表3 名古屋城三の丸遺跡周辺で みられる地質	5	表13 測定試料及び処理	115
表4 屋敷地拝領者の変遷	9	表14 放射性炭素年代測定及び 暦年較正の結果	116
表5 拝領した尾張藩士の事跡	9	表15 動物遺体種名表	119
表6 関連年表-1（明治から終戦まで）	14	表16 貝類数量表	120
表7 関連年表-2（明治から終戦まで）	15	表17 魚類数量表	124
表8 近世陶磁器組成表（466SE）	39	表18 飛虫類および哺乳類数量表	124
表9 近世陶磁器組成表（389SK）	40	表19 防空壕の構造と規模	130
表10 近世陶磁器組成表（381SK）	41		

第1章 調査の概要

1 調査の経緯と経過

名古屋市内の中心部に位置する著名な史跡、近世名古屋城の敷地のうち、本丸と二之丸の東側および南側に設けられた「三之丸」が名古屋城三の丸遺跡の範囲である。遺跡の調査は、これまでに18次（二の丸地区も含めると21次）に及ぶ（図2）。1975年に開始されて以来、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県埋蔵文化財センターなどにより断続的に調査が行われている。

平成17（2005）年度、愛知県教育委員会へ当該地点の埋蔵文化財所在の照会があり、依頼を受けた愛知県教育委員会が現地において遺跡の有無確認調査を行った。その結果により当該範囲は発掘調査の必要があると判断された。今回の調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局宮崎部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として（財）愛知県教育・スポーツ振興財團 愛知県埋蔵文化財センターが行った。

調査期間は平成18年11月～平成19年3月であり、調査面積は、1089m²である。調査は池本正明（主査）、加藤博紀（調査研究員）、武部真木（調査研究員）が担当して行った。また、調査の支援を（株）朝日航洋に委託して行った。スタッフは表2に示す通りである。

平成19（2007）年度4月より整理作業を開始し、年度内に報告書を作成・刊行した。資料整理作業にあたっては、科学分析を（株）パレオ・ラボに依頼し、遺物実測およびデジタルトレース業務はティケイトレード（株）、遺物の写真撮影を写真工房遊、金子知久氏に委託して行った。

（加藤博紀）

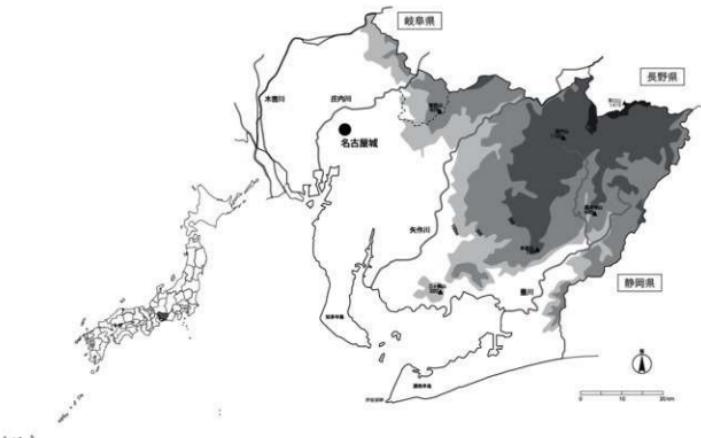
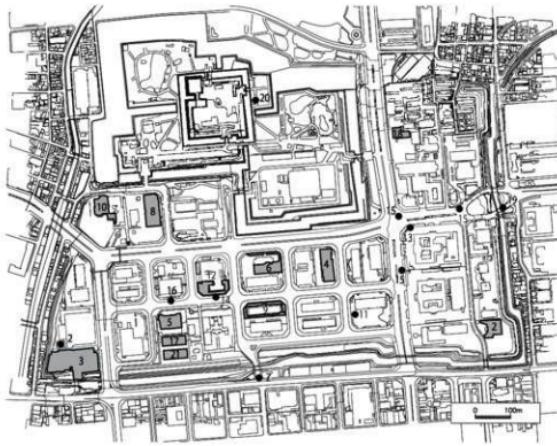


図1 愛知県の位置



地点名	調査年	調査主体	文 献
1 名古屋城二の丸庭園地点	1975	名古屋市教育委員会	「名古屋城二ノ丸庭園跡調査報告書」
2 名古屋市公館地点	1987～1988	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡－1・2・3次調査の概要」
3 愛知県図書館地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅰ」
4 名古屋城一地区同字香港	1988	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅱ」
5 聖母堂古戦闘跡地点	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅲ」
6 愛知県県政本部跡地点	1991	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅳ」
7 本町御門地点	1991	名古屋市教育委員会	「名古屋城本町御門跡発掘調査報告書」
8 中部電力地下変電所地点	1992～1993	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書－構造編・遺物編」
9 愛知県三の丸百合地	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅴ」
10 名古屋市美術館跡地点	1993～1994	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書」
11 鶴崎絞糸室地点	1995	鶴崎絞糸室	「代替鶴崎絞糸室施設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
12 名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書」
13 地下鉄駅入口地点	1998	名古屋市教育委員会	「名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書」
14 下水道管渠地	1999～2000	名古屋市教育委員会	「下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書」
15 NTT電話工事地点	2000	㈱バスコ	「名古屋城三の丸遺跡－平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
16 ガス管埋設工事地点	2001	㈱バスコ	「名古屋城三の丸遺跡－ガス管埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
17 地方競馬裁判所跡地	2001	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅵ」
18 国立名古屋病院地点	2002	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅶ」
19 東清水橋東交差点地点	2002	名古屋市教育委員会・㈱バスコ	「愛知県埋蔵文化財情報Ⅸ」
20 名古屋城本丸馬出門地点	2003～2005	名古屋市教育委員会・㈱バスコ	「特別史跡名古屋城本丸馬出石垣修復工事実照調査報告書－元都督門地の調査」
21 地方競馬裁判所跡地	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	「名古屋城三の丸遺跡Ⅷ」

図 2 名古屋城域の発掘調査地点

表1 調査日誌 抄

2006(平18) 11月16日	作業工程等打ち合わせ
11月22日	重機による土表削ぎ
11月30日	発掘作業による削削作業開始
12月26日	産業廃棄物搬出開始
2007(平19) 1月12日	伊藤史氏来訪
1月16日	全体撮影(北側裁判所建物屋上から)
1月17日	伊藤秋男氏来訪
1月24日	小田實貴氏来訪
1月25日	ラジコンによる回転撮影・全体撮影(高所作業車から)
1月26日	全体撮影(北側裁判所建物屋上から)・傾斜写真撮影
2月8日	森本伊知郎氏来訪
2月15日	安全ヒトロール
2月20日	高木さとし 様 葬儀実務
2月21日	横崎彰一氏による調査指導・ラジコンによる回転撮影
2月22日	全体撮影(裁判所建物屋上および高所作業車から)
3月1日	埋蔵文化財センター運営協議会視察
3月2日	菊池充氏・伊藤史氏来訪
3月3日	規定説明会
3月6日	東壁堆積層序実測
3月7日	北壁堆積層序実測
3月13日	井戸(460SD)断ち割り調査
3月14日	渡辺氏による遺物指導
3月15日	補足調査完了
3月19日	埋め戻し

表2 調査担当者

愛知県埋蔵文化財センター 調査担当

主査	池本正明
調査研究員	加藤博紀
調査研究員	武部真木

支援スタッフ

現場代理人	浅田良治
調査補助員	楠部博世
測量技師	伊藤正博
測量助手	水野聰哉

朝日航洋株式会社 中部空情支社



図3 調査区の位置



1 調査前風景
2 表土掘削作業
3 調査区北方にみえる名古屋城本丸
4 防空壕（SX340）掘削作業



5・6 2007年3月3日
現地説明会開催



2 周辺の自然環境

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区丸の内にある。名古屋市は愛知県の西に位置し、名古屋城三の丸遺跡の調査地点は名古屋市の中でも北西部にあたる（図4）。調査地点から約4.8km西には名古屋市内を流下する主要な河川のひとつである庄内川が南西へ流れ、庄内川からさらに西方約20.2kmには愛知県と岐阜県・三重県とを境する木曽川が、木曽川から約0.7km西には長良川、長良川よりさらに約3.7km西には揖斐川がそれぞれ南流し、伊勢湾にそぞごこんでいる。今回の調査地点は東海道本線・新幹線の名古屋駅から北東へ約1.8kmで、かつ現在の名古屋城天守閣から南へ約0.8kmの距離にある標高約13mの「熱田台地」とよばれる台地の北西縁部に立地する。台地の直下にひろがる標高およそ5.0mよりも低いところには地質図において白色で表される完新統が分布しており、いわゆる濃尾平野の沖積低地を形成している（図4）。調査地点での台地と沖積低地との標高差は約8mである。なお、熱田台地の西縁に沿って名古屋港へと流れる堀川は慶長十五年（1610年）の名古屋城の築城に伴い開削され、慶長十六年（1611年）に掘割りを終える人工的な水路である（服部、1981）。

名古屋城三の丸遺跡周辺地域の地下地質について、地層は全体として砂礫・泥互層からなり下位より東海層群（新第三系）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層下部（上部更新統）、熱田層上部（上部更新統）、第一疊層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）などの第四系の累層から構成される（表3・図1）。これらのうち中部更新統は丘陵～高位段丘を、上部更新統は中・低位段丘を、上部更新統最上部～完新統は沖積低地を構成している。名古屋城三の丸遺跡の立地する熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。この熱田層および周辺地域の地形・地質に関しては松澤・嘉藤（1954）による記載以来、地質学的に多くの研究・報告が行なわれてきた（総理府資源調査会、1956；桑原、1968、1975；名古屋地盤調査会、1969；濃尾平野第四系研究グループ、1977；桑原ほか、1982；坂本ほか、1984；坂本ほか、1986）。桑原（1975）は熱田層を最下部層・下部層・

表3 名古屋城三の丸遺跡周辺でみられる地質

地質時代		層序		
	完新世	沖積層		
		後期	鳥居松疊層（低位 大曾根疊層（段丘疊層）	熱田層（中位段丘疊層）
新生代	第四紀			
	更新世	前期	八事層 唐山層	
新第三紀	鮮新世	東海層群	矢田川累層	

坂本ほか（1984）、坂本ほか（1986）を参考に鬼頭が作成

上部層に区分した。熱田層最下部層は濃尾平野の中央部の地下にのみみられる砂層である。下部層は濃尾平野の地下全域に分布し、地表では熱田台地にのみ露出する海成粘土層である。熱田海進（濃尾平野地下第四系研究グループ、1977）とよばれる最終間氷期の海進堆積物と考えられる。本層上限面の深度は濃尾平野西縁部では-140mにおよぶが、熱田台地では10m以下である。上部層も濃尾平野の地下全域に分布する。地表では熱田台地と守山台地に露出する。主に砂層からなり、シルト・粘土層やレンズ状の礫層も挟まれる。層厚は濃尾平野西縁部で60m以上、熱田台地で30~40mであるという特徴をもつ。

今回の調査では自然科学的な解析を行なわなかったものの、北側に隣接した2001年の調査（松田編、2003）で実施した深掘により、標高7.97~11.20mまでに粗粒砂層と粘土層からなる深掘層序が得られている（鬼頭ほか、2003）。そこでは標高7.97~8.30mにみられる粗粒砂層中の標高8.01mの層準からは阿蘇4テフラ（Aso-4: 86~90 ka (kaは10³年前を表す地質年代単位)）、その直上の標高8.18mの層準からは大山生竹テフラ（DNT: 80±40 ka (木村ほか、1999)）とともに斜方輝石および單斜輝石を主体とし角閃石を含む特徴をもつ、岐阜県と長野県との県境をなす御嶽火山起源の御岳-奈川(On-Ng: 約5万年前(中村ほか、1992))も含まれた。また、黒褐色シルト質

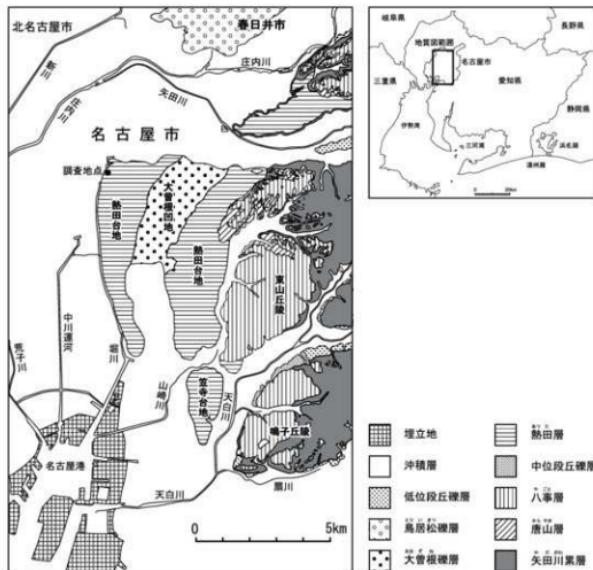


図4 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図
●が調査地点を示す。地質図は坂本ほか(1984)、坂本ほか(1986)を基に作成。

粘土層（標高 11.11 ~ 11.20m）の標高 11.15m からはバブルウォールタイプの火山ガラスが認められる始良 Tn テフラ (AT: 約 2 万 4 千年前 (村山ほか, 1993)) が検出され、さらに始良 Tn テフラが検出された層準よりも上位の標高 11.19m のシルト質粘土層の放射性炭素年代が層年代較正値で 10890-10755 cal yrs BP (PLD-1594) を示し、阿蘇 4 テフラの約 9 万年前以降から始良 Tn テフラの約 2 万 5 千年前、放射性炭素年代測定値の約 1 万年前までの地質年代や数値年代が得られている。

（鬼頭 剛）

【文献】

- 服部範太郎, 1981, 特別史蹟 名古屋城年誌, 名古屋城振興協会, 303p.
- 木村純一・岡田剛明・中山謙博・梅田浩司・草野高志・麻原慶重・館野満美子・植原 雅, 1999, 大山および三瓶火山起源テフラのフィッショントラック年代とその火山活動史における意義, 第四紀研究, 38, 145-155.
- 鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子, 2003, 名古屋城三の丸遺跡地下で確認された熱田層最上部層の層序と古環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡 (VI)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 46-56.
- 桑原 雅, 1968, 潟尾盆地と柏原地塊運動, 第四紀研究, 7, 235-247.
- 桑原 雅, 1975, 潟尾頸盆地の発生と地下の第四系, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 109-182.
- 桑原 雅・松井和夫・吉野道添・牧野 哲, 1982, 热田層の層序と海水準変動, 第四紀, 第四紀総研連絡紙, 22, 111-124.
- 松田 誠編, 2003, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡 (VI)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 60p.
- 松沼勤・嘉藤良次郎, 1954, 名古屋及び付近の地質, 同地質図, 愛知県建築部。
- 中村俊夫・藤井登美夫・施野尚次・木曾谷第四紀温暖化会, 1992, 岐阜県八百津町の木曾川泥流堆植物から採取された埋没樹木の加速器 14C 年代, 第四紀研究, 31, 1.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ビストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討 - タンデットロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代-, 地質雑誌, 99, 787-798.
- 名古屋地盤調査研究会, 1969, 「名古屋地盤図」, コロナ社, 東京, 279p.
- 澁尾平野第四系研究グループ, 1977, 澁尾平野第四系の層序と微化石分析, 地質学論集, 14, 161-183.
- 坂本 享・桑原 雅・糸魚川淳二・高田康秀・藤田浩二・尾上 享, 1984, 名古屋北部地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 64p.
- 坂本 享・高田康秀・桑原 雅・糸魚川淳二, 1986, 名古屋南部地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 55p.
- 総理府資源調査会事務局, 1956, 水奈地域に関する調査研究 第 1 部, 資源調査会資料, 46, 97p.

3 遺跡周辺の歴史的環境

名古屋城三の丸遺跡は近隣も含めると 21 次に亘り、愛知県埋蔵文化財センター、愛知県教育委員会および名古屋市教育委員会などにより発掘調査が実施されている。これらの調査によって、戦国期那古野城期・近世名古屋城期を中心に様々な知見をわざわざにもたらしてくれた。

今回の発掘調査においては、近世以前に加え、近代における三の丸区域の状況を明らかにすることができた。これまでの報告書において、既に近世以前の歴史的環境は語りつくされている感もあるため、ここでは近世以前は今回の調査範囲に関わることを中心に、近代は名古屋城三の丸遺跡範囲のほとんどを占めた旧陸軍第三師団を中心概観しておく。

<戦国時代以前>

文献によると、名古屋台地の北端を占めた愛知郡那古野莊は、平安末期に白河院の近臣菴室頭隆の孫・東大寺別当顯惠が開発し、後白河上皇の女御建春門院に寄進した後、その子孫が領家職を相続し、鎌倉後期には美濃源氏の一族足助氏に渡った。その後、那古野は奉公衆・今川那古野氏の領地となった。

その後、今川那古野氏は嫡流の駿河国守護今川氏から氏豊を迎へ、1522 年(大永 2)頃に尾張への押さえとして那古野城を築城したとされる。そして、1532 年(天文元)または 1538 年(天文 7)に織田信秀に城を奪われ、織田信秀の居城とされた。

この結果、今川那古野氏・織田氏の本拠とされた那古野城には交通路が集まり、旅宿や市が形成されていた景気などが近世の編纂書から窺うことができる。とくに、市場は、那古野に中市場・下市場・今市場という三つの存在が伝えられ、そして今市場の位置が、近世三之丸中小路と本丸から大手門にむかう南北路の交差地点周辺と推測され、また天王坊(現在の東海農政局の地点)は近世名古屋城築城後も移転されることはなく、天王坊を中心に寺社や町並みがあったことが想定されている。今回の調査地点周辺は那古野城の一部に含まれるか、少なくとも地域の中心として多くの民家などがあったことが推測されよう。

<近世>

1582 年(天正 10)頃に那古野城が廃城された後、1609 年(慶長 14)に名古屋城築城が決定され、1615 年(元和元)には本丸御殿が完成、二之丸殿社も 1617 年には完成し、1620 年徳川義直が二之丸御殿に移った。

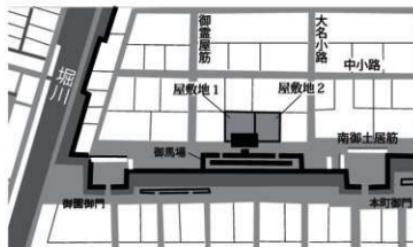


図 5 調査地点屋敷割推定図(享保末年絵図をもとに合成、御馬場北側が調査区)

表4 屋敷地拝領者の変遷

年代	1600	1700	1800	明治維新
屋敷地1	伊奈左助重定 伊奈五右衛門定次 伊奈左門吉次 伊奈左門吉勝	伊奈左門吉次 伊奈左門吉正春 伊奈左門吉正春	下条庄右衛門信周 成瀬竹之助正惟 成瀬大膳正苗 横遠山彦左郎正慶 津田兵宰次郎信周 津田幸次郎信周 津田幸次郎信周 成瀬喜三郎正為 成瀬喜三郎正為 成瀬喜三郎正為 成瀬吉太正平 成瀬吉太正平	成瀬喜三郎正為 成瀬喜三郎正為 成瀬喜三郎正為 成瀬吉太正平 成瀬吉太正平
屋敷地2	大道寺玄蕃直時 大道寺玄蕃直時 大道寺玄蕃直時 大道寺玄蕃直時 寺尾頼母	寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母	寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母 寺尾頼母	下条庄右衛門正員 下条庄右衛門正員 下条庄右衛門正員 下条庄右衛門正員 下条庄右衛門正員

表5 拝領した尾張藩士の事跡

屋敷地	「金城温泉記」 にみる通称	拝領者の名前	土林浜辺にみる事跡
1	伊奈左門	伊奈吉勝	松平忠方に属し、浜板で千石を賜り、同心頭となって五百石を加増。義直に仕えて大阪役に從事する。
	伊奈左門	伊奈吉次	父の家領を継いで寄合となる。寛永21年大番頭となる。 万治2年職を辞して寄合となる。
	伊奈源五右衛門	伊奈定次	端公の時に召しだされ御番番、後に進物御番となる。父の家領の内千二百石を賜る。
	伊奈左助	伊奈重定	定次の弟。家領を継いで寄合となる。元禄10年自殺。
	下条庄右衛門	下条正春	父の家領の内千二百石を賜り、寄合となる。天和元年御書院番頭、3年御用人となり後に端公義直（隠居の意）に仕える。元禄12年三百石加増、13年大寄合となる。
2	下条新内	下条孝正	渡辺新左衛門の子。元禄16年召しだされ御小姓、宝永2年義直の家領の内千二百石を賜る。 宝永4年御書院番頭、享保12年御用となる。
	大道寺玄蕃	大道寺直重	松平忠吉の時に二千石を賜り、義直に仕える。元和6年坂越番頭となり五百石を加増される。
	大道寺玄蕃	大道寺直時	父の道清により二千石を賜り大御番頭となる。慶安2年同心頭となる。万治元年家老職となり二千石を加増される。延宝5年提督五位下。
	大道寺玄蕃	大道寺直政	父の家領二千石を継ぐ。寛文9年返附することを命ぜられ、寛文11年家老職となり二千石を賜る。延宝3年坂越番頭となる。
	寺尾内匠	寺尾就実	延宝3年寺尾直龍丸心し丸山に難居する。その難居として三千石を賜り大寄合となる。6年難流となる。元禄14年御御番同心頭となる。
	寺尾頼母	寺尾好実	宝永元年父の家領を継ぎ、寄合となる。3年に病気によりその領を收公される。
	寺尾悦之助	寺尾实延	好実の家領の内、千五百石を賜り寄合となる。

同時に尾張藩上級藩士の拝領屋敷とされた三之丸区域も整備されていく。1663年(寛文3)には、それまで二之丸内にあった付家老の成瀬・竹脇の屋敷が三之丸へ移転されることによる三之丸内の屋敷替の結果、ほぼ屋敷配置が固定されていく。なお、調査地点南側には「御馬場」がみえる(図5)。この「御馬場」は、「金城温故録」によると「追廻馬場」と記され、「三之丸内片端、本町御門より西御土居筋通り、大名小路筋より、元御盡屋筋の間、惣長百廿間・巾拾間(中土居巾一間玉縁巾壹間)片馬場、巾四間宛。騎射の節は、御土居筋に的を建らる。此御馬場にて、明和三年頃迄は、御馬乗初、遊ばれ(源順公御代より向御屋敷馬場御殿に御式あり)し趣き、近來は三八の日並、小笠原与十郎(騎射犬追物小笠原流師家)騎射稽古の馬場に借用を為す。」(原文は縦書。カッコ内は二段)とあり、1766年(明和3)頃まで藩主の行事にも利用された重要な馬場の一つであった。

今回の調査範囲に関してみると、図5のような屋敷地が想定され、この地には「金城温故録」によると表4のような藩士が屋敷地を拝領した。さらに『土林浜洞』によると、屋敷地を拝領・継承した藩士の事跡を知ることができる。これを表5にまとめる。

表5から見ていくと、屋敷地1に関しては、伊奈重定の自殺により同格で藩主の覚めでたい下条正春へと屋敷替が行われているが、伊奈左門家と下条庄右衛門家とも千二百石の石高を有している。また、屋敷地2に関しては、二千石の大通寺玄蕃家が二代に渡って家老職に就任し石高を増やしたことから、拝領屋敷地が南御土居筋の一番西(現在の愛知県図書館の地点)に移り幕末を迎える。かわって1万石を有し家老職を任せられていた寺尾家が、直龍の乱心により三千石に石高を減らし、大道寺玄蕃家の跡地を拝領することになった。

近世前半に限っていえば、屋敷地1の拝領者は石高が千二百石で、非役の寄合から大番頭や御書院番頭、御用入などへ職をえていることから、格は番頭であったと考えられる。また、屋敷地2の拝領者は石高が二千~三千石で、家老や触流の職をえていることから、格は家老であったと考えられる。いずれにせよ、千石以上の藩士は近世前半において80家内外しかおらず、すべての藩士の1割弱にあたる存在であり、今回の調査範囲を拝領した藩士たちについていえば、屋敷地1は番頭、屋敷地2は家老の格を有した上級藩士が拝領していたと考えられる。

<近代>

1868年(慶応4)1月から始まる戊辰戦争で新政府軍は勝利をおさめた。しかし、この新政府軍は薩長土肥を中心とする藩軍の寄せ集めであり、新政府の直轄軍は全くない状況であった。

農民徵兵を想定した政府直轄軍創設の試みは、大村益次郎にはじまる。大村暗殺後は長州閥の山縣有朋に継承された。しかし、1871年(明治4)西郷隆盛の提案により薩長土三藩からの献兵による御親兵が設置された。この御親兵が日本陸軍の母胎となった。御親兵設置と平行して、同年4月に鎮台が設置された。当初2鎮台であったものは、廢藩置県に伴い8月に4鎮台に改められた。ただし、この時の鎮台兵は旧藩兵によって構成されていた。同じ頃、名古屋でも東京鎮台第三分営として政府直轄軍がおかれたが、やはり大垣・名古屋・安濃津の旧藩兵で構成される軍であった。その封建性を払拭すべく1872年(明治5)11月徵兵告諭、翌年1月に徵兵令が相次いで公布され、血税騷動や徵兵忌避といった農民の抵抗をうけながらも鎮台兵は徐々に旧藩兵から徵兵に切り替えられていった。

徵兵令と同時に名古屋・広島に鎮台が設置された。名古屋鎮台は、名古屋と金沢に師管をもち、名古屋の第六師管では歩兵第六聯隊・砲兵第一大隊・工兵第一小隊・輜重兵第一小隊という編成を有していた。これらの隊が旧名古屋城内に置かれたものと考えられる。



図6 1910年（明治10）の名古屋城
（「名古屋市実測図」『新修名古屋市史 第5巻』付録よりトレース・加筆）



図7 1921年（大正10）の名古屋城
（「隣接町村合併記念名古屋市全図」『新修名古屋市史 第5巻』付録よりトレース・加筆）

鎮台は、農民暴動や不平士族の反乱への鎮圧といった治安維持を目的としておかれたものであり、名古屋鎮台でも 1876 年（明治 9）の伊勢暴動への鎮圧のために出動している。また、西南戦争にも名古屋鎮台兵が派遣された。この結果、大規模な不平士族の反乱はなくなった。その結果、陸軍は国内の治安維持を担う軍隊から外的脅威に備える軍隊、外征が可能な軍隊へと性格を変え始める。それが 1888 年（明治 21）に切り替わられた師団制である。鎮台はすべて師団になったので、近衛師団を含め七個師団編成となった。

名古屋においても 1885 年に歩兵第五旅団司令部、1886 年に第三師団司令部が三の丸に設置され、同年輜重兵第三大隊、1888 年に工兵第三大隊、1892 年に騎兵第三大隊・野砲兵第三聯隊が創設された。すべて三の丸に設けられたが、1910 年（明治 43）作成の「名古屋市實測圖」（図 6）から考えると、創設順に司令部から遠方へと設置されたものと考えられる。この配置状況が敗戦まで基本とされた。

1894年(明治27)甲午農民戦争を契機とし日清戦争が勃発した。そして、日本軍最初の本格的外戦に勝利を収めた。当然、第三師団も出兵している。1896年から始まる戦後の軍備拡張によって五個師団が増設され、合計十三個師団編成で北清事変、日露戦争に臨むことになる。第三師団においても金沢の第六旅團を第九師団(金沢)に移譲し、豊橋に第十七旅團、守山に歩兵第三十三聯隊を創設した。また、騎兵第三大隊を騎兵第三聯隊に改編している。この体制で第三師団は日露戦争に出兵した。日露戦争は、日本軍にとって膨大な人の被害を与えた。そこで、戦争末期に四個師団を創設し、戦後に二個師団を増設した。第三師団においても、第十七旅團を第十五師団(豊橋)に移譲し、岐阜と久居に歩兵聯隊、飛行第一大隊を創設、野砲兵の増員がなされた。また、『第三師団史』や1921年(大正10)作成の「隣接町村併合記念名古屋市全図」(図7)によると、第三師団軍楽隊が日露戦争後から見える。



図8 1945年(昭和20)の名古屋城
〔名城郷内第3師団司令部周辺旧東施設跡間:「中部地方建設局當局事業三十五年史」左一部改変〕

1912年（大正元）の二個師団増設問題を契機とする大正政変で藩閥官僚が批判の対象となった。この世論にもかかわらず、1915年には朝鮮に二個師団を増設して二十一個師団編成となり、ロシア革命への干渉のために1918年（大正8）8月シベリア出兵を実施した。しかし、大正デモクラシーの風潮、第1次世界大戦後の世界的な軍縮傾向と不況によって、陸軍も軍縮をせまられた。1922年（大正11）から小規模な軍縮は行われてきたが、1925年（大正14）陸相宇垣一成によって四個師団廃止を含む大規模な軍縮が実施に移された。この宇垣軍縮は、軍備近代化のために師団廃止などによって経費を省み出したものであり、地元の要望を受けて廃止される部隊駐屯地には別の部隊を移動させる配慮もなされた。第三師団においても、飛行聯隊が浜松に創設されるなどの近代化と同時に、工兵第三大隊も浜松に、騎兵第三聯隊が歩兵第三十三聯隊の久居移転によって空いた守山に移転した。また、「第三師団戦史」によると、第三師団軍楽隊が昭和初期に廃止されている。

以上の改編によって、三の丸においても大きな変動が生じた。工兵第三大隊の跡地は輜重兵第三聯隊と倉庫の敷地拡張に利用された他は、騎兵第三聯隊跡地は名古屋市役所（1933年（昭和8）竣工）、愛知県庁（1938年（昭和13）竣工）へ、軍楽隊跡地は招魂社（1935年（昭和10）遷座・1939年（昭和14）愛知県護国神社と改称）に利用された。この配置状況が敗戦まで続く。（図8参照）

この後、日本は慢性的な中国との戦闘状態からアジア太平洋戦争に突入するが、第三師団も中国戦線を中心として1945年（昭和20）まで動員されることになる。戦局の悪化とともに、1944年7月にサイパンをアメリカ軍が制圧し、ここが日本本土に対する空襲の基地となった。そして、日本各地への本格的な空襲が始まった。

名古屋城では1945年（昭和20）3月12日・同月19日・5月14日に空襲を受けた。護国神社は3月の空襲で、名古屋城天守閣は5月の空襲で炎上するが、調査地点も甚大な被害を受けたと考えられる。

（加藤博紀）

【引用・参考文献】

- 名古屋市、1998.『新修名古屋市史第二巻』
名古屋市、2000.『新修名古屋市史第五巻』
名古屋市、2003.『新修名古屋市史第六巻』
名古屋市、1967.『名古屋叢書統編第十六巻金城温泉誌（四）』
名古屋市、1967.『名古屋叢書統編第十八巻士林浜瀬（二）』
名古屋市、1968.『名古屋叢書統編第十九巻士林浜瀬（三）』
林薰一編、1990.『新編尾張藩家臣団の研究』国書刊行会.p.138, 197
名古屋城管理事務所、1979.『天守閣再建二十周年記念名古屋城古絵図』
陸上自衛隊第10師団司令官編、1965.『第三師団戦史』陸上自衛隊
社団法人建築協会編、1986.『中部地方建設局構事業三十五年史』中部地方建設局
浅川範之、2005.「『真實』の考古学—考古資料にみる軍隊生活」『近現代考古学の射程～今なぜ近現代を語るのか～』六一書房
山中恒・山中典子、1999.『間違いだらけの少年H—鉄道生活史の研究と手引き』頃草書房
瀬戸市歴史民族資料館、1994.『戦争とやきもの』

表6 関連年表-1 (明治から終戦まで)

西暦	和暦	歴史事件	軍需業	その他
			名古屋(第3師団開港)	
1867	慶応 2			
1868	明治 元	王政復古の大号令、戊辰戦争		
1869	明治 2			
1870	明治 3			
1871	明治 4	廢藩置県		
1872	明治 5	8月東京鎮台第三分営設置		
1873	明治 6	7月第3軍管名古屋鎮台設置		
1874	明治 7	佐賀の乱、台湾出兵 3月歩兵第6聯隊(名古屋)軍旗桜受		
1875	明治 8	江華島事件		国産鉄子(電信用)使用 が広がる
1876	明治 9	新風連の乱、秋月の乱、萩の乱 12月伊勢暴動鎮圧のため歩兵第6聯隊派遣		
1877	明治 10	西南戦争		
1878	明治 11	竹橋事件		
1879	明治 12			
1880	明治 13			
1881	明治 14			
1882	明治 15	壬午軍亂		軍人勅諭發布
1883	明治 16			
1884	明治 17	加波山事件、秋父事件、飯田事件、甲申事変	8月豊橋に第18聯隊創設(歩兵第5聯隊隸下)	
1885	明治 18		8月歩兵第6聯隊創設(歩兵第5聯隊司令部設置)	
1886	明治 19		第3軍管名古屋鎮台を第3師団に改称改編、第3師団司令部設置、輸重兵第3大隊創設	
1887	明治 20			
1888	明治 21	工兵第3大隊創設		
1889	明治 22	大日本帝国憲法発布		
1890	明治 23			
1891	明治 24			
1892	明治 25	騎兵第3大隊創設、野砲兵第3聯隊創設		
1893	明治 26			
1894	明治 27	甲午農民戦争、日清戦争 2月出兵(～'95年1月)		アルミの実用化
1895	明治 28	下関条約調印	守山に歩兵第33聯隊創設(歩兵第5聯隊隸下)、第18聯隊を歩兵第17聯隊(舊橋)隸下へ	
1896	明治 29		騎兵第3大隊を騎兵第3聯隊に改編	
1897	明治 30			
1898	明治 31			
1899	明治 32			
1900	明治 33			
1901	明治 34			
1902	明治 35			
1903	明治 36			
1904	明治 37	日露戦争 2月出兵(～'06年1月)		陸軍兵器のアルミニ化進む
1905	明治 38	ポーツマス条約調印		
1906	明治 39			
1907	明治 40		第17聯隊を第15師団(舊橋)移譲	
1908	明治 41			軍隊内幕書改正
1909	明治 42			
1910	明治 43	日韓併合条約		

表7 関連年表-2 (明治から終戦まで)

西暦	和暦	歴史事件	軍関連		その他
			名古屋（第3師団開進）	愛知県下	
1911	明治 44				
1912	大正 元				
1913	大正 2				軍隊教育令制定
1914	大正 3	第一次世界大戦参戦			
1915	大正 4				
1916	大正 5				
1917	大正 6				
1918	大正 7	シベリア出兵宣言	8月出兵（～'19年10月）		
1919	大正 8	ヴェルサイユ条約			
1920	大正 9				
1921	大正 10	シベリア撤兵			
1922	大正 11	ワシントン海軍軍縮条約・九ヶ国条約調印			
1923	大正 12				
1924	大正 13				
1925	大正 14	宇垣軍縮	野砲兵第3聯隊野戦重砲兵第1旅団へ、野戦重砲兵第1旅団第3師団へ、工兵第3大隊浜松へ	歩兵第29旅団（廢稿）第3師団へ、騎兵第3聯隊守山へ移転し第4旅団へ、騎兵第4旅団第3師団へ	治安維持法成立
1926	昭和 元				
1927	昭和 2				
1928	昭和 3	張作霖爆殺事件	5月濟南警備（～29年5月）		真珠洋公布
1929	昭和 4	ニューヨーク株価大暴落、世界恐慌へ	防空演習始まる（第3師団、関連建機開、市民参加）		
1930	昭和 5				
1931	昭和 6	満州事変			
1932	昭和 7	五・一五事件、上海事変			
1933	昭和 8	国際連盟脱退			
1934	昭和 9	ワシントン海軍軍縮条約破裂	4月滿州警備（～36年5月）		
1935	昭和 10				
1936	昭和 11	二・二六事件			米穀自治管理法・重要穀量統制法改正公布
1937	昭和 12	盧溝橋事件、南京事件	8月日中戦争出兵（～41年12月）		
1938	昭和 13				
1939	昭和 14	ノモンハン事件、第二次世界大戦			国家総動員法が施行される。第1回非常用物品に「軍需食器」が指定される
1940	昭和 15				国民総动员令・電力統制令・軍需品工場商業場検査令・総動員物使用規則など公布
1941	昭和 16	真珠湾攻撃	アジア太平洋戦争出兵、華中・華南で戦闘（～46年5月）		軍需品等製造販売制限規則
1942	昭和 17		4月名古屋空襲		企業整備令・生活必需物資統制令・国民学校令・金属類取扱令・重要産業团体令公布・治安維持法改正
1943	昭和 18	ガダルカナル島撤退			硝子葉を駆逐陶磁器が企画整備の対象となる
1944	昭和 19	サイパン島守備隊玉砕	1月名古屋城お坂への網入れ/ (11月公共待避所整備指示) / 12月空襲	12月東南海地震M8.0	石油奉行法・軍需会社法公布
1945	昭和 20	硫黄島守備隊玉砕、東京大空襲、広島・長崎に原爆、ボツダム宣言受諾、敗戦	1月空襲/2月空襲/3月名古屋大空襲（愛知県護國神社等焼失）/4月空襲/5月空襲（名古屋城焼失）/6月空襲/7月空襲	1月三河地震M7.1	
1946	昭和 21	日本国憲法公布	第3師団復員完了		

第2章 遺構

1 遺構の概要と基本層序

<主な遺構>

確認された主な遺構には、中世・戦国期堀（2条）と溝（3条）、近世では武家屋敷に伴う溝、井戸（1基）、土坑・ピット多数があり、近代以降では溝（管理設置、建物基礎など）、防空壕（5基）ほか土坑・ピット多数がある。ピット状の小土坑の多くは、遺物も伴わず時期確定が困難である。ただし、埋土と検出状況の検討から中世以前に遡るものではなく、ほとんどが近世と近代に属するものと考えられる。

中世・戦国期の遺構群は、近世名古屋城築城以前に存在した「那古野城」の一端を構成していたものであり、区画施設（堀・溝）の規模、配置の軸線方向、成立の時期など、未だ不明な部分の多い当該時期の研究に新たな情報を提供することになった。

近世名古屋城三之丸において、今回の調査地点は「南御土居筋」に面する武家屋敷にあたる。これまでの調査成果と絵図等の資料からは、道・屋敷の境界が調査区を分断するように東西方向に通ることが想定された。調査範囲には、南辺土壁に沿う主要な道「南御土居筋」と、これに南面する武家屋敷の境界と正面、所謂「屋敷表」に相当する空間が含まれることになる。調査の結果、近世段階の道と武家屋敷境界については、境界の施設そのものは確定できなきまでも、概ねの位置を示すことが可能となった。また、遺構および遺物の分布は比較的希薄であり、「屋敷表」と「屋敷裏」での差異が明瞭に示されることになったが、詳細には「表」の空間にも建物、近世中期・後期の廃棄土坑が配置される場合があったことが明らかになった。

調査地点は近代以降に激しく変更を受けている。なかでも旧陸軍に関連すると思われる削平が目立ち、これまでの三の丸調査では特に著しい地点といえる。その理由の一つには、この地点が近世の「道」と「屋敷表」であり、近代初期の時点で広い空間が比較的容易に確保できたためと考えられる。

<基本層序>

図9に示すように、調査時点の地表面は標高13m前後であった。近代以降の客土は場所により様相が異なり、調査区南半部分では標高11.8mのレベルで（幕末～）明治初期の整地層が比較的安定した状態で確認されている（図10）。同地点では戦国期の区画溝を削平する近世初期と思われる整地が標高11.5mのレベルで確認され、以後幕末まで数次の整地が行われている。

北半部分では幕末の整地面は確認で

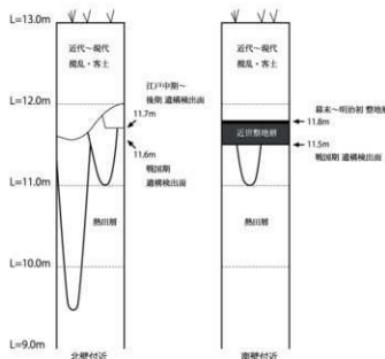


図9 基本層序概念図

きず、終戦前後の防空壕掘削と埋め戻しや建物建設等により損耗されており、検出レベルは一定していない。北壁（図13.14）において確認された近世中期段階の遺構（389SK）検出レベルは標高11.7m、戦国期堀（605SD）の検出レベルは11.6mであった。

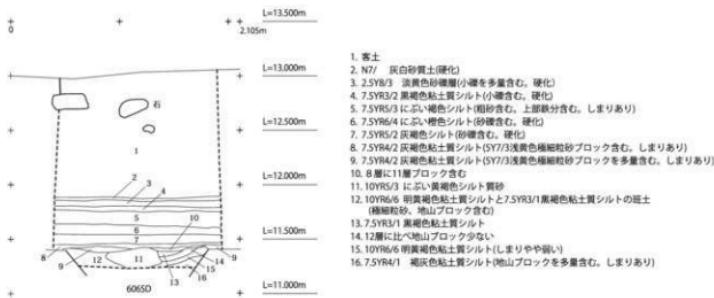
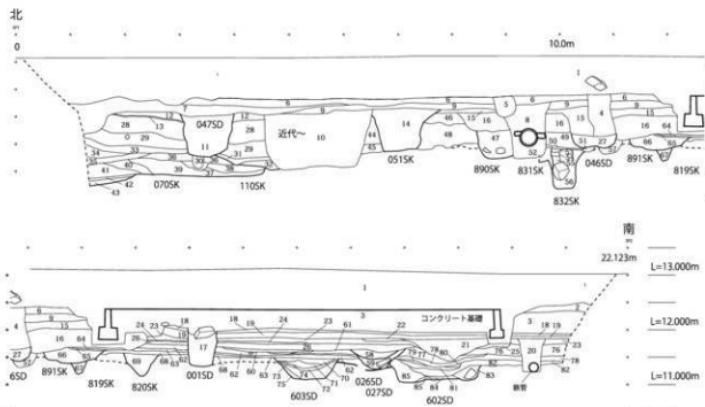


図10 南壁 土層断面図-1 (S=1/40)



1. 壱土
2. 整地土
3. 寄土
4. 寄土(コンクリート、レンガ、瓦、地山ブロックを多量含む)
5. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質土(砂利地ブロックを多量含む)
6. 7.5YR4/1 褐褐色砂質土(砂利地多量含む)
7. 10YR3/3 黄褐色砂質土(炭化物、小礫、地山ブロック含む)
8. 10YR3/3 褐褐色砂質土(炭化物を多量含む。下水管埋設土)
9. 7.5YR4/2 黄褐色砂質土(炭化物、地山大ブロック含む)
10. 10YR4/2 黄褐色砂質土(炭化物を多量含む。埴生、土質、レンガ含む。偏屈)
11. 10YR4/2 黄褐色砂質シルト
〔下層〕炭化物、小礫を多量含む。ピン(食)
12. 7.5YR4/3 褐褐色質土(炭化物、小礫、地山ブロック含む)
13. 10YR4/3 黄褐色シルト(炭化物、粘合土、一部被熱を含む赤褐色化)
14. 10YR4/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔下層〕小礫を多量含む。しまりあり
15. 10YR4/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔炭化物を多量含む。埴生、土質、偏屈含む。偏屈〕
16. 7.5YR4/3 黄褐色質土(炭化物、小礫を多量含む)
17. 2.5YI/1 黄色粘土相(3cmの大礫含む。しまり弱い)
18. N7/1 黄白粘土質土(硬化)
19. 2.5YB/3 淡黄色砂質土(小礫を多量含む。硬化)
20. 7.5YR5/2 褐褐色シルトと7/7.3淡黄色粘土相砂質の混合
〔小礫含む。水道修理原土〕
21. 7.5YR4/2 黄褐色シルト(炭化物充満。偏屈)
22. 10Y5/3 黄褐色砂質土(小礫含む。硬化)
23. 7.5YR2/1 黒褐色シルト(砂質)
24. 7.5YR4/3 黑褐色シルト(7.5YR4/1 黃褐色シルトブロック含む。硬化)
25. 10YR4/2 黄褐色砂質土(偏屈)
26. 10YR4/2 黄褐色砂質シルト
〔小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり〕
27. 10YR4/2 黄褐色砂質土(小礫充満。地山ブロック含む)
28. 10YR4/2 黄褐色シルト
〔炭化物、地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりあり。包含層〕
29. 10YR4/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり。包含層〕
30. 10YR4/2 黄褐色シルト(瓦含む)
31. 7.5YR4/2 黄褐色砂質シルト(埴物、炭化物、小礫含む。しまりあり)
32. 7.5YR4/2 黄褐色シルト(地山地ロック含む。しまりあり)
33. 7.5YR4/2 黄褐色シルト
〔炭化物を多量含む。埴物、小礫含む。しまりあり〕
34. 7.5YR5/2 黄褐色シルト(炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり)
35. 33層+同上
36. 34層+同上
37. 10YR4/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト(界面含む)
38. 33層+CSY6/6(堆積土質)をクロスカム
39. 7.5YR5/1 黄褐色砂質土質(地山ブロックを少量含む。しまりあり)
40. 10YR6/2 黄褐色砂質細粒砂(しまりあり)
41. 39層+同上
42. 7.5YR4/1 黄褐色砂質シルト(炭化物を微量含む。しまりあり)
43. 7.5YR4/1 黄褐色砂質シルト(地山ブロック含む。しまりあり)
44. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト(小礫を少量含む。しまりあり)
45. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔地山地ロックを微量含む。しまりあり〕
46. 7.5YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔地山ブロックを微量含む。しまりあり〕
47. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔地山ブロックを微量含む。しまりあり〕
48. 7.5YR4/3 黄褐色シルト(地山ブロックを少量含む。粘性ややあり)
49. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色シルト(地山ブロック充満。しまりあり)
50. 7.5YR5/2 黄褐色シルト(地山地ロックを少量含む。しまりあり)
51. 10YR4/4 黄褐色砂質シルト(地山ブロックを微量含む。しまりあり)
52. 10YR4/2 黄褐色シルト(地山ブロックを少量含む。しまりあり)
53. 2.5YB/2 黄褐色砂質シルトとSYB/3淡黄色粘土相砂質の土質
54. 10YR5/2 黄褐色シルト
55. 2.5YB/2 黃褐色土
56. 10YR5/3 にじいろ 黄褐色砂質シルト
〔地山ブロックを微量含む。界面含む。しまりあり〕
57. 7.5YR4/2 黄褐色シルト(地山ブロックを微量含む。しまりあり)
58. 7.5YR5/1 黄褐色砂質シルト(しまりあり)
59. 7.5YR5/2 黄褐色砂質シルト(礫含む。しまりあり)

図 12 東壁 土層断面図-2 (注記)

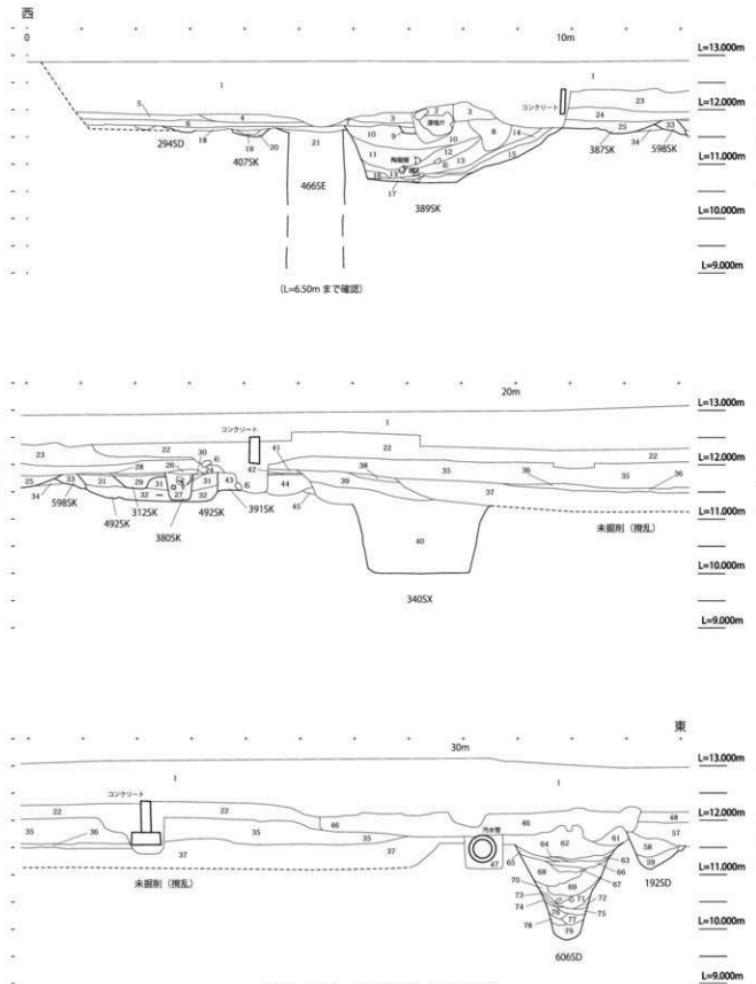
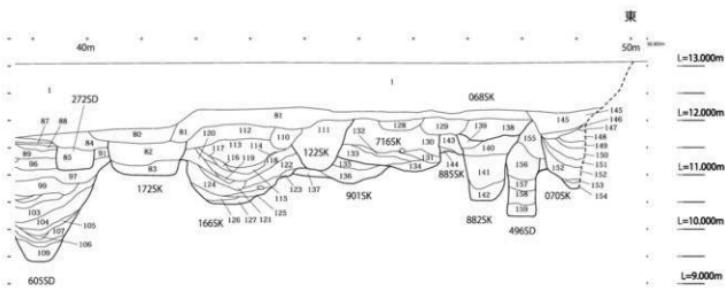
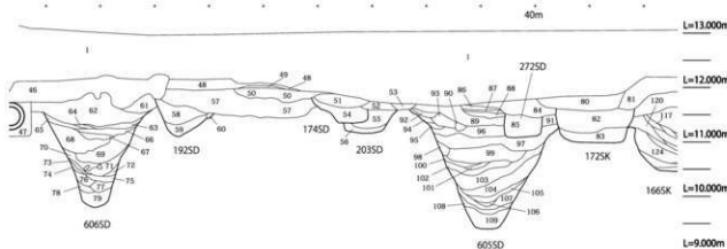


図 13 北壁 土層断面図-1 (S=1/80)



1. 壱土
 2. 7.5YR6/2 深褐色砂質シルト(コンクリート、小礫含む)
 3. 7.5YR5/2 深褐色砂質シルト(小礫含む)
 4. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土
 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色とシルトの混合(レンガ含む)
 6. 7.5YR4/2 深褐色砂質シルト(小礫、炭化物を多量含む)
 7. 6層に亘る褐色土
 8. 10YR4/2 黄褐色砂質シルト(瓦、小礫含む。しまりあり)
 9. 10YR4/1 黄褐色砂質シルト(瓦、小礫含む)
 10. 10YR4/2 深褐色砂質シルト(遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり)
 11. 10YR5/2 底質黃褐色砂質シルト(遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり)
 12. 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂(遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり)
 13. 10YR4/2 底質黃褐色砂質シルト(遺物、炭化物を多量含む。しまりあり)
 14. 7.5YR4/2 深褐色砂質砂(炭化物含む。しまりあり)
 15. 7.5YR4/2 深褐色砂質砂(炭化物含む。しまりあり)
 16. 7.5YR5/1 深褐色シルト(地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり)
 17. 25YR3 深褐色細粒砂と5YR5/1 暗褐色シルトの堆土(しまりあり)
 18. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
 19. 7.5YR4/2 深褐色シルト
 20. 7.5YR4/2 深褐色シルト(10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを多量含む)
 21. 10YR4/1 深褐色砂質シルト(炭化物、小礫、地山ブロックを多量含む。しまりあり)
 22. 磁土(コンクリート含む)
 23. 磁土
 24. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土(レンガ、礫含む。しまりあり)
 25. 7.5YR4/1 褐灰色シルト(遺物を多量含む。0.5cmの大砂礫、炭化物含む。しまりあり)
26. 10YR5/2 深褐色シルト(0.1~0.3cmの大砂礫含む。しまりあり)
 27. 10YR4/2 地面付近砂質シルト(遺物を多量、炭化物を少量含む。しまりあり)
 28. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(地山ブロックを多量含む。しまりあり)
 29. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(炭化物を少量含む。しまりあり)
 30. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト(地盤砂質含む。しまりあり)
 31. 7.5YR4/2 深褐色シルト(炭化物、小礫含む。しまりあり)
 32. 31層に亘る炭化物を多量含む。しまりあり
 33. 7.5YR4/2 深褐色砂質シルト(炭化物、地山ブロックを多量含む。小礫含む。しまりあり)
 34. 7.5YR4/2 深褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
 35. 7.5YR4/1 深褐色砂質土(砂利、礫、炭化物を多量含む)
 36. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと5YR7/1 深褐色細粒砂の堆土
 37. 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂(炭化物、小礫、地山ブロックを多量含む。しまりあり)
 38. 36層と同じ
 39. 10YR5/2 深褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
 40. 7.5YR4/2 深褐色砂質シルトと37/3 深褐色細粒砂の堆土
 41. 7.5YR5/2 深褐色砂質シルト(小礫含む)
 42. 7.5YR5/1 深褐色シルト
 43. 7.5YR4/2 深褐色シルト(地山ブロックを多量含む。炭化物含む。しまりあり)
 44. 7.5YR5/2 深褐色砂質シルト(地山ブロックを多量含む。小礫含む)
 45. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトと7.5YR4/2 深褐色シルトの堆土
 46. 4層と同じ
 47. 下水管配管
 48. 7.5YR4/1 深褐色シルト
 49. 10YR7/1 にぶい黄褐色シルト
 50. 7.5YR4/2 深褐色砂質土

図 14 北壁 土層断面図 -2 (S=1/80)

51. 49層に瓦を多量含む
52. 7.5YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量、炭化物を微量含む。遺物含む。しまりあり
53. 7.5YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量含む
54. 7.5YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。炭化物を微量含む。しまりあり
55. 7.5YR4/2 床面シルトと (地山)ブロックを多量含む。炭化物を微量含む。しまりあり
56. 7.5YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。しまりあり
57. 7.5YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。炭化物を微量含む。しまりあり
58. 10YR7/4 にぶく 黄褐色粘土質土と 7.5YR4/1 浅褐色シルトと 5Y7/3 深黄色粘土質砂礫物の斑土
59. 7.5YR4/2 床面シルトと (地山)ブロックを多量含む。炭化物を微量含む。しまりあり
60. 10YR7/4 にぶく 黄褐色粘土質土と 7.5YR4/1 浅褐色シルトと 5Y7/3 深黄色粘土質砂礫物を多量含む。しまりあり
61. 10YR7/4 にぶく 黄褐色粘土質土と 7.5YR4/1 浅褐色シルトの斑土
62. 7.5YR3/2 壤褐色シルト (極端粘土質) 粘土質砂含む。地山ブロックを少量含む。しまりあり
63. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (極端粘土質) 地山ブロックを少量含む。しまりあり
64. 29層に比べ地山ブロック少ない
65. 7.5YR3/2 壤褐色シルト (地山)ブロックを少量含む。しまりあり
66. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (地山)ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり
67. 10YR7/4 にぶく 黄褐色シルト (7.5YR4/1) 浅褐色粘土質土の斑土と炭化物を微量含む。しまりあり
68. 7.5YR3/2 壤褐色シルト (7.5YR4/1) 浅褐色粘土質土の斑土と炭化物を微量含む。しまりあり
69. 2.5Y7/4 深褐色粘土 (5Y7/3) 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。しまりあり
70. 7.5YR3/1 黑褐色粘土質土と 7.5YR4/6 浅褐色粘土質砂礫物を多量含む。掌大の礫含む。しまりやや弱い
71. 10YR6/6 明褐色粘土質土と 7.5YR4/1 浅褐色シルト (地山)ブロックを少量含む。しまりあり
72. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (地山)ブロックを少量含む。しまりあり
73. 7.5Y2/1 黑褐色粘土質土シルト (5Y7/3) 白色シルト (細粒) 含む
74. 7.5Y2/1 黑褐色粘土質土シルト (5Y7/3) 白色シルト (細粒) 含む
75. 7.5Y2/1 黑褐色粘土質土シルトと 10YR6/6 明褐色粘土質土の斑土 (6)。5Y7/3 床面シルト (細粒) 含む
76. 7.5YR4/2 壤褐色シルト質土 (4) (1) ブロックを多量含む
77. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト (7.5Y3/1) 床面シルト (地山)ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い
78. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (7.5Y3/1) 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。しまりあり
79. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (7.5Y3/1) 床面シルト (地山)ブロックを少量含む。しまりあり
80. 7.5YR5/2 床面シルト (小礫) 粘土質砂含む。瓦含む
81. 7.5YR5/2 床面シルト (炭化物) 地山ブロック含む
82. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (瓦) (礫) 地山ブロック含む。しまりあり
83. 7.5YR4/1 壤褐色シルト (小礫) 地山ブロックを少量含む。しまりあり
84. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (瓦) (礫) 地山ブロックを少量含む。しまりあり
85. 7.5YR4/2 壤褐色シルト (瓦) (礫) 地山ブロックを少量含む。しまりあり
86. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 黑褐色シルト (地山)ブロック含む。しまりあり
87. 7.5YR5/2 床面シルトと 5Y3/2 黑褐色シルト (地山) (細粒) 含む。しまりあり
88. 2.5Y7/4 黄褐色粘土 (2) 5Y5/3 床面シルトの斑土 (地山) (細粒) 含む
89. 10YR3/3 壤褐色シルト質 (10YR2/1) 黑褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む。しまりあり
90. 7.5YR5/1 黑褐色シルト (2.5YR4/1) 黑褐色シルト (地山) (細粒) 含む。しまりあり
91. 7.5YR5/1 黑褐色シルト (2.5YR4/1) 黑褐色シルト (地山) (細粒) 含む
92. 7.5YR3/1 黑褐色シルト (10YR7/4) にぶく 黄褐色シルト (地山) (細粒) 含む。しまりあり
93. 92層に比べ 10YR7/4/4 にぶく 黄褐色シルトブロックが少ない
94. 92層に比べ褐色シルト
95. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト
96. 10YR4/2 床面シルト (地山)ブロックを多量含む。粘性砂含む
97. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 床面シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを多量含む
98. 10YR4/2 にぶく 黄褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 床面シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い
99. 10YR5/3 にぶく 黄褐色粘土質シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い
100. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い
101. 10YR5/1 にぶく 黄褐色粘土質シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い
102. 10YR5/1 にぶく 黄褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 床面シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い
103. 10YR6/6 明褐色粘土質シルト (地山) (細粒) 含む。地山ブロックを少量含む
104. 1.5YR6/6 にぶく 黄褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 黑褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む。しまりやや弱い
105. 10YR5/2 黑褐色シルト (瓦) (礫)
106. 2.5Y7/2 黑褐色粘土 (瓦) (礫)
107. 2.5Y7/3 深褐色粘土 (瓦) (礫)
108. 7.5YR3/1 黑褐色粘土質シルト (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124)

図 15 北壁 土層断面図-3 (S=1/80)

125. 121屋と同じ（遺物含む）
 126. 7.5YR5/1 岩灰色粘土質シルト（地山ブロック含む）
 127. 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂（70層ブロック含む。しまりあり）
 128. 灰化物方塊
 129. 7.5YR5/2 岩灰色シルト（灰化物を少量含む。しまりあり）
 130. 7.5YR4/2 岩灰色シルト（7.5YR4/1 岩灰色シルトブロックを多量、灰化物、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
 132. 13.2Y3/1 に比べ（塊度強）
 133. 10YR7/4 に比べ（黃褐色シルトと7.5YR5/2底白色細粒砂の班土（しまりあり）
 134. 7.5YR5/2 岩灰色シルトと7.5YR5/2底白色細粒砂の班土（しまりあり）
 135. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを多量含む）
 136. 13.2Y3/1 に比べ（塊度強）
 137. 7.5YR5/2 岩灰色シルトと7.5YR5/2底白色細粒砂の班土（粘性ややあり）
 138. 10YR4/3 に比べ（黃褐色シルト（灰化物、地山ブロックを少量含む）
 139. 10YR4/2 に比べ（黃褐色シルト（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
 140. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質シルト（5YR5/2底黃褐色細粒砂を多量含む。しまりやや弱い）
 141. 7.5YR4/2 岩灰色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
 142. 7.5YR4/2 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
 143. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質（しまりあり）
 144. 7.5YR4/2 岩灰色シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
 145. 10YR3/3 單純色質土質（灰化物、小礫、地山ブロック含む）
 146. 7.5YR4/2 岩灰色粘土質
 147. 10YR4/2 岩灰色細粒シルト（灰化物、地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
 148. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質シルト（灰化物、地山ブロックを微量含む。粘性ややあり。しまりあり）
 149. 7.5YR4/2 岩灰色粘土質シルト（灰化物を多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
 150. 10YR4/3 に比べ（黃褐色細粒シルト（灰化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり）
 151. 14.9Y3/3 同じ
 152. 7.5YR5/1 嶺底灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
 153. 7.5YR4/1 岩灰色粘土質シルト（灰化物を多量含む。しまりあり）
 154. 7.5YR4/1 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
 155. 7.5YR4/1 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い）
 156. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い）
 157. 7.5YR4/1 嶺底色シルトと10YR7/4に比べ（嶺底色粘土質の班土）
 158. 7.5YR5/2 岩灰色粘土質シルト（地山ブロックを多量含む）
 159. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト（7.5YR5/2岩灰色シルトブロックを多量含む。しまりあり）

図 16 北壁 土層断面図-4 (S=1/80)

2 中世・戦国時代

後世の削平が激しく、この時期と判断できる遺構は規模の大きな溝に限られている。重複関係により、少なくとも2時期に分けられる。ただし遺物は土器・陶器小片が少量含まれるのみであり、遺物の年代観による時期差は明瞭ではない。

605SD

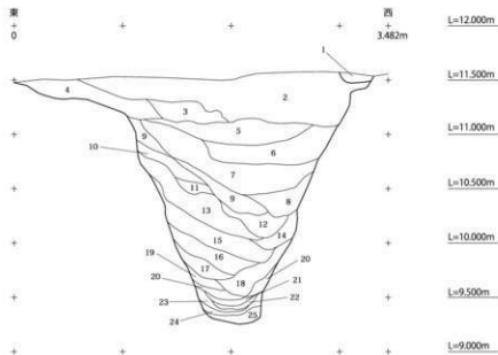
調査区を南北に通り、断面がV字状を呈するいわゆる「薬研堀」となる溝である。長さ 17.5m の範囲で確認した。検出面で上端幅最大 2.4m、深さ 2.3m を測る。上部では溝東側に幅 60cm 程度の犬走り状の平坦部がみられる。溝の底部は比較的平坦で 50cm 程度の幅がある。ベルト（図 17）で確認した埋土の堆積状況では、上部 1/5 程度に黒色シルト、その下は細かいブロック状灰土の灰色砂質シルト、最下層の 30cm 弱は砂層を挟む暗灰色の粘土質土の自然堆積が認められる。以上により、溝の存続期間にはほぼ空堀の状態であり、廃絶時は東側より短期間に埋められた状況が窺われる。なお、出土遺物のうち最下層で検出された土師質鍋は付着物の放射性年代測定、上層黒色土層と中層で検出された骨片などは種同定の分析を行っている（第 4 章）。

606SD (図 18)

先述の 605SD 西側をほぼ並行するように南北に通る溝である。後世の壊乱により検出部分は断続的であり、全体像が不明瞭となっている。島状に残る残存部分について、調査区南側から 606SD-a ~ f として検討した結果、北側の 606SD-e,f とやや規模が小さく一定しない南側 606SD-a,b,c の 2 タ

イブがあり、これらの境界付近 d 地点は溝 607SD と重複し、かつ b 地点で東西方向の溝 603SD に接続するという位置関係にあることから、軸線方向はほぼ一致するものの 606SD-a,b,c と 606SD-e,f は不連続である可能性が高いと判断した。

606SD-a,b,c では、a 地点は断面がやや開いた U 字状を呈し、幅 1.2m、深さ 59cm。c 地点は上端幅 0.8



1. 7SYR3/1 黒褐色シルトと 10YR7/4にぶい黃褐色粘土質シルトの斑土
(粘性ややあり、889cm土)
2. 7SYR3/1 黒褐色シルト
(10YR7/4にぶい 黃褐色粘土質シルトブロックを少量含む。粘性ややあり、しまりやや弱い)
3. 7SYR4/2灰褐色シルト(地山ブロックを微量含む。しまりあり。)
4. 7SYR5/2灰褐色シルト(地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い。)
5. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
(2.5Y8/2灰白色細粒砂ブロック、地山ブロックを全く的に含む。しまりやや弱い。)
6. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
(7SYR3/1 黑褐色シルト大ブロック、2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり。)
7. 5層に比べて山部分が少ない。
8. 7SYR2/2 黒色シルト(5層にブロック含む。しまり弱い。)
9. 2.5Y7/2灰褐色極細粒砂(地山ブロックを少量含む。)
10. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
(地山ブロックを多く含む。7SYR3/1 黑褐色シルトブロックを少し含む。しまりやや弱い。)
11. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂(地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い。)
12. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂(地山ブロック含む。しまりやや弱い。)
13. 2.5Y6/3にぶい 黄褐色細粒砂
(地山ブロックを多量に含む。7SYR3/1 黑褐色シルトブロック含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。)
14. 2.5Y6/3にぶい 黄褐色細粒砂(13層に比べてしまりあり。)
15. 2.5Y7/2灰褐色極細粒砂(地山ブロックを多量に含む。しまり弱い。)
16. 10YR4/2灰褐色粘土質シルト
(7SYR3/1 黑褐色シルトブロック含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。)
17. 2.5Y6/3にぶい 黄褐色シルト質砂(しまり弱い。)
18. 7SYR2/1 黑褐色シルト(粘性ややあり、しまり弱い。)
19. 10YR3/2 黑褐色シルト(粘性ややあり、しまり弱い。)
20. 7SYR3/1 黑褐色シルト(地山ブロックを多量に含む。粘性ややあり、しまり弱い。)
21. 10YR3/2 黑褐色シルト(2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロックを含む。粘性ややあり。)
22. SYR1.7/1 黑褐色粘土質シルト(しまりやや弱い。)
23. 2.5Y6/3にぶい 黄褐色シルト質砂(しまりやや弱い。)
24. 22層と同じ。
25. 10YR6/1灰褐色シルト(2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック含む。しまりあり。)

図 17 堀 605SD 断面図 (S=1/40)

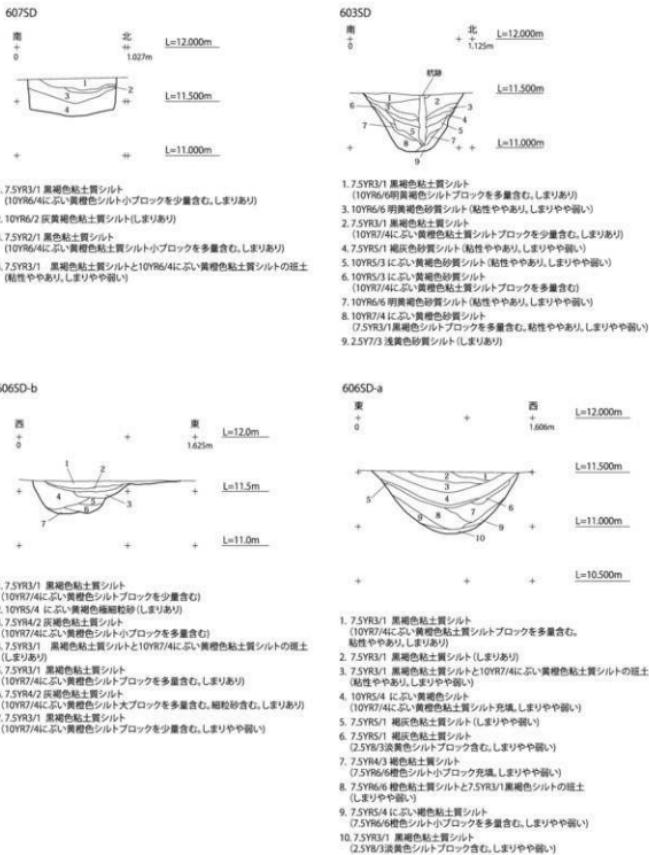


図 18 区画溝 607SD・603SD・606SD-a 断面図 (S=1/40)

～1m、深さは28cm、断面は浅い逆台形状を呈する。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土の細粒の斑土が徐々に堆積した状況が窺われる。

606SD-e,fは溝底のレベルが11.23m～10.96mと北側へ向かうほど急激に深さを増し、北壁では断面V字状の「薬研掘」の形状となり、幅は1.9mと605SDとほぼ同様の規模となる。d地点すぐ北側からe地点付近の溝底斜面には階段あるいは掘削痕のような凹凸が認められる。埋土はe地点では黒色シルトと灰色砂質シルトのブロック状斑土であり、f地点では605SDの場合と同様に上層に黒色土が堆積し、その下は礫混じりの暗灰色シルト、砂質土斑土が短期間に堆積した状況が窺われる。

606-d地点は僅かに残った溝底の痕跡である。南北どちらの溝に属するのか判断は難しい。また、606SD-e,f廃絶後の同地点真上に606SD-a,b,cから連続する溝の存在を仮定してみたが、その痕跡は全くみられなかった。

607SD（図18）

真北に対してほぼ直交する東西方向に直線的のびる。溝の断面形状は箱形を呈し、幅82cm、深さ35cmを測る。約29mの部分を確認した。東端は606SD-d地点で重複関係にあり、これより東側に連続する部分は確認されていない。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土がブロック状に混じる斑土である。

603SD（図18）

東西方向に直線的にのびる。605SDと重複し、西端は606SD-bにT字状に接続する。断面形状は地山（熟田層）を掘込む部分では明瞭な逆台形、605SD重複部分では丸みを帯びたU字状を呈する。上端幅1.3～1.6m、深さ40～50cmを測る。溝底レベルは概ね西方向に傾斜しており、606SD溝底とは段差をもって接続している。埋土は黒色シルトに明褐色粘土質土の細粒が混じる斑土であり、堆積状況は606SD-a地点に類似する。溝の両側の肩に近い内側部分に径10cm前後の小ビットが連続する部分があり、これらは杭列の痕跡かと思われる。

以上により遺構の変遷では、605SDと606SD-e,fの規模が大きく断面V字状を呈する堀が並行する時期があり、遺構の重複関係からこれらの廃絶後、小規模な溝603SDと606SD-a,b,cによる区画が再構築されたと考えることができる。少量の出土があった遺物のうち、古瀬戸後期の資料は両者でみられるが、大窓I（2）段階の資料は603SDに含まれる割合が高い。

遺構の軸線では、「I層」と603SD「溝」はともに真北から1度西にふれる、またはこれに直交する方向で一致している。これらと軸線方向が一致しない607SDは、重複関係では「堀」の時期、あるいは「溝」の時期のどちらかに先行すると考えられ、以下の2通りが想定される。

- (1) 607SD → 605SD・606SD-e,f → 603SD・606SD-a,b,c
- (2) 605SD・606SD-e,f → 607SD → 603SD・606SD-a,b,c

北側に隣接する過去の調査地点では、今回の606SD-e,fに繋がると思われる同規模の遺構が確認されている（SD514、『名古屋城三の丸遺跡VI』）。一方、605SDから連続する遺構は確認されていない。設定された調査区の間には幅10mの未調査部分があり、この間に605SDは途切れか、あるいは東側に屈曲する可能性が考えられる。605SD東側には土壘も想定され、いずれにせよ605SDと606SD-e,fは東側を内部とする区画の開口部を形成していると考えられる。

3 江戸時代

近世名古屋城の三之丸武家屋敷では屋敷表に相当する部分であり、屋敷地図を構成する遺構（溝、柱穴、その他）、建物跡を含む柱穴、井戸、廐棄土坑などがある。廐棄土坑は調査区北西部と、隣接する屋敷地周辺の調査区東部に集中する。その他、南御土居筋がかかる道路整地部分も範囲として捉えることができた。

〈北西部〉

466SE

調査区西部の北壁付近に位置する径1.1mの円形の井戸である。内部に構造物は確認されず、標高6.5mの深さまで確認した。上層から下層まで陶磁器類を含む暗褐色粘土質土を基調とした埋土である。17世紀中葉～後葉の時期を中心とした遺物を含む。

1535K

西辺が壊されているが 50 × 60cm 前後、深さ 10cm の隅丸方形の土坑である。土坑内にはロクロ土師器皿 2 枚（485,486、写真図版遺構 7）が合せ口の形で置かれていた。うち一点は外面底部に墨書きが施されている。出土の状況などから腹衣埋納の痕跡かと推定される。

3895K

466SEに一部重複する廃棄土坑であり、北側は調査区外に広がる。検出された部分で幅3.7m、奥行1.8m、深さ1.1mを測る。灰褐色シルトを基盤とした埋土で、部分的に炭化物を含む。

土坑の形状が判明している南側は、一部直線的であり、断面形状は壁面がほぼ垂直に立ち上がる方形を呈する。土坑廃絶以後と思われるが、この南辺ラインに並行する方向のピット列が存在する。建物跡の復元には至らず、塀のようなものかもしれない。遺物の量は密度としては低い方であり、陶磁器類、瓦（木瓦條）のほか土器類が比較的多く含まれる。466SEの廃絶とほぼ同時期、17世紀後

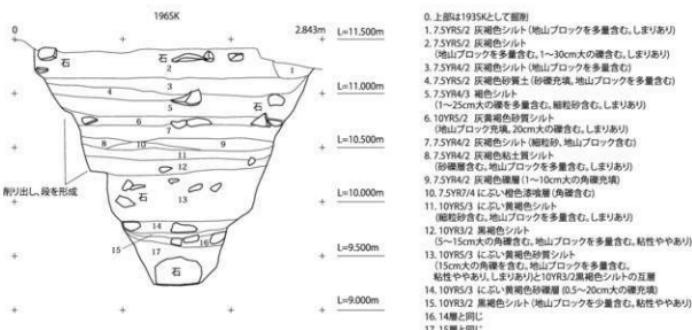
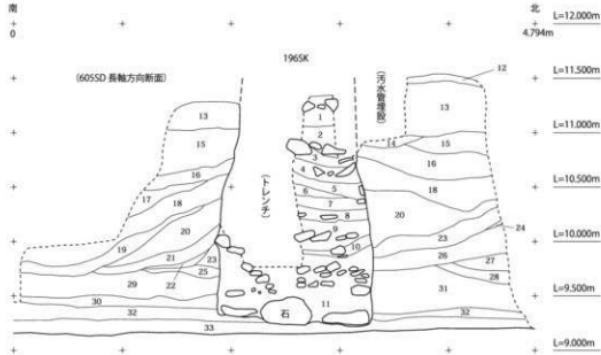


図 19 1965K 断面図-1 (S=1/40)



1. 7.5YR5/2 黒褐色シルト(地山ブロックを多量含む。1~30cm大の礫含む。しまりあり)
2. 7.5YR4/2 黒褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
3. 7.5YR4/1 黒褐色シルト(1~25cmの大礫を多量含む。細粒砂含む。しまりあり)
4. 10YR5/2 采葉色砂粉シルト(地山ブロック充満。20cm大の礫含む。しまりあり)
5. 7.5YR4/2 黑褐色シルト(細粒砂、地山ブロック含む)
6. 7.5YR4/2 黑褐色層(1~10cmの大礫を充満)
7. 10YR5/3 にぶい 黑褐色シルト(地山ブロックを多量含む。細粒砂含む。しまりあり)
8. 10YR3/2 黑褐色シルト(1~15cmの大礫を含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり)
9. 10YR3/3 にぶい 黑褐色砂質シルト(15cmの大礫を含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり)と10YR3/2 黑褐色シルトの互層
10. 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト(10cmの大礫を含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり)
- 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト(10cmの大礫を含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり)
12. 7.5YR3/2 黑褐色シルト(10YR3/4にぶい 黄褐色粘土質シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりあり)
13. 7.5YR3/1 黑褐色シルト(10YR3/4にぶい 黄褐色粘土質シルトブロックを微量含む。粘性ややあり。しまりあり)
14. 7.5YR3/1 黑褐色シルト(2.5Y/7/3浅黄色細粒砂ブロック含む)
15. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(2.5Y/8/2白色粘土ブロック。地山ブロックを全体的に含む。しまりやや弱い)
16. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(2.5Y/3/1黒褐色シルト大ブロック。2.5Y/8/2白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり)
17. 10YR7/4 にぶい 黄褐色細粒砂(7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック。2.5Y/8/2白色粘土ブロックを少量含む。しまり弱い)
18. 15層と別
19. 10YR5/2 黄褐色シルト(7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック。2.5Y/7/3浅黄色細粒砂ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い)
20. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(地山ブロックを多量。7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い)
21. 15層と別
21. 10YR4/2 黃褐色粘土質シルト(7.5YR3/1黒褐色シルトブロック。2.5Y/7/3浅黄色細粒砂ブロックを多量含む。しまりやや弱い)
22. 2.5Y/7/2 黄褐色細粒砂(しまりやや弱い)
24. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(地山ブロック含む。しまりやや弱い)
25. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(10YR3/6にぶい 黄褐色粘土質シルトブロック含む。しまりやや弱い)
26. 2.5Y/6/5 にぶい 黄褐色細粒砂(地山ブロックを多量含む。7.5YR3/1黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりやや弱い)
27. 2.5Y/7/2 黄褐色細粒砂(地山ブロックを少量含む。しまり弱い)
28. 10YR4/2 黃褐色粘土質シルト(7.5YR3/1黒褐色シルトブロック。2.5Y/7/3浅黄色細粒砂ブロックを多量含む。しまりやや弱い)
29. 7.5YR2/2 黑褐色シルト(2.5Y/7/3浅黄色細粒砂ブロック含む。しまりやや弱い)
30. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂シルト(2.5Y/8/2白色粘土ブロック含む。しまりやや弱い)
31. 2.5Y/6/5 にぶい 黄褐色シルト(しまり弱い)
32. 2.5Y/7/2 黄褐色細粒砂(しまりやや弱い)
33. 2.5Y/7/3 浅黄色細粒砂(地山ブロック含む。しまりあり)

図20 1965K断面図-2 (S=1/40)

半から 18 世紀初めの時期を中心とした遺物が含まれる。

381SK

調査区内では最も南側に位置する土坑である。遺構上部は東側から 3/4 を防空壕（340SX）に削られている。平面形は整った方形を呈し、2.0m × 1.8m、深さ 2.3m を測る。壁面が垂直に立ち上がる形状であり、底部も平坦に仕上げられている。もとは地下室として構築されたと思われるが、残存部分に階段などは認められない。埋土は最下層に暗褐色土の無遺物層が堆積し、しばらく使用されなかった間に自然に堆積したものと思われる。その上は防空壕の床面レベルまで（第 2 ~ 7 層）は暗灰色粘土などが堆積し、やや散漫に陶磁器類が含まれるが、上下層での時期差はほとんど認められない。ここには炭化物ほか、魚類骨片、貝類など食料残滓と思われる動物遺体が目立って多く含まれている。（第 4 章 -2）

陶磁器類は 18 世紀後葉から 19 世紀初めの時期のものが含まれ、一部は 492SK 出土遺物と接合関係が認められた。

492SK

土坑 381SK から北西約 5m の距離にある。平面形は不整形な梢円形かと思われ、北側は調査区外に広がる。検出された範囲で、幅約 2.8m、奥行約 2.4m、深さは最大で 40cm を測る。遺構側壁の立ち上がりは緩やかで底面には凹凸が残る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、炭化物、貝類なども含まれる。（第 4 章 -2）

陶磁器、瓦類の密度は高く、ピット、土坑など数次の掘り込みが重複し、混入品も多いが、一括性は比較的高いと考えられる。一部は 381SK 出土遺物と接合関係にある。18 世紀末から 19 世紀前葉の時期の遺物が含まれる。

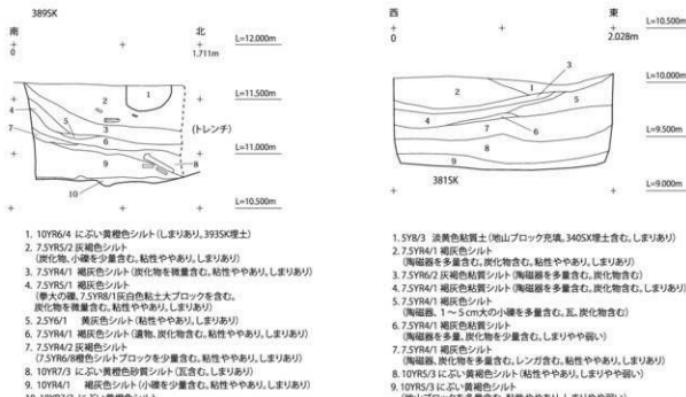


図 21 土坑 389SK・381SK 断面図 (S=1/40)

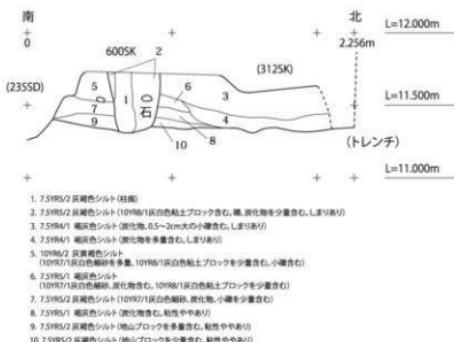
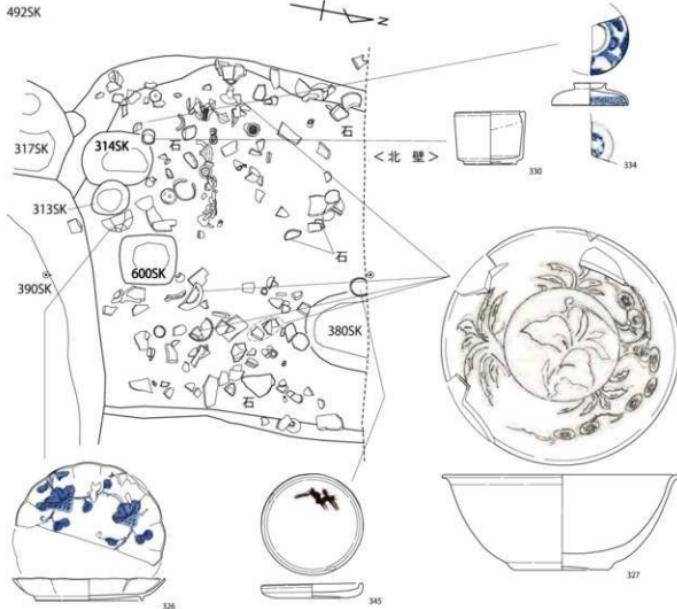


図22 土坑492SK 遺物出土状態 (S=1/30)

387SK

492SKのすぐ西側に位置する。北側の一部が調査区外にかかるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。検出された範囲では幅1.8m、奥行1.8m、深さ30cmを測る。底面には凹凸が残る。灰褐色シルトを基調とした埋土であり、炭化物、貝類なども含まれる。陶磁器、瓦類の密度は高い。18世紀末～19世紀前半の遺物が含まれる。

413SK

調査区内では最も西側に位置する廃棄土坑であり、最終の廃棄は明治期にかかると思われる。平面形は不整形な楕円形を呈し、長さ2.8m、幅2.3m、深さ29cmを測る。埋土は大きく上下2層に分かれ、上層は暗褐色シルト、下層は焼土ブロックが混じる明黄褐色の粘土が多く含まれる。遺物は主に下層

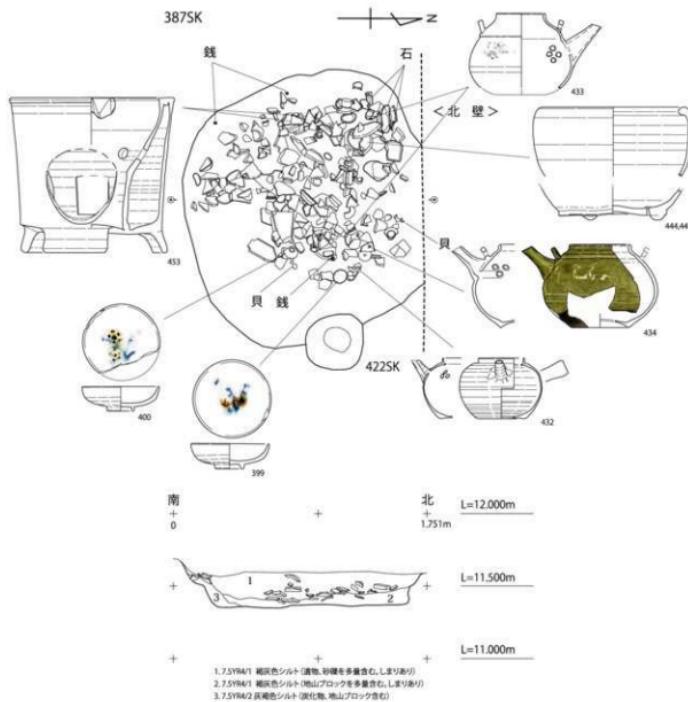


図23 土坑387SK遺物出土状態 (S=1/30)

に含まれ、瓦が最も多い。瓦類では桟瓦と平坦な飾り瓦が大半を占める。その他に被熱した長方形の砂岩ブロックなども数点を確認した。

<北東部>

496SD

南北方向の溝であり、北側は調査区外へ続くが、南側は途切れる。長さ 8.0m の範囲を確認した。上端幅約 60cm、底部幅約 50cm、深さ 1.1m を測り、断面形状は逆台形～箱形を呈する。埋土は地点により異なるが、いずれも短期間に埋められた状況が認められる。廃絶後、110SK が重複して掘削されている。

北側延長線上には過去の調査地点で確認された溝（SD10,『名古屋城三の丸遺跡 III』）があり、これと形状が類似し、位置・方向ともに齟齬はないことから連続するものと考えられる。南端の平面形は方形を呈し、戦後の汚水管理設溝（東西方向）がすぐ南に接する位置に配されているが、重複はしていない。屋敷地を区画する境界施設と考えられ、近世を通じて強い規制力をもっていたと考えられる。

SA001 (882SK,497SK,116SK)

496SD に沿って西側に並ぶ 3 基のやや大型の柱穴で構成される。それぞれ円礫の礎板石をもつ。礎石間は 1.7 ~ 1.8m を測る。北側は連続する可能性があるが、3 基の南側には展開しない。116SK,882SK は 496SD に重複している。堀立柱の土壠あるいは板塀などの上部構造が想定される。

SA002 (058SK,055SK,053SK,832SK)

後述する 196SK と 832SK を結ぶライン上に位置する、東西方向に並ぶやや大型の柱穴列である。土杭中心間の距離は 2.0 ~ 2.2m を測る。832SK 以外では礎石は確認されてない。築地塀あるいは土塀などの上部構造が想定される。

110SK

一部は東側調査区外に広がるという位置で確認された廃棄土坑である。検出部分で、長さ 2.7m、奥行 1.0m、深さ約 45cm を測る。灰褐色シルトを基調とする埋土であり、炭化物と薄い貝殻も認められる。出土遺物では陶製、土製の玩具類、土師質鉢・釜類などに一括性の高い廃棄状況がうかがわれる。

土坑の位置関係について。溝 496SD 廃絶後にその上に重複して掘削されている。また、下には（おそらくは土坑）070SD があり、遺構西側のラインが一致して重複する。このラインに強い規制が認められることがどうから、これらは屋敷地境に造られた廃棄土坑であり、位置的に東側の屋敷地に含まれると考えられる。

085SK

平面形が橢円形を呈する土坑である。長さ約 2.5m、

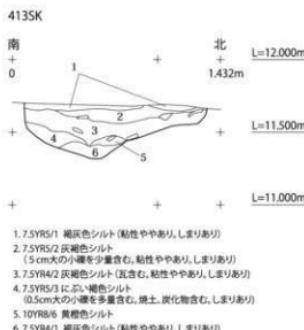


図 24 土坑 413SK 断面図 (S=1/30)

幅1.2m、深さ55cmを測る。長軸方向は、溝496SDにはほぼ並行する。暗褐色シルトを基調とする埋土であり、17世紀半ばから後半の陶器、土器が散漫に含まれる。

660SD

東西方向の溝であり、上部に近代の溝(047SD)が重複して不明な部分が多いが、幅1.5m、深さ20cmの部分を確認した。断面はU字状を呈する。東壁では確認できないため、柱穴列(SA001)の西側で途切ると考えられる。

<その他>

602SD

調査区南東部で検出された、土壠と並行する東西方向のやや幅広の溝である。幅1.6m、深さ40cmを割り、東側は調査区外へ続く。長さ10.1mの範囲で確認した。底部は平坦で両脇に溝状の凹みをもち、埋土には剥片礫を少々含む。東壁で確認される状況から、近世のある段階の整地の際に埋められたと考えられる。少量の近世陶器が出土した。

196SK

埋土の状況が不自然であり、当初は戦国期堀に設けられた土壠状の遺構と想定したが、精査の結果、戦国期堀605SDの幅で掘込まれた近世の土坑であることが判明した。平面形は長方形を呈し、上端は長軸2.6m、幅1.0m、下端では幅1.4mを測る。土坑部分の戦国期堀の埋土を除去し、最下層に大型の礫3個を小礫を使って据え置いた上で、新たに礫、漆喰の混じる黒色～暗褐色シルトを交互に水平に版築状に積み上げている。おそらくこの作業のため、断面V字状の堀の側面に数カ所の段が削り出されている。

同様の堆積状況は196SKのほか東西両側で部分的に認められる。東側では隣接する193SK、東壁にかかる832SKがあり、これはピット状で下位に礫石をもつ。また西側では連続する194SK、195SKで認められ、これらは196SKを含み同一線上に並んでいる。埋土中からは鉄軸(柿軸)箆利片、磁器染付鉢か(639)が出土し、後者は196SK西側の194SK出土遺物と同一個体であった。これらの版築状埋土の遺構群は一連のものであり、帯状に展開する形態であると考えられる。

この帯状の遺構群は、屋敷地境界と考えられる溝496SDの南端に接するように東西に直交する位置にあり、かつ近世段階の特殊な構築物であることなどから、屋敷と南御土居筋を画する築地脚の基部(痕跡)の可能性が考えられる。193SK、194SK、195SKなどもすべて直接基盤層(熱田層)を掘り込むようにして直接版築が行われており、196SKでは軟弱な地盤の改良のため戦国末の埋土を除去するという地業を行ったものと考えられる。なお、196SKを壊す擾乱(汚水管埋設溝)より南側全体は薄い整地層が重なり、硬化している部分も確認できる。

その他に多数の小土坑があるが、時期の不明なものが多い。形状では、圓丸方形、円形(梢円形)、不定形などがあり、方形のタイプは一边が40cm前後、円形は径30cm弱、40cm前後、60cm前後などがある。圓丸方形土坑には、円礫を礫石とするものが比較的多く含まれる。

主に調査区の中央より北側に分布し、(後世の擾乱の影響もみられるが)北西部の廃棄土坑群周辺に集中してみられる。建物あるいは辦などが配置されていたと思われるが、復元には至らなかった。また、調査区中央付近で東西に並ぶピット列が幾つか想定されるが、近代以降のものが多く含まれる。

4 近代以降

明治6年以降、名古屋城が第三師団の管轄下に置かれ、調査地点付近は被服庫→軍楽隊→第三師団経理部第一倉庫の敷地となったと思われるが（第1章3節）、その間の内部の様子は実態としては不明な部分が多い。

調査では、溝、柵列と思われるピット列、コンクリート建物基礎などのほか熟田層に深く掘り刻まれた大型の遺構5基を確認した。これらには互いに重複が認められず、ほぼ同時期に存在したと考えられる。戦時中の遺物を含み旧陸軍が占有していた時代の遺構であり、規模・機能等から「防空壕」の痕跡と判断した。

<防空壕>

340SX (087SD,088SD,090SD 含む)

南側に開く出入口（087SD）から南北方向、直線的に続く通路、通路東側に直角に接続する複数の部屋（088SD,090SD）からなる。通路の先北側は調査区外で不明である。出入口から通路を含む長さは14.5m（検出範囲）、通路幅は2.3～2.5mである。部屋は2室を検出し、奥行約6.5m、幅は約0.8m。検出面からの深さは約1.4m、床面のレベルは10.6mである。出入口は平面形が舌状のスロープとなっており、傾斜角度は約12°～16°を測る。出入口の床面は平坦ではなく、中央部分が若干凹み、その両脇に小さな凹みが階段状に連続する。検出当初は中央凹み部分に周囲にはない光沢が認められた。車輪の痕跡と推測される。通路および部屋の床面は段差のない平坦面をなし、部屋（088SD）の奥、壁面の側には用いられていた角柱状の柱の痕跡が認められる（写真図版 遺構11）。また、北側の部屋（090SD）の上部には、部屋より広い幅（1.2～1.5m）で深さ50cm程度掘りくぼめた段差があり、

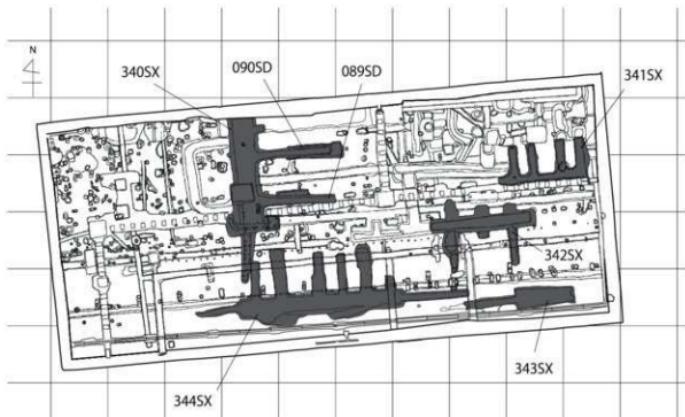


図25 防空壕 配置図

この部分のみ天井部が厚い板状の蓋をする構造であったと考えられる。蓋受と思われる段差から床面まで 1.1m 程度しかなく、大人が立って移動することは難しい。その他、出入口から 11m ほど入った通路西側壁面には幅 25cm 程度の凹みが 2 箇所あり、照明具等が置かれたかと推測される。

341SX (021 ~ 025SD 含む)

西側に聞く出入口をもつ東西通路（025SD）と、これの北側に直角に接続する 4 室（021 ~ 024SD）からなる。出入口から奥までの距離は 7.8m、部屋の長さは約 2.5m、通路と部屋の幅はほぼ同じで 0.8m、検出面からの深さは平均して約 80m である。出入口は床面が平坦なスロープとなっており、傾斜角度は約 24° である。最も西側の部屋の突当り床面中央には、排水施設の痕跡かと思われる径 10cm、深さ 5cm の円形の凹みが設けられている。

342SX

南側に聞く 2 個所の出入口と、これに直交する幅約 1.5m、長さ 4.7m の東西通路、通路に直交する 4 個所の部屋からなる。ただし、部屋と呼べるほどの空間ではなく、奥行は極端に短く 0.8m から 1.7m 程度である。出入口は床面が平坦なスロープであり、傾斜角度は 14° と 23° を測る。うち 1 個所はスロープ途中で窓穴状に掘り凹められており、階段ではなく、出入りには梯子が必要である。遺構の重複関係は確認できなかったが、この部分は廃絶後の擾乱の可能性も考えられる。機能としては不完全な状態と思われ、部屋の拡張を試みながらも築造途中で断念した箇所かもしれない。

343SX

東側に広く聞く出入口に連続して東西に溝状にのびる。出入口床面は平坦であり、傾斜角度は約 20° である。出入口は幅 1.5 ~ 2.0m の部分が 5.0m 続き、その奥は急激に狭くなり幅 80cm の部分が 4.5m 続いたあと掘削途中と思われる不整形な部分で止まっている。検出面からの深さは 75cm 前後、床面のレベルは 10.9m 前後である。幅が狭くなる箇所は基盤層ではなく、ちょうど戦国期の堀（605SSD）にあたる。この遺構も機能としては不完全であり、軟弱な地盤に遭遇したため、途中で掘削を断念したのかもしれない。

344SX

出入口は 2 個所あり、東西方向の通路の南側中央付近から東側と西側へそれぞれスロープが設けられている。出入口の床面は平坦であり、傾斜角度はそれぞれ 14° ~ 18° と 16° ~ 20° である。通路は幅約 1.8m と比較的広く、長さ 14m の部分と、さらに東側に続く幅 0.8m の部分 5.5m 確認した。また西側にも断面天井部がアーチ状をなす掘削の途中段階の箇所がみられる。通路北側にはほぼ直交する方向で 6 個所の部屋が接続する。用途か築造順序によるものか、幅や奥行は一定せず規模のばらつきが大きい。規模は、西から幅 0.7m × 長さ 3.2m、幅約 1.2m × 長さ 4.0m、幅 0.9 ~ 1.2m × 長さ 3.5m、幅 0.7m × 長さ 3.3m、幅 1.0 ~ 1.3m × 長さ 4.1m、幅 0.9m × 長さ 1.1m である。検出面から 1.0m までの部分の掘削を行った。床面は確認できていない。

<その他>

046SD

幅 80cm、深さ 25cm 前後、断面形状は箱形の東西方向に直線状にのびる溝である。調査区東壁か

ら防空壕（340SX）付近まで確認できるが、それより西側では不明である。

047SD

幅95cm、深さ75cm、東西方向に直線状にのびる溝であり、断続的ながら約20mの範囲で確認した。断面下方は隅の丸い方形で、側面は直に立ちあがる。埋土は黒色～暗灰色シルトを基調とし、陶器のほか、レンガ・ガラス・金属製品を比較的多く含む。近世段階と思われる溝（660SD）とはほぼ重複する。

089SD

防空壕（340SX）に先行する。幅約80cm、深さ約40cm、断面箱形の東西方向にのびる溝であり、防空壕（340SX）東側の約22mの範囲で確認した。完全な直線ではなく、東西では幅や方向が若干変わるために、2条の別々の溝が接している可能性も考えられる。埋土は暗灰色シルトを基調とした斑点状であり、主に西側部分を中心に軍の徽章がプリントされた硬質陶器カップ、皿類など比較的一括性の高い資料が得られた。

235SD

コの字状にめぐる幅1.1～1.4m、深さ45cm前後、断面形状が逆台形を呈する溝である。防空壕（340SX）に先行する。北端はさらに北側に、南端もさらに南側に折れ、若干のびて続く様相が一部で確認できる。平面形では屈曲部は角がなく緩やかなカーブを描いて繋がっている。

026・027SD

ほぼ同じ位置に重複して掘削された東西方向の溝であり、調査範囲内では途切れず連続する。長さ約45m、幅約90cm、深さはそれぞれ15cm、40cmを確認した。断面は皿状を呈し、埋土は暗灰色シルトを基調とする。出土遺物は少量の近世陶器のほか近代の磁器（磁器）、環平焼小判皿（702）などがある。

001・002SD

溝そのものは戦後建設された建物基礎の痕跡と思われる。幅約70cm、深さ90cmの部分を確認した。最下層に花崗岩礫薄片があり、その上厚さ50cmは砂で埋められている。その上には花崗岩角礫、煉瓦片、その他石材片が入る。溝の上部に廃棄された石材には、花崗岩では支柱の基礎や、間知石など加工痕の残る建築部材が多く含まれる。煉瓦にはコンクリートが付着し、多くの赤煉瓦に混じり少量の耐火煉瓦（856、写真図版 遺物13）が含まれる。

第3章 出土遺物

1 出土状況の概要

出土遺物は石製品・土器・陶磁器類、金属製品などコンテナ約150箱である。

材質により「土器・陶磁器」「ガラス製品・骨製品」「石製品」に分類して整理を行った。

掲載資料の選択においては、各時期の主要遺構出土遺物を優先した。中世・戦国期では堀と区画溝、近世は武家屋敷の井戸、廐棄土坑、区画施設関連の遺構などであり、遺物量の多い近世のみ廐棄土坑群付近の包含層出土資料からも抽出した。近代以降は防空壕出土資料を基本として、比較的一括りの高いもの、遺存状態の良好なものから抽出した。陶磁器類のほか金属製品・ガラス製品・骨製品がある。

中世・戦国期資料は隣接する過去の調査地点での様相と同様に少量であった。遺構そのものの機能や地点の性格、あるいは近世段階の整地の規模などに理由が求められよう。

近世の廐棄土坑は、調査区の北西部と北東部に分かれて分布しており、北西部の一群(466SE, 389SK, 381SK, 492SK, 387SK)は「屋敷表」に設置された事例とみることができ、北東部の一群(085SK, 110SK)は東西隣に接する2軒の屋敷の屋敷境を挟む廐棄土坑群である。前者ではまず18世紀代半ば以前に井戸廐棄も含めた廐棄があり、その後やや期間をおいて18世紀後半～19世紀前半にかけて数次の廐棄が行われていたようである。後者では東側の屋敷(図5、屋敷地2)の方が土坑の規模は大きく、境界施設の変更(屋敷間の溝496SD→共有溝?)に伴い拡張されている。

出土遺物の分析では、過去の調査地点での様相と同様、陶磁器の産地別組成では瀬戸美濃産陶器の占める割合は高く、破片数で比較した場合には7割前後と高率で推移している。分布の傾向では調査区中央付近と南側は極端に遺構・遺物が少なくなり、前者は前庭のような空間あるいは礎石建ち建物の範囲、後者は屋敷の外側、すなわち南御土居筋と考えられる。

近代以降の遺構は直線的な溝と小ピット、土坑などであり、第二次大戦末期の防空壕跡を除いて性格を特定できるものは少ない。陶磁器類の中ではやはり軍用食器類が目立ち、薬品瓶、化粧品容器、インク瓶などのガラス製品、蹄鉄など馬具に関連するもののほか大量の用途不明の金属製品が得られた。明治以降三の丸に駐屯した陸軍第三師団に関連する具体的な資料である。

2 土器・陶磁器

<中世・戦国期>

605SD (1～9)

東濃型山茶碗の小片(4)のほか、施釉陶器類では縁釉小皿(6)、擂鉢(7.8.9)など(藤澤編年)古瀬戸後期Ⅲ段階から大窯Ⅱ段階に属するものと思われる。土器類は非クロコ土器皿(1)、内耳鍋(3)がある。内耳鍋外面付着物の年代測定結果では、戦国期に収まる数値として、1520～1580年の年代を得ている(第4章1)。

606SD-d,e,f 地点 (10～16)

東濃型山茶碗(10.11)のほか、施釉陶器類は縁釉小皿(12.14)、直縁大皿(15)、卸口付大皿(16)

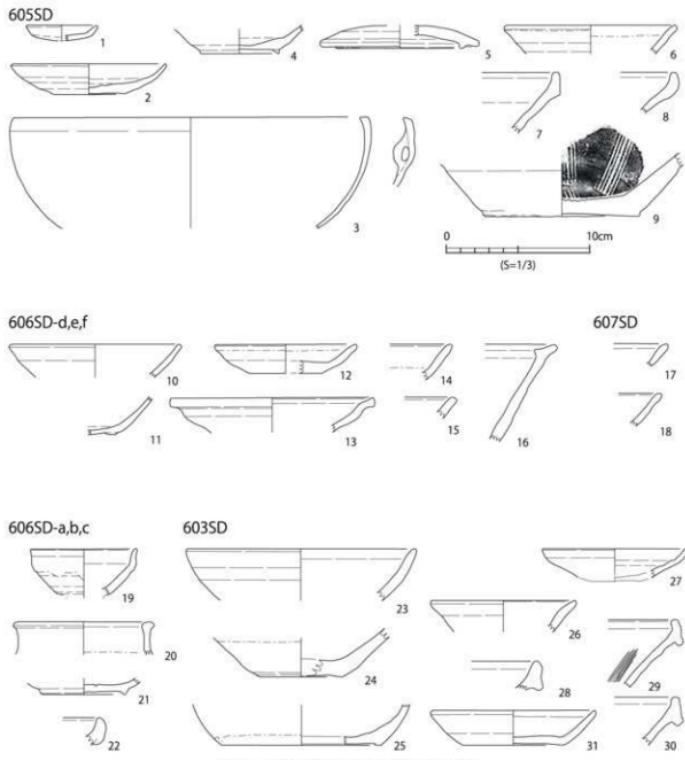


図 26 中世・戦国時代の陶磁器 (S=1/3)

などの小片であり、(藤澤編年) 古瀬戸後期 IV 段階に属するものと思われる。

607SD (17,18)

出土遺物は山茶碗と土師器皿の小片のほか、施釉陶器は古瀬戸後期 III 段階の縁釉小皿 (17) と近世の灰釉丸皿 (18) のみであるが、後者は混入と思われる。

606SD-a,b,c 地点 (19 ~ 22)

未掲載資料に山茶碗、土師器皿、銅片がある。施釉陶器は小天目 (19)、鉄釉香炉 (20)、灰釉皿 (21)、

擂鉢（22）である。21は印花をもち大窯1段階に、19,22は大窯3段階に属するものと思われる。

603SD（23～30）

施釉陶器は灰釉平碗（23,24）、鉄釉徳利（25）、擂鉢（28,29,30）があり、古瀬戸後期Ⅲ段階～大窯3段階に属するものと思われる。31土師器皿はロクロ成形である。未掲載資料には、山茶碗、片口鉢、土師器皿、土師質羽付釜、常滑産甕、古瀬戸灰釉四耳壺、鉄釉器種不明陶片などがある。

<近世>

出土量が比較的多い井戸（466SE）、土坑（389SK,381SK,387SK）について、器種・产地別カウントを行った。产地は瀬戸と美濃を併せて「瀬・美」として扱い、同様に京都・信楽系、肥前系をそれぞれ「京・信」「肥前」と表記した。計測の方法は、まず陶磁器類はa. 口縁部を12分割して計測した残存率（残存1/12以下を1）と、b. 接合後破片数のカウントを行った（表7～10）。a.は個体数での比較を、b.は口縁部が残存せず抽出されない器種を減らすことを目的としている。土器・常滑産陶器は、約1cm角以上の「破片数」のみを計測した。また、土師器皿はすべて灯明具に、常滑産陶器は用途が火具と判断できないものを「貯蔵具」甕として分類した。焼し瓦類・玩具類はサンプリングの方法および計測基準が異なるため、今回のカウント作業からは除外している。

なお、陶磁器類の分類については、金子健一氏の協力を得た。

【内耳鍋・茶釜形鍋】

鈴木正貴、1996、「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

【焰炉】

金子健一、1996、「尾張出土のホウロクについて」（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要4

【焼塙甕】

身A類（芯に粘土紐を輪積み成形）

身B類（板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘塊を充填。口縁端に蓋受けを削り出し）

身C類（B類の蓋受けが退化し、痕跡程度になったもの）

身D類（全体を型成形、小型で厚手）

身E類（蓋受けのない、C類より薄手で粗雑）

蓋A類（上面が曲面、側面が緩やかに開くもの）

蓋B類（上面が平坦、側面との境に明瞭な棱をもつもの）

【瀬戸・美濃産陶磁器】

瀬戸市、1998、「瀬戸市史 陶磁史篇六」

愛知県、2007、「愛知県史」別冊 窯業2

466SE（32～480, 表8）

完掘していない井戸の検出面から約4mの部分に含まれていた資料である。瀬戸・美濃産陶器の割合が高く、陶磁器類（破片数）では72.8%を占める。次いで肥前系磁器・陶器、少量の京・信楽系陶器となる。産地比（破片数）では瀬：肥=1:0.19である。

用例でみると、供膳具が全体の5割以上を占め、その内8割が瀬戸・美濃産陶器である。供膳具全体の产地別個体数比は瀬：肥=1:0.14であるが、小碗・小杯類の器種のみ瀬：肥=1:1.2となり、肥前系磁器が主体といえる。瀬戸・美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉・鉄釉丸碗、皿類は志野丸皿、灰釉丸皿、反り皿、輪禿皿、菊皿、型打皿、鉢類は黄瀬戸鉢、折縁鉢である。肥前産陶器は刷

表8 近世陶磁器組成表 466SE

用途	器種・形形	陶器					磁器			土器	瓦器	器種別破片數小計	用途別合計 (破片數)	
		原・美	東洋	京・僅	備前	肥前	不明	原・美	肥前	中國	不明			
供膳具	瓶	残存率合計 (口縫/12)	65	7	6			20	2	3				
		破片数 (混合)	85	11	14			20	1	1				132
	小瓶・小杯・接口	残存率合計 (口縫/12)	5					6						
		破片数 (混合)	4					6						10
	皿	残存率合計 (口縫/12)	163					1	0					
		破片数 (混合)	135					2	1					138
鉢 (内付類を含む)	残存率合計 (口縫/12)	32			3			2						
		破片数 (混合)	61		5			5						71
	その他の (深・皿類)	残存率合計 (口縫/12)	10		1									
		破片数 (混合)	40		9									49
調理具	鍋 (内耳鍋・俎物・行	残存率合計 (口縫/12)												
	平・釜・魚鉢)	破片数 (混合)												99
	鉢 (片口鉢・鍋鍋)	残存率合計 (口縫/12)	12											5
		破片数 (混合)	5											
	俎	残存率合計 (口縫/12)	26			2								
		破片数 (混合)	75					(浮遊?) 1						75
瓶 (土瓶・櫻形・瓶	残存率合計 (口縫/12)													
	子・魚瓶)	破片数 (混合)												0
	その他	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												0
貯藏具	瓶 (底・利口・水注・	残存率合計 (口縫/12)	0					0						
	汁次)	破片数 (混合)	23					3						26
	壺 (酒・茶器・茶入)	残存率合計 (口縫/12)	2		0									
		破片数 (混合)	4					(浮遊?) 1						10
	壺 (半瓶・常滑燒錦	残存率合計 (口縫/12)	0											
	壺)	破片数 (混合)	3	58										61
灯火具	皿 (灯明具・灯明便	残存率合計 (口縫/12)												
	皿・行灯座)	破片数 (混合)												2
	燭臺	残存率合計 (口縫/12)												0
		破片数 (混合)												
	その他	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												98 (12.8)
火薬具	皿 (火薬・底座・風	残存率合計 (口縫/12)												
	火・火薬・手箱・水	破片数 (混合)												2
	壺 (火薬・香合)	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												
	その他	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												0
火薬具	鉢 (火鉢・底座・風	残存率合計 (口縫/12)												
	火・火鉢・手箱・水	破片数 (混合)												4
	壺 (火薬・香合)	残存率合計 (口縫/12)												0
		破片数 (混合)												
	その他 (底炉・七輪)	残存率合計 (口縫/12)												5 (0.7)
		破片数 (混合)												
化粧具	紅皿	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												0
	壺 (お湯瓶蓋・製油	残存率合計 (口縫/12)												0
	壺)	破片数 (混合)												0
	蜜罐	残存率合計 (口縫/12)												0
		破片数 (混合)												0
神具	その他 (火爐・七輪)	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												2 (0.3)
	火薬	残存率合計 (口縫/12)	3					2						1
		破片数 (混合)						1						4
	香炉	残存率合計 (口縫/12)												0
		破片数 (混合)												0
神仙具	仙人	残存率合計 (口縫/12)												5 (0.7)
		破片数 (混合)												0
	書炉	残存率合計 (口縫/12)	4											0
		破片数 (混合)	5											5
	仙盤具	残存率合計 (口縫/12)												0
		破片数 (混合)												0
寝具	その他	残存率合計 (口縫/12)												
		破片数 (混合)												0
	天日茶碗	残存率合計 (口縫/12)	1											6 (0.8)
		破片数 (混合)	6											6
	その他	残存率合計 (口縫/12)	1											14 (1.9)
		破片数 (混合)	1											1
不透明	鉢 (模木鉢・鈍鉢・撥	残存率合計 (口縫/12)	1											0
	鉢・煙袋壺)	破片数 (混合)	1											1
	水滴	残存率合計 (口縫/12)												0
	陶鏡・土鏡	残存率合計 (口縫/12)												11
		破片数 (混合)												11
	その他 (水盤・花盆・水	残存率合計 (口縫/12)	0											14 (1.9)
不透明	皿・丸入れ・灰葉(し)	残存率合計 (口縫/12)	2											2
		破片数 (混合)	30											57 (7.5)
		残片数	479	61	11	0	28	13	0	63	2	1	106	766
		割合(%)	(62.2)	(8.0)	(1.5)	(3.7)	(1.7)	(8.3)	(0.3)	(0.2)	(14.1)			

表9 近世陶磁器組成表 3895

用途	器種・器形	陶器						磁器				土器	瓦器	器種別破片小計	用途別合計(破片數%)
		漢・美	常滑	京・備	備前	肥前	不明	漢・美	肥前	中國	不明				
供應品	瓶	残存率合計(口縫/12)	111			12	2	61	5						215 29 120 43 399 (37.0)
		破片数(破片合計)	128			20	4	51	4						
	小瓶・小杯・猪口	残存率合計(口縫/12)	45						38						
		破片数(破片合計)	9						20						
	皿	残存率合計(口縫/12)	141	2	21	1		2	0						
		破片数(破片合計)	94	1	19	1		4	1						
詰(向付類を含む)	残存率合計(口縫/12)	16				8			1						120 43 399 (37.0)
		破片数(破片合計)	29			11			3						
	その他(瓶・皿類)	残存率合計(口縫/12)													
調理具	鍋(内耳鍋・煙袋・行	残存率合計(口縫/12)	0												234 4 68 2 309 (28.7)
	平・巻・泡割鍋)	破片数(破片合計)	1												
	鉢(片口鉢・練鉢)	残存率合計(口縫/12)	3												
	鍋(内耳鍋・煙袋)	残存率合計(口縫/12)	4												
	鍋鉢	残存率合計(口縫/12)	41												
		破片数(破片合計)	68												
瓶(土瓶・霊通利・鍋	残存率合計(口縫/12)	0													2 309 (28.7)
	子・急須)	残存率合計(口縫/12)	2												
	その他	残存率合計(口縫/12)													
貯蔵具	瓶(瓶・德利・水注・汁	残存率合計(口縫/12)	25					0							42 5 56 1 107 (10.0)
	甕(水)	破片数(破片合計)	37					5							
	壺(壺・茶壺・茶入)	残存率合計(口縫/12)	0												
	壺(半壺・常滑燒)	残存率合計(口縫/12)	3												
	壺(半壺)	残存率合計(口縫/12)	9	47											
	壺(段壺・香合含)	残存率合計(口縫/12)													
火薬	火(火薬・火薬筒)	残存率合計(口縫/12)	14			14									147 1 148 (13.8)
	火(火薬)	破片数(破片合計)	3			3									
	火(火薬)	残存率合計(口縫/12)	0												
火薬	火(火薬・火薬筒)	破片数(破片合計)	1												1 1 6 (0.6)
	火(火薬)	残存率合計(口縫/12)	1												
	火(火薬)	残存率合計(口縫/12)	8												
化粧具	紅皿	残存率合計(口縫/12)													0 0 1 (0.1)
	巻(お轟巻・蜜油	残存率合計(口縫/12)													
	巻(お轟巻)	破片数(破片合計)													
火薬	火(火薬・火薬筒)	残存率合計(口縫/12)	5												5 0 6 (0.6)
	火(火薬)	破片数(破片合計)													
	火(火薬)	残存率合計(口縫/12)													
火薬	火(火薬・火薬筒)	残存率合計(口縫/12)													1 0 1 (0.1)
	火(火薬)	破片数(破片合計)													
	火(火薬)	残存率合計(口縫/12)													
神仏具	瓶(神酒德利・仙花	残存率合計(口縫/12)	0												9 0 0 1 (0.1)
	瓶(神酒德利)	破片数(破片合計)	9												
	香炉	残存率合計(口縫/12)	16												
仏壇具	香炉	破片数(破片合計)	14												14 0 1 24 (2.3)
	香炉	残存率合計(口縫/12)	2												
	その他	残存率合計(口縫/12)													
仏壇具	天(天蓋・天蓋碗)	残存率合計(口縫/12)	8												8 (0.6) 13 (1.2)
	天(天蓋)	破片数(破片合計)	8												
	天(天蓋)	残存率合計(口縫/12)													
その他	瓶(瓶木詰・銅詰・櫻	残存率合計(口縫/12)	3												3 0 3 1 (1.2)
	瓶(瓶木詰・銅詰)	破片数(破片合計)	3												
	水滴	残存率合計(口縫/12)													
陶器	陶器	残存率合計(口縫/12)													0 17 3 7 13 (1.2)
	陶器	破片数(破片合計)	4												
	陶器	残存率合計(口縫/12)													
不明	その他(水盤・花盆・水鉢・	残存率合計(口縫/12)	0												64 (6.0)
	入れ・灰盒・土器)	破片数(破片合計)	40	1	6	12		0	101	5	0	383	0	1079	
		累計	466	55	1	6	105	12	0	101	5	0	383	0	
		割合(%)	(43.2)	(5.1)	(0.6)	(9.8)	(1.2)	(9.4)	(0.5)	(35.5)					

表 10 近世陶磁器組成表 3815K

用途	器種・器形	陶器					磁器			土器	瓦器	器種別破片數小計	用途別合計 (破片數%)	
		湖・美	常滑	東・僅	備前	肥前	不明	湖・美	肥前	中國	不明			
供應具	瓶	残存率合計 (口縫/12)	148	40	0	4	31	1						232 (34.9)
		破片数 (破合率)	170	34	1	7	19							
	小瓶・小杯・建口	残存率合計 (口縫/12)	3						22					
		破片数 (破合率)	3						7					
	壺	残存率合計 (口縫/12)	97	18			2	18						
		破片数 (破合率)	59	7			1	8						
儲藏具	鉢 (石皿・向付類を含む)	残存率合計 (口縫/12)	11	10					2					25 (3.6)
		破片数 (破合率)	21	1					3					
	その他 (瓶類)	残存率合計 (口縫/12)	1						2					
調理具	鍋 (内鍋・外鍋・行・半・足・角・鋸跡)	残存率合計 (口縫/12)	13									120		130 (21.9)
		破片数 (破合率)	10											
	鍋 (片口跡・鋸跡)	残存率合計 (口縫/12)	26											
		破片数 (破合率)	10											
	鋸跡	残存率合計 (口縫/12)	15											
		破片数 (破合率)	40											
瓶 (土瓶・燒德利・瓶)	残存率合計 (口縫/12)	21				0								21 (2.1)
		破片数 (破合率)	12											
	子・急須	残存率合計 (口縫/12)	4				9							
貯蔵具	その他 (乳母・漏斗)	残存率合計 (口縫/12)	2											203 (21.9)
		破片数 (破合率)	2											
	壺 (瓶・徳利・水注・汁)	残存率合計 (口縫/12)	31					12						
食器	次	残存率合計 (口縫/12)	43					2						45 (7.0)
	盞 (巻・英春・茶入)	残存率合計 (口縫/12)	10				0							
		破片数 (破合率)	4				1							
甕	半柄・紫湯沸縫	残存率合計 (口縫/12)	15											86 (16.7)
		破片数 (破合率)	21	65										
	蓋物 (肩重・香合付)	残存率合計 (口縫/12)	12					6						
器	蓋物 (肩重・香合付)	残存率合計 (口縫/12)	10					2						12 (2.4)
	匁 (茶)	残存率合計 (口縫/12)	17		19			15						
		破片数 (破合率)	8	3			2							
灯火具	火 (灯火具・灯明架)	残存率合計 (口縫/12)	35			1								66 (12.0)
		破片数 (破合率)	7			2						57		
	提灯	残存率合計 (口縫/12)	0											
火具	火 (火鉢・火桶・火炉)	残存率合計 (口縫/12)	1											1 (0.2)
		破片数 (破合率)	1											
	その他 (瓦爐・檻台)	残存率合計 (口縫/12)	1											
化粧具	紅皿	残存率合計 (口縫/12)	0											0 (0.0)
		破片数 (破合率)	0											
	蓋 (お風呂敷・熨斗)	残存率合計 (口縫/12)	0											
神具	蓋 (お風呂敷・熨斗)	残存率合計 (口縫/12)	0											0 (0.0)
	香炉	残存率合計 (口縫/12)	0											
		破片数 (破合率)	0											
仏教具	仏像	残存率合計 (口縫/12)	0											4 (0.5)
		破片数 (破合率)	0											
	その他 (羅伊・七輪)	残存率合計 (口縫/12)	0											
寝茶具	天目茶碗	残存率合計 (口縫/12)	0											2 (0.3)
		破片数 (破合率)	2											
	その他 (水桶・鐵桶・鐵瓶)	残存率合計 (口縫/12)	14											
その他	鐵桶・煙銭	残存率合計 (口縫/12)	13											13 (2.7)
	水滴	残存率合計 (口縫/12)	0											
		破片数 (破合率)	0											
瓶	瓶 (火鉢・火桶・火炉)	残存率合計 (口縫/12)	1											1 (0.2)
		破片数 (破合率)	1											
	水滴	残存率合計 (口縫/12)	0											
其他	瓶 (火鉢・火桶・火炉)	残存率合計 (口縫/12)	1											1 (0.2)
		破片数 (破合率)	1											
	水滴	残存率合計 (口縫/12)	0											
不明	その他 (水桶・花盆・水鉢・入水・灰皿)	残存率合計 (口縫/12)	11											13 (2.7)
		破片数 (破合率)	13											
	不明	残存率合計 (口縫/12)	3				1	1	1	0				
		破片数 (破合率)	58	2	0	1	27	0	54	0	2	184	0	930 (8.2)
		割合(%)	(57.6)	(8.9)	(4.9)	(0.1)	(2.9)	(5.8)	(0.3)	(19.8)				

表 11 近世陶磁器組成表 3875K

用途	器種・目影	陶器					磁器				土器	瓦器	器種別確 定片數小計	用途別合 計(總片 數%)	
		瀬・美	荒瀬	京・信	備前	肥前	不明	瀬・美	肥前	中国	不明				
供應具	瓶	残存率合計(口縁/12)	37	2				16	5	16					
		破片数(總合計)	47	2				15	8	4				76	
	小瓶・小杯・壺口	残存率合計(口縁/12)	2					4	13						
		破片数(總合計)	4					3	14					21	
	皿	残存率合計(口縁/12)	49	0			5	7	0	9					
		破片数(總合計)	15	1			(大山瀬)3	4	2	5				30	
	鉢(内付類含む)	残存率合計(口縁/12)	17												
		破片数(總合計)	11											11	
	その他の(瓶・皿類)	残存率合計(口縁/12)												0	138 (22.7)
		破片数(總合計)													
調理具	鍋(内耳縁・短脚・行)	残存率合計(口縁/12)	53											19	75
	平・浅・陶製鍋	残存率合計(口縁/12)	56												
	鉢(片口体・鋸跡)	残存率合計(口縁/12)	8												3
	鍋形	残存率合計(口縁/12)	3												
	鋸跡	残存率合計(口縁/12)	9												13
食器	碗(土瓶・櫛目・鉢)	残存率合計(口縁/12)	16	27	24			29							
	子・魚皿	残存率合計(口縁/12)	[瀬合む]45	(瀬合む)3	(瀬合)2			(瀬合む)23						77	
	その他の	残存率合計(口縁/12)												0	168 (27.7)
		破片数(總合計)													
		破片数(總合計)													
貯蔵具	瓶(底利・便利・水注・汁次)	残存率合計(口縁/12)	3												
	晝(香・茶葉・茶入)	残存率合計(口縁/12)						10							17
	甕(半柄・香港懶拂)	残存率合計(口縁/12)	37					1						1	2
	甕(重)	残存率合計(口縁/12)	21	49											70
	蓋物(段差・香合蓋)	残存率合計(口縁/12)	6						0						
火薬	火薬(火薬・火薬筒)	残存率合計(口縁/12)	1					1						2	
	火薬(瓦罐・薬台)	残存率合計(口縁/12)	2												92 (15.2)
	火薬(火鉢・煙袋)	残存率合計(口縁/12)	21											1	
	火薬(火薬筒)	残存率合計(口縁/12)	7						24					31	
	瓦罐	残存率合計(口縁/12)												0	
火具	その他(瓦罐・薬台)	残存率合計(口縁/12)												31 (5.1)	
	鉢(火鉢・煙袋・風呂・火盆・手足・水)	残存率合計(口縁/12)	10											0	
	火薬(火鉢・手足・水)	残存率合計(口縁/12)	7	13										20	
	その他(煙袋・七輪)	残存率合計(口縁/12)												0	
		破片数(總合計)												15	35 (5.8)
化粧具	紅皿	残存率合計(口縁/12)						4						1	1
	香炉(お香薰器・蜜油)	残存率合計(口縁/12)						1							0
	香爐(蜜油)	残存率合計(口縁/12)													0
	鏡	残存率合計(口縁/12)													0
	その他(鏡)	残存率合計(口縁/12)												1	(0.2)
神仏具	神具(神酒拂利・仙花)	残存率合計(口縁/12)												0	
	香炉	残存率合計(口縁/12)												2	
	仙服具	残存率合計(口縁/12)												0	
	その他	残存率合計(口縁/12)												2	
	廢茶具	残存率合計(口縁/12)												0	(0.4)
その他	天目茶碗	残存率合計(口縁/12)												0	0
	鉢(椎木鉢・鍋鉢・羅)	残存率合計(口縁/12)	46												
	鍋鉢(佳胡境)	残存率合計(口縁/12)	10											10	
	水滴	残存率合計(口縁/12)							6						
	陶器	残存率合計(口縁/12)							3					3	
不明	陶器・土器	残存率合計(口縁/12)												0	
	その他(水桶・花盆・水)	残存率合計(口縁/12)	14												
	皿・火入れ(良質なし)	残存率合計(口縁/12)	9												
		破片数合計(口縁/12)	10					9						17	
		破片数(總合計)	87	5				2						25	
		破片数合計	354	70	4	1	0	29	18	18	2	49	63	0	608
		割合(%)	(58.3)	(11.6)	(0.7)	(0.2)		(4.8)	(3.0)	(3.0)	(0.4)	(8.1)	(10.4)		

毛目碗、青緑釉碗皿、京焼風碗皿である。

調理具鍋は土師質鍋類で占められ、内耳鍋（深いもの、浅いもの2タイプB6類）、茶釜形鍋（羽無釜B4類）、焰烙（D類）がある。擂鉢では混入も含めて第3小期～6小期のものがみられるが、第4小期が主体である。陶器德利類は尾呂徳利、舟徳利である。

その他に喫茶具の天目茶碗が少量ながら含まれ、大型の陶錘の出土量がやや目立つことなどが特徴としてあげられる。瀬戸・美濃産陶器の年代観により、17世紀中葉～後葉の時期の資料と思われる。

389K (96 ~ 202, 表9)

466SE に一部重複する土坑資料である。陶磁器類（破片数）での瀬戸・美濃の割合は 66.2%とやはり高率で、7割近くを占める。産地比（破片数）では瀬：肥 = 1 : 0.44 となり、肥前系の割合が 466SE と比較してやや高くなっている。

供膳具の割合は 37%であり、調理具（土師質鍋類）、灯火具（土師質皿）の増加により相対的に低い数値となっている。供膳具全体でみると産地別個体数比は瀬：肥 = 1 : 0.45 となり、小碗・小杯類では瀬：肥 = 1 : 0.85 と瀬戸・美濃産陶器の増加が認められるもの、依然として肥前磁器の占有率は高い。瀬戸・美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉丸碗、腰錫茶碗、皿類は灰釉丸皿、輪禿皿、菊皿、ひだ皿、型打皿、摺絵皿、鉢類は黄瀬戸鉢少量と鉄絵鉢である。肥前系陶器は刷毛目碗、青緑釉碗、京焼風碗皿類である。

調理具鍋のほとんどが土師質鍋類であり、内耳鍋（B6類）、茶釜形鍋（羽無釜B4類）である。擂鉢は第3小期～第5小期のものが含まれるが、主体は第5小期である。

陶器徳利類は尾呂徳利、舟徳利、鍛徳利である。焼塩壺はすべて身 A 類である。

灯火具では陶器製灯明皿が若干認められる。土師器皿はロクロ成形で橙色を呈する。比較的一括性一括性の高い資料群である。スズ付着資料は一部である。

このほか喫茶具とした天目茶碗が少量みられるほか、灰釉丸碗では器高が高く深い大型のものが目立つ。瀬戸・美濃産陶器の年代観により 17世紀後葉～18世紀前葉の時期の資料と思われる。

381SK (203 ~ 319, 表10)

当初は地下室として構築されたと思われる方形土坑の資料である。土坑上部は防空壕（340SX）に削平されている。一部資料は 492SK 資料と接合関係にある。

陶磁器類（破片数）に占める瀬戸・美濃の割合は 75.8%と高率である。産地比（破片数）では瀬：肥：京 = 1 : 0.103 : 0.085 となり、肥前系が減少し、京・信楽系は肥前系に拮抗する程度にまで増加している。

供膳具の割合が 36.9%と低くなり、貯蔵具（蓋物、常滑窓など）、火具（火鉢など）、その他（植木鉢など）がそれぞれ増加している。供膳具における産地別個体数比では、瀬：肥：京 = 1 : 0.29 : 0.263 である。小碗・小杯類では瀬：肥 = 1 : 7.33 で肥前磁器がこの器種を独占している。瀬戸・美濃産陶器の内訳は、碗類は灰釉丸碗、上絵付碗、腰錫茶碗、沈線碗、拳骨茶碗、小杉碗、笠文碗、せんじ、小中、箱形湯呑など多種の碗・湯呑がある。皿類は灰釉丸皿、輪禿皿、梅文皿、型打皿、摺絵皿、染付皿がある。鉢類には石皿が含まれる。京・信楽系では灰釉丸碗、上絵付碗、小杉碗などがある。肥前磁器は丸碗のほか、猪口がある。

調理具では、土師質鍋のほとんどが焰烙（J2類、J3類）に占められるようになったほか、陶製鍋（行平、耳付鍋）、土瓶などが出現している。擂鉢は第8小期が主体と思われる。

貯蔵具では、陶器・磁器の両方で蓋物が増加がみられる。陶器徳利は尾呂徳利、鍋徳利、貧乏徳利がある。焼塙壺は蓋B類と蓋受の退化した身C類で、「泉湊伊織」刻印が認められる。

灯火具とした土器皿の多くの資料ではスヌ、タール状の付着物が認められる。

火具では火鉢類が増加しており、火具への分類に漏れた常滑産を含めると増加率はさらに高いものと予想される。

その他に分類した植木鉢、鳥鉢鉢、喫煙具の増加が目立つほか、植木鉢、喫煙具への転用の痕跡多くの資料で認められる。

個別にやや特殊な資料をとりあげる。232は鉛釉・透明が施された釉軟質焼成の鉢である。手づくね成形、236,237は碗片を利用した色見と思われる。238は水注蓋。焼締で器壁は薄く硬質の焼成である。381SK資料には上絵付陶器が比較的多く、復元されたものでは灰釉丸碗(222,228)、蓋(233)、灰釉丸皿(246,247)などがある。脂土・釉調等より判断して、233を除くほかすべては瀬戸窯の製品と考えられる。過去の出土資料にも同様の上絵付製品が確認されており、京・信楽製品に分類されているものも少なくない。具体的な生産窯は未確定であるが、瀬戸窯においても一定量の生産があったことを窺わせる資料といえよう。土製の玩具類は比較的良好な状態で出土しており、人形(294)、天神像(295,298)、箱庭道具茶室(297)、ままごと道具(296)などがある。ほかに綠釉丸瓦(293)がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、18世紀後葉～19世紀初頭の時期の資料と思われる。

492SK (320～393)

381SK出土資料と一部は接合関係にある。肥前系染付型打皿(326,332)や、青磁鉢(327)上絵付跳子(344)など優品が含まれる。蕪麦猪口(320～325)は描いて6点が復元でき、一括して廃棄されたと考えられる。土瓶は381SK資料とは異なり、直線的な注口をもつタイプである。焼塙壺(380)は蓋受のないE類。土師質鍋は茶釜形鍋(383、羽無釜B4類)と焰烙(384,J類)があり、384は外面底部に沢尻文の刻印が残る。土製・陶製・磁器製の玩具類(385～393)があり、このうち385茶室は箱庭道具としては特に大型と思われる。381SK資料と同形の綠釉丸瓦(381)1点がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により19世紀前葉の時期の資料と思われる。

387SK (394～459,表11)

陶磁器類(破片数)にしめる瀬戸・美濃(陶器・磁器)の割合は、68.2%である。肥前系、京都・信楽系は激減し、代わりに産地不明の磁器類の増加が認められる。

供膳具の割合は22.7%に減少し、調理具が27.7%となっている。供膳具碗において産地別個体数比は瀬：肥：不明=1:0.094:0.3となる。肥前系がほぼ独占していた磁器碗においても瀬戸・美濃産が出現し、個体数比は瀬：肥=1:0.31と凌駕している。碗類は端反碗、上絵付碗、丸碗、掛分碗、拳骨碗、広東碗、湯呑類などがあり、皿類は梅文皿、染付皿などである。

調理具は陶製の鍋類(行平、耳付鍋)と土瓶、急須が増加している。土師質鍋はすべて焰烙であり、表面に調整痕がほとんどみられないタイプ(L類)が出現している。擂鉢は第9(10)小期が主体と思われる。

その他に分類した植木鉢、鳥鉢鉢、喫煙具などの割合は相対的に増加している。

資料を個別にみると、焼締急須(432)、吊手に「玉川」刻印のある上絵付土瓶(422)、筒描文様

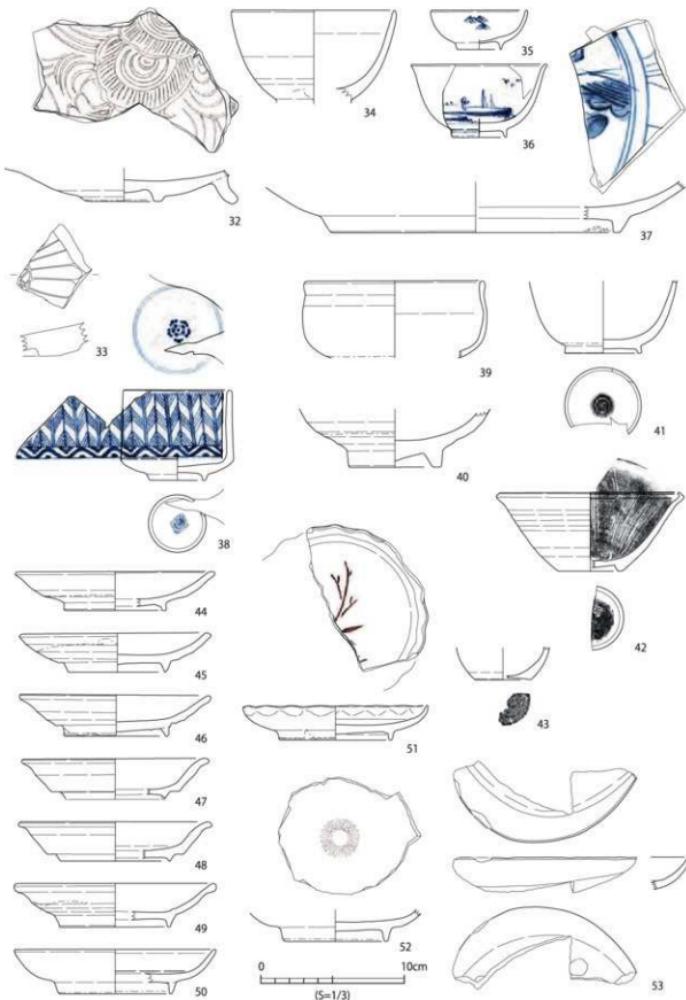


図 27 466SE 出土陶磁器 1 (S=1/3)



図 28 466SE 出土陶磁器 2 ($S=1/3$)

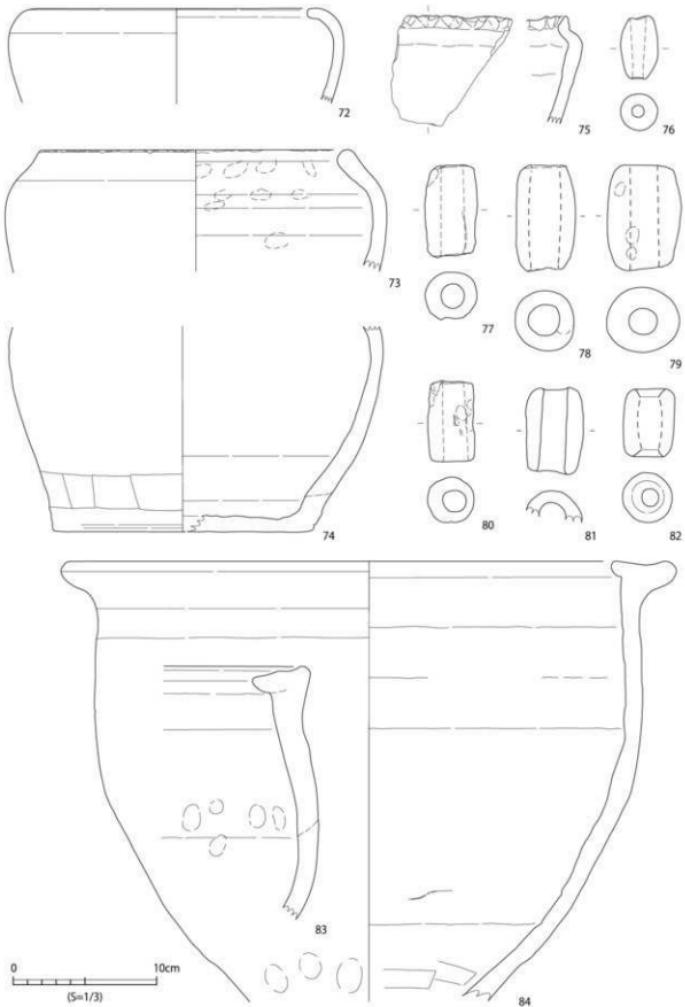


図 29 4665E 出土陶磁器 3 (S=1/3)

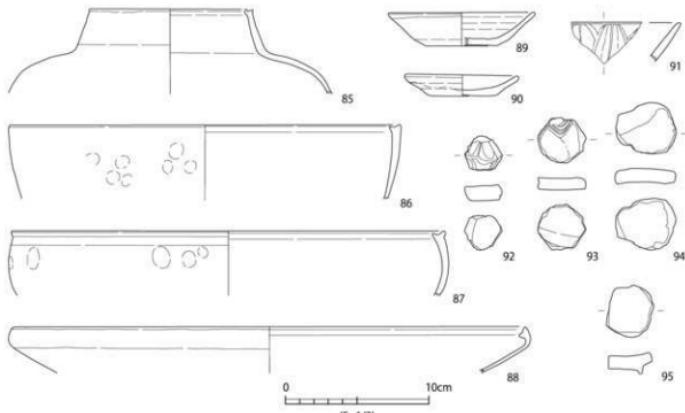


図30 466SE 出土陶磁器4 (S=1/3)

の土瓶（434）、藻掛急須？と蓋（441,442）、土器二重焜炉（453）など喫茶（煎茶）と関連すると思われる器種が特に多く含まれている。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、19世紀前葉の時期の資料と思われる。

413SK (460 ~ 477)

近世陶磁器は主に上層覆土に含まれる。近代陶磁器類は下層の焼土や焼けた砂岩などに混じり大量の瓦類（桟瓦、飾瓦）とともに出土した。染付、クロム青磁釉があり、施文方法は手描のほか摺絵がみられる。行平蓋（475）は黄褐色釉が施され、焼成は軟質、裏面に刻印が認められる。19世紀後期～20世紀初頭の資料と思われる。

北西部その他土坑（478 ~ 503）・包含層出土資料（504 ~ 529）

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。380SK（478～481）は492SKに重複する土坑である。灰釉蓋物（478）、灰釉蓋（479）など18世紀後葉の資料と思われる。153SK（485,486）は併せ口の状態で出土した土師器皿2枚である。他にみられないタイプであり、白色でロクロ成形、硬質の焼成であり、1点には外面に墨書きが施されている。胎衣埋納の容器かと推測される。焼塩壺では身C類（488）、身D類（526）、蓋B類（525）などがある。521は瓦質の火消し壺底部である。瓦質の製品は少ない。玩具ではままごと道具（527,528）のほか、鉄軸（柿軸）の施された陶製人形猿（529）などがある。

110SK (530 ~ 585)

屋敷地境界と想定される溝（496SD）の廃絶後に東側から掘削された土坑の資料である。下部は496SD存続期間に重なる土坑（070SK）を壊していると考えられる。瀬戸・美濃産陶器類では18世

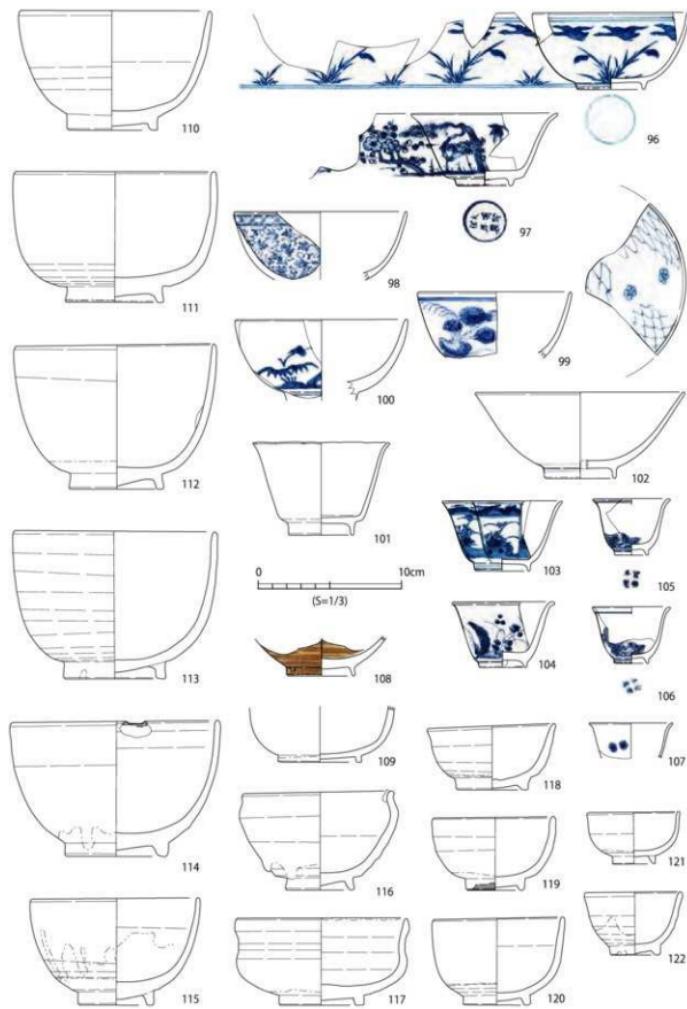


図 31 3895K 出土陶磁器 1 (S=1/3)

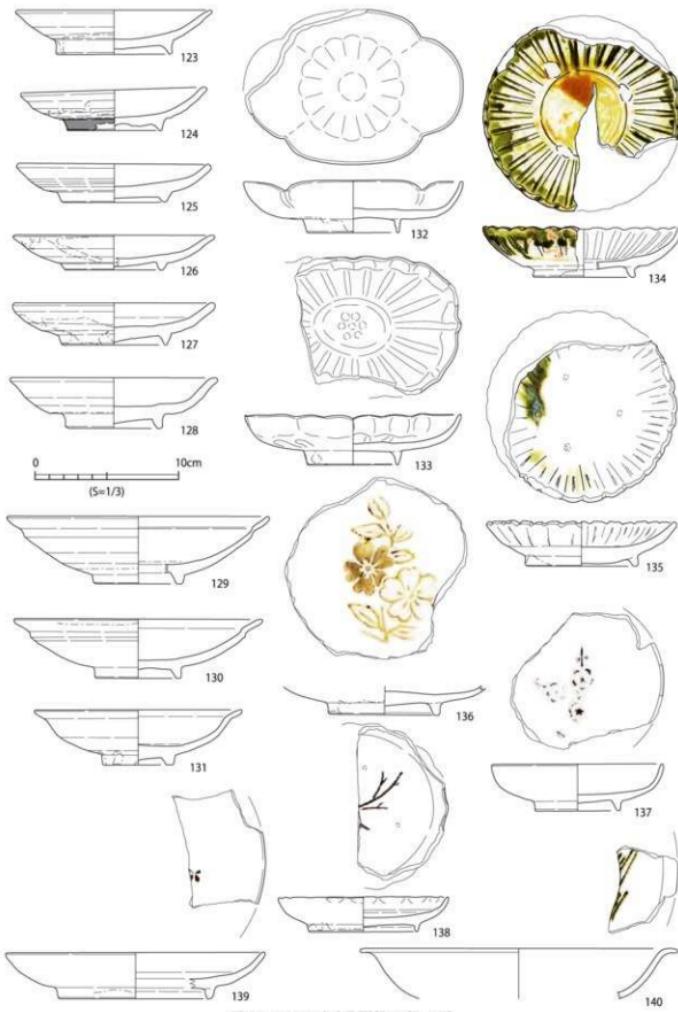


図 32 389SK 出土陶磁器 2 ($S=1/3$)

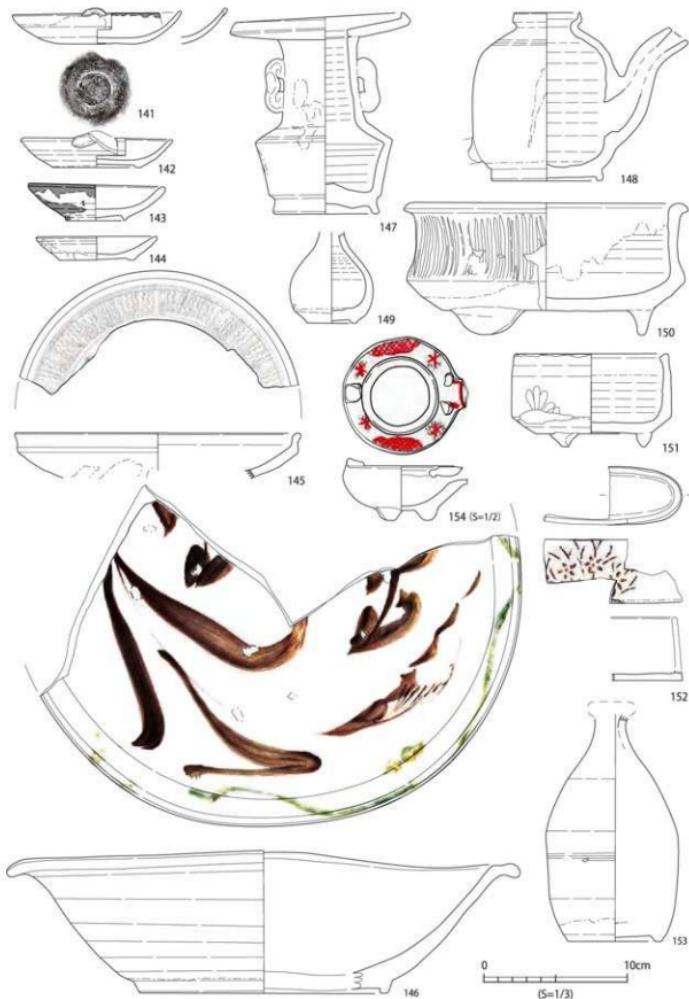


図33 3895K 出土陶磁器3 (S=1/3)

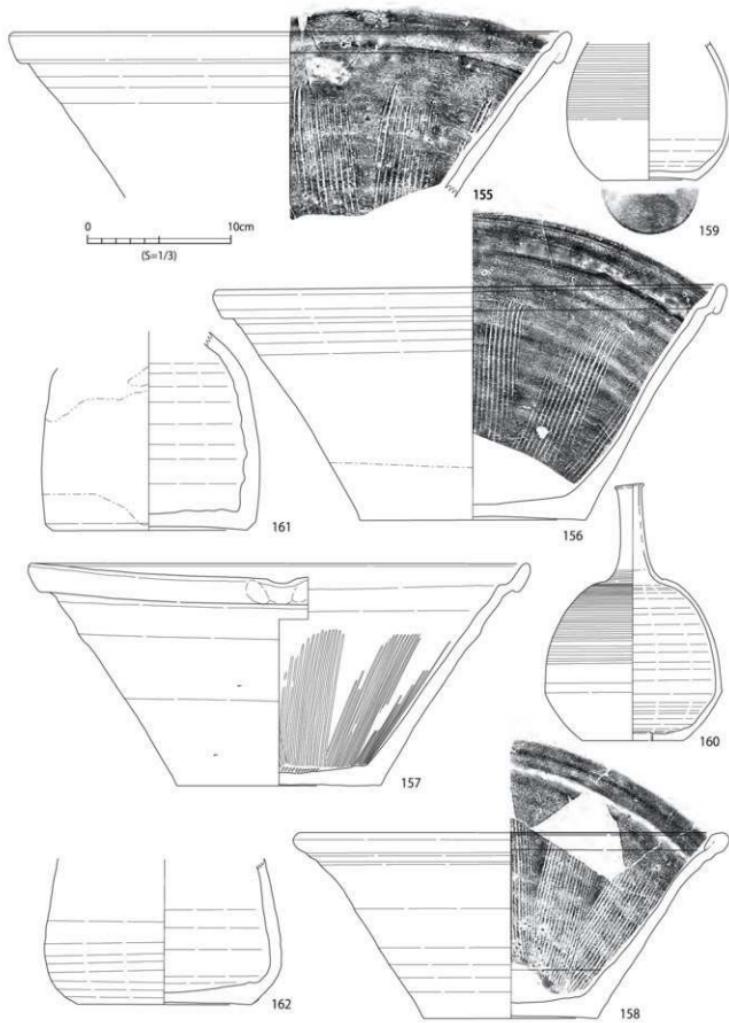


図34 389SK 出土陶磁器 4 ($S=1/3$)

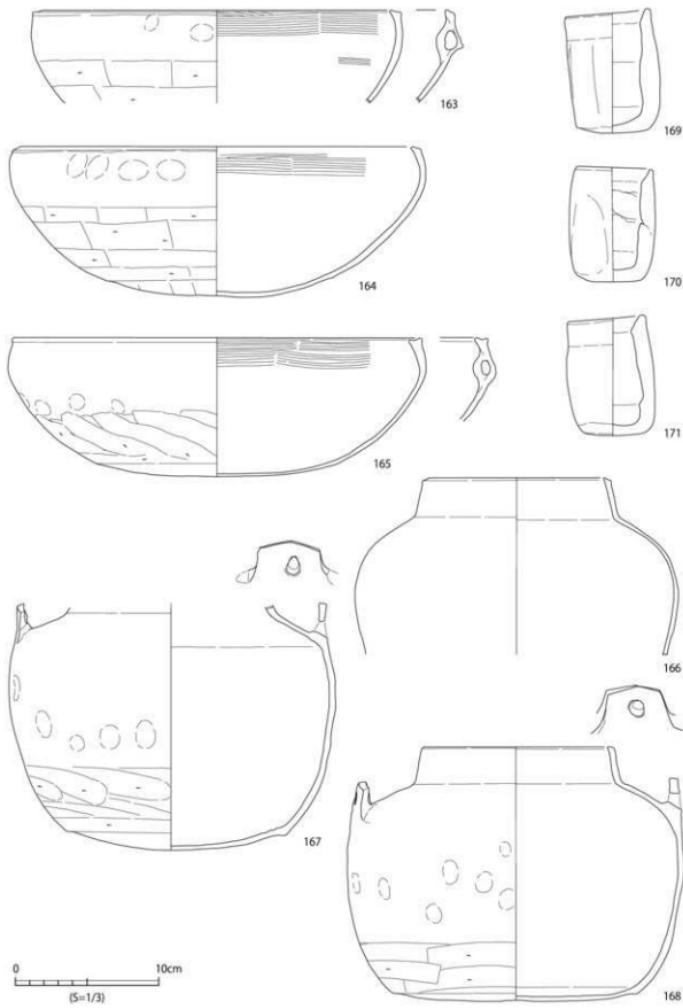


図 35 3895K 出土陶磁器 5 (S=1/3)

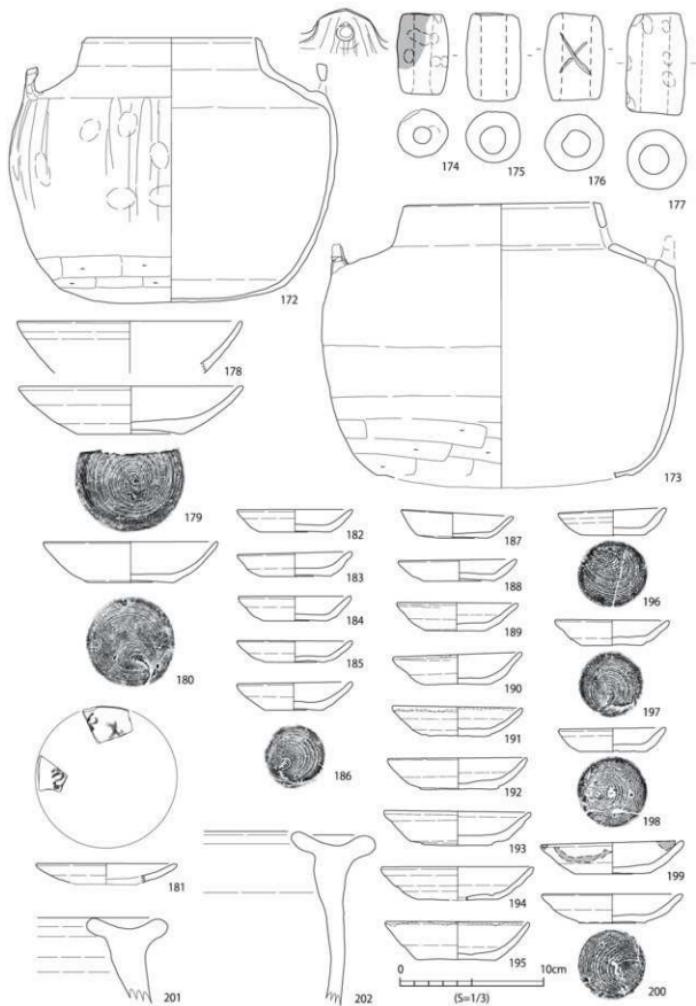


図36 389SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)

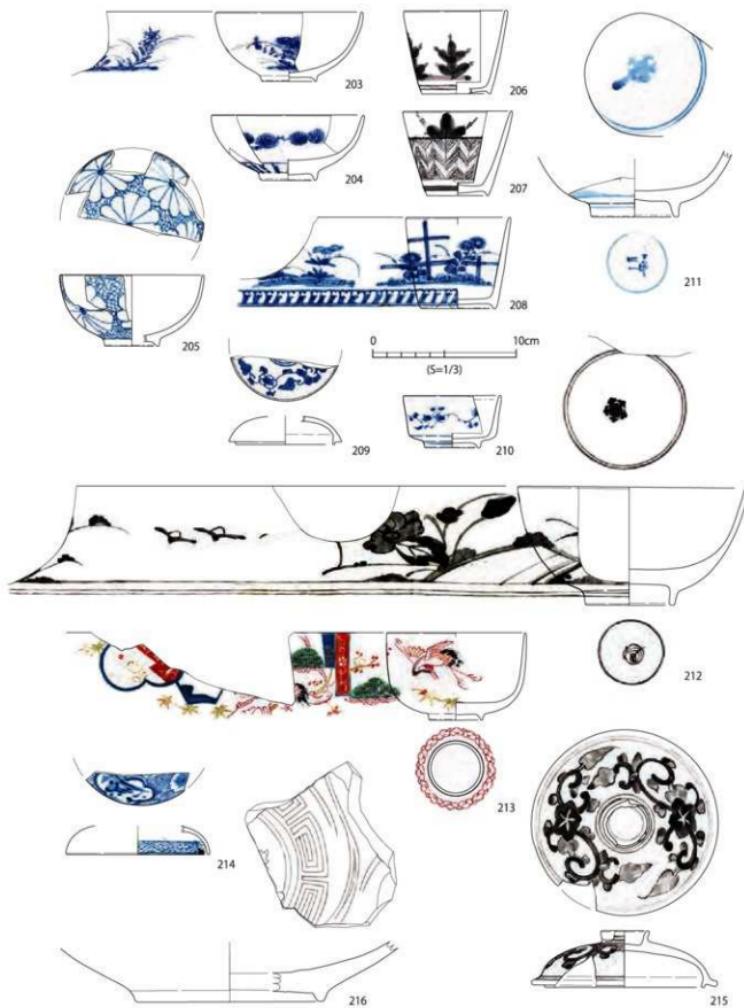


図 37 381SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)



図38 381SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)

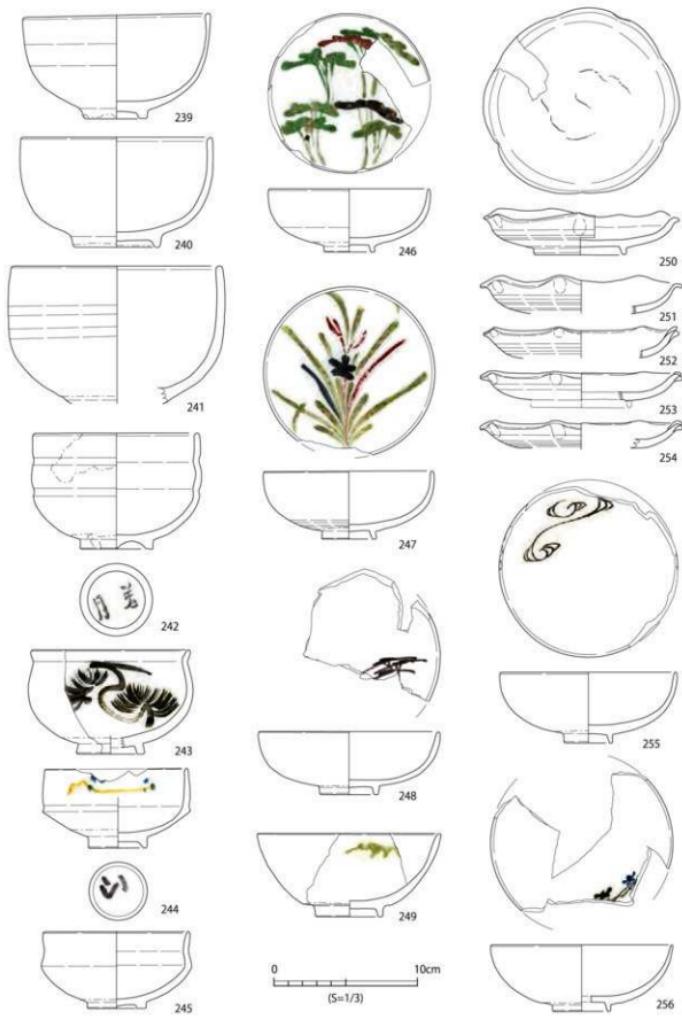


図 39 381SK 出土陶磁器 3 ($S=1/3$)

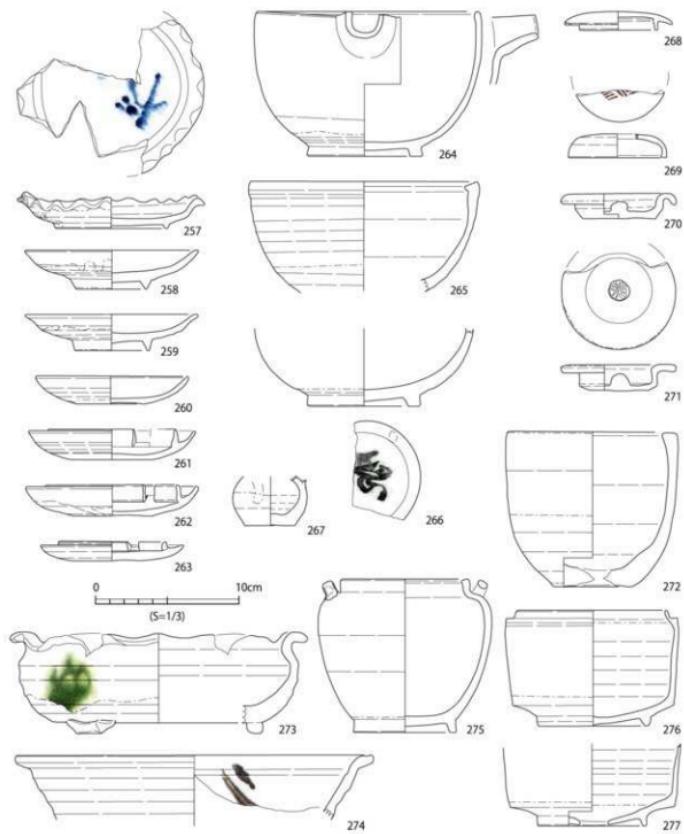


图 40 381SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)

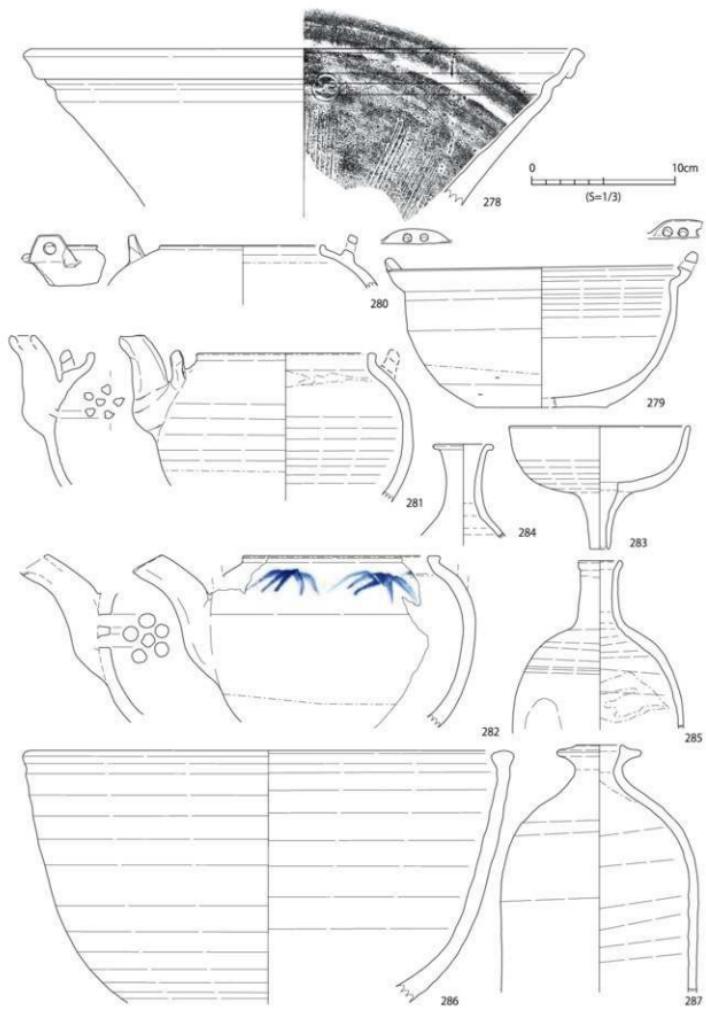


図 41 381SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)

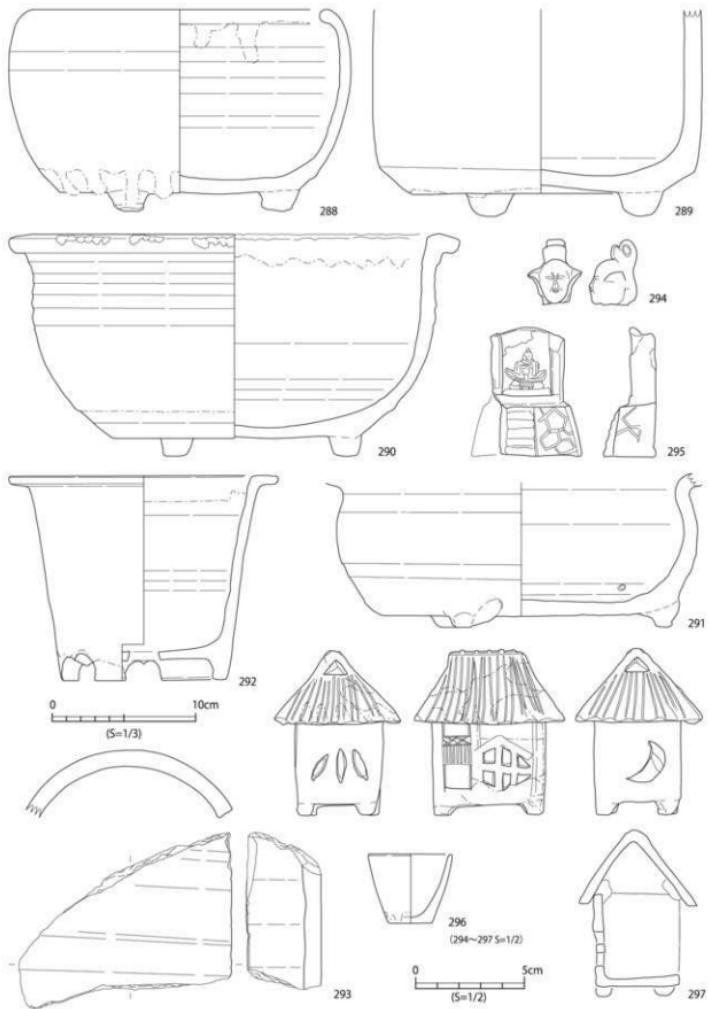


図 42 381SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)

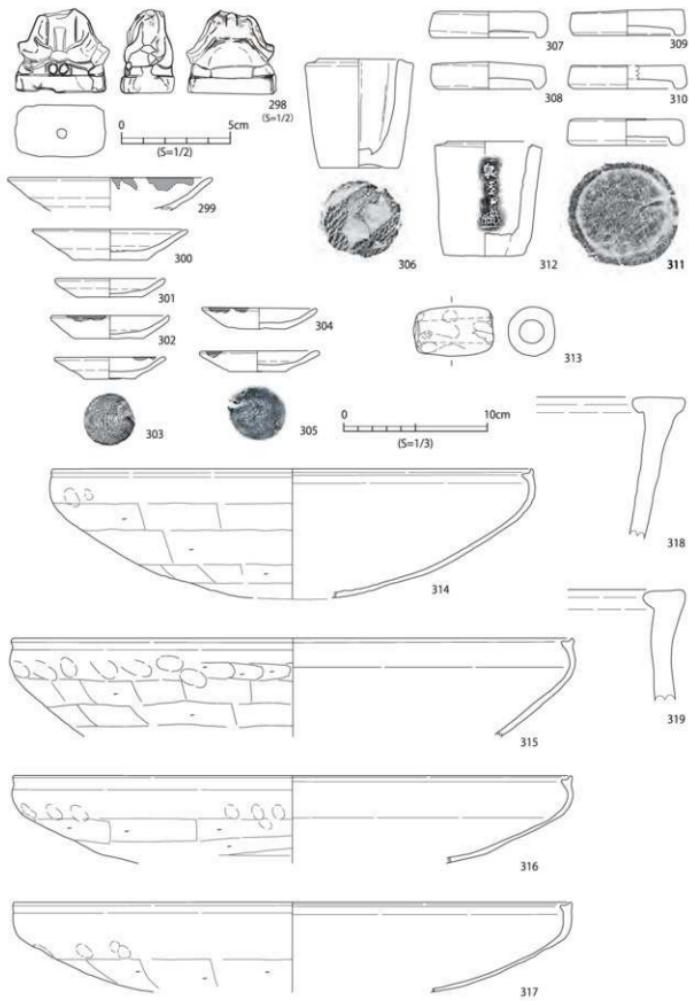




図 44 492SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

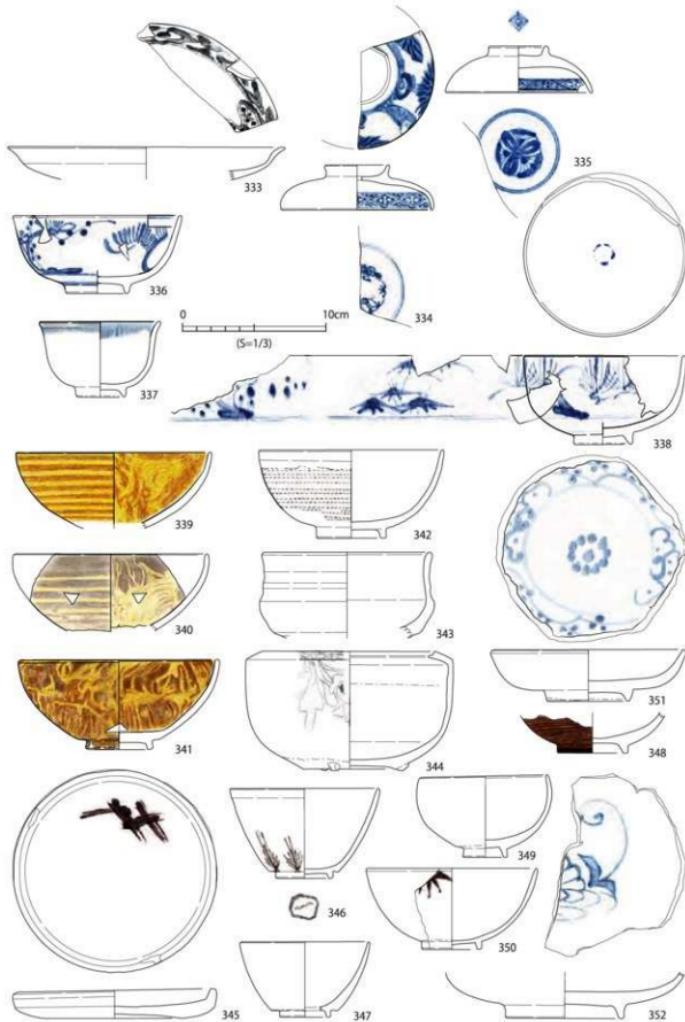


図 45 492SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)

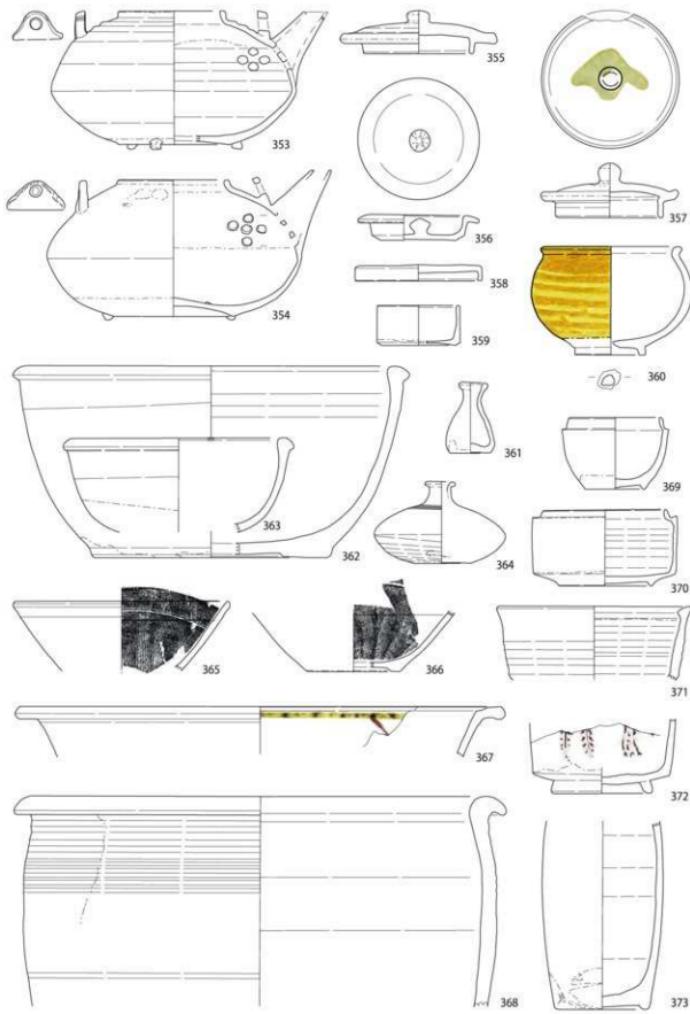


図 46 492SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)

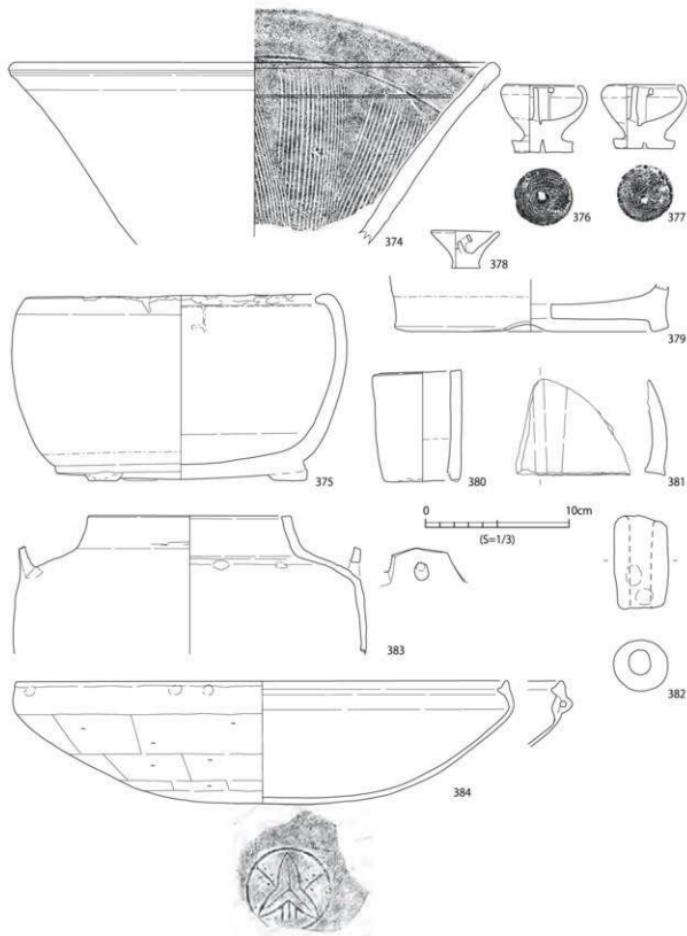


图 47 4925K 出土陶器 4 (S=1/3)

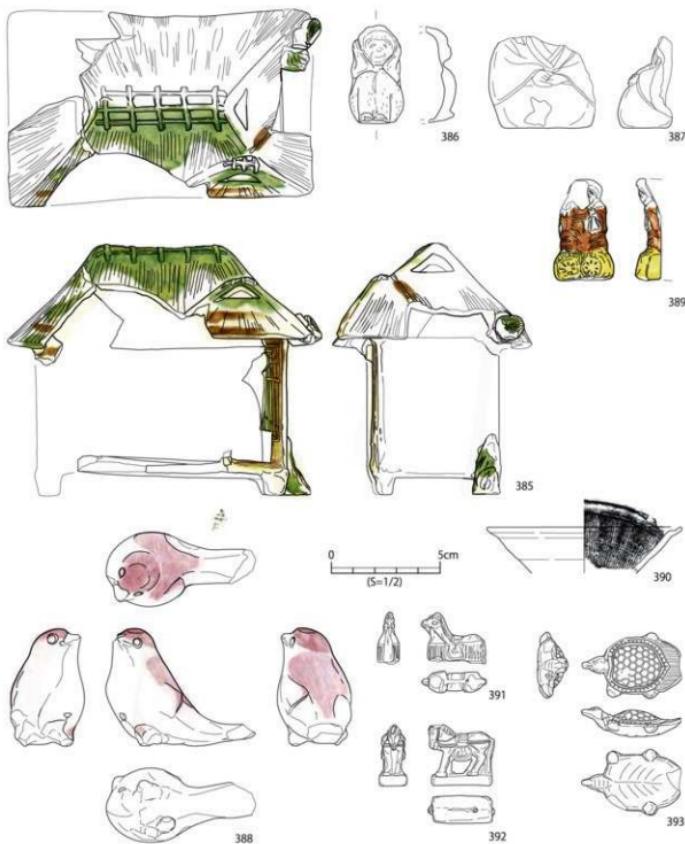


图 48 492SK 出土陶磁器 5 (S=1/2)

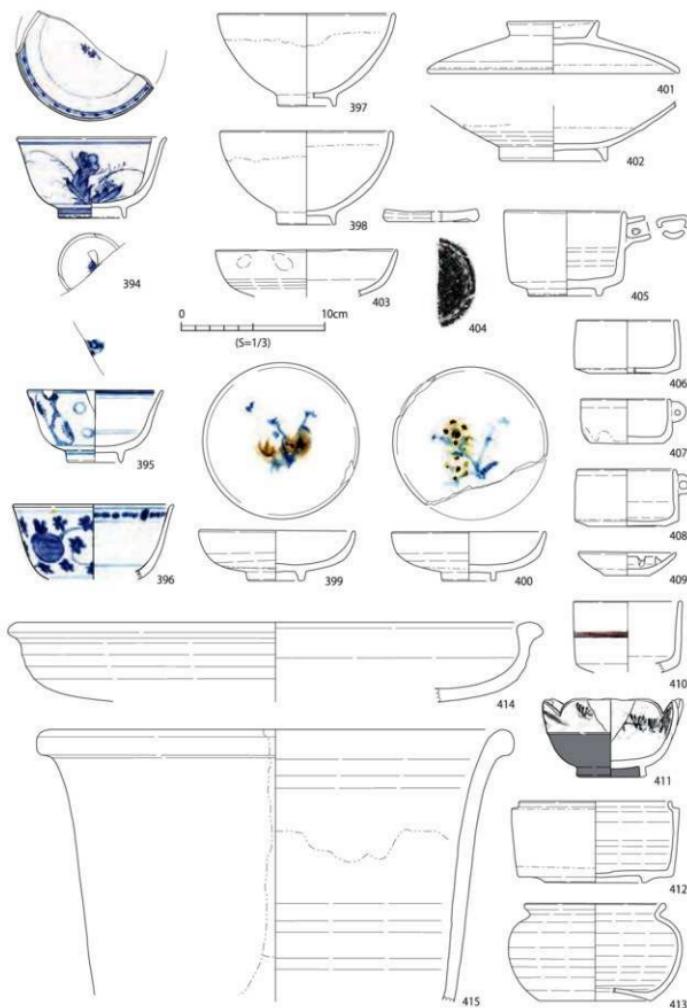


图 49 387SKSK 出土陶器 1 ($S=1/3$)

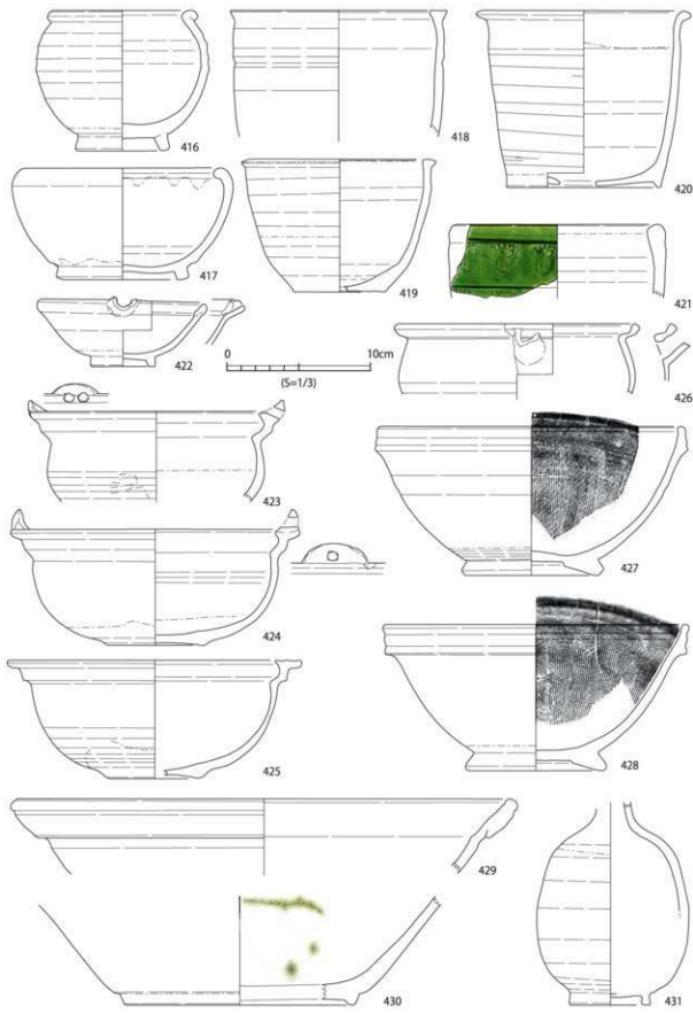


图 50 3875SKK 出土陶磁器 2 ($S=1/3$)

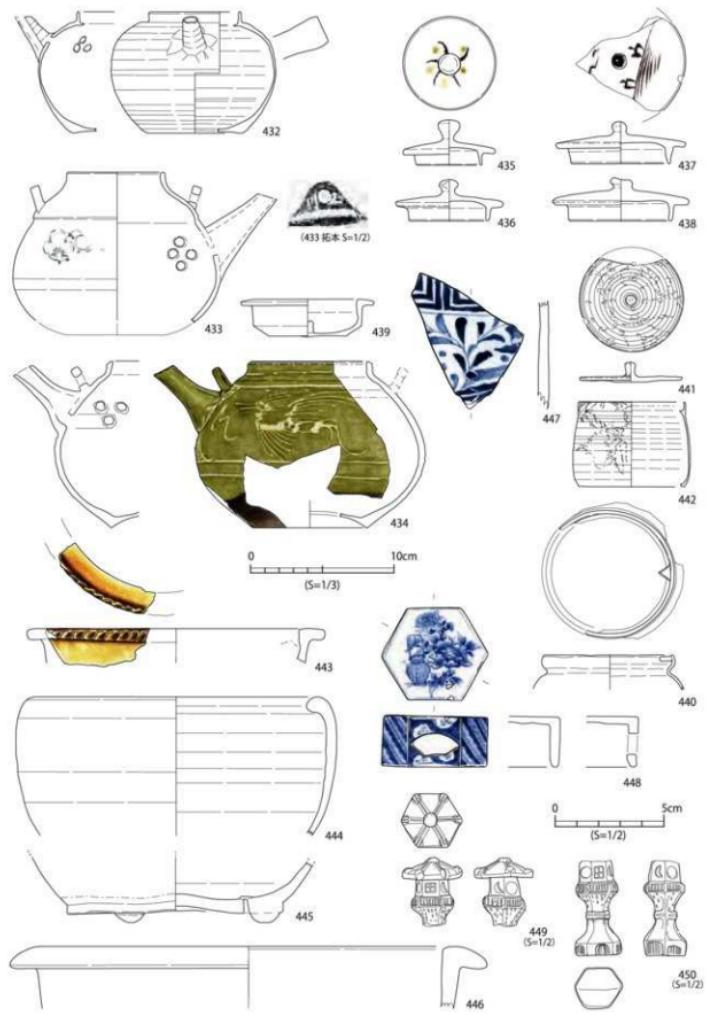


図 51 387SKSK 出土陶器 3 ($S=1/3$)

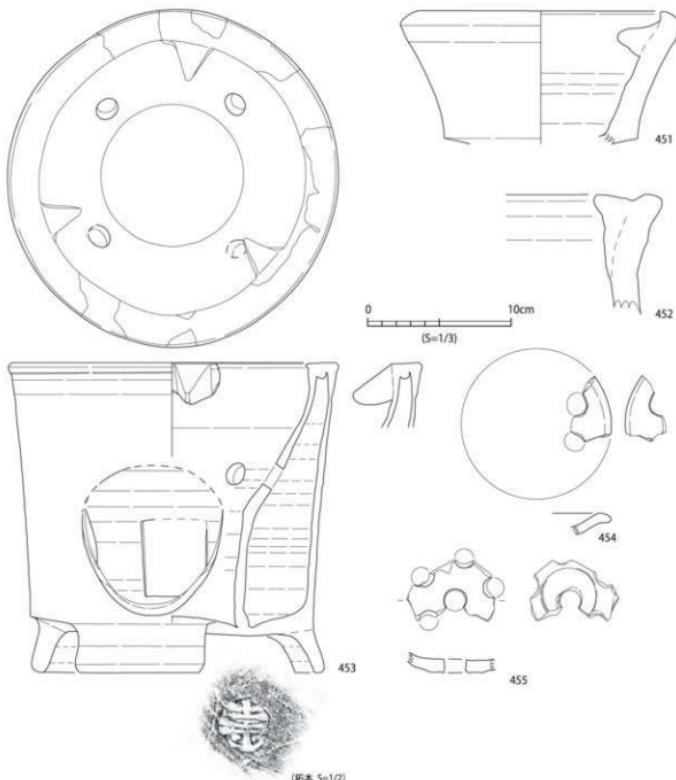


図 52 3875KSK 出土陶磁器 4 (S=1/3)

紀後葉～19世紀初頭の時期が主体であり、灰釉碗（538,539）など17世紀末～18世紀前葉の資料が混入していると考えられる。

京・信楽系では柳茶碗（541）、小杉碗（542）上絵付筒形湯呑（535）などがある。焼塙壺は「泉湊伊織」刻印のある身 C 類（567,569）身 D 類（568）、蓋 B 類（566）がある。調理具では瓦質鍋（550）のほか、土師質茶釜形鍋（羽無釜）、焰格（J2 類）がある。玩具類（578～585）が比較的まとまって出土しており、土製犬（582,583）、磁器製上絵付鶏（585）などがある。

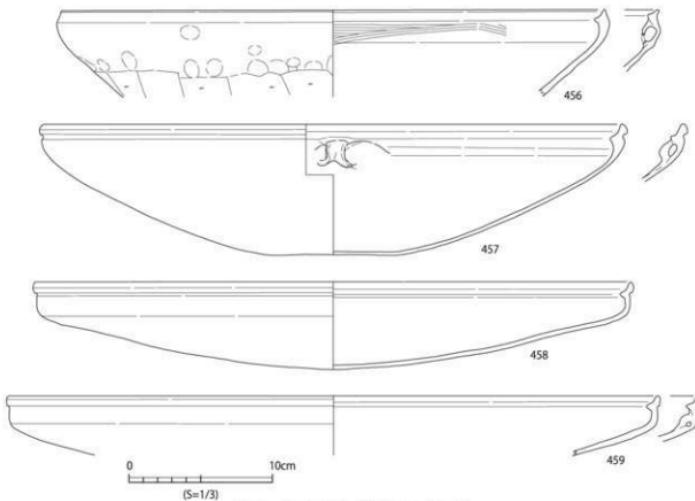


図53 387SKSK 出土陶磁器 5 (S=1/3)

085SK (586 ~ 609)

屋敷地境界と想定される溝（496SD）の1.2m西側に位置する土坑の資料である。17世紀後葉の時期を主体に、19世紀初頭の資料が混入していると考えられる。志野織部向付（598）1点がある。

北東部その他土坑（610 ~ 647）・南部の遺構（701 ~ 718）・包含層出土資料（648 ~ 700）

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。焼塙壺（618.686）は身A類であり内面の変色が顕著に認められる。687は身C類で「泉湊伊織」刻印があり、内面全体に黒色の付着物がある。717は身B類で、「口伊織」の刻印がある。土師皿のうち619.620.622.629などは調整・胎土・色調などが異なり、中世に遡る可能性がある。織部向付（632）は把手、三足が付く。出土遺構は085SKに比較的近い。639は磁器染付の大型の鉢のような形状で、内外面に同様の文様が施されている（写真図版 遺物3）。瓦質風炉または火鉢（647）は表面を装飾し、側面に半月形削り込みで把手が作り出されている。上絵付碗（653.654）、小瓶（656）は胎土等より判断して瀬戸窯産と思われる。玩具類（691 ~ 700）では芥子面（696）や土製猿（698）、陶製猪（699）などがある。702は環平底小判型皿、716染付碗はガラス縞の痕跡があり、高台内に朱書が残る。鉄軸火鉢（718）は底部に穿孔があり、内面に墨書きが認められる。

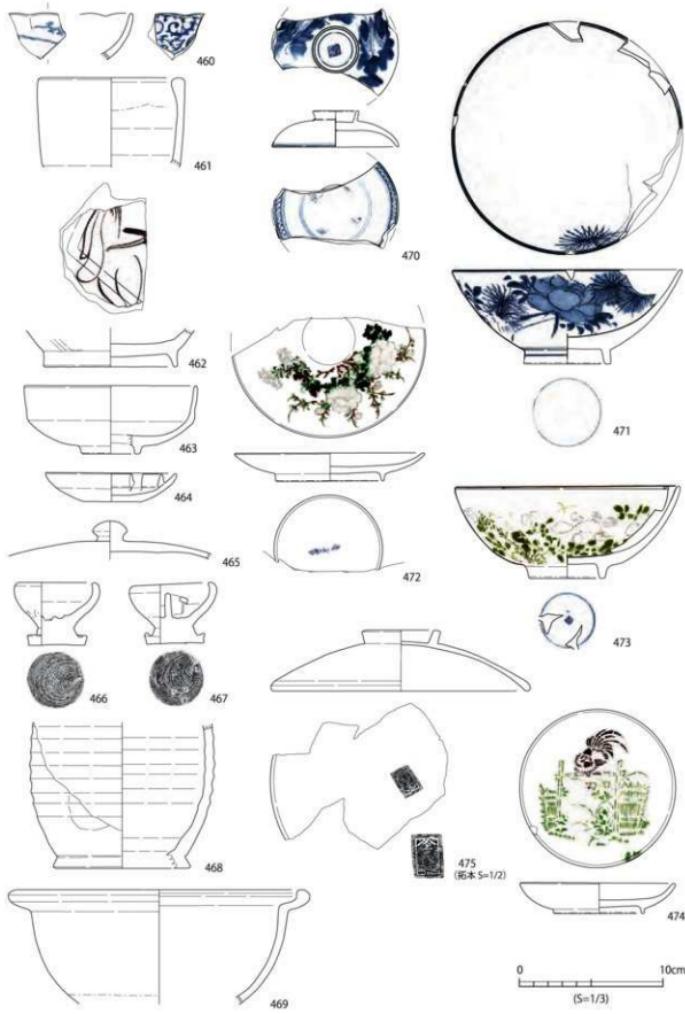


図 54 413SKSK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

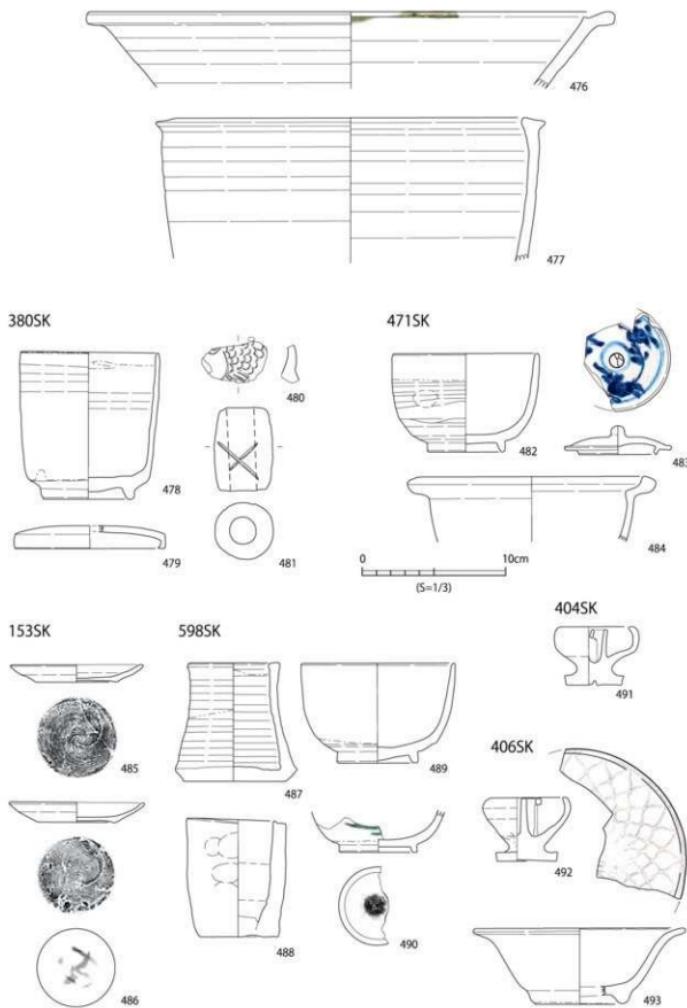


図 55 北西部土坑群 出土陶磁器 1 ($S=1/3$)

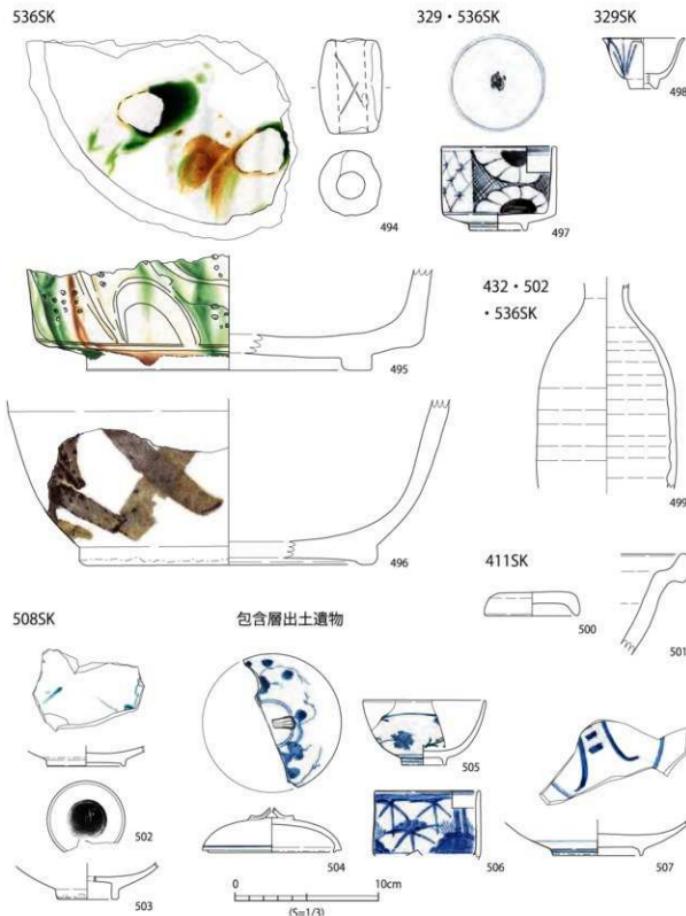


图 56 北西部土坑群 出土陶器 2 ($S=1/3$)

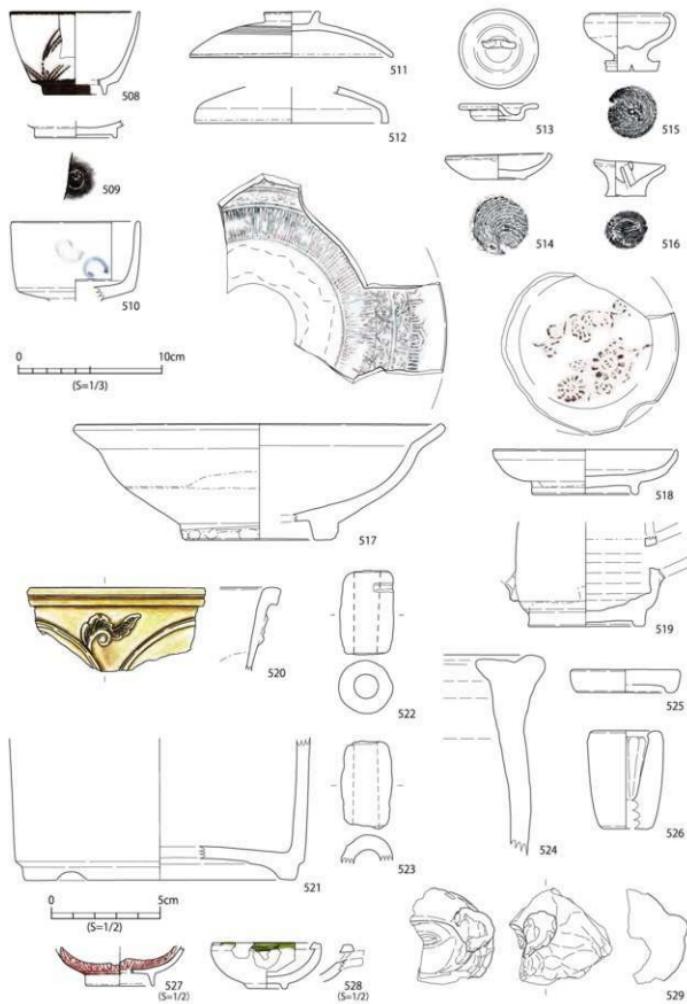


图 57 包含层（北西部土坑群）出土陶器 (S=1/3)

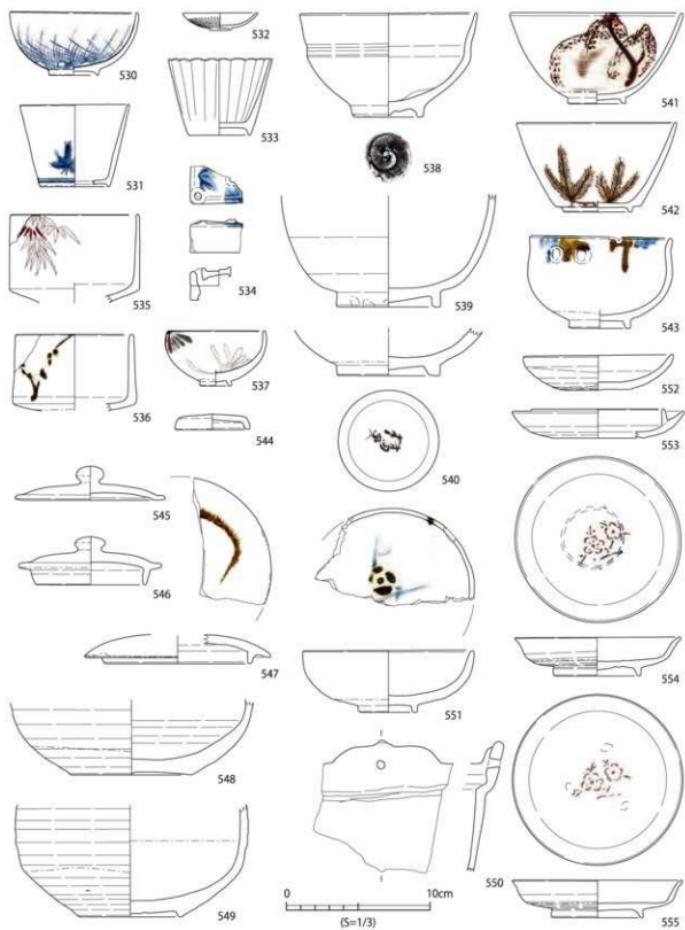


図 58 110SKSK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

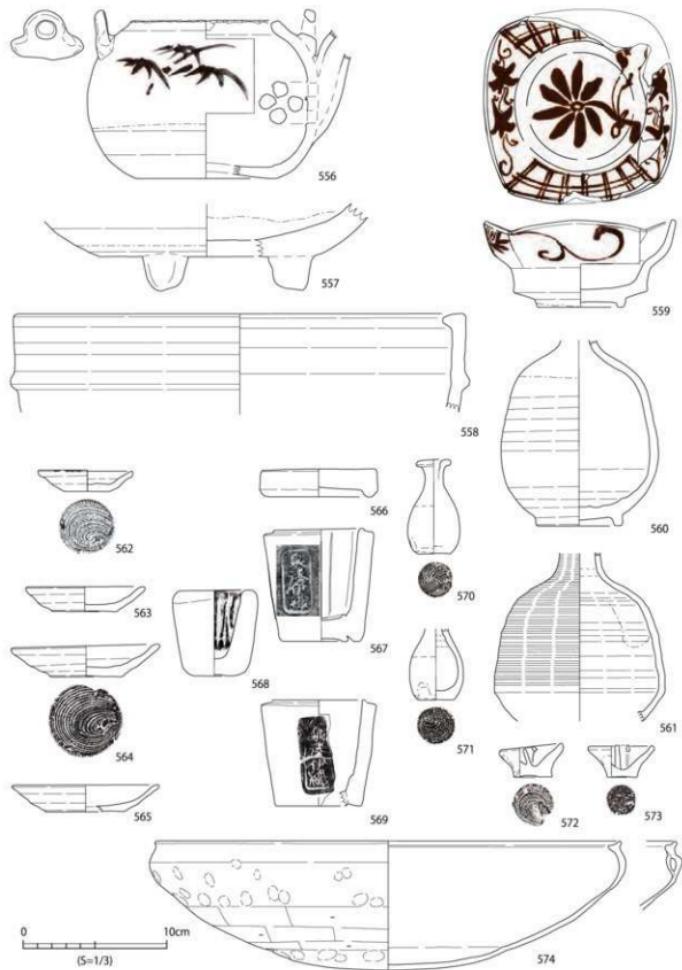


図 59 110SKSK 出土陶磁器 2 (S=1/3)

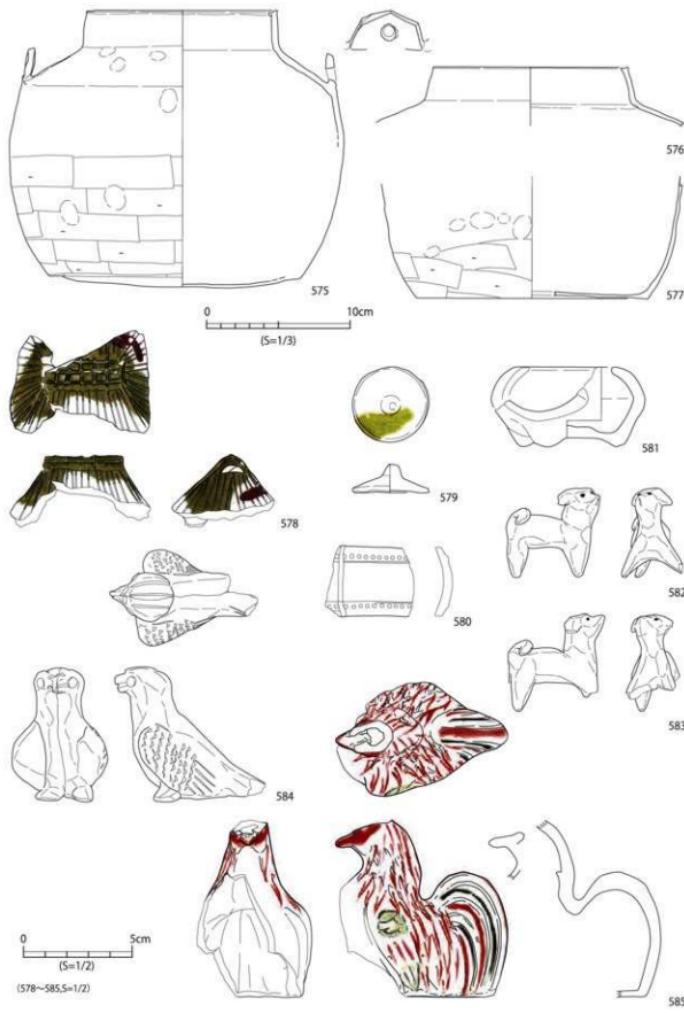


圖 60 1105KSK 出土陶磁器 3 (S=1/3)

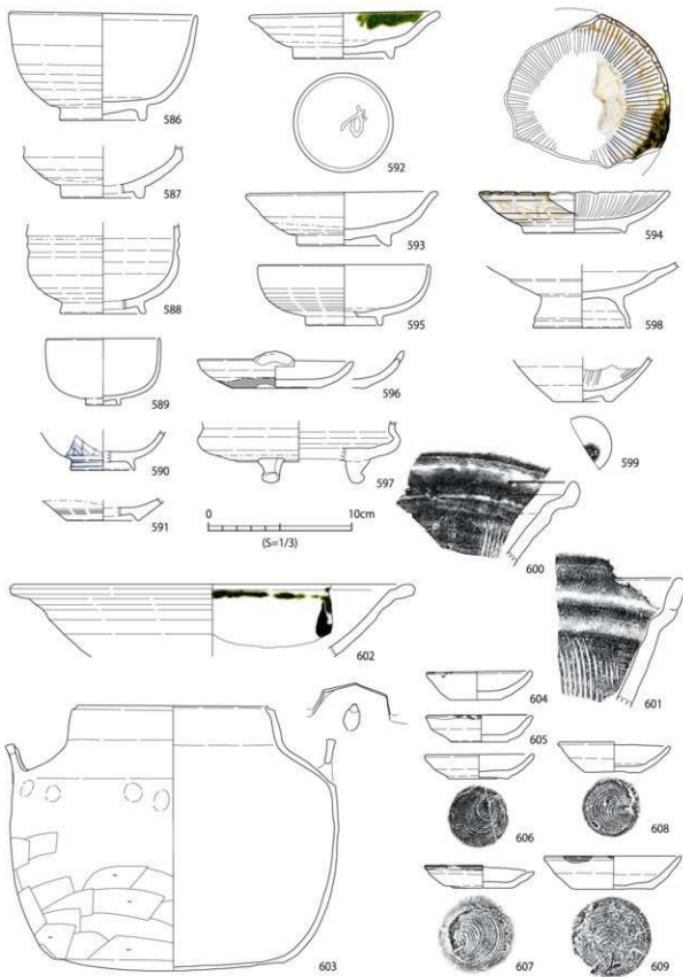


图 61 0855KSK 出土陶磁器 ($S=1/3$)

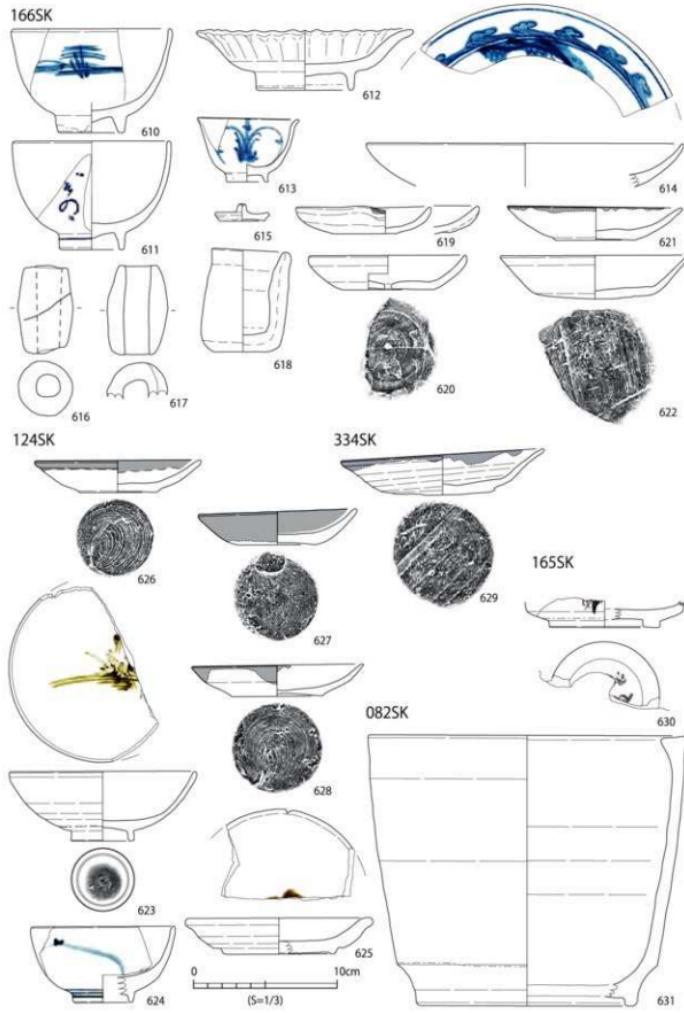


図 62 北東部土坑群 出土陶磁器 1 (S=1/3)



図 63 北東部土坑群 出土陶磁器 2 ($S=1/3$)

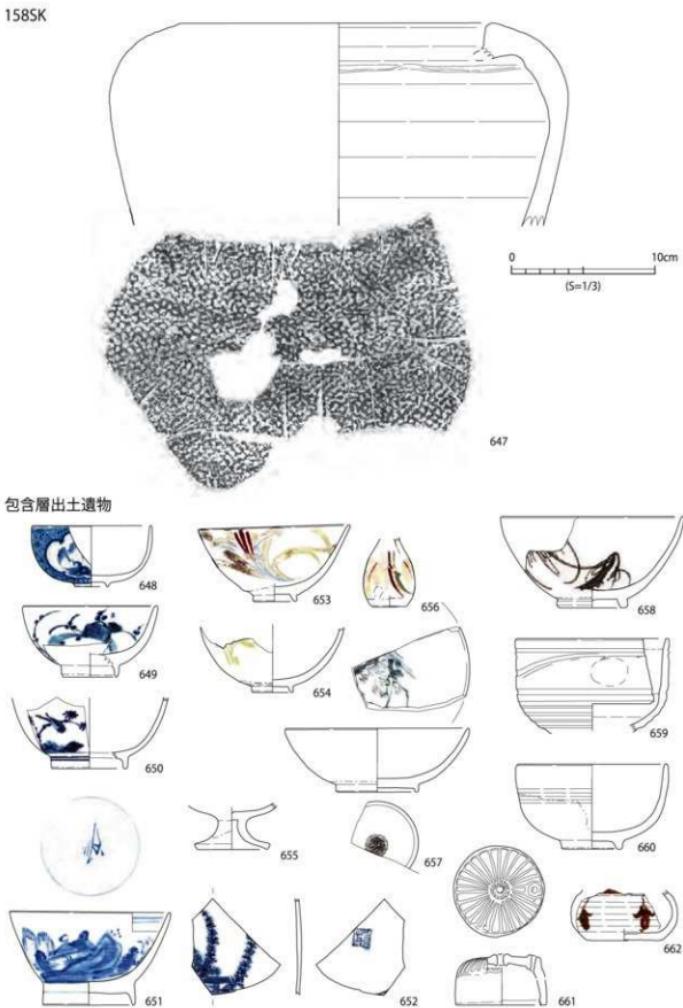


図 64 包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 1 (S=1/3)

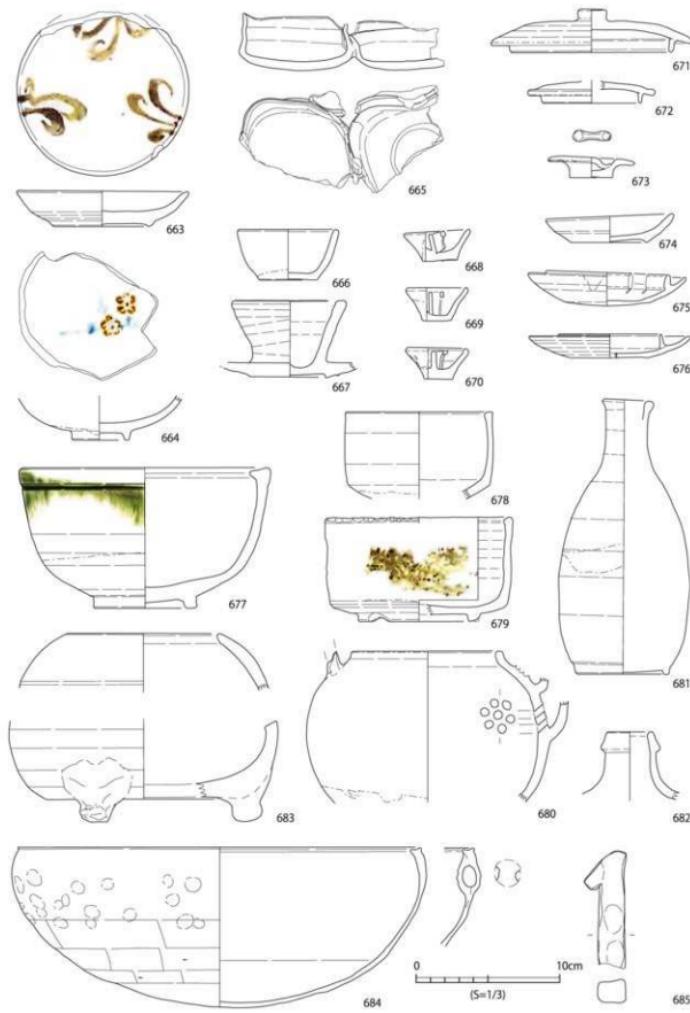


図 65 包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 2 (S=1/3)



图 66 包含层(北东部土坑群)出土陶磁器 3 (S=1/3,1/2)



図67 その他の地点の出土陶磁器 ($S=1/3$)

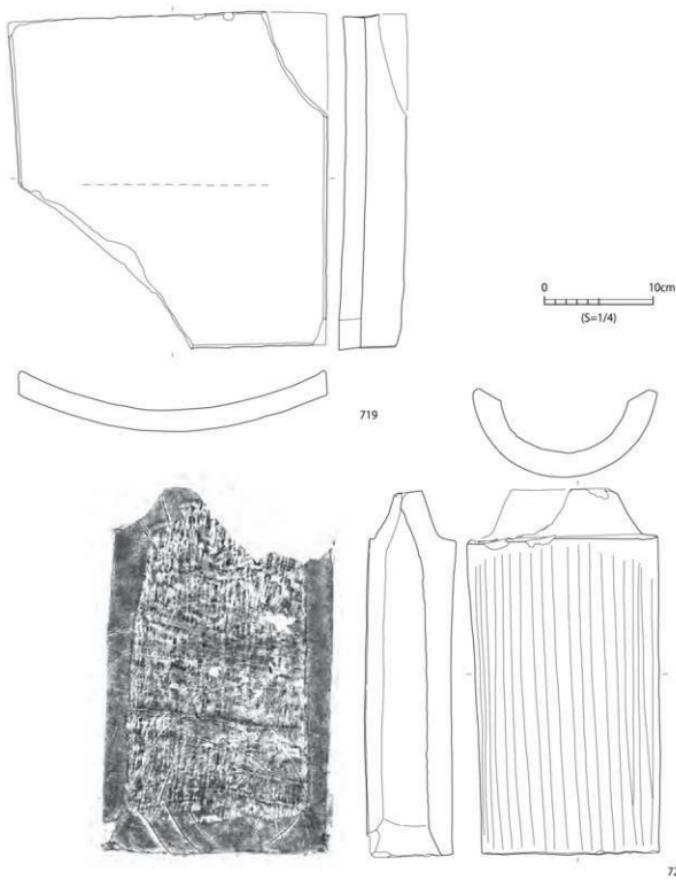
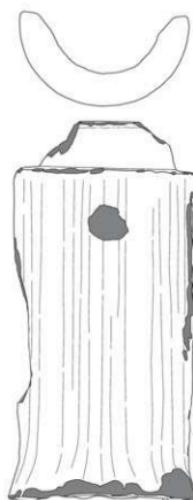
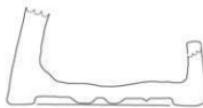
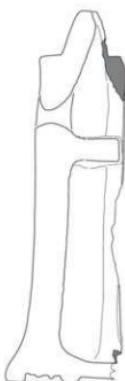


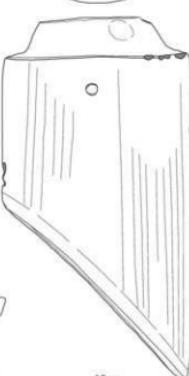
図 68 3895K 出土平瓦・丸瓦 (S=1/4)



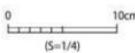
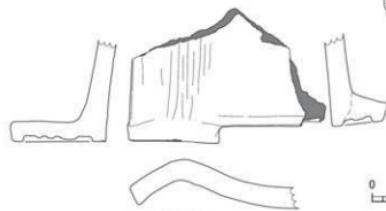
721



722

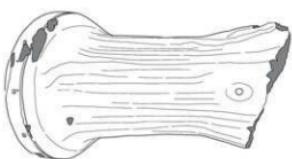


723

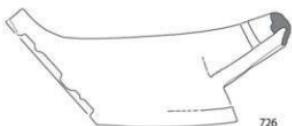


724

図 69 389SK 出土軒丸瓦・丸瓦・軒棧瓦 (S=1/4)



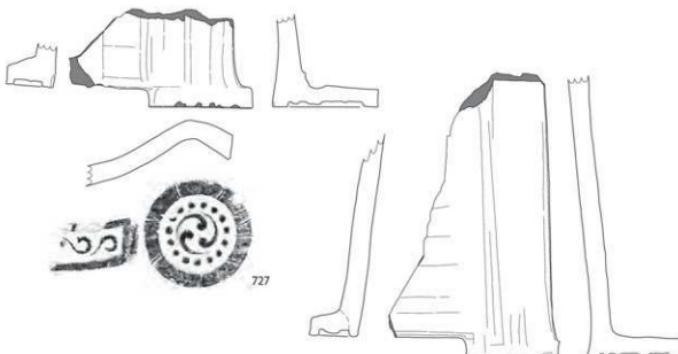
728



726

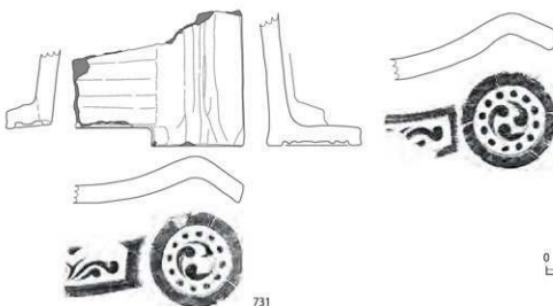


729



727

730



728

圖 70 381SK 出土軒瓦 (S=1/4)

0
10cm
(S=1/4)

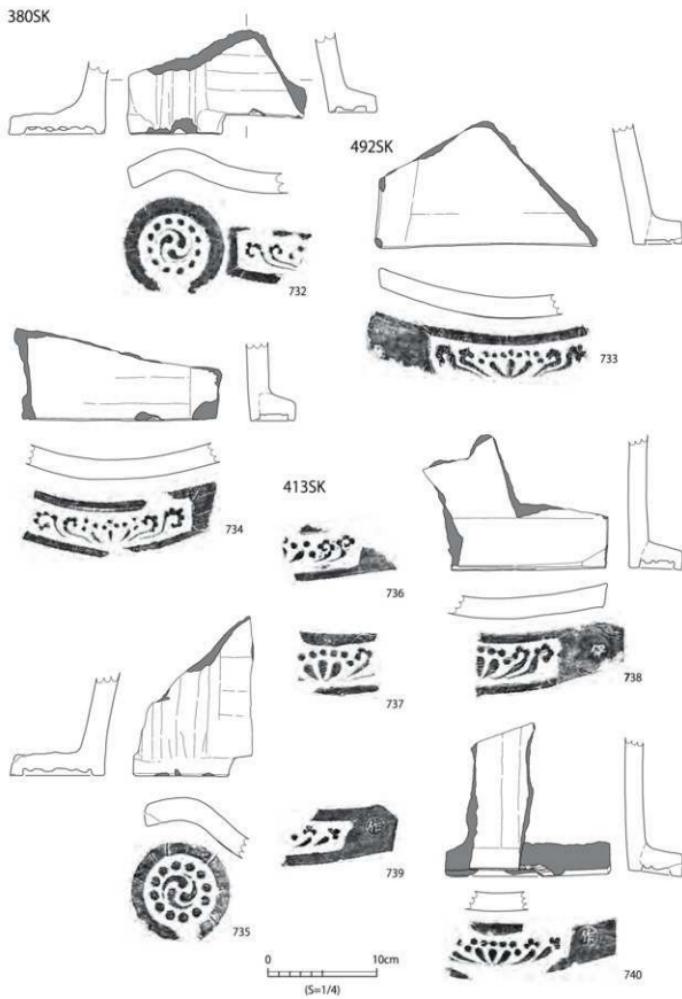


図 71 軒棟瓦 (S=1/4)

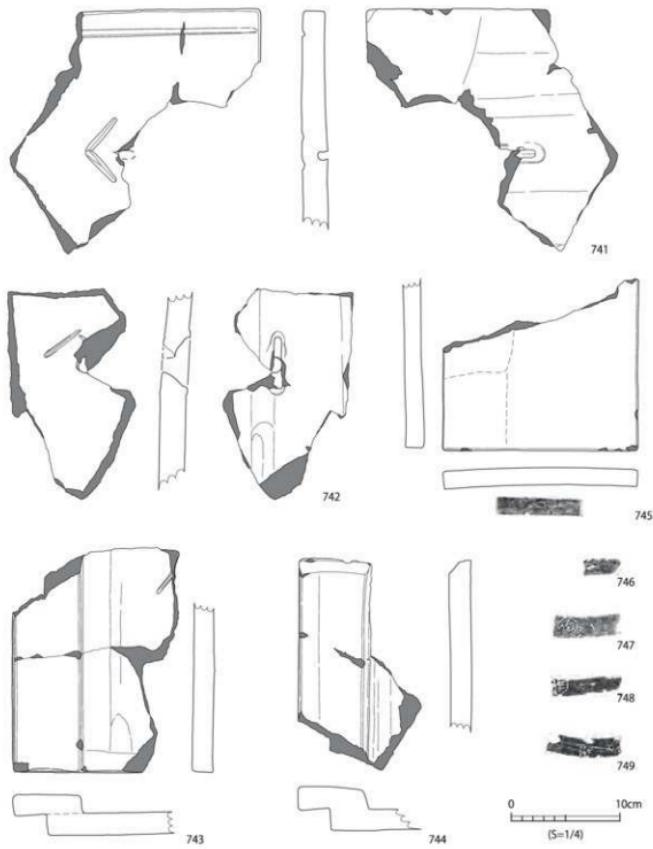


図 72 飾り瓦・刻印 (S=1/4)

瓦類（719～749）

調査において焼し瓦については、瓦当をもつもの、遺存状況の良好なものを選択・採取した。本瓦葺瓦類は少量である。また、今回の調査地点で近世段階の瓦溜りは検出されていない。

389SKは本瓦葺平瓦（719）、丸瓦（720,723）、軒丸瓦（721,722）、軒棧瓦（724,725）がある。381SKは隅瓦（726）、未掲載資料に丸瓦が存在する。727～731は軒棧瓦である。唐草文から3タイプに分けられる。492SKは軒棧瓦（733～735）がある。413SKは棧瓦類が集中して廃棄されていた土坑であるが、瓦当部分は僅かであり、ほとんどが反りのない平坦な瓦類（741～749）である。軒棧瓦（736～740）は唐草文から2タイプに分けられ、それぞれ「伊」○に「作」の刻印が認められる。板状の瓦類は貫通する釘穴をもち（741～743）、側辺に沿って長方形板状粘土を接合した（743,744）形状である。表面の調整に粗密の差異がある。飾り瓦。また、小口の残る小片には、○に「一」（745,746）、○に「作」（747～749）の刻印が認められる。

棧瓦様は、丸瓦部分は12あるいは15珠文と左巻三巴文、平瓦部分は三子葉文を中心に二反転唐草文を基本とする。413SK資料は唐草文が簡略化され、子葉文的な表現となっている。

<近代以降>（750～838）

明治期から昭和20年の終戦前後の時期の資料があり、名古屋・瀬戸・美濃地域で生産されたものが多くを占める。なお、遺構面は広範に撫摸を受けており、必ずしも一括性が高いとはいえないものの、図版では遺構単位のまとまりを優先して配置している。また、掲載資料は遺存状況の良い個体を優先しているため、必ずしも器種のバランスを反映したものでない。

磁器製品の施文技法では手描、摺絵併用、銅版転写、上絵などがみられる。手描、摺絵・手描併用が主となる時期、摺絵・銅版転写が盛行する時期、いわゆる「軍用食器」が主体となる時期に大別すると、それぞれ19世紀後期、19世紀後期から20世紀前期、20世紀前期から中期に属すると考えられる。

陸軍関連の陶磁器

無地あるいは数条の緑色團線がめぐる簡単な装飾の磁器、および硬質陶器で、陸軍徽章、部隊名など所属や製造会社を示す社名や記号がプリントされている。仙台城二の丸遺跡報告（註1）の分類名を参考にすると、硬質陶器では碗、皿、把手付碗、大型碗、鉢、皿があり、名古屋城三の丸遺跡では、蓋付の井の形状の鉢も一定量認められる。磁器では碗、大型碗、湯呑などがある。整った規格の注文生産品であり、無地のものは少なく、陸軍徽章（星印）のほか星形の枠内に「工三」（工兵第三大隊）、方形枠に「東焼」（761）などいずれかを青色で銅版転写している。緑二重團線がある資料は「砲三ノ六」（776、砲兵第三聯隊第六小隊？）、同「砲三ノ二」（786）などは「RC NORITAKE」（ノリタケ製）とクロム釉スタンプで焼き付けられたもののほか、高台内「日陶製」（785、日本陶器製）などがある。硬質陶器では高台内に角に「硬陶」（826,827、日本硬質陶器株式会社）と銅版転写されたものがみられる。磁器湯呑は無地上に上絵で文字「酒保」「工三」、「工三下集」（795）、「将集」（778）と記された痕跡が残る。塗料は完全に剥落しており（註2）、当時の色彩は不明である。工兵第三大隊は明治21年（1888）に創設されてより大正14年（1925）浜松移転まで三の丸に駐屯している。出土した「工三」銘食器類はこの間に使用され、移転時に廃棄された可能性が想定される。したがって、これらは硬質陶器が生産された日露戦争以降から大正14年頃の資料と思われる。

戦時統制品

昭和 41 年より施行された、いわゆる統制番号が付された一群がある。端反形の湯呑「岐 724」、徳利「岐 765」、井「瀬」の一部などがある。

陶製の羽付釜（791）は、本体を型作りし、底部に三足となる突起と口縁下 2箇所に把手状の突起が付く。内面には薄く透明釉が残る。内面にも使用の痕跡があり胴部下半にススが付着する。胎土は常滑の赤物に似て白色砂粒を多く含む。戦時に金属製品の代用品とされた形態と似ている。88 は陶製の竈と思われる。全面に厚く鉄釉（柿釉）が施された円筒状をなし、一箇所が切れ、上部内側 3 箇所に円錐状の突起が付く。突起の周囲には径約 1cm 程度の空気孔が空けられている。使用痕は特にみられない。

（武部真木）

【註】

（註 1）須藤隆ほか、1999、「仙台城二の丸道路第 12 地点（NM12）の調査」東北大学埋蔵文化財調査年報 11

（註 2）実見した高崎城出土資料では青色陶器が残存していた。

【参考文献】

瀬戸市歴史民俗資料館、1993、「明治時代の瀬戸窯業」

瀬戸市歴史民俗資料館、1994、「戦争とやきもの」

瀬戸市歴史民俗資料館、2001、「〈代用品〉としてのやきもの」

瀬戸市歴史民俗資料館、2002、「大正二年のやきもの展」

（註）瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター、2007、「宮跡出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃窯の近代 I－」

松原隆治、1988、「勝川遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集

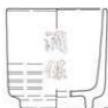
088SD



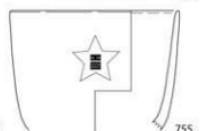
750



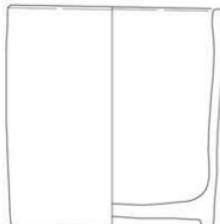
754



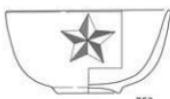
751



755



756



752



758



048SD



757



759



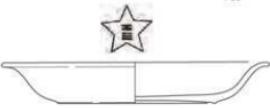
760



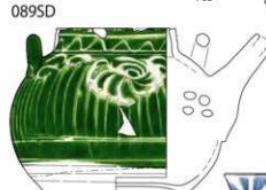
763



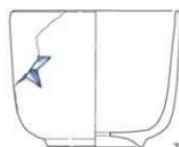
762



761



764



765



766

図 73 近代 出土陶磁器 1 (S=1/3)



図 74 近代 出土陶磁器 2 (S=1/3)

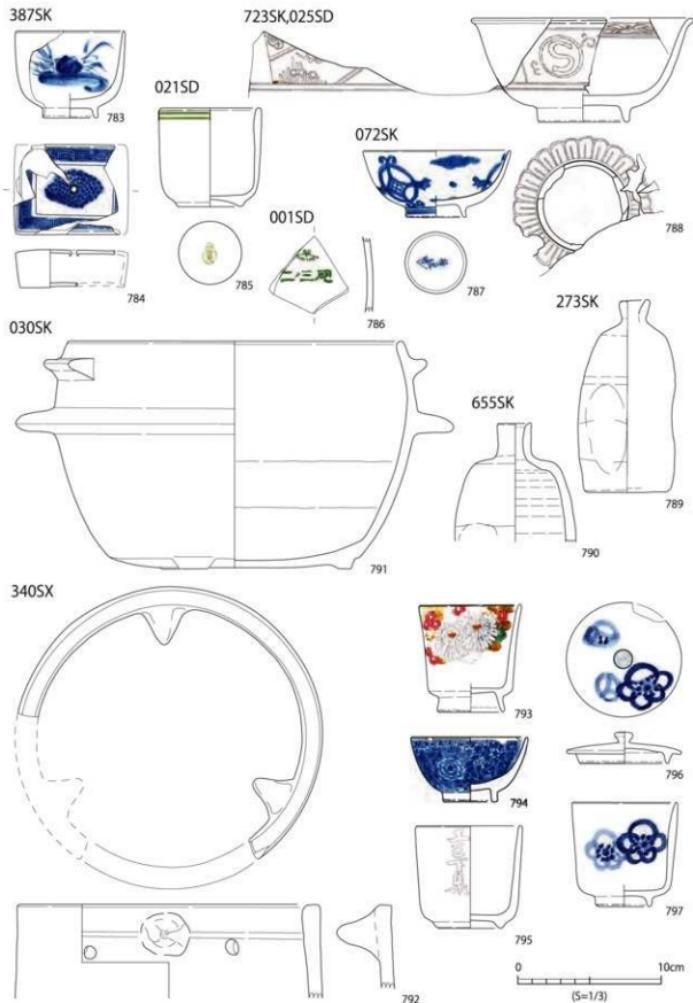


図 75 近代 出土陶磁器 3 (S=1/3)

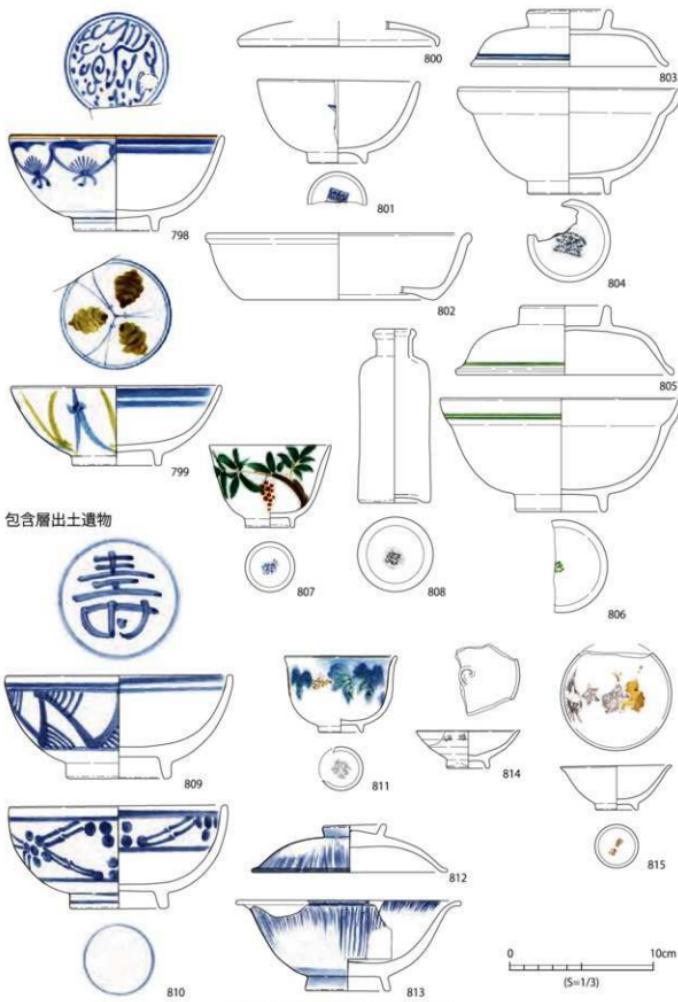


图 76 近代 出土陶器 4 (S=1/3)



图 77 近代 出土陶磁器 5 (S=1/3)

821

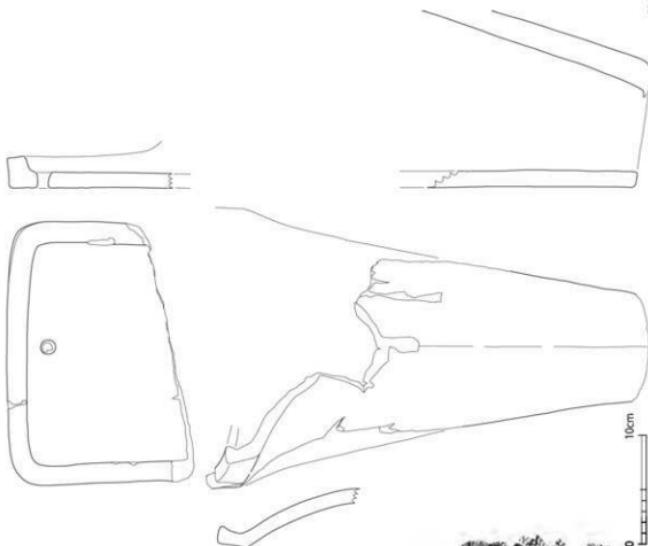
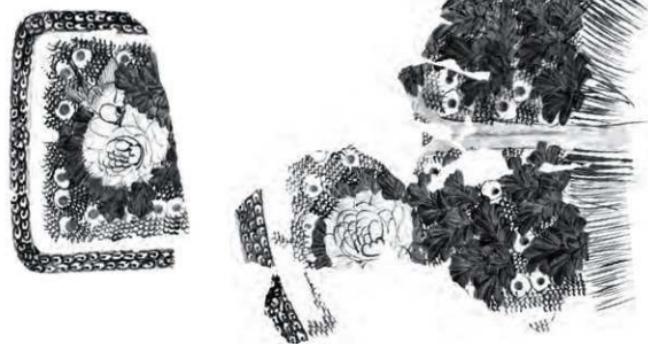


图 78 近代 出土陶瓷器 6 (S=1/4)

(S=1/4)



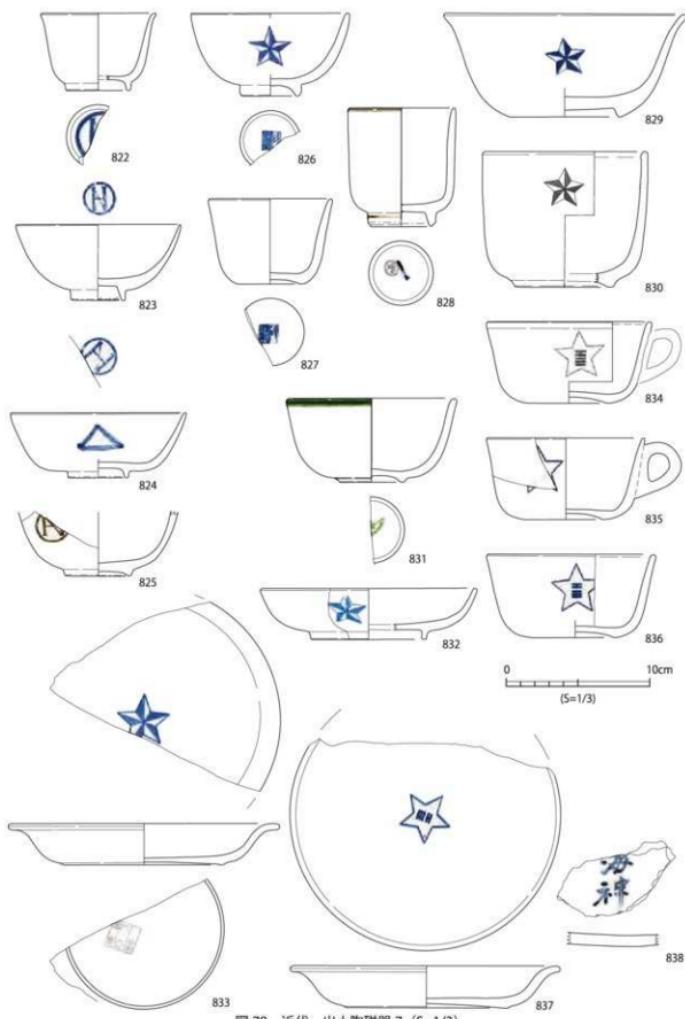


図 79 近代 出土陶磁器 7 (S=1/3)

3 ガラス製品・その他

<ガラス製品>

今回の調査ではガラス製品が多数出土している。このうち破損が著しい大型瓶などは諸事情のため採取していないが、現在器種などをある程度確認できる資料は全部で105点存在する。ここでは、おむね桜井準也の分類(桜井2006)に従って、遺構単位で資料を紹介し出土傾向を若干考察したい。

1) 046SD 出土遺物(図81-1～15) 1は小型瓶で一般用薬瓶、2,3は胴部横断面形が方形状で、胴部中央の3面に沈線が巡るインク瓶と推測される。2,3は口部中位から下部までは対角線上の位置に型成形の合わせ目が存在する。4,5,6は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、内面に青色系インクが残存する。4にはコルク栓が共存し、口部上端まで型成形の合わせ目が存在する。5は体部と首部を接着した接合部を工具で大きく挟んで造られたものである。6は桜花紋に「S K」の文字をデザイントした陽刻が存在する。インク瓶は図示したもの以外に7点が存在する。7は横断面形が方形のインク瓶、9は東京高田の「ヨヂュムエキ」瓶であり、汐留I遺跡で類似例がある(一般用薬瓶)。10は目盛り線のある医療用薬瓶で、背面の体部器壁中に白色の磁器片?が混入している。11,12は桃谷順天館のにきび薬「美顔水」の瓶である。13,14は薬品瓶と思われ、13の内面には白濁した付着物が認められる。14は底部に星印にY字の陽刻がある。15は手鏡用の板ガラスと思われる。

2) 340SX 出土遺物(図81-16～25) 16は口縁部が特徴的な東京尾澤製のたむし薬「全治水」の瓶である。体部下端から口部上端まで型成形の合わせ目が存在し、口の成形は雑である。17～19はやや青みがかる透明なスクリュー栓の瓶で、陽刻は存在しないがインク瓶と思われる。18は口部と体部の型成形の合わせ目がずれている。インク瓶は図示したもの以外に4点が存在する。20は目盛り線のある医療用薬瓶で、内部にコルク栓が落ちている。21は薬品瓶用と思われるガラス栓で、瓶口に嵌る部分は磨りガラス状に白濁している。22,23はインク瓶で、22は胴部有段で断面が円形となるもの、23は立方体の体部に斜めに円柱状口部が付くものである。24は彌生商會の「ハナソース」瓶、25は銘柄や用途が不明であるが、調味料瓶と思われる。

3) 089SD 出土遺物(図81-26～29) 26は底部外面に「J. M. & C」の陽刻があり、内部に黄黒色沈殿物が残存していた。27は横断面形が長方形となるもので、1面にのみラベル貼付用の栓が存在する。栓が嵌り込んで外せない状態である。28は円形の鏡用板ガラスと思われる。29は「MARUSHIRO SHIYOKAI」と陽刻されたインク瓶で図示したもの以外に2点存在する。この他に図示したもの以外には、美顔水の瓶や薬瓶やアンプルが各々1点存在する。

4) 3425D 出土遺物(図81-30～31) 30は「SANTANEY」と陽刻された化粧クリーム瓶と思われる。化粧クリーム瓶と思われるものは、この他に1点認められる。31は凸レンズである。

5) その他の遺構出土遺物(図82-32～44) 34は「COMBI」の陽刻を持つ瓶で化粧水瓶と想定される。36は底部に「M」、体部に「実用新案」と「No3218」の陽刻を持つ首部が中心から偏る扁平な丸善のインク瓶と思われる。38は横断面形が方形となる薬品瓶と思われ、体部下半部が一旦成形した後に板状工具を宛てがい整形したものと考えられる。40は堀越商會の白色剤「ホーカー液」の

ものである。43は「登録商標『丸にツ』塚本 愛知 名古屋組合 非賣容器」の陽刻を持つ瓶で牛乳瓶と想定する。44は横断面形が楕円形の大型瓶で、桜井分類では調味料瓶の酢瓶に類似する。

6) 構造外出土遺物(図82-45～55) 46は「晴光水 小野製」と陽刻された小瓶である。晴光水は目薬のブランドである。47は内部にコルク栓が残る。48は下端部の一部がつぶれ変形している。49は横断面形が長方形の瓶で銀色の金属製スクリュー蓋が冠っている。50は「TELLME 80cc」と陽刻された横断面形が長方形の瓶である。テルミーは昭和5年に創業した大東化学工業所のブランドである。51は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、底面に直線状の凹みがある。53は口縁部に型抜きの失敗が認められ、内部に赤色インクが残存しているインク瓶である。54は円筒形スクリュー栓の瓶で、「ふくのり」と記されたアルミ製蓋が共伴する。食用の海苔瓶の可能性もあるが、ここでは文具瓶の糊瓶と推定する。55は口縁部に青色付着物が確認された。

7) 小結

桜井准也はガラス瓶について機能を重視して9類に大別し、さらに細分している(桜井2006)。ここではこの分類に依拠し、今回の調査と2002年度に実施した旧国立名古屋病院地点の出土傾向をまとめておきたい。

今回の調査ではガラス瓶は、酒瓶1点、乳製品瓶1点、調味料瓶4点、薬瓶34点、化粧瓶18点、文具瓶38点という組成となった。なお、この資料はブランド名が不明な小型瓶が多く、上記の組成はこれらを薬瓶に分類して算定したものである。この結果、薬瓶とインク瓶が突出して多いことが分かる。一方、2002旧国立名古屋病院地点では、酒瓶4点、清涼飲料瓶2点、乳製品瓶2点、調味料瓶2点、食品瓶17点、薬瓶14点、化粧瓶9点、文具瓶2点という組成となった。このうち食品瓶

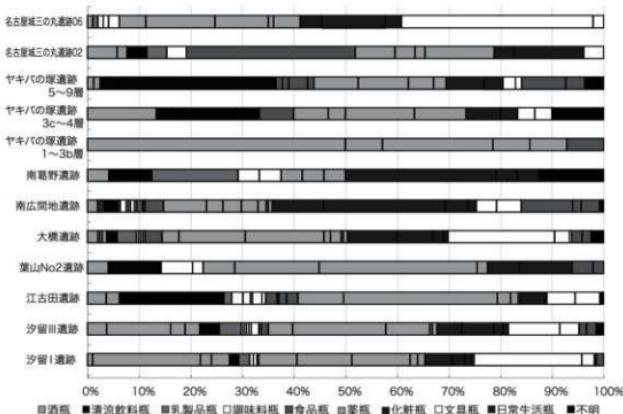
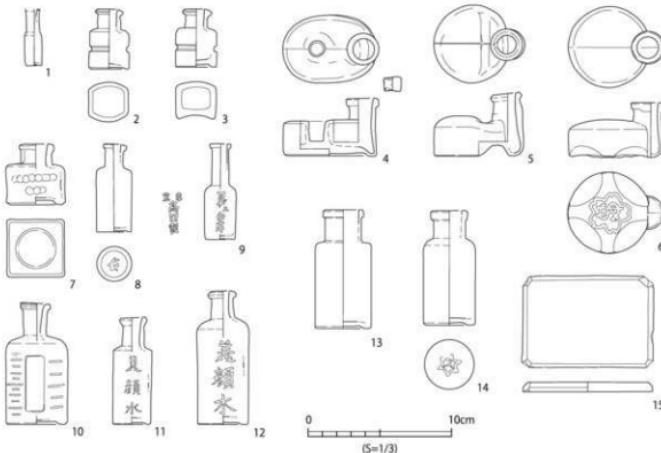


図80 各遺跡ガラス瓶組成(桜井2006のデータを元に作成した)

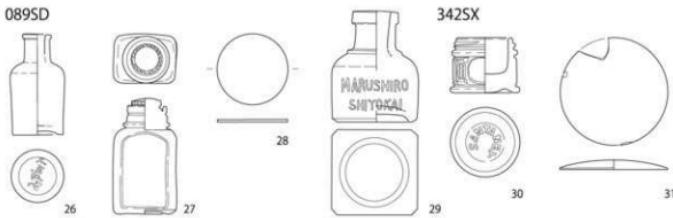
0465D



3405X



0895D



3425X

図 81 ガラス製品 1 (S=1/3)

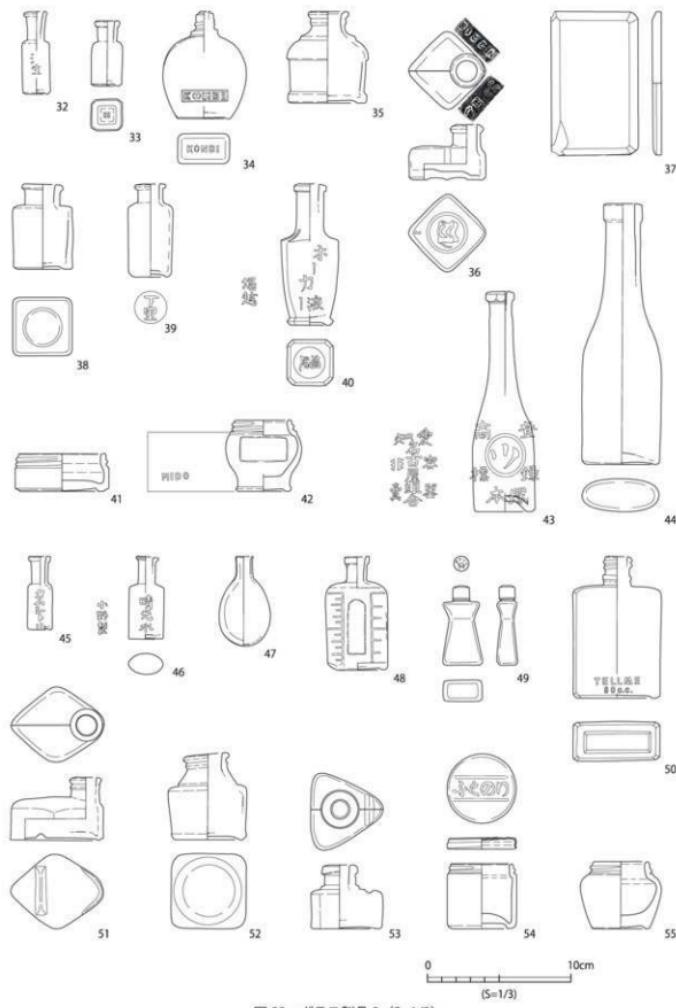


図 82 ガラス製品 2 ($S=1/3$)

としたものは口縁部が括れたコップ形の小型瓶が大半で、桜井はこれに類似した瓶を食品瓶の項目に掲載していたが、実際の機能は特定が難しいように思われる資料である。終戦直前に陸軍名古屋病院第二分院が建設されたこの地点では、意外と薬瓶の割合は少ないと、試験管など特殊な製品の存在が病院としての特徴を示しているといえよう。

今回の調査区は近代では陸軍第三師団のうち工兵第三大隊・輜重兵第三大隊が配され、倉庫群が置かれた場所と推定される。ここで確認されたガラス瓶は文具瓶が最も多く、薬瓶と化粧瓶がこれに次ぎ、酒瓶や食品瓶がほとんど見られないという特徴がある。こういった組成のあり方は、桜井が分析した結果をみても他に確認できない偏ったものである（図80）。インク瓶が多いという特徴から事務用品の保管場所であった可能性を指摘することもでき、この点からも場の特異性を物語る資料群と評価できるだろう。

（鈴木 正貴）

＜その他＞（図83～56～63）

その他の材質の出土遺物として、歯ブラシ、ボタンなどがある。遺存状況が悪く、採取されたものは僅かである。動物骨角を利用したと思われるものの、セルロイド製（61.62）がある。骨製歯ブラシ（56～60）の乳白色の表面は滑らかに加工され、光沢がある。柄の先端の孔には環状に針金が通され、孔の周辺には緑色の変色部分が認められる。倉庫に保管されていた物資の一節とも考えられるが、使用・未使用の区分は不明である。

動物骨の細工利用のうち、牛馬骨の利用は近世以降に増加する傾向がみられ、近世では「小道具」「小間物」などと称され、多くが大阪に集められたという。第一次大戦期にセルロイド製品の国内生産が本格化するまで、ブラシ類の柄などの主な材質であった。ただ衰退したとはい、1950年代頃まで細工用に牛四肢骨が出荷されていた記録（四日市の場合）もあり、こうした骨の利用は継続していたかもしれない。

（武部 真木）

【参考文献】

- 桜井準也 2006.『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 久保和士 1999.『動物と人間の考古学』真陽社
- 中島久恵 2005.『モノになる動物のからだ—骨・血・脂・臓器の利用史—』批评社

表12 名古屋城三の丸遺跡の
ガラス製品組成表

大分類	小分類	02年度	06年度
酒瓶	ビール瓶	3	1
	洋酒瓶	1	
	小計	4	1
清涼飲料瓶	ラムネ瓶	2	
	小計	2	
乳製品瓶	牛乳瓶	2	1
	小計	2	1
	ソース瓶		1
	酢瓶		1
調味料瓶	その他の調味料瓶	1	
	不明調味料瓶	1	2
	小計	2	4
食品瓶	不明食品瓶	17	
	小計	17	
	医療用薬瓶	4	5
	薬品瓶	2	13
薬瓶	一般用薬瓶		10
	目薬瓶		1
	アンプル	1	5
	試験管	7	
	小計	14	34
化粧瓶	化粧水瓶	2	4
	化粧クリーム瓶	7	12
	不明		3
	小計	9	19
文具瓶	インク瓶	2	36
	顛瓶		2
	小計	2	38
ガラス瓶総計		52	97
板ガラス	スライドガラス	6	
	鏡		3
	凸レンズ		1
	板ガラス	3	1
その他	薬品瓶の栓?		1
	電球座		1
	ロート		1
	コップ	2	
総計		63	105

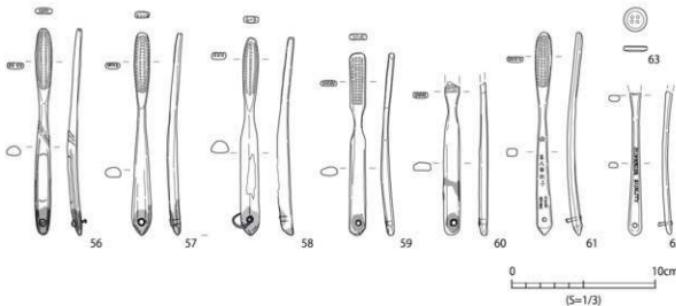


図 83 その他の素材の製品 (S=1/3)

4 金属関連資料

今回の調査において、確認された金属製品は 16 世紀初頭頃から昭和 20 年前後までのものがあり、出土した金属製品は明治時代から昭和 20 年まで調査地を含む名古屋城跡におかれた陸軍第 3 師団に関連する資料と思われるものが大半である。近代以後の新しい掘削や整地から外れた戦国時代の溝・土坑からは、鉄製品 2 点、鍛冶関連資料 1 点と江戸時代の土坑・井戸からは銅製品 13 点（他にキセルと銭 34 点）、鉄製品 59 点、鍛冶関連資料 4 点が出土した。よって今回の調査により出土した江戸時代以前の資料の大半について実測・拓本を行ない、近代以後の資料については陸軍関係と思われる、容器、服飾具、馬具など用途が特定でき、形態的特徴があるものを中心に実測と写真による資料化を行なった。

<1 戦国期>

戦国時代 1 期（古瀬戸後期～大窯 2 段階）の 606SD から鉄製鍔 1 点（1）、戦国時代 2 期（大窯 3 段階）603SD から鉄鍔の基部 1 点（2）があり、鍔は幅 1.0cm 程の断面方形、長さ 16.0cm の中型品である。

<2 江戸時代>

金属製品と鍛冶関連資料は 17 世紀～18 世紀初頭の 389SK・466SE、18 世紀中頃の 110SK、18 世紀後半～19 世紀初頭の 381SK・492SK、18 世紀末～19 世紀初頭の 387SK などから出土した。江戸時代を通じてみられる出土遺物は銅製キセル（全部で 26 点）、銅鋤（全部で 17 点）、鉄製釘であり、その他には銅製の釘隠し用飾り金具がある。

389SK（3～11）：銅製品 5 点、鉄製品 13 点がある。3 は長さ 9.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm の断面やや二等辺三角形状の扁平な細板で、腐植物が表面に付着した痕跡が見られる。4 は四葉文？の凹みがある飾り金具で、左右に小さな切り込みがある。5 は口付部が欠損しているがキセルの吸口、6 と 7 はキセルの雁首で首の火皿下部に炭化物が、小口部に木質物が残る。6 の首の脣反し部の幅が 0.75cm、7 は 0.7cm を測る。鉄製品は M8 が不明の板状品であるが、木材の付着痕がある。9～11

は鉄釘で比較的頭部が明瞭にあり、長さ 5cm を超えるものが主体である。江戸時代の釘は頭部が「T」字状、鍵状に造り出されるもので、断面方形のものである。

466SE (12 ~ 15) : 鉄製品 5 点あり、全て釘である。長さ 9cm を超える 12・13 と長さ 5.5cm 前後の 14・15 に分かれる。

110SK(16 ~ 21) : 銅製品 1 点、鉄製品 5 点がある。16 は銅製キセルの雁首で長さ 3.2cm と短いもので、首の脂反し部の幅は 0.55cm で、細身である。17 は鉄製の板で、厚さ 0.9cm、長さ 7.0cm、幅広部が 4.2cm と平面撥形をしたものである、刃部は確認できていない。18 ~ 21 は鉄釘で 18 が長さ 6.7cm でやや長いが 19・20 は長さ 4.0cm 程で短いもので、頭部の造り出しも不明瞭である。19 には木材の付着痕が残る。21 は釘の先端部か。

381SK (22・106) : 22 は鉄製の断面長方形状の棒状品である。106 は寛永通宝で 1 点出土している。492SK (23 ~ 40) : 銅製品 4 点、鉄製品 14 点がある。銅製品は 23 がキセルの雁首の火皿冠部で残りが悪い、24 はキセルの吸口で、今回の調査では 24 のように肩部の無いタイプのものばかりが出土した。25・26 は銅錢と思われるもので、鉄鋸による土の固着が厚くみられる。鉄製品では 27 の形態が不明なものを除いて、他是全て鉄釘であり、28・29 が長さ 6cm を超える比較的長いもの、その他全体が明らかなものでは長さが 5.0cm 以下の短いものが多い。全体に頭部の造り出しが不明瞭である。今回の調査で出土した鉄釘では江戸時代の新しい時期の鉄釘の方が短いものが主体で、頭部の造り出しが不明瞭になる傾向が認められる。36 には木材の付着痕が見られる。

その他：整地層などからの出土遺物で、41 ~ 43 は銅製品のキセルで、41 は全体の長さ 11.4cm で、雁首が長さ 4.2cm、吸口が長さ 7.1cm、吸管の接続部が長さ 0.2cm と短いもので、雁首の脂反し部の幅は 0.7cm で、今回の出土資料の中では幅広のものである。42 は雁首で径 3.2cm 程の環状に曲げられて出土した。43 は吸口で、小口部に 3 条の線が廻る。

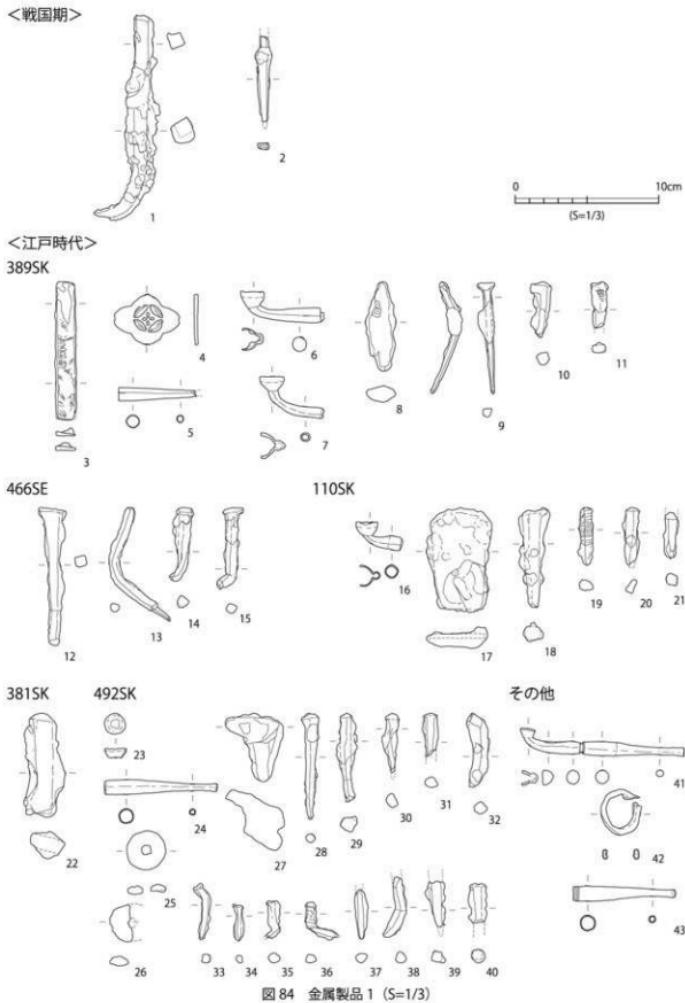
銅錢では寛永通宝（101 ~ 107）がある。近世の遺構からの出土のものは先に述べた 381SK 出土の 106 と 149SK 出土の 102、329SK 出土の 104 がある。他のものは近代の土坑からの出土である。

<3 競合関連資料>

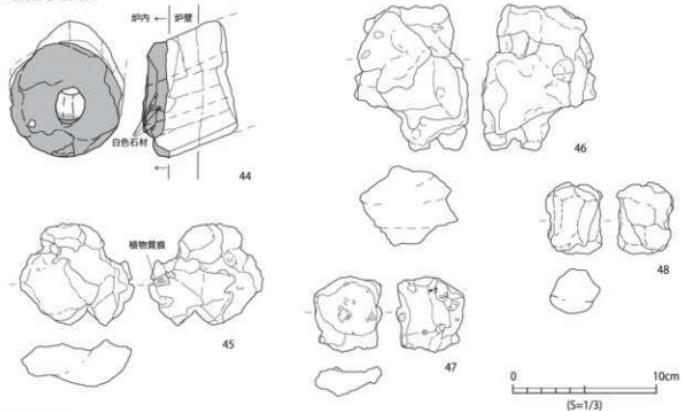
今回の調査ではフイゴの羽口 1 点（44）、椀型鉄滓 4 点（46 ~ 48）が出土した。44 は外径 7.3cm、送風孔径 2.9cm、炉壁厚さ 2.0cm、送風角度 24 度の羽口先端部で、炉内の部分には流動鉄滓が付着している。椀型滓は 45 と 46、48 が重複椀型滓の完形品で、45 が 2 つ、48 が 3 つ、46 が 4 つ ~ 7 つ重複しており、重複した椀型滓の 1 つは 47 のような径 4cm ~ 6cm 前後、厚さ 1.0cm ~ 1.5cm 前後のものである。これらの資料は 45 が戦国時代の可能性がある 604SD 出土、46 が 18 世紀後半 ~ 19 世紀初頭の 492SK 出土、47 が 17 世紀 ~ 18 世紀初頭の 466SE 出土、48 が 18 世紀後半の 110SK からの出土で、時期的な偏りはみられず、競合が各時期において散在的に行なわれたことを示すのであろうか。

<4 近代以降>

明治時代～昭和時代 20 年まで存在した近代の陸軍に関する防空壕跡や用排水溝、および表土直



鋳冶関連資料



近代以降

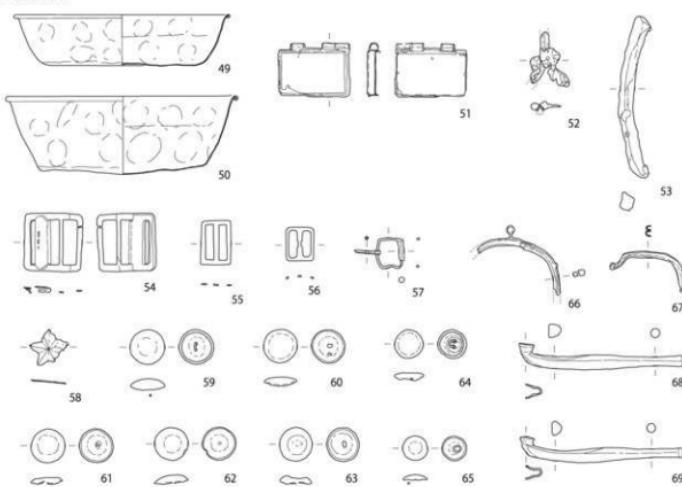


図 85 金属製品 2 (S=1/3)

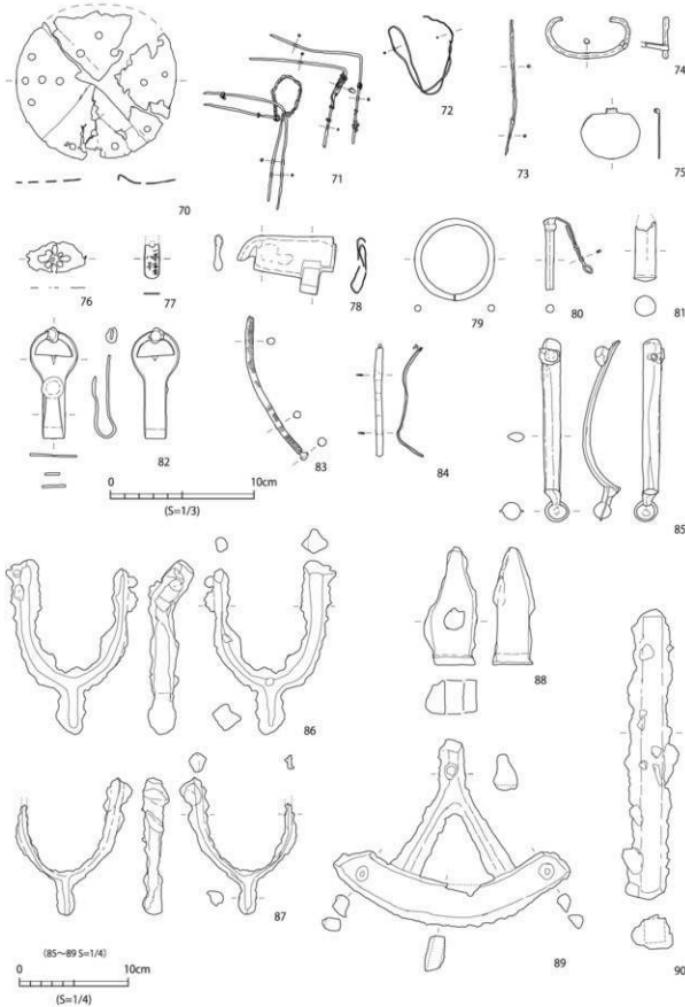


図 86 金属製品 3 (S=1/3,1/4)

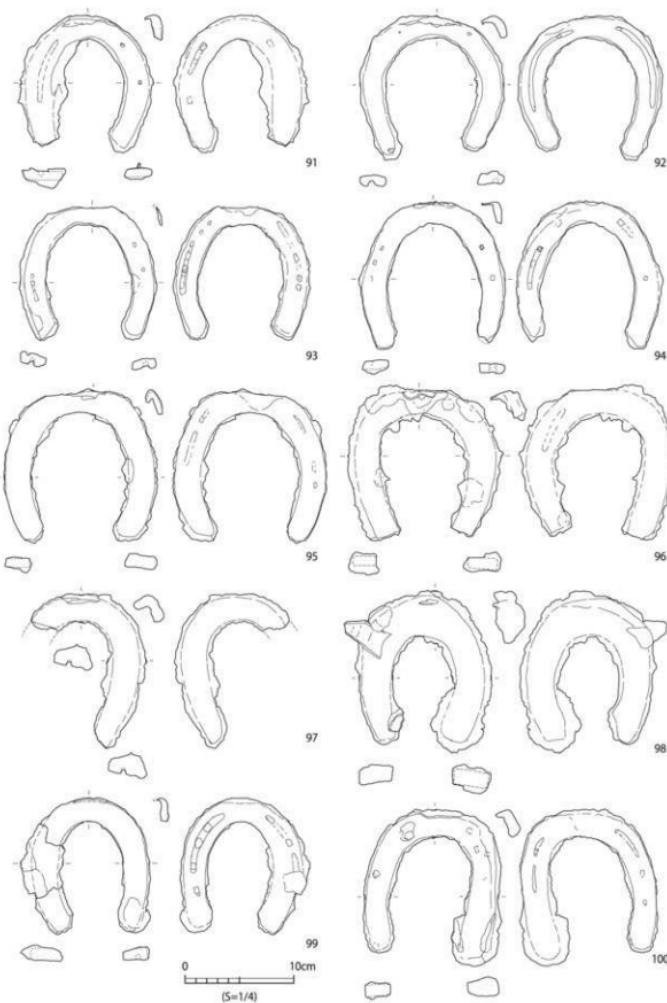


図 87 金属製品 4 (S=1/4)

下の整地層から出土したものである。今回は陸軍に関連するアルミ製品、鉛製品、銅製品、銅合金製品、鉄製品の主要なものを図化した。なお、鉄製品は総数 643 点、銅製品は総数 86 点、アルミ製品は総数 6 点が出土した。

アルミ製品（49～51）：49 は口径 15.0cm、器高 3.5cm、底径 8.0cm の深皿で、50 は口径 16.0cm、器高 5.0cm、底径 9.0cm の碗で、どちらも口縁端部が外側に折り返して補強される形態をしている。肩から外した跡の研磨痕が横方向にみられる。51 は長さ 5.0cm、幅 3.7cm、厚さ 0.6cm の開閉式のケースで蓋の軸部側に小さい穴が空けられている。蓋外面に 2mm に 4 個の点々がある。

鉛製品（52・53）：52 は配線の管状圧痕がみられ、配線の留め金具の可能性があるもの、53 は長さ 11.2cm の弧状で、幅 1.0cm の断面方形をした不明品、先端部がやや燃かれている。

銅製品（54～84）：陸軍の服飾に関連するもの（54～69）、生活用具などの雑具に関連するもの（70～84）を中心に取り上げた。

54～57 はベルトの金具と思われるもので、54 は幅 4.0cm、55 は幅 3.0cm、56 は幅 2.3cm、57 は幅 2.1cm で、54 は人間の着用するベルト金具の可能性があるが、他は馬具のベルトの留め金具の可能性がある。製品番号の「16 □ NO.1685」が刻まれている。58 は陸軍徽章で、つぶれて、残存状態は悪い。59～65 は陸軍の制服に伴うボタンで、径 2.4cm 前後のもの（59～63）、径 2.0cm 前後のもの（64）、径 1.4cm 前後のもの（65）の 3 タイプのボタンが確認できた。66・67 は蝦夷口金具で、66 は左右対称のタイプのもの、67 は左右非対称の形態のようである。68・69 は一体型のキセルで、幅と厚さは 0.9cm～1.0cm で同じであるが、長さは 68 が 11.5cm、69 が 9.3cm と異なる。脂反し部の幅はどちらも 0.6cm 前後である。

70 は懐の目皿状のもので、復元径 11.0cm の円形の薄板で、径 0.5cm 程の穴が 20 個確認できる。穴の配置にパターンがありそうであるが、接合する部分では左右対称にならない。71～73 は径 0.1cm 程の銅線で、71 は銅線が巻き付けられている、急須の把手にかける銅線などの可能性がある。74 は環状の吊り輪のような形のもの、用途不明である。75 は梢円形の薄板が、紐通しのような環状部分によって固定される部品である。76 は釘刺しと思われる菊菱文が抜いてある金具、77 は第 3 師団司令部に関する「一等客室八号」の彫刻のある鍵ホルダーの板と思われるもの、78 は用途不明であるが、何らかの留め金具、79 は径 5.6cm にめぐる環、同一規格品がもう 2 点出土している。80 は何かの栓のような断面円形の棒状金具、81 は径 1.5cm の薬莢と思われるもの、先端部が欠けている。82 はやや装飾性があるベルトの留め金具と思われるもので、図の上部に鉄製品の一部が付着していたと思われる金具が固着している。83 は全体に線状痕がみられる長さ 10cm 程の断面円形の棒で、頭部が丸く造り出されている。84 は幅 0.5cm、厚さ 0.1cm の薄板で、2ヶ所で曲げられている、先端に糸状の金具が付けられている。

銅合金製品（85）：拍車の左側で、幅 9 cm の「U」字形に脊を挟むものである。後部には径 1.7cm の球形の拍車部がある。「U」字部の先端に鉄製のネジが付けられており、脊とつながれたものと思われる。後に述べる鉄製拍車と 85 のような銅合金製品との違いは、銅合金製拍車が第 3 師団司令部の他の士官と高官用のものに区別されていた可能性がある。

鉄製品（86～100）：馬具に関連するものと、形態が明瞭なものを図化した。86・87は拍車の鉄製品で、幅9cm前後の「U」字型に脊を挟む部分があり、その先端が上に曲げられている。銅合金製品の拍車のような留め金具形状は確認できなかった。88は長さ8.1cm、幅2.7cm、厚さ2.3cmの金槌の頭部で、径1.3cm程の脇により柄が差し込まれていたものである。89は三角形状の秤の釣り金具と思われるもので、上部と弧状になる部分の左右に穴がある。目盛りは確認できていない。90は長さ26.8cm、一辺2.0cm前後の角棒で、用途は不明である。

91～100は馬具の蹄鉄で、全て蹄鉄の鉄頭に鉄骨がたち蹄を固定化するタイプのもので、蹄側に沿った左右の鉄板に幅0.5cmの釘溝があり、その中に蹄鉄を取り付ける釘を打ち込む眼とよばれる長方形の穴がみられる。91～96は前後と左右の幅がほぼ同じである円形状の前足の蹄鉄、97～100は前後が左右の幅より長い梢円形状になる後ろ足の蹄鉄である。前足の蹄鉄は前後の長さと左右の長さから2タイプから4タイプに分かれる可能性があり、前後の長さ12.0cm～12.5cm、左右の長さ12.5cm前後の91・93、前後の長さ13.1cm前後、左右の長さ13.1cmの92、前後の長さ13.5cm、左右の長さ13.4cmの94、前後の長さ14.0cm前後、左右の長さ14.0cm前後の95・96がみられる。後ろ足の蹄鉄は前後の長さからやや小型の97・99とやや大型の98・100に分かれる可能性がある。明治32年6月発行の陸軍省『陸軍蹄鐵術教範』には蹄鉄の前足と後ろ足について4号の大きさによる規定がある。これによると前足の91・93は前後の長さ12.0cm、左右の長さ9.8cmの第一號蹄鐵、92は前後の長さ13.0cm、左右の長さ10.5cmの第二號蹄鐵、94・95は前後の長さ13.8cm、左右の長さ11.4cmの第三號蹄鐵、96は前後の長さ14.5cm、左右の長さ12.0cm

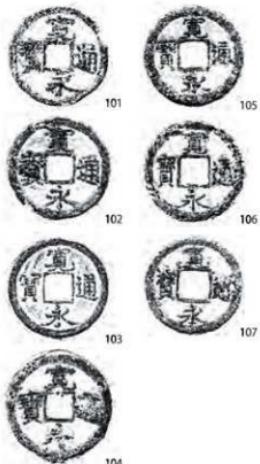


図88 寛永通宝拓本 (S=1/1)

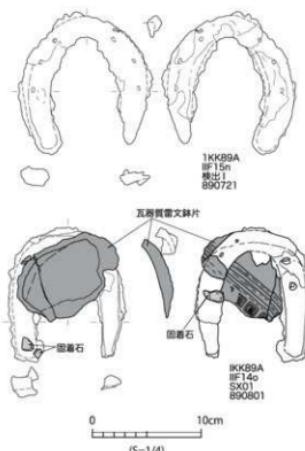


図89 勝川遺跡出土蹄鉄 (S=1/4)

の第四號蹄鐵に対応する可能性がある。しかしいずれも左右の長さでは2.0cm程幅広になっており、銷び膨れの分を引いても、修正が施されている可能性が高い。後ろ足についても、99は前後の長さ12.4cm、左右の長さ10.0cmの第一號蹄鐵、98は前後の長さ13.4cm、左右の長さ10.7cmの第二號蹄鐵、100は前後の長さ14.4cm、左右の長さ11.6cmの第三號蹄鐵に対応する可能性があるが、左右の長さが前足と同様に1.0cm～2.0cm幅広になっている。

また図89の勝川遺跡の89A区出土蹄鐵は幕末から明治時代の遺構とされるSX01と遺物包含層から出土しており、勝川遺跡の蹄鐵が、鉄側に沿った釘溝が切られていないタイプのものである点が、陸軍と愛知県春日井市にある勝川宿の民間用馬の蹄鐵の違いを示していて興味深い。

(藤山 誠一)

5 石器・石製品

1は凹基無茎の石鎚で、脚部の一端が欠失している。断面形状は対称的で扁平な菱形を呈するもので、平面中央部にも瘤状残存部が認められないものである。下呂石製。2は短冊形の打製石斧で、完形である。片面は原石の礫面を一部に残しており、もう片面は全面に剥離が行なわれている。いずれも図示した右側側辺に調整時の細かい剥離が認められる。使用によると考えられる磨滅が表面に著しく認められるが、特に礫面を残している平面において、図示した上半分と下半分とでは痕跡の様相の異なりが指摘できる。石材はホルンフェルス。

(川添 和暉)

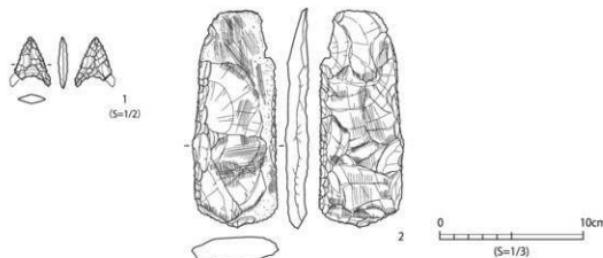


図90 石器 (S=1/2, 1/3)

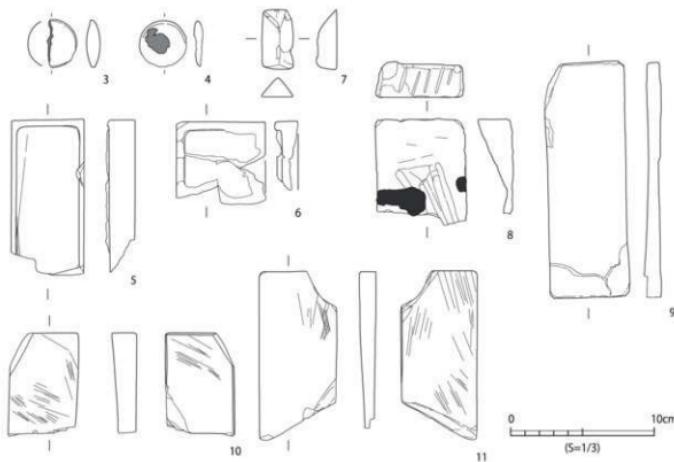


図 89 石製品 ($S=1/3$)

3, 4は径 2.2cm の白色の碁石である。4は凝灰質泥岩製、3は磁器製であり布目のような痕跡がみえる。

5, 6は硯である。5は頁岩、6は泥質凝灰岩製であり硯にしてはやや軟質である。

7～11は砥石である。7は長さ 4.1cm、幅 2.2cm 程度の小型の三角柱状をなし、一端を斜めにカットして三角形の研磨面を形成している。石材は凝灰質泥岩。8は肌理の粗い凝灰質砂岩製であり、中央は大きく凹み、さらに V 字状の凹みが数条みられる。鉄錆が付着しており、近代以降のものと思われる。9,10,11は近世の土坑から出土したものであり、幅がほぼ揃っている。幅 5.0～5.4cm、厚み 1.1cm～1.7cm 程度、ほぼ完存する 9 は長さ 16cm の長方形の形状である。9 は泥質凝灰岩、10,11 は凝灰質泥岩である。

(武部 真木)

第4章 自然科学分析

1 土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林絢一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

1.はじめに

名古屋城三の丸遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 13 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 13 測定試料及び処理

測定番号	道路データ	試料データ	前処理
PLD-8567	位置：II NS06, IF17r 遺構：60SSD 層位：下層（最下層直上） その他：070205	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：胴部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.01N, 塩酸：1.2N）
PLD-8568	位置：II NS06, IF17r 遺構：60SSD 層位：下層 その他：070216	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.01N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表 14 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 92 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

<暦年較正>

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表14 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-8567	-19.29±0.19	325±18	325±20	1510AD(55.0%)1600AD 1610AD(13.2%)1640AD	1490AD(95.4%)1650AD
PLD-8568	-19.71±0.18	280±18	280±20	1520AD(24.9%)1550AD 1630AD(43.3%)1650AD	1520AD(45.7%)1580AD 1620AD(49.7%)1670AD

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

<参考文献>

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C年代、3-20。
- Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talama, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

<補足>

なお、分析後に試料2点は同一個体であることが判明した。土師質内耳鍋(E-3)は形状等により時期は戦国時代に比定されるものである。測定番号PLD-8568で得られた2つのピークのうち戦国時代の範囲内に収まる1520~1550年という年代が、この場合最も蓋然性の高い数値としてあげられよう。

(整理担当 武部)

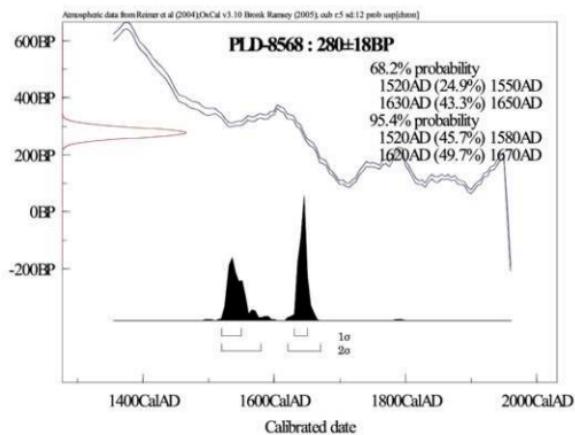
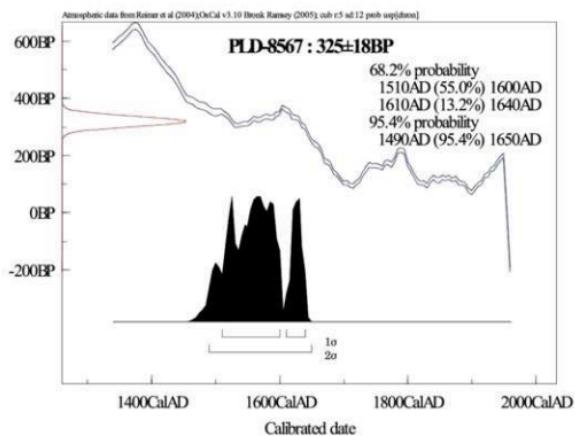


図 92 历年較正結果

2 動物遺体の同定（戦国期・近世・近代）

中村賀太郎・山形秀樹（パレオ・ラボ）

樋泉浩二（早稲田大学）

1. はじめに

愛知県名古屋市の名古屋城三の丸遺跡において、近世から近代にかけての時期とされる動物遺体が検出された。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、381SK、605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SD、遺構不明より検出された動物遺体である。381SKの試料は、土ごと取り上げられた動物遺体である。605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SDの試料は、発掘調査時に動物遺体として取り上げられた未洗浄の試料である。遺構不明の試料は、骸骨がまとまって出土し、周囲の土と共に塊状で取り上げられたものである。

試料は、1mm メッシュの篩上で水洗し土を除去した。得られた残渣から5mm メッシュの篩により動物遺体を抽出した。なお、381SKと387SKの試料は、微小な動物遺体が確認されたため、1mm メッシュで得られた残渣からも動物遺体を抽出した。

抽出した動物遺体の同定と各部位の計数を行った。なお、貝の計数にあたって、巻貝（腹足綱）は殻頂、殻軸（1/2 以上残存）、殻口部、蓋の数をカウントした。二枚貝（斧足綱）は殻頂が残っているものを対象に左殻右殻に分けてカウントした。ただし、ナミマガシワは左右の区別をしていない。

表1に同定された動物遺体の一覧を示す。以下、動物遺体を貝類、魚類、爬虫類、哺乳類に区分して記載する。

3. 貝類（表16）

腹足綱はアカニシ、サザエ、キセルガイ類の3分類群、斧足綱はヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ、マガキ、アサリ、ナミマガシワの6分類群が検出された。表16に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、巻貝は殻頂、殻軸、殻口部、蓋のうち最も大きい数、二枚貝は左右殻のうちでより大きい数である。ただし、ナミマガシワは殻頂数の半数をもって最小個体数とした。

• 381SK

アカニシ（殻口部のみ欠損）、サザエ、キセルガイ類、ヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ（破片）、マガキ、アサリが検出された。最小個体数はアカニシ1、サザエ1、キセルガイ類1、ヤマトシジミ2、ハマグリ8、マガキ4、アサリ2である。ハマグリが多く、次いでマガキが多い。

• 387SK

サザエが検出され、最小個体数は3である。

• 110SK

ヤマトシジミ、マガキ、ナミマガシワが検出された。最小個体数は、ヤマトシジミ1、マガキ8、ナミマガシワ1である。マガキが多い。

• 413SK

表15 動物遺体種名表

貝類	
腹足綱 Class Gastropoda	
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i>
サザエ	<i>Batillus cornutus</i>
キセルガイ類	<i>Clausiliidae</i> sp.
斧足綱 Class Bivalvia	
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
サルボウまたはアカガイ	<i>Scapharca subcrenata</i> or <i>Scapharca boughtoni</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	
ウナギ属	<i>Anguilla</i> sp.
ニシン科	<i>Clupeidae</i> sp.
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
コイ科	<i>Cyprinidae</i> sp.
タラ科	<i>Gadidae</i> sp.
ボラ科	<i>Mugilidae</i> sp.
サンマ	<i>Cololabis saira</i>
サヨリ属	<i>Hyporhamphus</i> sp.
フサカサゴ科	<i>Scorpaenidae</i> sp.
コチ科	<i>Platycephalidae</i> sp.
アイナメ属	<i>Hexagrammos</i> sp.
アジ科	<i>Carangidae</i> sp.
タイ科	<i>Sparidae</i> sp.
タイ科?	<i>Sparidae</i> sp. ?
サバ属	<i>Scomber</i> sp.
カレイ科	<i>Pleuronectidae</i> sp.
フグ科	<i>Tetraodontidae</i> sp.
真骨類	<i>Teleostei</i> sp.
爬虫綱 Class Reptilia	
スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
哺乳綱 Class Mammalia	
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ウシまたはウマ?	<i>Bos taurus</i> or <i>Equus caballus</i> ?
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ヤギまたはヒツジ	<i>Capra hircus</i> or <i>Ovis aries</i>
哺乳綱	<i>Mammalia</i> sp.

サザエ、サルボウまたはアカガイ（破片）が検出された。最小個体数はサザエ 1 である。

・492SK

サザエが検出され、最小個体数は 1 である。

表 16 貝類数量表

アカニシ	サザエ			キセルガイ類			ヤマトシジミ			ハマグリ			サルボウまたはアカガイ			マガキ			アサリ			ナミマガシワ		
	殻輪		殻口部	蓋	殻頂		殻頂	殻頂		殻頂	殻頂		殻頂	殻頂		殻頂	殻頂		殻頂	殻頂		殻頂		
	—	—	—	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	
381SX	1	1		1	1	2	8	8	+	3	4	2	2											
387SK		3																						
110SK							1							8	8									2
413SK		1							+															
492SK			1																					

+ : あり

4. 魚類（表 17）

硬骨魚綱はウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサガ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科？、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類の 18 分類群が検出された。表 17 に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。ただし、腹椎と尾椎は複数あっても 1 とカウントした。

・381SK

ウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサカサゴ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科？、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類が検出された。

タイ科の前上顎骨、歯骨、角骨は、マダイ亜科の別種かと思われるが、種を特定するに至っていない。前上顎骨の概形はマダイ亜科（マダイ・チダイ）と同様だが、歯列形状が異なる。すなわち、マダイ・チダイの主歯列は 2 列の大型歯列とその舌側のわずかな小型歯帯からなるが、本例は頬側にやや大型の歯列が 1 列ありその舌側に中～小型歯による幅広い歯帯が伴う。歯骨の概形や歯列は基本的にマダイ亜科（マダイ・チダイ）と同様だが、主歯列舌側の小型歯帯がやや広い点で明確に異なる。歯骨も前上顎骨と同一種と思われる。

真骨類の鱗は、主にタイ科とボラ科だと考えられる。

最小個体数はウナギ属 1、ニシン科 1、マイワシ 1、コイ科 1、タラ科 1、ボラ科 1、サンマ 1、サヨリ属 1、フサカサゴ科 1、コチ科 1、アイナメ属 1、アジ科 1、タイ科 1、サバ属 1、カレイ科 1、フグ科 1 である。

椎骨のみが検出された分類群が多い。また、タラ科腹椎、ボラ科尾椎、タイ科？第 1 椎骨の各 1 点に切断の痕跡が見られる。

・387SK

タイ科？が検出された。

5. 蜈蚣類（表 18）

蜈蚣類はスッポンの 1 分類群が検出された。表 18 に点数を示した。

381SK よりスッポンの右中腹板+下腹板 1 点、剣状腹板左右各 1 点、甲骨板破片 2 点が検出された。すべて同一個体だと考えられる。

6. 哺乳類（表 18）

哺乳類はウシ、ウシまたはウマ？、ウマ、ヤギまたはヒツジ、哺乳綱の 5 分類群が検出された。表 18 に爬虫類と共に、分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。

・605SD

ウシ、ウシまたはウマ？、ウマ、哺乳綱の 4 分類群が検出された。IF15r よりウシ下顎骨破片 1 点、ウマ左下顎白歯 2 点、IF16r より哺乳綱部位不明破片、IF17r よりウシまたはウマ？の長骨破片、歯を含む哺乳綱の骨片、IF18r よりウシまたはウマ？の長骨破片、ウマ上顎白歯破片 1 点、哺乳綱部位不明破片が検出された。最小個体数はウシ 1、ウマ 1 である。ウマは左下顎白歯 2 点が検出されたが、部位の特定はできていないため、最小個体数を 1 とした。

・603SD

ウマ、ウシまたはウマ？の 2 分類群が検出された。IF17s よりウマ左上顎第 2 前白歯 1 点、IF18g よりウシまたはウマ？の長骨破片が検出された。ウマの最小個体数は 1 である。

・遺構不明

小型のウシ科の 1 分類群が検出された。カモシカより小さく、ヤギ・ヒツジ現生標本とほぼ同大であることから、ここではヤギまたはヒツジと同定した。ただし、四肢骨はかなり長く、また脛骨の骨幹形状がヤギ・ヒツジ現生標本とかなり異なるなど、相違点もあり、さらに検討を要する。検出された部位は、前肢と後肢および頭蓋骨の一部である。いずれも保存状態が悪く、破損が著しい。骨端のほとんどは欠損している。大腿骨骨幹に切削が見られる。すべて同一個体である。

また、哺乳綱の部位不明破片多数が検出されたが、ヤギまたはヒツジと同じ個体だと考えられる。

7. おわりに

遺構ごとの動物遺体出土傾向の整理と遺構間の比較を行い、まとめとしたい。

381SK は、貝類、魚類、爬虫類が検出された。貝類はハマグリ、マガキをはじめとする 8 分類群からなり、多様である。魚類も種類が多く、淡水魚と海水魚を合わせて 18 分類群が検出された。最小個体数で見ると各分類群とも同数である。魚類は、椎骨のみが見られた分類群が多く、複数の椎骨で切断の痕跡が観察された。また、他の遺構では見られないスッポンが検出された。

387SK は、貝類と魚類が検出された。貝類はサザエのみ、魚類はタイ科？と真骨類が見られた。

110SK は、貝類のみが検出され、マガキが多く、その他にヤマトシジミとナミマガシワが見られた。

413SK は、貝類のみが検出され、サザエとサルボウまたはアカガイが見られた。

492SK は、貝類のみが検出され、サザエが見られた。

605SD や 603SD の溝状遺構は、哺乳類のみが検出され、ウシ、ウマが見られた。387SK などの土坑とは異なり貝類は検出されず、廃棄される動物の種類が土坑とは異なっていたと考えられる。

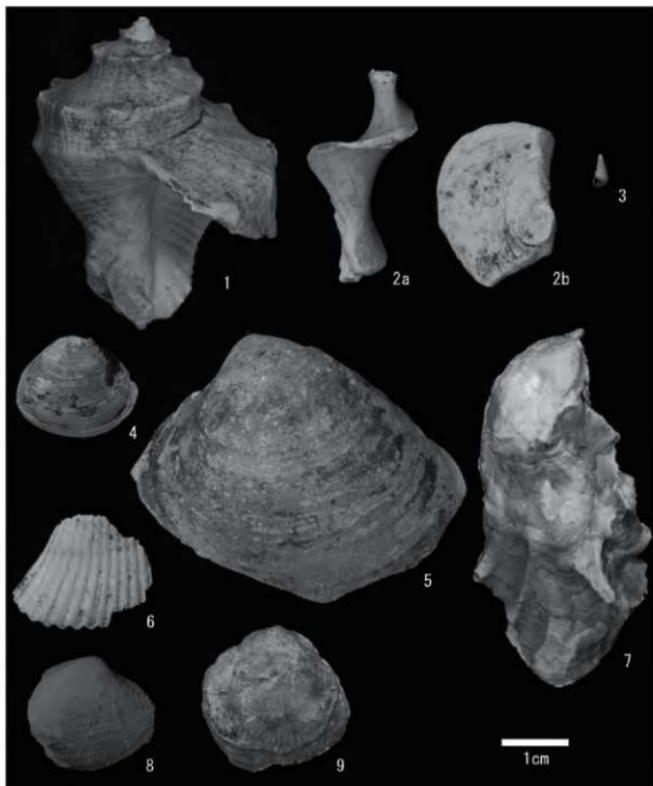
遺構不明は、ヤギまたはヒツジと同定された小型のウシ科のみが検出された。前肢、後肢、頭蓋が検出され胴部が見られないことと、大腿骨に切創が見られたことから、ヤギまたはヒツジ（小型のウシ科）が解体された痕跡だと考えられる。

遺構間を比較すると、動物遺体の種類に差がある。このうち、魚類については試料採取方法による見落としの問題を考えなければならないため、遺構間での出土傾向の差を過去の廃棄行動を十分に反映したものだと考えることは難しい。一方、溝と土坑で見られた哺乳類と貝類の有無の差は、溝と土坑で廃棄される動物の種類が異なっていたことを示すと考えられる。

<補足>

動物遺体を含む遺構の年代について、溝 605SD,603SD は戦国期那古野城の時期、土坑 110SK は 17 世紀後葉と 18 世紀後葉、381SK,492SK,387SK は 18 世紀後半から 19 世紀前葉、土坑 413SK は明治期が最終の廃棄時期と考えられる。試料はいずれも貝あるいは骨が目視で確認できた堆積層から採取している。

（調査担当 武部）



貝類

1. アカニシ
2. サザエ (a: 軸, b: 蓋)
3. キセルガイ類
4. ヤマトシジミ
5. ハマグリ
6. サルボウまたはアカガイ
7. マガキ
8. アサリ
9. ナミマガシワ

図 93 検出された貝類

表17 魚類数量表

ウナギ 科	魚類												調査 年			
	腹椎						尾椎									
	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨				
3815X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
3815Y	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

+ : あり

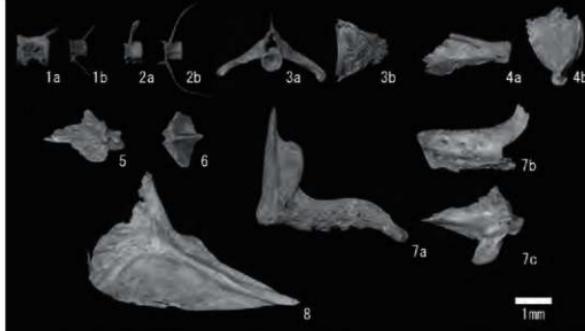
++ : 多数あり

表18 爬虫類および哺乳類数量表

爬虫類 科	哺乳類												調査 年			
	ス タ リ ジ						ウニ カ ル シ ア ム									
	ウニ カ ル シ ア ム															
3815X	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
3815Y	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

+ : あり

++ : 多数あり



魚類

1. ウナギ属 (a : 腹椎, b : 尾椎)
2. ニシン科 (a : 腹椎, b : 尾椎)
3. ボラ科 (a : 腹椎, b : 切断された椎骨)
4. フサカサゴ科 (a : 齧骨R, b : 方骨L)
5. アイナメ属角骨R
6. アジ科接觸
7. タイ科 (a : 前上頸骨R, b : タイ科齧骨L, c : タイ科角骨L)
8. フグ科前鰓蓋骨R

図 94 検出された魚類骨



爬虫類と哺乳類

1. スッポン (a : 中腹板+下腹板R, b : 剣状腹板R, c : 剑状腹板L)
2. ウシ下顎骨
3. ウマ上顎L第2前臼歯
4. ヤギまたはヒツジ-小型のウシ科- (a : 側頭骨岩様部L,
b : 上腕骨L骨幹, c : 桡骨L近位端, d : 中手骨L近位端,
e : 上腕骨骨幹, f : 脊骨L骨幹, g : 距骨L)

図 95 検出された爬虫類と哺乳類骨

第5章 総括

1 戦国期の区画施設

今回調査地点での主な成果は、以下のようにまとめられる。

(1) 断面V字状で土塁をもつ大型の堀(605SD)と同じく大型の堀(606SD-e,f)が成立し、両者は区画の開口部を形成している。

(2) 堀(605SD)の廃絶後に規模の小さい溝(603SD,606SD-a,b)による方形区画が形成される。

(3) 堀には大窓3段階の時期の遺物は含まれておらず、区画溝への変更是16世紀半ば前後の時期と考えられる。

三の丸遺跡の中世・戦国期の溝の方位を基にした分類^(注1)に従えば、すべて「正方位」溝群に含まれるものであり、期間を通して区画の基本的な方位は変更はみられない。土塁を伴うとみられる大型の堀を廃棄し、方位を継承しつつ新たな区画を設定するという大規模な改変が行われており、溝の形状からは「防護」から「区画」への変化を読み取ることが可能である。調査区北側に近接する簡易・家庭裁判所地点(報III)では、大窓3段階以降の時期に更に大規模な堀が設定されており、これとの関連が注目される。三の丸遺跡の広い範囲で行われた区画再編の一例を加えることとなった。

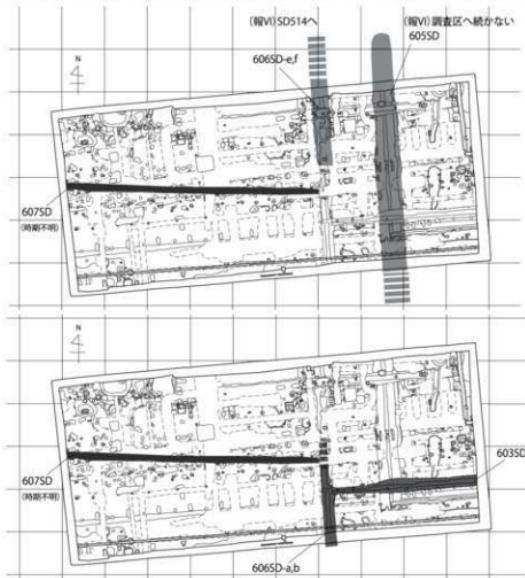


図96 中世・戦国期 主要遺構の変遷

2 近世武家屋敷の空間利用

今回の調査により、ある武家屋敷地の1区画について、大凡の範囲の推定が可能となった。近世武家屋敷の内部構造の実態を考古学的に検証するための貴重な事例を加えることができた。これまでの調査成果と併せて、(1)近世武家屋敷の境界、(2)内部空間の利用方法(主にゴミの廃棄)についてまとめておきたい。

(1) 近世武家屋敷の境界

関連する隣接調査地点との位置を図97に示す。今回の調査地点から南辺土塁に沿って西側約195mの距離に県図書館地点(報告書I)があり、北側は約10m幅の未調査部分を挟んで裁判所庁舎地点(報VI)その更に北側に簡易・家庭裁判所地点(報III)という位置関係にある。名古屋城内の拝領武家屋敷地一境界の変更が厳しく制限される—という特殊事情を前提として、時期幅をもつ複数の遺構群の関係性を検討した結果、今回の調査により一つの屋敷地をめぐる境界線を結ぶことが可能となった。

まず、(報I)は御薦御門内北側に設けられた広場「内片端」と西御土居筋が交わる範囲を含む地點である。調査では柱穴列と布掘の溝が銳角に屈曲するコーナー部分が検出され、上部構造として塀が推定されている。土塁基部の位置も確認されており、土塁と塀の間、道路幅は約30m(15間)と推定されている。道路そのものの構造については明確な情報を得られていないが、道路側溝は存在しないことが確認された。

(報III)地点で検出された規模の大きい一群の溝の配置は、近世を通じて強い規制力をもった区画の存在を示している。このうち東西方向の溝群は隣接する屋敷の裏手の「背割」の境界線を構成するものと推定される。またその周辺に土坑群が密集して展開することから、どの屋敷でもほぼ同様に屋敷裏をゴミの処理の空間に当てていたと考えることができる。さらに東西溝に直交して北側、南側にそれぞれ接続する溝も規模や形状など類似する点も多く、それぞれ屋敷地の側面を画す境界を構成していたと考えられる。

以上の調査地点の成果からまず(報I)の情報と今回調査地点の196SK、東壁際の832SK(どちらも版築状堆積層をもつ)を結んだラインを南御土居筋と屋敷地との境界線として提示しておく(図97)。抜った遺構の形態は一定しておらず地点により異なっている(註2)ことなど、共通する上部構造を復元するとなれば問題点も多く残されているが、ここでは遺構の密集度を大きく区分する境界という性格を強調しておきたい。

次に図5で設定した屋敷地1・2の範囲は、(報III)で検出された背割の境界線を参考にすると、図98のように推定することができる。南御土居筋から屋敷の背割までの距離は約85mである。屋敷1・2が接する側面の境は、形状や遺物を含まず短期間に埋積している点など廃絶の様相なども一致する(報III)SD10と今回調査の496SDを結んだラインを推定している。496SD廃絶後に成立するSA001に土塀あるいは板塀が想定されるが、(報VI)SD001はこれに付随する施設である可能性が考えられる。なお『坪間路頭帳』(註3)によれば屋敷地1は間口二十九間半、奥行四十三間半であり、屋敷地2は間口三十間四尺五寸、奥行四十五間三尺五寸である。

屋敷地1の間口を約53mと仮定すれば、東西幅でも大半の部分が今回の調査範囲内に含まれると考えられる。今回の調査では南面する屋敷の出入口となる門の跡は確認されていないが、調査区の中央に近い381SKより西側にはピット・土坑の分布が特に集中するため、正面の門はそれより東側に

存在したものと思われる。

(2) 内部空間の利用方法

屋敷地1の内部について遺構の分布状況をみると、17世紀前半～18世紀初頭に機能していた背割の溝（SD08）の南側において、廃棄土坑は北西端（a）・北東端（b）の両コーナー付近、南部東側屋敷境付近（c）、南部西側（d）の大きく4カ所の範囲が判明している。（a,b）の範囲は屋敷境のすぐ際にまで達しており、遺物量は格段に多い。（a）は17世紀中葉段階を含む溝状土坑群がL字状溝（SD19）の北・西側に掘削されていたものが、SD19廃絶後に18世紀中葉には重複して大型の土坑が掘削されている。（b）は平面形が方形となるものが多く、側面の境（SD10）廃絶後に重複して18世紀末～19世紀初頭の遺物を含む土坑が掘削されている。（c）は東側屋敷境に沿って細長くのび、しかも南辺ラインからやや距離をおく（4m程度）範囲を想定しているが、17世紀後半、18世紀中葉～19世紀前半の遺物が認められる。井戸は17世紀後半～18世紀前半の遺物を含む1基（SE003）がすぐ近くにあり、若干距離をおいて18世紀後半～19世紀半ばの遺物を含む（SE201）が検出されている。今回調査の範囲では遺物量は少ない。（d）は南辺ラインから7～8m距離をおいて横並びに分布する。17世紀後半の遺物を含む井戸・土坑各1基、18世紀後葉～19世紀前半の土坑・地下室である。

名古屋城三の丸の武家屋敷内部の様相を伝える資料として、西面する屋敷地である野崎一学邸（註4）がある。屋敷は大名小路と中小路に交点東南角に位置する。街路に沿う西側・北側部分に「長屋」が配置され、隣うる屋敷との境は堀である。西側が「門番所」、「中間部屋」のつく「長屋門」であり、北側長屋には物置のほか「馬屋」、「薪部屋」「炭部屋」が入る。門から入ると母屋正面に玄関があり、玄関右手（敷地南側）は「書院」「中の間」など表向の空間、玄関奥が「待詔所」「侍部屋」「広間」など中奥の空間、そして玄閨左手（敷地北側）が「台所板間」「茶ノ間」「女中部屋」奥向の空間となっている。この母屋とは別に「土蔵」（敷地南東隅）、「穀蔵」（同南西隅）がある。母屋の建物南側には縁がめぐり、敷地南側に広く開いた空間（庭）が存在する。中奥と奥向の間（敷地中央東側）にも空

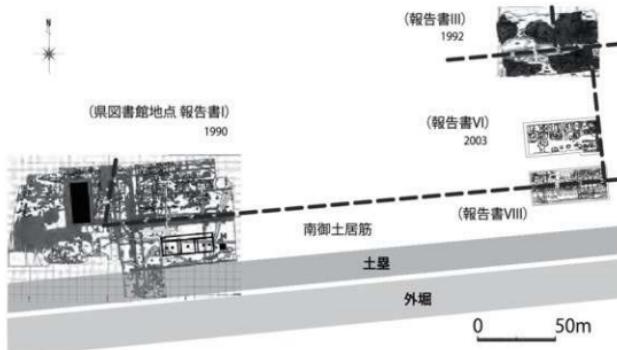


図97 武家屋敷 南辺境界の推定図

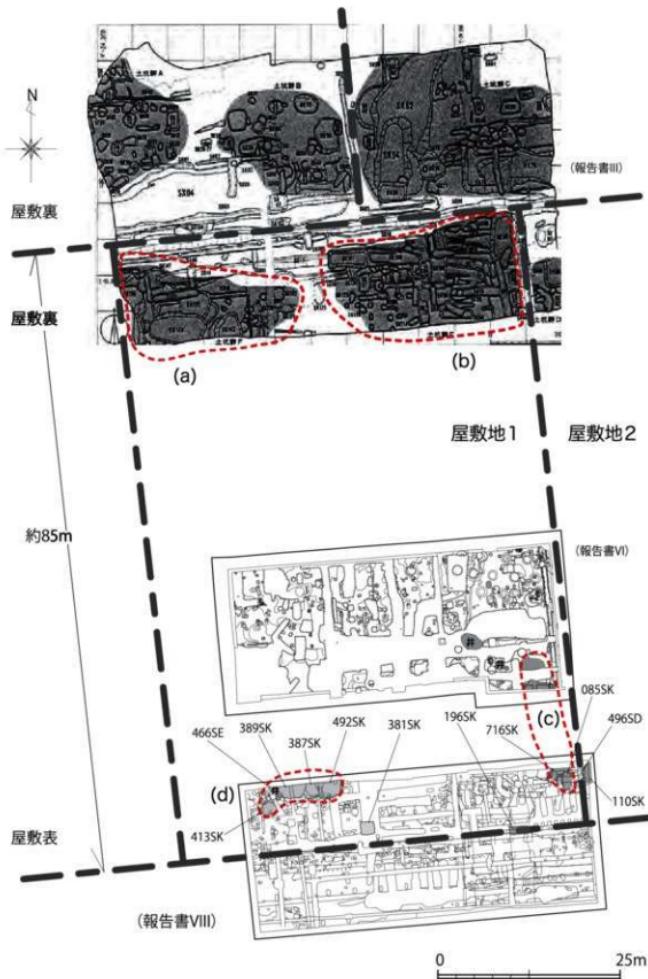


図 98 屋敷地1・2 境界の推定図

間（庭）が存在する。また、母屋建物と長屋との間に、「カマド」（台所）に接する「内庭」が設けられ、井戸が設置されている。廻は母屋の北西端にある。敷地周縁には「路地」がめぐり、「カコイ」が多用されで細かく区切られている。

以上を参考にして再び屋敷地1の遺構の配置を眺めると、南御土居筋に面する敷地境界付近に一定の一定幅で遺構の希薄な範囲があり、何らかの建物が存在していたと考えられる。（報VI）地点は全体に遺構・遺物ともに希薄であり、母屋建物が存在した空間である可能性は高い。ただし、調査区北東部には、植栽痕と思われる土坑数基が検出されており、これらが「表庭」に含まれるとすれば母屋建物は敷地内のやや西寄りに配置されていたと考えられる。井戸は（c）付近で2基、（d）で1基が確認されているが、これらの付近に台所の存在が想定される。（報III）の範囲には建物は及ばず、すべて「裏庭」の空間に含まれると考えられる。

「屋敷表」「屋敷裏」という空間的特質の違いは、遺構（主に廃棄土坑）の分布状況などからこれまでにも指摘されており、屋敷表である今回の調査範囲には大規模な廃棄土坑は存在しないものと予想されていた。調査の結果では屋敷裏と比較して土坑の規模・密度・遺物量のいずれも「表」と「裏」の差異は明瞭であった。しかし屋敷表の範囲も全くの空白地ではなく、少なくとも18世紀後半頃には、建物、堀などで目隠しとなればどこも廃棄場所となった可能性がある。因に、屋敷地2の廃棄土坑（110SK）は、境界を隔てた屋敷地1のものより大規模であることが予想され、範囲としては当初の境界線（496SD）上で拡張されている。屋敷地2側ではより本格的な廃棄場所とされていたかもしない。このようなわゆる「ゴミ処理」の行為は、日常的、あるいは屋敷替やその他事情による後片付けの廃棄（一時的）であるのか、性格の違いにより場所が選択されたと予想される。廃棄状況や遺物内容と居住者の屋敷替時期との関連性の検討が課題である。

3 軍用防空壕の構造

第1章・3節にあるように、名古屋城三の丸遺跡は明治6年以降終戦まで陸軍第三師団が駐屯しており、調査では旧陸軍に関連する遺物も陶磁器類をはじめ金属製品、ガラス製品など多数出土している。当該時期の遺構は調査区全体に分布し、これらは近世の基本的な軸線方向をほぼ踏襲していることがわかった。写真・記録資料の援用も試みたが、図6.7.8にみられるような建物（兵舎、倉庫、厩等）をそれぞれ特定するには至っていない。

今回の調査では、その他に「防空壕」跡5基を確認した。防空壕の多くは終戦間際の混乱期に急造されており（注5）、これらの詳細な記録は残されていない可能性がある。記録が多く残る民間用防空

表19 防空壕の構造と規模

	家庭用*待避所（記録）	備考	候出遺構				
			340SX	341SX	342SX	343SX	344SX
構成	出入口・非常口・収容室	出入口は収容室に向いてて 屈曲	1~2	1	2	1	2
出入口	2箇所・「斜路」を推測	発掘調査事例では「階段」 が多い	2	4	3~4	単層	5~6
規模	収容室幅 (小型) 70./100cm (大型) 80./120cm	それぞれ片側底/両側 底タイプがある	○	○	○2カ所	○	○2カ所
	収容室高さ (小型) 140cm (大型) 150cm		○1カ所?				
その他							

*公共、学校、東屋、工場別に待避所の規定がある

塙と今回検出された遺構群を比較すると表19のようになる。

検出された防空塙の特徴には、複数の収容室をもつこと、出入口が平坦な斜面であること、などが指摘できる。また複数の収容室を結ぶことから必然的に通路が長くなり、全体に規模が大きくなっている。防空塙は同時に存在したとみられ、計画的であるが密度の高い配置状況である。おそらく上部から掘削可能な（建物のない？）空間が限定されていたためであろう。一部に掘削途中とみられる箇所を確認したが、344SX西側などは通路側面から水平方向に掘削を行っている。建物の床下に拡張を試みたものであろうか。

昭和20年における調査地点は、「第三師団絆理部第一倉庫」となっている（図8）。防空塙出入口が階段ではなく平坦なスロープが多く採用されている点は、人員の収容だけでなく物品等の運搬目的とした構造であった可能性が考えられる。複数の収容室と通路をもつ比較的大規模な構造であることも含め「軍用」の施設としての特徴と考えられよう。

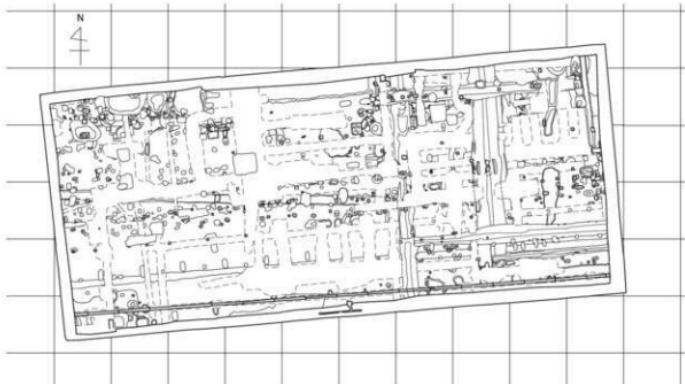
【註】

- (註1) 松田潤,2002.「遺構からみた那古野城の残影」研究紀要3,愛知県埋蔵文化財センター
- (註2) 南御土居筋の東端と東御土居筋が接する地点の調査では、屋敷を区画する遺構として石組と柱穴列（2タイプ）から跡跡が復元されている。名古屋市教育委員会,1989.「名古屋城三の丸 1・2・3次調査の概要」
- (註3) 名古屋市博物館所蔵、宝暦3年（1753年）
- (註4) 幕末期 1200石匁。水野耕嗣,1985.「武家地とその建築」『名古屋城』
- (註5) 「防空待避施設指導要領」内務省防空局制定、昭和17年7月。

【参考文献】

- 大岡敏昭,1999.「日本の風土文化をすまい—すまいの近世と近代」相模書房
- 四国城下町研究会,2006.「近世の屋敷境とその周辺」第7回四国城下町研究会発表要旨・資料集
- 町田 保,1943.『都市計画編 5』土木防空
- 服部赤二郎,1942.『空爆と防空塙 待避所の造りかた』東昇社
- 財团法人日本防空協会,1941.『防空塙 用途と配置 構造と施工』
- 十賀敏武・菊池 実,2002.『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
- 十賀敏武・菊池 実,2003.『新しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
- 名古屋市教育委員会,1989.「名古屋城三の丸遺跡—1・2・3次調査の概要—」
- 名古屋市教育委員会,1997.『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査概要報告書』
- 梅本博志,1990.『名古屋城三の丸遺跡（1）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集
- 金子健一,1992.『名古屋城三の丸遺跡（III）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集
- 松田 潤,2003.『名古屋城三の丸遺跡（VI）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第115集

全体図（下面）



全体図（上面）

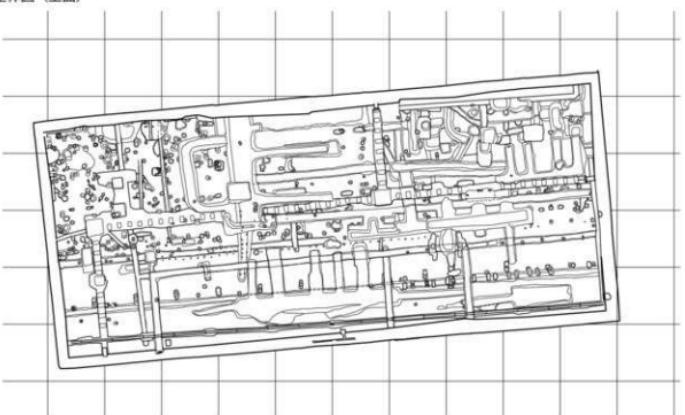


図 版

<基本平面図>
(S=1/100)

- (1) 上面西部 (2) 上面中央 (3) 上面東部
(4) 下面西部 (5) 下面中央 (6) 下面東部

<登録遺物一覧表>

- ・土器・陶磁器 (1~14)
- ・ガラス製品
- ・その他 (骨製品)
- ・金属製品 (1~2)
- ・石製品

<写真図版>

遺構 1~13
遺物 1~18

基本平面図1 上面西部



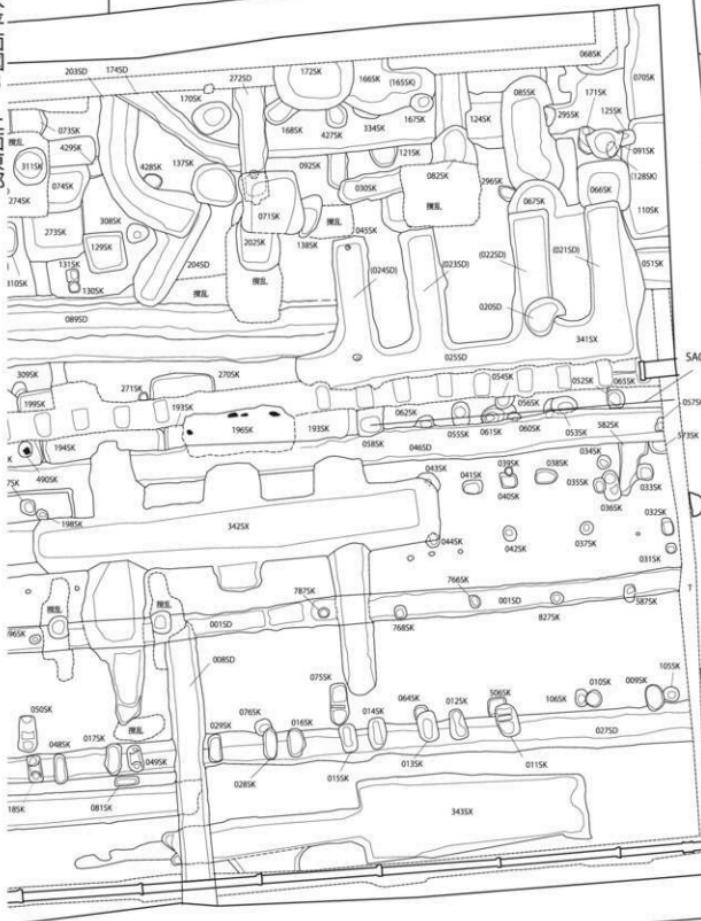
基本平面図2 上面中央



基本平面図

3

上面東部



Y=24410

X=91090
Y=24400

X=91080

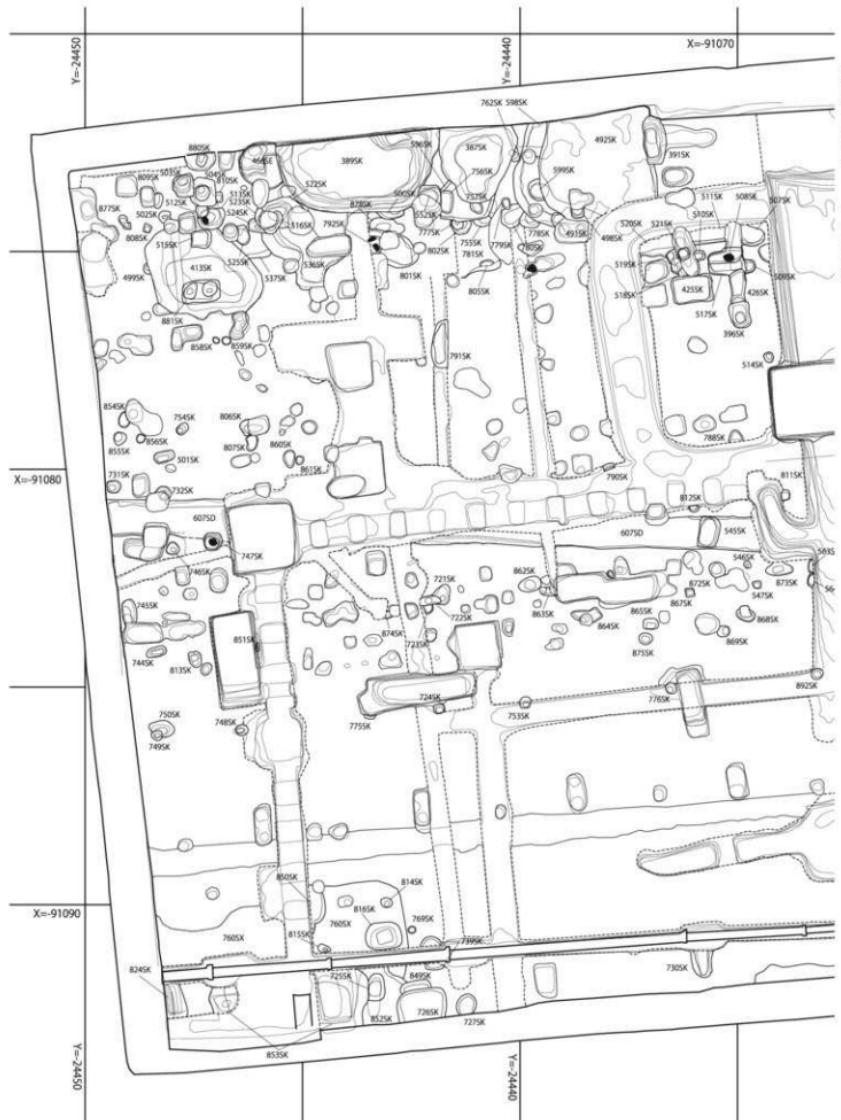
SA002

Y=24400

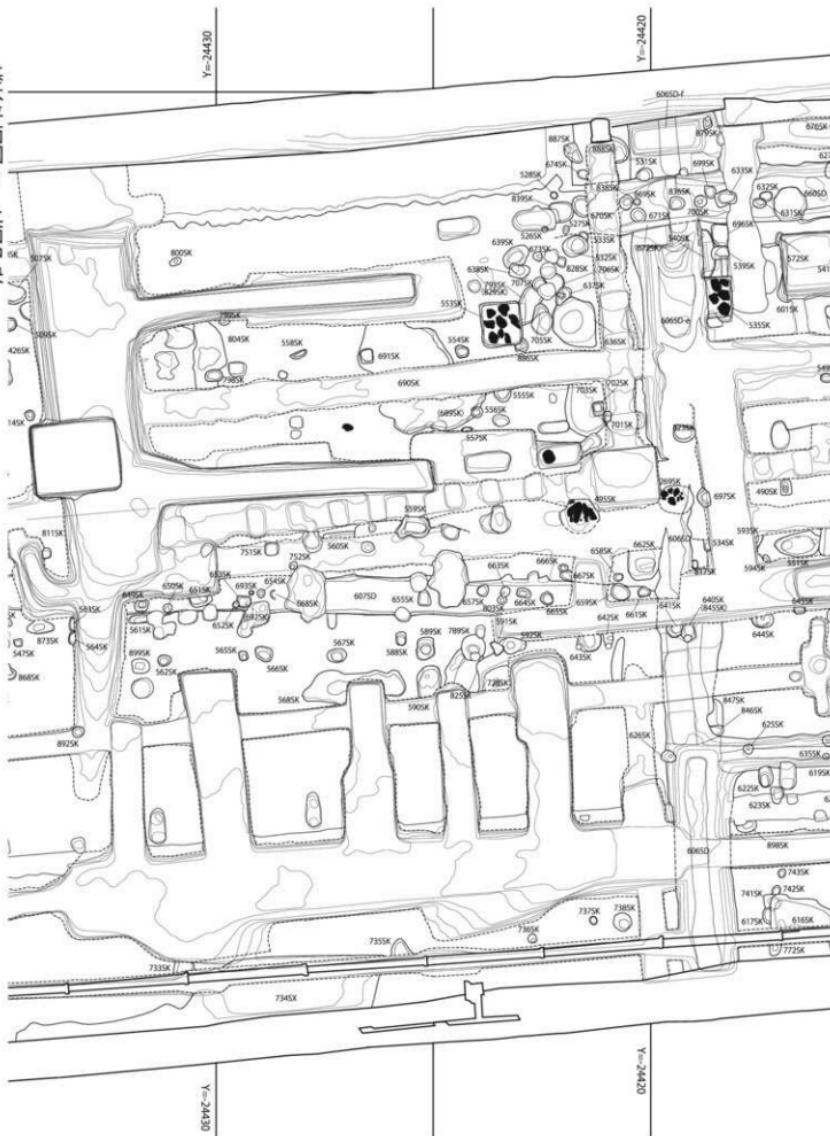
X=91070

Y=24410

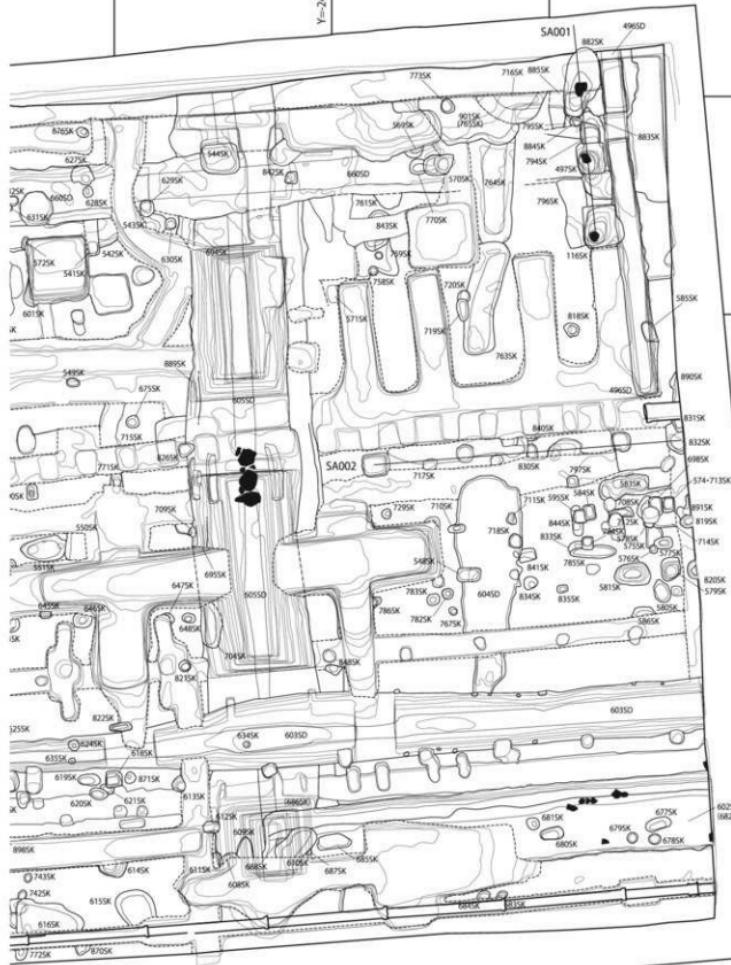
基本平面図 下面西部



基本平面図5 上面中央



基本平面図 6 上面東部



土器・陶磁器（1）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
1	土師器皿	土	605SD曲丁型	#16,17r	4.8	1.1	3.9	2	3	土師器皿,井戸口	
2	灯明皿	陶	605SD(褐色陶土 下層)	#15r	10.6	2.2	5.0	1	6	燒跡,（大窓1か2）	瀬
3	内耳盤	土	605SD曲下層	#16,17r	24.2	*2.7	-	2	-	外圓入ス(年代未定)	
4	山茶碗	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#16r	-	*1.7	5.4	-	4	束腰型(大型大洞口),14c前半	東濃
5	土瓶蓋	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#16r	8.8	*1.6	11.0	3	2	燒跡,（大窓1か2）	瀬
6	繩跡小皿	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#16r	11.6	*2.0	-	1	-	鉄輪,（古窓後V）,15c第2四半期	瀬
7	壺	陶	605SD(褐色陶土 下層)	#16r	-	*4.2	-	1	-	鉄輪,（大窓1）,16c前半	瀬
8	壺	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#16,17r	-	*2.9	-	1	-	鉄輪,（古窓後IV-V）,15c末	瀬
9	壺	陶	605SD曲下層	#17r	-	*3.6	10.6	-	4	鉄輪,（古窓戸後V）,15c末	瀬
10	山茶碗	陶	605SD-O	#17r	10.0	*2.3	-	1	-	更濃型(大窓東北點之),15c前半	
11	山茶碗	陶	605SD-(窓下層)	#16q	-	*2.6	-	-	2	束腰型(大窓東),15c前半	
12	繩跡小皿	陶	605SD-(上層, 褐色陶土)	#15p,q	9.6	2.0	5.0	1	5	灰跡,（古窓後IV-V）,15c半ば	瀬
13	折腹	陶	605SD-(窓下 層,褐色陶土)	#15p,q	14.0	*2.4	-	2	-	灰跡,（古窓戸後仰）,15c第2四半期	瀬
14	繩跡小皿	陶	605SD-(上層, 褐色陶土)	#15q	-	*2.4	-	1	-	灰跡,（古窓後V-VI）,15c第2四半期	瀬
15	直縁大皿	陶	605SD-(上層, 褐色陶土)	#15q	-	*1.5	-	1	-	灰跡,（古窓後V-VI）,15c第2四半期	瀬
16	脚付大皿	陶	605SD-D	#17q	-	*6.7	-	1	-	灰跡,（古窓後IV-V）,15c半ば	瀬
17	繩跡小皿	陶	605SD	#17m	-	*1.6	-	1	-	鉄輪,15c第3四半期	瀬
18	灰陶丸皿	陶	607SD(褐色陶土 上層)	#17o	-	*2.3	-	1	-	灰跡,17c後半(追加)	瀬
19	小天目	陶	605SD-B(褐色陶 土)	#18q	7.2	*3.1	-	4	-	鉄輪,（大窓2前）,16c第3四半期	瀬
20	春伊	陶	605SD-B(褐色陶 土)	#18q	9.0	*2.3	-	1	-	鉄輪,（古窓後IV-V）,15c第2四半期	瀬
21	灰釉豆	陶	605SD-B(褐色陶 土)	#18q	-	*0.8	5.6	-	2	灰跡,印花文,（大窓1か2）,15c末～16c初頭	瀬
22	壺	陶	605SD-(褐色陶 土上層)	#18q	-	*1.9	-	1	-	鉄輪,（大窓3前）,16c第3四半期	瀬
23	平瓶	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#17,18q	15.8	*3.6	-	2	-	灰跡,（古窓戸後IV-V）,15c半ば	瀬
24	平瓶	陶	605SD-(褐色陶土 上層)	#18q	-	*2.2	5.8	-	5	灰跡,（古窓後V-VI）,15c第2四半期	瀬
25	巻か瓶	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#17s	-	*2.8	11.0	-	2	鉄輪,16c代	瀬
26	縦唇	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#17s	10.0	*2.1	-	2	-	鉄輪,（大窓3）,16c後半	瀬
27	灯明皿	陶	605SD(褐色陶土 上層)	#17,18q	10.0	*2.0	-	2	-	焼跡,（大窓1）,15c末	東濃
28	壺	陶	605SD	#18r	-	*2.0	-	1	-	鉄輪,（大窓3前）,16c第3四半期	瀬
29	壺	陶	605SD	#17r	-	*4.7	-	2	-	鉄輪,（大窓3前）,16c第3四半期	瀬
30	壺	陶	605SD-(褐色陶土 上層)	#17,18r	-	*3.4	-	1	-	鉄輪,（大窓3前）,16c第3四半期	瀬
31	土師器皿	土	605SD-(褐色沙質 シルト土層)	#17,18r	12.0	2.4	7.0	4	5	ロクロ口,淡褐色,軟質	
32	青磁碗	磁	466SE	#15k	-	*2.5	5.4	-	7	片切口,面V,腹面U,輪高台と三足	波佐見
33	青磁碗	磁	466SE	#15k	-	*2.5	-	-	2	縫肥V	肥
34	青磁碗	磁	466SE	#15k	11.2	*6.4	-	2	-	肥	
35	染付小皿	磁	466SE	#15k	6.5	2.7	3.1	3	6	染付,茎文	肥
36	染付碗	磁	466SE	#15k	9.2	5.1	3.6	3	6	染付,輪高形	?
37	青花皿	磁	466SE	#15k	-	*3.5	20.0	-	3	青花付,茎付	中国
38	方形高足碗	磁	466SE	#15k	7.3	4.3	4.0	3	11	青花付,斜方格文,五花卉,方形柄に溝添	肥
39	青花高足碗	磁	466SE	#15k	12.2	*5.3	-	4	-	青花,斜方格文,五花卉,方形柄に溝添	肥
40	灰釉高足碗	磁	466SE	#15k	-	*4.0	6.6	-	3	灰跡,斜方格文,五花卉,16c初	瀬
41	灰釉高足碗	磁	466SE	#15k	-	*5.0	5.3	2	9	高台付,斜方格文	?
42	壺	陶	466SE	#15k	12.4	5.4	0.5	2	6	焼跡,斜方格文,高付「櫛口」,凹目,鋸目,側丸	平野?
43	灰入	陶	466SE	#15k	-	*2.2	3.8	-	4	底付丸,凹目,底付丸,斜丸(櫛?)	瀬
44	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	13.4	2.7	7.1	2	2	灰跡,外輪高,17c後半	瀬
45	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	13.3	2.7	6.8	7	7	灰跡,17c後半	瀬
46	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	13.3	2.9	7.2	5	8	灰跡,外輪高,17c後半	瀬
47	灰陶及び皿	陶	466SE	#15k	13.0	*2.8	-	2	-	灰跡,17c後半	瀬
48	灰陶及びV	陶	466SE	#15k	13.4	2.7	7.6	3	4	灰跡,鉄輪,17c後半	瀬
49	長石陶丸皿	陶	466SE	#15k	13.6	3.0	7.6	4	5	長石付,17c後半	瀬
50	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	13.8	3.1	8.0	2	3	御深井軽輪,見込に圓窓3条,17c前半	瀬
51	ひだ鉢	陶	466SE	#15k	12.8	2.4	7.8	5	6	良石付,鉄輪,17c前	瀬
52	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	-	*2.2	7.0	-	11	御深井軽輪,見込に葉17c前半	瀬
53	志野削口皿	陶	466SE	#15k	-	*2.5	-	5	-	志野削,刃削,三足村か	瀬
54	灰陶丸皿	陶	466SE	#15k	23.0	4.4	10.8	2	4	灰跡,三足丸後平底で使用(焼跡),17c後半	瀬
55	鉄輪鉢	陶	466SE	#15k	26.6	*4.8	-	1	-	鉄輪,凹目,17c前半	瀬
56	黄泥戸鉢	陶	466SE	#15k	28.6	*4.9	-	3	-	灰跡,鉄輪,17c第2四半期	瀬

土器・陶器 (2)

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	保存率 口/12	保存率 底/12	備考	产地
57 瓢	瓶	466SE	#15k	10.2	*5.0	-	-	3	-	灰陶,鉢形,数突,19c前か(混入)	東
58 鉢形土瓶	瓶	466SE	#15k	-	*5.6	-	1	-	-	鉢形,内面に透明白粉,17c後半	東
59 鉢形瓶(栓)	瓶	466SE	#15k	4.5	2.8	下部破	7	-	-	鉢形(上部のみ)	
60 小壺	瓶	466SE	#15k	-	*2.6	4.0	-	10	縦部,17c紀前半か	東	
61 仏龕真	瓶	466SE	#15k	-	*3.7	3.5	-	9	灰陶,19c初(混入)	東	
62 灰陶小壺	瓶	466SE	#15k	13.0	6.2	8.7	1	4	灰陶,鉢形,筒形,17c後2四段期か	東	
63 灰陶香炉	瓶	466SE	#15k	17.7	9.4	-	3	3	側面片輪絞輪,筒形,三足足,17c後半	東	
64 鉢形口瓶	瓶	466SE	#15k	13.7	9.5	9.4	9	7	鉢形,火形,17c後半	東	
65 灰陶鉢形か	瓶	466SE	#15k	-	*4.3	12.0	-	5	灰陶,19c初(混入)	東	
66 罐	瓶	466SE	#15k	17.2	*4.7	-	4	-	鉢形,19c初(混入)	東	
67 備註	瓶	466SE	#15k	32.4	*7.4	-	2	-	鉢形,17c後半	東	
68 備註	瓶	466SE	#15k	-	*8.6	-	1	-	鉢形,17c後半	東	
69 槍木瓶	瓶	466SE	#15k	-	*3.8	-	1	-	鉢形,錐形か	東	
70 灰陶銘文瓶	瓶	466SE	#15k	31.0	18.7	14.2	3	10	灰陶,口込に焼約6cmの轍トチ曲X2	東	
71 灰陶土瓶蓋	瓶	466SE	#15k	4.6	2.1	10.4	10	-	灰陶,19c初(混入)	東	
72 火鉢	瓶	466SE	#15k	18.2	*6.5	-	2	-	鍋跡?	東	
73 火鉢	瓶	466SE	#15k	21.6	*8.4	-	2	-	赤物	東	
74 火鉢	瓶	466SE	#15k	-	*14.2	18.0	-	9	赤物,底面全体に砂付着	東	
75 火鉢	瓶	466SE	#15k	-	*7.4	-	3	-	縦部外側から指捺サエ	東	
76 土罐	土	466SE	#15k	9.0.8	6.3	6.6	-	-	土師質,2.25g		
77 銘文罐	土	466SE	#15k	9.1.7	6.6	6.6	-	-	燒跡,83.3g		
78 銘文罐	土	466SE	#15k	9.2.1	6.7	6.0	-	-	燒跡,85.6g		
79 銘文罐	土	466SE	#15k	9.1.9	6.7.1	6.0.0	-	-	燒跡,158.0g		
80 銘文罐	土	466SE	#15k	9.1.6	6.5.6	6.5.2	-	-	燒跡,68.7g		
81 銘文罐	土	466SE	#15k	-	6.0.0	6.5.8	-	-	燒跡,49.3g		
82 銘文	土	466SE	#15k	8.1.1~	6.4.7	6.3.5	-	-	鉢形鉢跡,63.8g		
83 貝	土	466SE	#15k	-	*17.5	-	2	-	赤物	東	
84 貝	土	466SE	#15k	42.6	*30.4	-	2	-	赤物	東	
85 京基	土	466SE	#15k	11.2	*5.9	-	2	-	鉢水分類判別度44段		
86 内耳鏡	土	466SE	#15k	27.0	*5.2	-	2	-	鉢水分類内耳鏡B6段,やや深い		
87 内耳鏡	土	466SE	#15k	30.0	4.5	-	2	-	鉢水分類内耳鏡G6段,やや深い		
88 烧迹	土	466SE	#15k	35.4	*3.2	-	1	-	金子文残器名のほか(胎土深褐色)		
89 土師器皿	土	466SE	#15k	9.8	2.3	5.0	2	5	土師質,ロクロ,全体が修理で黒く変色		
90 土師器皿	土	466SE	#15k	7.4	2.0	4.6	11	12	土師質,ロクロ,口縁にスス付着	第7	
91 青磁碗	碗	466SE	#15k	-	*2.7	-	2	-	青磁,直井文,中世	中国	
92 加工円盤	碗	466SE	#15k	2.5×2.2	2.0	1.0	-	-	青磁, no.33一圓朱	把	
93 加工円盤	碗	466SE	#15k	3.2×3.1	0.8	0.8	-	-	黄斑,直井文,17c前半	第8	
94 加工円盤	碗	466SE	#15k	2.4×2.5	2.1	1.0	-	-	及腰,17c前半	第8	
95 加工円盤	碗	466SE	#15k	3.6×3.3	1.5	1.5	-	-	及腰,直井文,周縁研磨	第8	
96 沢付花瓶	瓶	389SK下	#15k	10.9	5.3	4.6	4	12	澤付,直井文,高台	把	
97 反折瓶	瓶	389SK	#15k	10.0	5.0	3.9	4	12	澤付,直井文,高台内「大明成化年製」	中国?	
98 反折瓶	瓶	389SK	#15k	12.0	*4.7	-	3	-	澤付,直井文,牡丹花草	把	
99 反折瓶	瓶	389SK	#15k	10.6	4.6	-	3	-	澤付,直井文,	把	
100 反折瓶	瓶	389SK	#15k	11.8	*5.6	-	2	-	澤付,直井文?	把	
101 反折瓶	瓶	389SKT下	#15k	9.4	6.4	4.4	8	12	無文,口附脚花	把	
102 沢付平底瓶	瓶	389SK	#15k	14.4	5.9	4.7	3	3	澤付,直井文,梅花文	把	
103 沢付瓶	瓶	389SK	#15k	8.3	4.9	3.9	5	12	澤付,八瓣形	把	
104 小杯	碗	389SK	#15k	6.9	4.5	3.3	8	12	澤付,直井文	把	
105 小杯	碗	389SK	#15k	5.2	4.9	2.4	3	12	澤付,直井文?,「宣德年製」	把?	
106 小杯	碗	389SK	#15k	5.2	3.9	2.4	2	12	澤付,直井文?,「嘉靖年製」?	把?	
107 小杯	碗	389SK	#15k	5.7	*2.5	-	4	-	澤付	把	
108 刷毛目瓶	瓶	389SK	#15k	-	12.6	4.5	-	12	19c後(混入)	第8	
109 瓶	瓶	389SK直下	#15k	-	*3.9	5.8	-	12	灰陶,18c	復	
110 沢付丸瓶	瓶	389SK	#15k	13.0	8.2	6.5	6	12	灰陶,澤付,高台厚唇,18c前半	第8	
111 沢付丸瓶	瓶	389SKベルト上	#15k	13.8	9.0	6.8	2	12	灰陶,澤付,高台厚唇,18c前半	第8	
112 沢付丸瓶	瓶	389SK上	#15k	13.8	10.0	6.5	7	12	灰陶(はく)はく,澤付,高台厚唇,18c前半	第8	
113 沢付丸瓶	瓶	389SK	#15k	13.7	10.1	6.8	8	12	灰陶,澤付,高台厚唇,18c前半	第8	
114 沢付丸瓶	瓶	389SK	#15k	14.2	9.4	7.0	8	12	灰陶,澤付,高台厚唇,18c前半	第8	
115 屋呑宋瓶	瓶	389SK	#15k	11.8	7.4	5.3	11	12	鐵瓶,つらぶね,17c後半	第8	
116 天目茶碗	碗	389SK	#15k	10.2	6.8	4.6	12	12	鐵瓶,口縁に滑垂紙(鐵成不良品),18c第1四半期	第8	
117 錠折瓶	瓶	389SK	#15k	12.1	6.0	5.9	2	12	鐵瓶,錠折瓶け分け,18c豪華	第8	
118 小瓶	瓶	389SK	#15k	8.7	4.6	4.9	12	-	反折,17c後半	第8	
119 小瓶	瓶	389SK	#15k	8.2	5.1	4.0	12	12	鐵瓶,のふ物,變色不直(鐵成不良品),17c	第8	
120 小瓶	瓶	389SKT上	#15k	8.9	6.1	4.7	7	12	反折,18c前半	第8	
121 小瓶	瓶	389SK	#15k	6.2	3.6	3.0	2	6	鐵瓶,高台,18c初	第8	
122 小瓶	瓶	389SKT上	#15k	6.5	4.4	3.4	7	12	鐵瓶,17c後半	第8	
123 沢付丸瓶	瓶	389SKT上	#15k	13.4	3.1	7.8	3	7	鐵瓶,17c後半	第8	
124 沢付丸瓶	瓶	389SK	#15k	12.6	2.8	6.7	12	12	鐵瓶,高台にスス付着,17c後半	第8	

土器・陶磁器（3）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	保存率 D./12	残存率 底/12	備考	産地	
125	灰陶丸皿	陶	389SKY上層	I#15i	13.0	2.7	5.0	4	12	灰陶,高台にスカ付茎,單耳,17c後半	■	
126	灰陶丸皿	陶	389SKY下層	I#15i	13.7	2.4	6.6	4	5	灰陶,17c後半	■	
127	灰陶丸皿	陶	389SK	I#15i	14.1	2.9	7.2	12	灰陶,打撲底に使用,17c後半	■		
128	灰陶丸皿	陶	389SK	I#15i	14.4	3.5	6.7	3	12	灰陶,口部削油溶内凹,高台單耳,17c前半か 銅鋸跡,蛇の目軋剥ぎ	■	
129	灰陶皿	陶	389SK	I#15i	17.9	4.2	5.9	1	5	灰陶,蛇の目軋剥ぎ	肥	
130	折縁盤	陶	389K下層	I#15i	17.0	4.1	5.8	2	12	銅鋸跡,蛇の目軋剥ぎ	肥	
131	折縁盤	陶	389SK	I#15i	14.2	3.8	5.0	4	12	銅鋸跡,蛇の目軋剥ぎ	肥	
132	型打皿	陶	389SKベルト下層	I#15i	15.2	3.5	6.3	8	12	灰陶,高台,17c末	■	
133	型打皿	陶	389SK	I#15i	14.8	3.5	6.4	6	12	灰陶,高台,17c末	■	
134	範	陶	389SK	I#15i	15.8	3.5	7.1	6	10	灰陶,範,17c半~18c初	■	
135	範	陶	389SK	I#15i	13.0	3.1	7.8	4	12	灰陶,範,17c半~18c初	■	
136	複縫	陶	389SK	I#15i	-	*1.8	7.8	-	12	灰陶,範,草文,18c初	■	
137	複縫	陶	389SK	I#15i	11.7	3.2	5.9	2	12	灰陶,複縫,草文,18c初	■	
138	六点式	陶	389K下層	I#15i	11.6	2.4	7.4	2	5	長石斑? 複縫,18c前半	■	
139	複縫	陶	389SK	I#15i	17.8	3.2	10.4	2	4	灰陶,複縫,18c前半	■	
140	瓦形周底	陶	389SK	I#15i	22.0	*3.5	-	3	-	灰陶,瓦形	肥	
141	灯明皿	陶	389SK	I#15i	11.5	2.3	5.2	12	12	銅鋸(内面),口縁部にスス付茎	■	
142	灯明皿	陶	389SK	I#15i	10.1	2.4	6.2	9	12	銅鋸,灰陶,19c前半(深入)	■	
143	灰陶丸皿	陶	389SK	I#15i	9.2	2.6	4.0	12	11	灰陶,高台近口付茎	■	
144	皮陶小皿	陶	389SK	I#15i	8.2	1.6	5.2	6	6	灰陶,底面スリッペ	■	
145	鉢	陶	389SK	I#15i	19.4	*3.1	-	5	-	三島式? 17c後半~18c前半	肥	
146	鉢	陶	389SK	I#15i	34.4	9.9	17.4	7	8	灰陶,鉢脚,鉢脚からし?,17c後半	■	
147	花瓶	陶	389SK	I#15i	12.5	13.9	7.3	12	12	灰陶,花瓶ちらし,薄暗形,豆耳,18c前半	■	
148	水注	陶	389SK	I#15i	4.6	11.6	7.6	1	11	灰陶,灰陶流,掛け,17c前半	■	
149	小瓶	陶	389SK	I#15i	-	*6.3	3.4	-	12	灰陶,瓶,高台	■?	
150	水盤	陶	389SK	I#15i	18.8	9.1	7.2	4	4	4	灰陶,星雲文模様,三足付,19c初(深入)	■
151	香炉	陶	389SK	I#15i	10.7	6.5	8.0	4	6	灰陶,半球ノミヨリ,三足付,口縁部に缺打 痕,17c~18c半	■	
152	灰陶入	陶	389SK	I#15i	*9.5	4.4	*4.9	3	4	灰陶,匣形,草花文,17c末	■	
153	灰陶便利	陶	389SK	I#15i	-	*15.6	6.3	-	12	灰陶,便利,高台,18c前半か	■	
154	灰陶	陶	389SK	I#15i	3.5	-	-	12	土器,上部に「△」印	肥?		
155	灰陶	陶	389SK	I#15i	36.4	*11.4	-	-	12	灰陶,17c後半(深入)	■	
156	鉢	陶	389SK	I#15i	34.9	16.3	15.7	9	12	鉢,17c~18c半	■	
157	鉢	陶	389SK	I#15i	34.2	15.4	14.2	8	12	鉢,17c~18c半	■	
158	鉢	陶	389SK	I#15i	30.8	12.8	12.0	5	12	鉢,17c~18c半	■	
159	便利	陶	389SK	I#15i	-	*9.6	6.6	-	12	透印鉢,舟形,底部に「○」刻印	備的	
160	便利	陶	389SK	I#15i	2.0	17.8	7.0	11	5	透印,舟形	備的	
161	舟透便利	陶	389SK	I#15i	-	*13.6	13.4	-	12	鉢,舟形,17c後半	■	
162	轆轤	陶	389SK	I#15i	-	*10.0	12.0	-	12	鉢,内底鉢脚,18c	■	
163	内耳鍋	土	389SK	I#15i	24.0	*6.5	-	6	-	鉢木ノ類内底鉢6.5型(卷色)	■	
164	内耳鍋	土	389SK上層	I#15i	27.0	10.4	16.1	7	11	鉢木ノ類内底鉢6.5型(卷色),底面板柵直彎 曲,17c~18c半	■	
165	内耳鍋	土	389SK	I#15i	28.0	9.6	16.7	4	12	鉢木ノ類内底鉢6.5型(卷色)	■	
166	茶壺	土	389SK下層	I#15i	12.1	*12.2	-	4	-	鉢木ノ類羽根型B4型	■	
167	茶壺	土	389SK	I#15i	-	*17.1	15.1	-	9	鉢木ノ類羽根型B4型,やや凸底	■	
168	茶壺	土	389SK	I#15i	12.6	17.6	16.7	11	10	鉢木ノ類羽根型B4型,ほぼ平底	■	
169	佛造像	土	389SK	I#15i	5.8	8.4	5.0	6	9	舟A舟,内底面赤あり	■	
170	佛造像	土	389SK	I#15i	5.0	8.0	4.1	11	12	舟A舟,内底面赤あり	■	
171	佛造像	土	389SK上層	I#15i	5.0	8.1	4.0	8	12	舟A舟,内底面赤あり	■	
172	余器	土	389SK	I#15i	11.5	16.3	15.5	9	10	鉢木ノ類羽根型B4型	■	
173	余器	土	389SK	I#15i	13.6	*19.0	17.5	12	2	鉢木ノ類羽根型B4型,やや凸底	■	
174	陶鏡	陶	389SK	I#15i	1.5	-	-	-	-	鏡,63.7g	■	
175	陶鏡	陶	389SK	I#15i	1.8	-	-	-	-	鏡,76.8g	■	
176	陶鏡	陶	389SK	I#15i	1.9	-	-	-	-	鏡,94.9g,「X」縞刻	■	
177	陶鏡	陶	389SK上層	I#15i	11.8	高6.8	4.0	-	-	鏡,114.0g	■	
178	土器鏡	土	389SK	I#15i	15.4	*3.6	-	4	-	口クロ,磨色	■	
179	土器鏡	土	389SK	I#15i	15.6	3.3	7.4	5	8	口クロ,磨色	■	
180	土器鏡	土	389SK下層	I#15i	12.1	3.8	6.0	3	12	口クロ,縁端で全体が変色	■	
181	土器鏡	土	389SK	I#15i	9.5	*1.3	-	3	-	口クロ,磨色,内面に墨書き	■	
182	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.8	1.6	4.8	3	6	口クロ,磨色	■	
183	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.9	1.6	4.8	9	12	口クロ,磨色	■	
184	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.6	1.7	4.4	4	6	口クロ,磨色	■	
185	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.8	1.5	4.0	4	6	口クロ,磨色	■	
186	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.8	1.9	4.0	12	12	口クロ,磨色	■	
187	土器鏡	土	389SK	I#15i	7.6	1.7	4.6	6	8	口クロ,磨色	■	
188	土器鏡	土	389SK	I#15i	8.0	1.5	4.9	10	12	口クロ,磨色	■	
189	土器鏡	土	389SK	I#15i	8.1	1.9	4.2	12	12	口クロ,磨色	■	
190	土器鏡	土	389SK	I#15i	8.6	2.1	4.6	11	12	口クロ,磨色,口縁部にスス付茎	■	
191	土器鏡	土	389SK	I#15i	8.8	2.1	4.2	11	12	口クロ,磨色,口縁部にスス付茎	■	
192	土器鏡	土	389SK	I#15i	9.5	2.2	4.8	12	12	口クロ,磨色,口縁部にスス付茎	■	

土器・陶磁器（4）

E-no.	器種	縦径	横径	グリッド	口徑 (cm)	器高	底径	残存率 □/△/■	残存率 ■/△/■	備考	産地
193	土師器皿	土	3895K	#151	9.5	2.4	2.4	11	12	ロクロ, 淡色, 口縁端スリット	近畿
194	土師器皿	土	3895K	#151	10.4	2.3	5.6	3	4	ロクロ, 淡色	近畿
195	土師器皿	土	3895K	#151	9.7	2.6	5.3	9	12	ロクロ, 淡褐色, 口縁周辺にスリット	近畿
196	土師器皿	土	3895K	#151	7.3	1.8	4.3	11	12	ロクロ, 淡褐色	近畿
197	土師器皿	土	3895K	#151	7.8	1.8	4.2	11	12	ロクロ, 淡褐色	近畿
198	土師器皿	土	3895K	#151	7.2	1.6	4.5	11	12	ロクロ, 淡褐色	近畿
199	土師器皿	土	3895K	#151	9.7	2.2	5.2	5	12	ロクロ, 淡褐色, 口縁部にスリット	近畿
200	土師器皿	土	3895K	#151	9.6	2.0	4.6	6	12	ロクロ	近畿
201	壺	土	3895K	#151	-	*5.9	-	2	-	真継	近畿
202	壺	土	3895K	#151	-	*11.3	-	1	-	真継	近畿
203	染付丸壺	磁	3815K(第4-7番) #0875	#161,7n	10.2	4.3	3.8	4	8	染付, 花文	近畿
204	染付丸壺	磁	3815K	#16n	10.6	4.5	3.8	3	12	染付, 斜枝松文	近畿
205	染付丸壺	磁	3815K(第4-7番)	#16n	9.8	4.9	3.8	2	6	染付, 花文もちらし	近畿
206	墨書き口壺	磁	3815K	#16n	7.0	5.8	4.7	6	5	染付, 直枝松文	近畿
207	墨書き口壺	磁	3815K	#16n	7.4	5.9	4.2	6	8	染付, 羽根様の壠に墨松	近畿
208	墨書き口壺	磁	3405X	#16n	7.3	6.3	5.2	7	12	染付, 墨に星文	近畿
209	染付壺	磁	3815K	#16n	6.6	*2.0	-	4	-	染付, 花草文	近畿
210	染付斜枝	磁	3815K(第4-7番)	#16n	6.6	3.6	3.7	6	12	染付, 斜枝文?	近畿
211	染付壺	磁	3815K(第4-7番)	#16n	-	*4.3	5.8	-	12	染付, 五瓣花 (コンニャク印)	近畿
212	染付壺	磁	3815K(第4-7番)	#16n	15.8	8.2	6.0	7	12	染付, 五瓣花 (コンニャク印), 旗し湯桶	近畿
213	上絵付酒器	磁	3815K(第4-7番)	#16n	9.7	6.1	3.6	6	12	上絵付 (赤, 錆, 金), 鳥龜文, 19c初	近畿?
214	染付瓶	磁	3815K(第4-7番) #0950	#16n	9.8	*2.0	-	2	-	染付	近畿
215	染付蓋	磁	3815K	#16n	11.0	3.9	3.8	11	-	染付, 花草文	近畿
216	大皿	磁	3815K(第4-7番)	#16n	-	*4.1	12.7	-	2	雪文, 丸台内鉄の目駒剥ぎ	近畿?
217	型打瓶	磁	3405X(墨書き)	#16n	-	*3.7	-	3	-	染付, 花草文, 八角形	近畿?
218	染付中壺	磁	3815K	#16n	15.6	2.6	10.0	4	6	染付, 斜枝梅文	近畿
219	染付盆	磁	3815K	#16n	13.8	1.3	7.8	2	9	染付, 花文, 菊草文, 五瓣花 (コンニャク印), 鏡し湯桶	近畿
220	染付盆	磁	3815K(第4-7番)	#16n	12.4	2.1	8.8	9	12	染付, 菊画文, 菊草文, 目白附形高台	近畿
221	便利	磁	3815K(第4-7番)	#16n	2.1	18.0	5.6	12	7	染付, 菊草文	近畿
222	上絵付	磁	3405X	#16n	9.6	5.4	3.6	3	12	上絵付 (赤, 錆), 19c初	近畿
223	灰釉丸壺	陶	3815K(第2番)	#16n	9.0	5.4	2.9	6	12	灰釉, 18c第4四半期	近畿
224	灰釉丸壺	陶	3815K(第2番)	#16n	9.9	5.6	3.4	9	12	灰釉, 灰, 19c初?	近畿
225	灰釉丸壺	陶	3815K(第4-7番)	#16n	9.2	5.8	3.2	12	灰釉, 灰, 灰斑鎌, 19c初	近畿	
226	灰釉丸壺	陶	3815K	#16n	8.9	5.5	4.1	1	12	灰釉, 18c末	近畿
227	灰釉丸壺	陶	3815K(第2番)	#16n	15.5	6.6	3.9	12	12	灰釉, 18c末	近畿
228	上絵付	陶	3815K(第4-7番)	#16n	10.2	*5.4	-	3	-	灰釉, 上絵付 (赤, 錆, 黒)	近畿
229	灰釉丸壺	陶	3815K	#16n	-	*1.9	3.6	-	12	灰釉, 各内面墨書き, 黑 (真)	近畿
230	小絵付	陶	3815K(第4-7番)	#16n	13.2	5.9	4.0	1	12	灰釉, 灰不成品品	近畿
231	小絵付	陶	3815K(第4-7番)	#16n	10.7	6.9	4.2	8	12	灰釉, 灰, 18c第3四半期	近畿
232	鉢か	陶	3815K	#16n	11.4	7.0	4.7	10	12	鉢類, 透明釉, 青系, 花款	近畿?
233	上絵付蓋	陶	3815K	#16n	7.0	*1.6	8.6	7	-	灰釉, 上絵付 (赤, 錆)	近畿
234	蘿原器皿	陶	3815K(第4-7番)	#16n	11.8	2.4	-	5	-	蘿原器皿, 灰斑ヒビ割れあり	近畿
235	蘿原器皿	陶	3815K(第4-7番)	#16n	14.4	4.2	7.4	5	12	蘿原器皿, no.234と物類か	近畿
236	灰見	陶	3815K(第4-7番)	#16n	14.2	4.2	-	2	-	灰釉, 灰, 反覆碗	近畿
237	灰見	陶	3815K(第4-7番)	#16n	-	*1.8	3.3	-	9	長石斑, 斜片	近畿
238	水注器	陶	3815K	#16n	6.4	4.7	7.9	6	-	透明釉	近畿
239	灰釉丸壺	陶	3815K	#16n	13.0	7.4	4.4	5	12	灰釉, 18c後半	近畿
240	灰釉丸壺	陶	3815K(第3-7番)	#16n	13.4	7.6	6.0	4	12	灰釉, 底辺に錐条痕, 高台摩耗, 18c後半	近畿
241	灰釉丸壺	陶	3815K(第3-7番)	#16n	14.2	*9.5	-	8	-	灰釉, 18c下半年にスリット, 18c半ば	近畿
242	灰釉瓶	陶	3815K(第4-7番)	#16n	11.6	8.0	5.0	4	12	灰釉, 18c後半	近畿
243	蘿丸高反碗	陶	3815K(第4-7番)	#16n	11.0	7.2	4.7	8	5	灰釉, 18c化粧? に鉛粒, 19c初	近畿
244	蘿原瓶	陶	3815K	#16n	9.8	5.5	4.0	10	12	蘿原瓶, 第4四半期	近畿
245	摩折瓶	陶	3815K	#16n	10.2	5.3	4.0	6	5	灰釉, 18c第4四半期	近畿
246	上絵付	陶	3815K	#16n	11.2	4.3	3.5	8	8	上絵付 (赤, 錆, 黒), 19c初	近畿
247	上絵付	陶	3815K	#16n	11.8	4.7	3.7	7	12	上絵付, 上絵付 (赤, 錆, 黒), 19c初	近畿
248	灰釉盤	陶	3815K(第2番)	#16n	12.4	4.4	3.8	2	8	灰釉, 灰	近畿
249	雪絵付	陶	3815K(墨書き)	#16n	12.7	5.8	4.6	2	12	灰釉, 雪絵, 18c後半	近畿
250	鉄輪花瓶	陶	3815K	#16n	12.9	2.9	6.1	12	11	鉄輪, 18c後半か	近畿
251	鉄輪花瓶	陶	3815K(第4-7番)	#16n	14.0	*3.3	-	3	-	鉄輪, 18c後半か	近畿
252	鉄輪花瓶	陶	3815K(第4-7番)	#16n	13.6	*2.1	-	3	-	鉄輪, 18c後半か	近畿
253	鉄輪花瓶	陶	3815K(第4-7番)	#16n	14.0	*2.0	-	4	-	鉄輪, 18c後半か	近畿

土器・陶磁器（5）

E-no.	器種	種別	遺傳	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	其存率 口/12	其存率 底/12	備考	产地
254	灰陶輪花沿	輪	381SK	I#16n	14.0	*1.9	-	3	-	鉢形,18c後半から	東
255	灰陶丸皿	皿	381SK	I#16n	12.3	4.9	3.4	7	5	灰陶,鉢形,18c後半から	東
256	灰陶皿	皿	381SK第2・3層	I#16n	12.6	4.6	4.0	6	3	灰陶,鉢形,底盤,18c後半から	東
257	ひだ皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	13.0	2.6	7.8	5	8	灰陶,高脚,18c後半	東
258	灰陶丸皿	皿	381SK	I#16n	12.0	2.2	4.9	6	12	灰陶,17c後半	東
259	灰陶丸皿	皿	381SK	I#16n	12.0	2.5	5.1	5	8	灰陶,17c後半	東
260	灯明皿	皿	381SK第2層	I#16n	10.6	2.0	4.7	8	12	鉢形,19c前半	東
261	灯明皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	11.4	2.1	5.0	6	5	鉢形,内部と底部にスス付帯,19c第1四半期	東
262	灯明皿	皿	381SK	I#16n	12.0	2.2	5.5	7	12	鉢形,19c初	東
263	灯明要皿	皿	381SK第3層	I#16n	9.8	1.3	3.7	12	10	鉢形,19c前半	東
264	片口	皿	381SK第4-7層	I#16n	15.4	10.0	8.0	2	12	鉢形,灰陶二重掛け,付高台,18c前半	東
265	片口	皿	381SK第1層	I#16n	15.7	*2.6	-	7	-	灰陶,体部下半にスス付帯,19c初	東
266	灰陶鉢	鉢	381SK・340SK	I#16n	-	*5.4	7.8	-	5	灰陶,高脚内面唇「S」字	東
267	小瓶	瓶	340SK	I#16n	-	*3.4	3.5	-	12	灰陶,瓶形,鉢底付品	東
268	灰陶瓶	瓶	381SK第1層	I#16n	5.3	1.3	-	10	-	灰陶	東
269	灰陶瓶	瓶	381SK	I#16n	6.8	1.6	-	4	-	灰陶,瓶形,18c初	東
270	灰陶瓶	瓶	381SK	I#16n	5.0	1.8	森大澤	-	-	灰陶,灰陶二重掛け	東
271	土瓶	瓶	381SK第4-7層	I#16n	4.1	1.9	6.0	8	-	鉢形(特徴)	東
272	鉢	皿	381SK	I#16n	11.9	10.7	5.4	7	12	鉢形,底穿孔,18c末	東
273	水盤	皿	381SK	I#16n	20.6	7.0	14.4	6	3	灰陶,縁輪ちらし,三足付,19c初	東
274	鉢	皿	381SK	I#16n	24.6	*4.4	-	2	-	灰陶,17c末	東
275	灰陶有耳壺	壺	381SK第2層	I#16n	9.0	10.6	7.1	5	12	灰陶	東
276	灰陶蓋物	蓋物	381SK・340SK	I#16n	10.4	8.0	7.6	4	12	灰陶,付高台,18c後半から	東
277	灰陶蓋物	蓋物	381SK第2層	I#16n	-	*5.7	7.6	-	9	灰陶,底穿孔,18c後半	東
278	壺	壺	381SK第4-7層	I#16n	38.8	10.8	-	3	-	鉢形,丸に「大」鋸印,19c前半	東
279	耳竹筒	筒	381SK	I#16n	18.8	10.7	9.0	8	2	鉢形,耳付2つと3つ,19c前半	東
280	土瓶	瓶	381SK第4-7層	I#16n	11.4	*3.5	-	1	-	鉢形,瓶形付,円厚	東
281	土瓶	瓶	381SK第2-4層	I#16n	12.4	*11.5	-	4	-	鉢形,内面縁輪,18c末	東
282	土瓶	瓶	381SK第4-7層	I#16n	13.6	*12.0	-	3	-	灰陶,肩縁輪,19c初	東
283	塵斗	瓶	381SK第4-7層	I#16n	12.6	8.5	1.3	4	-	鉢形(縁輪),縦輪,19c初	東
284	灰陶便利	便利	340SK	I#16n	4.2	*6.4	-	12	-	鉢形(縁輪),18c前半	東
285	便利	便利	381SK	I#16n	3.1	*11.6	-	11	-	鉢形,19c初	東
286	鉢	皿	381SK	I#16n	34.0	*16.8	-	5	-	灰陶,19c初	東
287	油燈	油燈	381SK	I#16n	3.7	*17.3	-	12	-	鉢形(棒輪),19c初	東
288	鹿伊または 大鉢	鉢	381SK第2層・ 340SK	I#16n	20.4	13.9	16.6	8	6	鉢形,円柱形三足付,19c初	東
289	鹿伊または 大鉢	鉢	381SK第2層	I#16n	-	*14.2	17.3	-	12	長石陶,円柱形三足付,内面にスス付帯,19c初	東
290	火鉢	火鉢	381SK第2層,第4 -7層・340SK	I#16n	31.2	15.3	16.8	3	4	縁輪,内面縁輪,内柱形三足付,内面にスス付帯,口縁輪に敲打痕,19c初	東
291	火桶	火桶	340SK・345SK	I#16n	-	*10.6	19.5	-	12	三足付,握持用摩耗	東
292	木鉢	鉢	381SK	I#16n	18.6	14.2	11.4	9	12	灰陶,付高台	戸内
293	灰陶丸皿	皿	340SK・345SK	I#16n	7.1	-	-	-	-	外縁輪輪,17c第2四半期	東
294	灰皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	-	*3.0	-	-	-	土製,灰,型作り,鍵入,	東
295	灰皿	皿	381SK	I#16n	-	6.0	-	-	-	土製,彩色,型作り,天地	東
296	灰皿	皿	381SK	I#16n	3.9	3.2	2.0	1	12	陶器,灰,手作り,小杯	東
297	灰皿	皿	381SK	正方形	6.9	7.9	5.8	-	-	土製,彩色,型作り,茶室	東
298	灰皿	皿	381SK	I#16n	-	*3.8	-	-	-	土製,彩色,型作り,天神	東
299	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	14.2	*2.2	-	2	-	ロクロ,淡褐色,スス付帯	東
300	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	10.6	2.1	5.0	2	5	ロクロ,褐色	東
301	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	*7.4	1.3	*4.4	5	7	ロクロ,白~ベージュ系	東
302	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	8.2	1.6	4.8	12	12	ロクロ,白~ベージュ系,口縁輪にスス付帯	東
303	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	7.5	1.5	3.5	8	12	ロクロ,淡褐色,スス付帯	東
304	土師器皿	皿	381SK	I#16n	8.0	1.5	4.0	12	12	ロクロ,褐色,口縁輪にスス付帯	東
305	土師器皿	皿	381SK第4-7層	I#16n	8.3	1.6	3.3	6	12	ロクロ,褐色,口縁輪にスス付帯	東
306	唐爐	皿	381SK	I#16n	6.5	7.5	5.4	12	12	身心焼,鉢印あり	東
307	唐爐	皿	381SK	I#16n	7.7	1.8	-	12	-	唐日焼	東
308	唐爐	皿	381SK第2層	I#16n	7.4	1.8	-	12	-	唐日焼	東
309	唐爐	皿	340SK(右虎ガラ) 丁寧	I#16,17n	7.9	1.8	-	10	-	唐日焼	東
310	唐爐	皿	381SK	I#16n	7.2	1.6	-	4	-	唐日焼	東
311	唐爐	皿	381SK	I#16n	7.5	1.8	-	12	-	唐日焼	東

土器・陶磁器（6）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
312	燒鉢	土	381SK	#16n	-	7.6	5.4	-	-	身C様「兔毫伊織」刻印	
313	燒鉢	土	381SK(北4-7層)	#16n	81.6	高5.5	幅3.4	-	-	燒鉢,62.5g	
314	燒鉢	土	381SK第2層	#16n	33.0	8.9	*14.0	1	-	盒子分段器皿J2種(褐色)	
315	燒鉢	土	381SK	#16n	38.6	*6.8	-	3	-	盒子分段器皿J2種(褐色<淡褐色)	
316	燒鉢	土	381SK第2層	#16n	38.6	*6.0	-	1	-	盒子分段器皿J2種(褐色<淡褐色)	
317	燒鉢	土	381SK	#16n	38.6	*6.2	-	1	-	盒子分段器皿J2種「窓跡」(淡褐色)	
318	甌	土	381SK	#16n	*42.7	*9.8	-	1	-	甌物	常
319	甌	土	381SK	#16n	*31.0	*7.5	-	1	-	甌物	常
320	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.5	6.4	4.8	10	12	染付	肥
321	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.5	6.3	4.8	10	12	染付	肥
322	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.4	6.1	4.8	12	12	染付	肥
323	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.1	6.2	5.1	9	12	染付	肥
324	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.5	6.0	4.9	9	12	染付	肥
325	甌	土	492SK・381SK	#15m	7.6	6.2	5.1	11	10	染付	肥
326	染付切目中 皿	土	492SK(南面)	#15m	21.1	3.1	14.8	7	7	染付,葉筋唐草文	肥
327	青磁杯	土	492SK(北面)・北 壁	#15m	32.2	13.2	12.8	10	12	青磁,片切り断り,若松文	波佐見
328	小秆	土	492SK(北面)	#15m	5.5	2.5	3.6	7	12	染付	肥
329	紅皿	土	492SK(東面トレン チ)	#15m	2.3	1.0	0.8	4	6		肥
330	青磁圓形巻 口	土	492SK,380SK	#15m	9.9	7.3	7.4	12	12	青磁,蛇の目四形高台	肥
331	線形透香	土	492SK・380SK	#15m	7.4	5.6	3.3	9	12	染付,文五瓣花(コニャク印)	肥
332	染付切目皿	土	492SK(北面,西面)	#15m	16.4	3.3	10.1	9	8	染付,口縁,草文文	肥
333	染付皿	土	492SK	#15m	19.0	*2.3	-	3	-	染付	肥
334	瓶	土	492SK	#15m	10.4	3.1	5.5	4	-	瓶内削花,人面,竹文	肥
335	瓶	土	492SK(南面)	#15m	10.0	3.2	結果4.1	4	-	外面部削花,染付,新小字,三方削花文,方形 紋に刀削	肥
336	染付高脚	土	492SK・381SK	#15m,16n	11.4	5.4	4.1	7	6	陶胎染付,松柏梅文,19c初	肥
337	灰陶圓形	土	492SK(北面)	#15m	8.2	5.2	3.9	7	12	灰陶,土足付,三足付,粗土,やや精良	肥
338	染付丸瓶	土	492SK(北面,南 面)・312SK	#15m	11.0	6.2	3.9	7	12	陶胎染付,松柏梅文19c初	肥
339	刷毛目茶碗	土	492SK	#15m	13.6	*5.3	-	4	-	19c初	肥
340	刷毛目茶碗	土	492SK(北面)	#15m	13.3	*5.3	-	3	-	19c初	肥
341	刷毛目茶碗	土	492SK・381SK	#15m,16n	13.6	6.2	4.6	8	12	19c初	肥
342	青茶碗	土	492SK・312SK	#15m	12.8	6.1	4.8	6	9	貴賤戶跡,内面線緋,村高台,19c初	肥
343	灰陶瓶	土	492SK	#15m	11.4	*5.9	-	3	-	灰陶,瓶形	肥
344	上粒付動子	土	492SK・380SK	#15m	11.8	8.2	6.5	2	8	灰陶,上粒付,三足付,粗土,やや精良	肥?
345	行灯	土	492SK	#15m	13.1	2.1	9.4	12	12	志野款,铁輪	肥
346	小舟	土	492SK	#15m	10.4	5.5	3.8	4	12	鐵輪,行舟,若松文,高台内墨書きに「一」,19c末 ~	肥
347	小舟	土	492SK(北面)	#15m	8.8	0.2	3.3	3	4	鐵輪,19c初	肥
348	刷毛目茶碗	土	492SK墨書きベント	#15m	-	*2.8	4.9	-	-	刷毛目茶碗	肥
349	灰陶茶碗	土	492SK	#15m	8.8	5.7	3.1	6	12	灰陶,19c初	肥
350	灰陶茶碗	土	492SK	#15m	11.8	5.6	4.0	3	5	灰陶,茶碗,墨文,19c初か	肥
351	染付盆	土	492SK	#15m	13.1	3.6	5.5	1	12	陶胎染付,墨書き花文,19c末	肥
352	灰陶盆	土	492SK	#15m	-	*3.2	7.5	-	7	灰陶盆,長脚,19c末	肥
353	土瓶	土	492SK	#15m	7.3	9.6	7.7	12	3	鐵輪,三足付,19c初?	肥
354	土瓶	土	492SK(北面)	#15m	7.6	10.3	8.1	11	12	鉢輪,三足付,19c初	肥
355	土瓶蓋	土	492SK	#15m	10.9	3.0	7.7	12	12	鉢輪,灰陶扣(流し),19c初か	肥
356	土瓶蓋	土	492SK	#15m	5.2	丁度推	1.8	12	12	鉢輪?,no.354と組み,19c初	肥
357	土瓶蓋	土	492SK	#15m	7.3	3.7	9.5	11	-	灰陶,鉢輪ちらし,19c初	肥
358	刷毛目茶碗	土	492SK	#15m	8.8	1.1	-	12	-	灰陶,19c初?	肥?
359	青磁鉢	土	492SK(西面)	#15m	5.5	2.7	5.0	5	6	刷毛目茶碗?	肥
360	刷毛目茶碗	土	492SK	#15m	9.1	7.5	4.8	4	12	底部穿孔,腳輪か,19c初	肥
361	灰陶小瓶	土	492SK	#15m	1.6	4.9	2.8	12	12	灰陶,神仙具	肥
362	鉢	土	492SK・380SK	#15m	23.0	13.2	16.2	5	3	鉢,19c末	肥
363	鉢	土	492SK(北面トレン チ)	#15m	14.0	*6.5	-	4	-	灰陶,18c末	肥
364	幫治窯	土	492SK	#15m	2.1	5.7	3.9	12	12	鉢輪,19c初?	肥
365	鉢	土	492SK	#15m	14.6	*4.8	-	5	-	鉢輪,便器底あり,19c初	肥
366	鉢	土	492SK・598SK	#15m	-	*4.0	6.4	-	7	鉢輪,便器底あり,19c初	肥
367	鉢輪	土	492SK	#15m	33.0	-	-	2	-	灰陶,鉢輪ちらし,17c後半	肥
368	半網	土	492SK	#15m	31.0	*14.5	-	2	-	鉢輪,半網扣(流し),19c初	肥
369	彫刻茶入	土	492SK	#15m	6.6	5.0	4.2	5	7	鉢輪,17c後半	肥
370	灰陶物	土	492SK(北面)	#15m,16n	8.4	5.3	6.4	10	12	灰陶,18c末か	肥
371	灰陶香炉	土	492SK	#15m	13.2	*5.1	-	3	-	灰陶,圆形,17c後半	肥
372	灰陶香炉	土	492SK	#15m	-	*5.1	6.8	-	12	灰陶,便器底,17c後半	肥

土器・陶器類 (7)

E-no.	器種	種別	通査	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	片存率 Q./12	片存率 Q./12	備考	施地
373	灰陶壺利	壺	492SK	#15m	-	*13.0	6.6	-	12	灰陶,19c前半	無
374	壺鉢	壺	492SK	#15m	34.0	*12.5	-	3	-	鉢鉢	無
375	鉢形火鉢	壺	492SK	#15m	22.0	12.9	17.2	6	9	鉢形,口縁側に斜打痕,19c前か	無
376	壺鉢	壺	492SK	#15m	5.1	4.7	4.0	12	12	鉢形,厚底,19c初	無
377	壺鉢	壺	492SK	#15m	5.1	4.4	4.0	8	12	鉢形,厚底,19c初	無
378	壺鉢	壺	492SK	#15m	4.6	2.6	2.0	12	12	灰陶,19c初	無
379	縫木鉢	壺	492SK	#15m	-	*2.8	19.0	-	6	19c後?	無
380	燒造壺	土	492SK(北面)	#15m	4.9	7.7	5.0	11	9	身C縫	無
381	鉢形丸瓦	壺	492SK	#15m	10.0	-	-	-	-	外表面施,17c後18c前半	無
382	陶鑊	壺	492SK	#15m	8.1~ 1.8	高4.6	幅3.6	-	-	鐵鋸,表面摩耗,89.4g	無
383	蒸籠	土	492SK(北面)	#15m	14.0	*9.6	-	2	-	縫木分隔器無蓋84件 盒子分隔器無JZ類少(決褐色),裏面に泥文 刷印	無
384	陶鑊	土	492SK(南面)	#15m	33.8	8.4	-	10	-	無	無
385	玩具	土	492SK(南面,北 面)	#15m	幅22.0	17.4	高13.8	-	-	土製,彩色,手作りと型作り,茶室	無
386	水滴	壺	492SK	#15m	高4.4	幅2.5	-	-	-	範成形,輪鉢,型作り,深小鉢	無
387	玩具	土	492SK(南面)	#15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,手多種	無
388	玩具	土	492SK	#15m	-	-	-	-	-	土製,彩色,手焼,褐黃色	無
389	玩具	土	492SK	#15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,型作り,大風	無
390	玩具	土	492SK(西へ少ト)	#15m	9.0	*2.1	-	2	-	陶鑊,鉢形,底鉢	無
391	玩具	土	492SK	#15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,鹿U馬	無
392	玩具	土	492SK(北面)	#15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,頭部人物	無
393	玩具	土	492SK	#15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,鳥	無
394	翫瓦反台	壺	387SK	#15i	10.4	5.6	4.7	5	6	協付,草花文,見出「□□年製」,高台内角強化	無
395	小瓶	壺	387SK	#15i	9.4	5.0	3.9	3	7	梁付	無
396	圓筒形	壺	387SK	#15i	11.1	*5.2	-	6	-	梁付	無
397	圓筒形青銅器	壺	387SK	#15i	12.3	6.4	4.0	3	4	銅製,表面磨耗,底高,19c前半	無
398	圓筒形青銅器	壺	387SK	#15i	12.0	6.5	4.1	3	12	銅製,表面磨耗,底高,19c前半	無
399	陶文具	土	387SK	#15i	10.8	3.5	4.0	12	12	灰陶,器,表面磨耗,19c末	無
400	陶文具	土	387SK	#15i	10.7	3.4	3.7	8	12	灰陶,器,表面磨耗,19c末	無
401	平行轍	土	387SK	#15i	17.4	3.7	-	11	-	灰陶,19c初	無
402	瓦體瓦	壺	387SK	#15i	-	*4.1	7.2	-	12	灰陶,瓦體瓦	無
403	鉢形丸瓦	壺	387SK	#15i	12.4	*3.2	-	3	-	鉢形,口縁歪みあり	無
404	燒造青銅器	壺	387SK	#15i	6.6	1.0	-	6	-	銅D盤	無
405	杓柄	土	387SK	#15i	8.6	5.9	5.1	9	12	灰陶,刃用穴,輪高台,18c後半	無
406	魚頭鉢	壺	387SK	#15i	6.8	3.7	5.4	4	6	灰陶,19c初	無
407	魚頭鉢	壺	387SK	#15i	6.2	3.1	5.0	7	11	灰陶,19c初	無
408	魚頭鉢	壺	387SK	#15i	6.9	4.0	5.3	6	8	灰陶,19c初	無
409	灯明受皿	土	387SK	#15i	6.8	1.7	3.2	12	12	灰陶	無
410	方形過舟	土	387SK	#15i	7.5	*4.9	-	7	-	灰陶,鉢形,19c初	無
411	縫合小鉢	壺	387SK	#15i	9.7	5.4	4.0	5.0	12	梁付,松竹梅文,底縫	無
412	圓物	壺	387SK	#15i	10.6	5.7	7.0	6	12	灰陶,19c初	無
413	椎	土	387SK	#15i	9.8	6.7	7.8	10	6	燒拂(底)底部に巻番	無
414	灰陶大器	壺	387SK	#15i	37.0	5.5	-	5	-	灰陶	無
415	手水鉢	土	387SK	#15i	33.0	*18.7	-	4	-	灰陶,うのふ鉢,鉢脚側け分け	無
416	鉢形櫛	土	387SK	#15i	10.4	9.7	6.5	6	7	鉢形,三重縁,19c初	無
417	手あぶり	土	387SK	#15i	13.4	7.7	9.2	2	8	灰陶,19c初	無
418	手網	土	387SK	#15i	15.0	*8.7	-	5	-	灰陶,19c初	無
419	錢袋	土	387SK	#15i	13.4	9.2	6.4	12	6	灰陶	無
420	縫木鉢	土	387SK	#15i	14.6	12.2	10.7	8	10	鉢形,底脚厚乳,19c初	無
421	丸入	土	387SK	#15i	13.8	*5.1	-	3	-	縫合(呂合輪),印花,19c初	無
422	口片	土	387SK	#15i	11.8	4.8	4.5	5	10	灰陶,19c初	無
423	耳付鏡	土	387SK	#15i	17.8	*7.0	-	4	-	鉢形,耳付2ヶ,19c前半	無
424	耳付鏡	土	387SK	#15i	20.0	9.4	6.8	7	8	鉢形,二重縁,耳穴1ヶ,19c前半	無
425	耳付鏡	土	387SK	#15i	24.0	8.3	6.2	4	5	鉢形,19c前半	無
426	平行手鏡	土	387SK	#15i	16.4	*4.9	-	3	-	灰陶,19c初	無
427	唐模	土	387SK	#15i	21.4	10.3	9.8	2	12	鉢形,19c中葉	無
428	壺鉢	壺	387SK	#15i	21.3	10.1	9.7	3	6	鉢形,19c中葉	無
429	縫合	土	387SK	#15i	35.0	5.1	-	2	-	鉢形,19c初	無
430	鉢形	土	387SK	#15i	-	*15.5	15.8	2	-	灰陶,縫合らし,17c末	無
431	鉢形	土	387SK	#15i	-	*14.1	5.5	-	12	鉢 - 灰陶縫合分け,19c初	無
432	楕円急須	土	387SK	#15i	6.2	8.3	6.5	12	8	燒拂	無
433	上給付土瓶	土	387SK・596SK	#15i	6.4	*10.4	-	4	-	上給付,梅花文,「玉川」刻印,19c末	無
434	土瓶	土	387SK	#15i	8.6	11.5	8.0	8	3	灰陶,質指き(イッテン),19c中葉	無

土器・陶磁器 (8)

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	基高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	墓地
435	土瓶蓋	瓶	3875K-236SD	I#15i	4.5	3.1	最外径 6.3	12	-	三彩土瓶の蓋,19c	
436	土瓶蓋	瓶	3875K	I#15i	5.4	2.9	最外径 7.4	12	-	縁輪	墓
437	土瓶蓋	瓶	3875K	I#15i	6.9	2.9	最外径 9.0	3	-	灰釉,鉢輪,19c初	墓
438	土瓶蓋	瓶	3875K	I#15i	7.0	3.0	最外径 9.4	12	-	縁輪,19c前半	墓
439	土瓶蓋	瓶	3875K	I#15i	5.4	2.6	最外径 9.2	5	5	灰釉,no.334と組,19c初	
440	埴輪不明	瓶	3875K	I#15i	9.2	2.4	-	8	-	埴輪,青白釉,外側に舟形	
441	壺	瓶	3875K-3885K	I#15i	7.2	1.4	-	11	-	蓋板,no.442と組,19c中葉か	墓
442	附蓋器	瓶	3875K	I#15i	7.3	5.9	7.3	4	5	蓋板,19c中葉か	墓
443	水盤	瓶	3875K	I#15i	20.6	*2.4	-	2	-	鉢輪,19c初	墓
444	火鉢	瓶	3875K	I#15i	20.0	9.5	-	6	-	鉢輪,19c初	墓
445	火鉢	瓶	3875K	I#15i	-	*4.2	15.0	-	12	鉢輪,二重鉢,底部三足内側にひご舟穴,19c初	墓
446	瓶	瓶	3875K	I#15i	33.0	*4.3	-	2	-	鉢輪,19c初	墓
447	不明	瓶	3875K	I#15i	-	-	-	-	-	染付,萬葉文と魚文か,大型の菱形唇器か	
448	合扣	瓶	3875K	I#15i	7.4	3.5	-	10	-	染付,魚鱗文と牡丹文,型打成形,六角形,例図3 面に菱形窓し穴	
449	玩具	瓶	3875K	I#15i	-	*3.2	-	-	-	土製,彩色, 備前上部	墓
450	玩具	瓶	3875K	I#15i	-	14.4	-	-	-	土製,彩色, 備前基部	墓
451	燈炉	瓶	3875K	I#15i	16.7	9.2	-	2	-		墓
452	燈	瓶	3875K	I#15i	-	*8.4	-	2	-	赤物	墓
453	燈炉	土	3875K-236SD	I#15i	22.7	21.5	19.0	10	12	壺焼,二重燈炉,底面に「寿」刻印	
454	目皿	土	3875K	I#15i	10.4	*1.4	-	2	-	素輪,口クロ,変色なし	
455	目皿	土	3875K	I#15i	-	-	-	-	-	素輪,口クロ,変色あり	
456	鏡	土	3875K	I#15i	37.9	*6.0	-	3	-	金子鏡柄D環か(淡褐色),外面口縁部付近才 テ	
457	鏡	土	3875K	I#15i	40.0	9.0	9.0	6	5	金子鏡柄L環(淡褐色),底面に沢文模印(不 明期)	
458	鏡	土	3875K	I#15i	41.5	6.1	-	4	-	金子鏡柄L環か(褐色),外面口縁部付近ケズリ	
459	鏡	土	3875K	I#15i	44.8	*4.1	-	1	-	金子鏡柄L環か(褐色),外面口縁部付近ケズリ	
460	聖灯籠	箱	4135K(下巻)	I#16k	-	*3.2	-	1	-	染付,萬葉文	墓
461	青磁香炉	箱	4135K	I#16k	8.8	6.2	-	4	-	青磁炉	墓
462	雞脚肉付	瓶	4135K	I#15k	-	*2.7	9.3	-	4	羅部,前部筒状入(布袋?),型打,竹高台,17c 第 1四半期	墓
463	灰陶輪折衷	瓶	4135K	I#16k	11.7	4.7	4.0	3	1	灰釉,丸んじ,18c後半	
464	灯明豆皿	瓶	4135K	I#13k	9.1	2.0	4.0	12	12	鉢輪,19c初	墓
465	灰陶蓋	瓶	4135K	I#15k	-	22.6	-	-	-	灰陶,17c	
466	灰陶蓋	瓶	4135K	I#15k	5.2	4.3	3.9	12	12	灰陶,17c	
467	灰陶	瓶	4135K	I#15k	5.3	4.2	3.9	12	12	灰陶,17c	
468	瓦瓶	瓶	4135K	I#16a	-	*10.1	9.6	-	3	灰陶,表面吹込みあり,平底	墓
469	瓦丁臥	瓶	4135K	I#16a	20.8	*7.9	-	3	-	鉢輪,19c後半	
470	瓶	瓶	4135K	I#16a	8.8	2.5	-	3	-	染付,「唐大觀」,19c後期	
471	平底	瓶	4135K-350SK	I#16k-15,16i	16.0	6.5	6.0	10	12	染付,底付穴當たり,19c後期	墓
472	カツラ裏皿	瓶	4135K	I#16k	13.2	1.9	7.5	6	7	夕口ロ青磁,鉢輪,高台内「唐光製」銘,19c後期	墓
473	井	瓶	4135K	I#16k	15.6	6.4	5.4	11	12	夕口ロ青磁,鉢輪,19c後期	墓
474	皿	瓶	4135K	I#16k	10.8	2.2	6.3	12	12	夕口ロ青磁,鉢輪,底に鶴,20c初	墓
475	行平皿	瓶	4135K	I#16k	18.0	4.2	-	2	-	橙色胎,裏面に削印,19c後期	
476	飴鉢	瓶	4135K	I#16k	35.4	*5.3	-	2	-	灰陶,飴鉢らし,17c後半	
477	平胴	瓶	4135K	I#16k	26.9	*9.9	-	2	-	鉢輪,18c	墓
478	置物か	瓶	3805K	I#15m	9.6	10.2	6.0	7	12	灰陶,底付穴當たり,18c末	墓
479	灰陶蓋	瓶	3805K	I#15m	10.4	1.6	-	4	-	灰陶,18c後半	墓
480	灰陶水滴	瓶	3805K	I#15m	*4.6	*3.7	-	-	-	灰陶,兔形	墓
481	陶鏡	瓶	3805K	I#15m	9.7	85.6	3.9	-	-	佛頭,TX「鏡」銘,94.8g	
482	糠漬酒呑	瓶	4715K	I#15i	9.8	6.6	5.2	9	12	灰陶,瓶身,18c前半	墓
483	染付蓋	瓶	4715K	I#15i	5.3	2.0	最外径 7.4	4	-	染付	墓
484	耳付瓶	瓶	4715K	I#15i	15.4	14.5	-	2	-	鉢輪,19c中葉	墓
485	土師器蓋	土	1535K	I#16m	9.0	1.2	5.6	12	12	ロクロ,白色,底部墨書き	
486	土師器蓋	土	1535K	I#16m	9.1	1.4	5.4	12	12	ロクロ,白色,底部墨書き	
487	灰陶とし	瓶	5985K	I#15m	6.2	8.2	7.0	9	12	鉢輪,灰陶掛け分け,18c後半	墓
488	燒泥壺	土	5985K	I#15m	5.5	8.2	5.4	9	8	身軽	
489	尾呂本陶	土	5985K	I#15m	10.5	6.9	5.4	6	12	鉢輪,17c後半	墓
490	京燒黑陶	土	5985K	I#15m	-	*2.8	5.4	-	6	灰陶,高台内「小松吉」印	墓
491	秉瓶	土	4045K	I#15k	5.0	4.1	3.9	3	12	鉢輪,脚付	墓

土器・陶器類 (9)

E-no.	器種	種別	通番	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 D/12	残存率 D/12	備考	墓地
492	水盤	箱	406SK	F15k	5.0	4.4	4.0	-	12	鉢形,脚付	■
493	青磁鉢	箱	406SK	F15k	14.4	5.2	6.1	4	1	青磁鉢,型打,縁目文,ガラス腰あり	■
494	陶瓶	箱	536SK	F15k	81.7	高6.6	縦4.5	-	-	焼物,10.5cm	■
495	水盤	箱	536SK	F15i	-	*9.0	19.7	-	3	灰陶,鉢,縁陶洗なし付け,19c前半	■
496	水盤	箱	536SK	F16i	-	*11.5	20.7	-	5	灰陶,鉢,19c	■
497	陶形透香	箱	329,536SK	F16i	7.7	5.8	3.8	6	12	透竹,平蓋と置墨文	把
498	小杯	箱	329SK	F16i	5.7	3.5	1.9	2	2	透竹,縁方形	把
499	灰陶透利	箱	432,502,536SK	F15k+15l	-	*14.1	-	-	-	灰陶,18c後半	■
500	陶器遺物	土	411SK	F15k	6.3	1.7	-	9	-	蓋A類	■
501	唐鉢	箱	411SK	F15k	-	*7.0	-	1	-	鉢類,17c後半	■
502	京焼瀬戸	箱	508SK	F16m,n	-	-	5.4	-	9	灰陶,鉢,高台内「瀬戸」印	把
503	灰陶瓶	箱	508SK	F16m,n	-	*2.3	4.1	-	5	灰陶	把
504	唐付壺	箱	515SK	F15m	8.8	*3.1	-	6	-	塗付	把
505	小瓶	箱	515SK (変化物)	F15i	8.5	4.5	3.1	1	9	塗竹,五舟文(コンニャク田),松葉文	把
506	陶形透香	箱	595SK	F15m	7.1	*4.8	-	11	-	塗竹,竹文	把
507	漆付壺	箱	595SK	F15k	-	*1.3	6.0	-	4	塗竹,吉文文字か	把
508	厚底瓶	箱	595SK	F15i	9.0	5.7	4.2	5	1	透明白口瓶,厚底,縁鉢	把
509	京焼瀬戸	箱	595SK	F15i	-	*1.2	5.6	-	7	灰陶,高台内切	■
510	陶形透香	箱	595SK	F15i	8.7	*5.5	-	3	-	灰陶,具足,19c初	■
511	行平腹	箱	595SK	F15i	13.9	3.2	-	5	-	19c前半	■
512	灰陶壺	箱	595SK	F15m	13.4	*2.5	-	4	-	灰陶,18c末	■
513	灰陶蓋	箱	595SK (変化物)	F15m	5.5	1.2	下限埋	12	-	灰陶	■
514	灰陶小壺	箱	595SK	F15m	7.0	1.8	3.8	7	11	灰陶,19c初~中葉	■
515	灰陶	箱	595SK	F15m	5.1	4.0	3.5	8	12	灰陶,脚付	■
516	灰陶壺	箱	595SK	F15i	4.9	2.2	2.8	12	12	灰陶	■
517	二重腹壺	箱	595SK	F15i	23.0	8.0	10.0	2	10	透明釉,花見,込込の目輪刻ぎ,妙目模	把
(518)	灰陶	箱	595SK	F15i	12.6	2.6	7.2	3	12	灰陶,埋入墨文,18c前半	■
519	灰陶水注	箱	595SK	F15i	-	*7.2	8.1	-	12	灰陶,17c後半	■
520	木鉢	箱	595SK	F15i	-	*5.8	-	3	-	鉢類(鉢),塗付文	■
521	大深巻	土	595SK	F15i	-	*9.8	19.0	-	4	-	■
522	陶瓶	箱	595SK	F16k	81.7	高5.8	縦3.2~	-	-	塗辞,81.1g	■
523	陶瓶	箱	595SK	F15m	-	高5.1	縦3.5	-	-	焼辞,表裏摩崖,*42.4g	■
524	鏡	箱	595SK	F15m	-	*13.9	-	3	-	古物	常
525	陶器遺物	土	595SK	F15m	6.5	1.6	最高	4	-	墨田類	■
526	陶器蓋	土	595SK (変化物)	F15i	4.5	6.8	3.0	1	4	身O頭	■
527	灰陶	箱	595SK	F15i	-	*1.8	*3.2	3	-	磁器蓋,上鍍付,塗	■
528	灰陶	箱	595SK	F15i	5.0	2.1	1.9	6	12	土製,彩色片口	■
529	灰陶	箱	595SK	F15i	高6.7	-	-	-	-	灰陶,陶器,墨(頭片)	■
530	白陶丸壺	箱	110SK	F15i	5.7	4.4	3.4	10	12	塗竹	■
531	陶罐口	箱	110SK	F15i	7.4	5.7	4.8	1	9	塗竹,若松文	■
532	紅豆	箱	110SK	F15i	5.2	1.2	1.5	3	12	-	■
533	白磁小杯	箱	110SK	F15i	7.1	5.3	4.2	3	8	白磁,球型打	■
534	水滴	箱	110SK	F15i	-	2.3	-	-	-	塗竹,方形	■
535	上越村湯舟	箱	110SK	F15i	6.9	*6.1	-	5	-	灰陶,上越村(赤)・塗文,輪形	復
536	陶形透香	箱	110SK	F15i	8.1	*5.3	-	5	-	灰陶,鉢,18c末~19c初	■
537	上越村小壺	箱	110SK	F15i	6.7	3.8	2.2	6	12	灰陶,上越村(赤),18c後半	■
538	灰陶壺	箱	110SK	F15t	12.0	7.2	5.0	11	12	灰陶,高台金合,焼成時火くくれあり,スス付	■
539	灰陶丸壺	箱	110SK	F15t	-	*7.8	7.0	-	8	灰陶丸壺,18c前半	■
540	灰陶丸壺	箱	110SK	F15t	-	*3.3	7.0	-	12	灰陶,高台内墨書,口口か,18c前半	■
541	鶴茶碗	箱	110SK	F15t	12.0	6.3	4.0	9	12	灰陶,鶴紋被文	復
542	小杉碗	箱	110SK	F15t	11.1	6.2	4.8	9	10	灰陶,鶴紋被文,18c第3四半期	復
543	長石輪瓶	箱	110SK	F15t	9.9	6.2	4.3	12	12	長石輪,輪,18c後半	■
544	灰陶蓋	箱	110SK	F15t	5.2	1.1	-	12	-	灰陶	復
545	灰陶	箱	110SK	F15t	10.4	2.4	1.8	10	-	灰陶,19c初か	第7
546	灰陶蓋	箱	110SK	F15t	7.2	3.3	2.8	12	-	灰陶	■
547	灰陶瓶	箱	110SK	F15t	10.0	*2.0	-	3	-	灰陶,鉢	■
548	片口か	箱	110SK	F15t	-	*5.2	8.4	-	12	灰陶(内外面施釉),底直	■
549	手あぶし	箱	110SK	F15t	-	*7.8	7.0	-	12	灰陶,19c初	■
550	鏡	五重	110SK	F15t	-	*9.1	-	3	-	-	■
551	梅丈皿	箱	110SK-169SK-	F15t	11.6	4.5	4.1	5	7	灰陶,鉢物,須直,18c第3四半期	■
552	打明受皿	箱	110SK	F15t	10.4	2.5	4.5	11	12	鉢物	■
553	打明受皿	箱	110SK	F15t	11.8	2.1	6.3	3	2	鉢物	■
554	唐物皿	箱	110SK	F15t	11.5	2.7	6.0	12	12	灰陶,唐物文	■
555	唐物皿	箱	110SK	F15t	11.8	2.6	5.4	12	12	灰陶,唐物文	■
556	土瓶(火入れ に転用)	箱	110SK	F15t	10.4	11.7	9.6	12	9	灰陶,鉢物管文,口縁に敲打直,19c初	■
557	水懸器	箱	110SK	F15t	-	6.0	14.8	-	3	鉢物,三足付	■
558	半圓	箱	110SK	F15t	31.4	*6.8	-	1	-	鉢物	■

土器・陶器 (10)

E-no.	番号	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	墓地
559	付	陶	1109K-047SD	#1F1st	13.3	6.0	6.0	8	12	繩部,鉄紐環・朝頭,輪高台,19c前半	通
560	セリ	陶	1109K	#1F1st	-	*12.8	6.0	-	12	鉄紐,灰陶,縦分け,18c前半	通
561	継御利	陶	1109K	#1F1st	-	*10.6	-	-	-	鉄紐,19c初	通
562	土師器皿	土	1109K	#1F1st	6.6	1.5	3.3	12	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
563	土師器皿	土	1109K	#1F1st	8.3	1.7	4.5	7	8	ロクロ,褐色	通
564	土師器皿	土	1109K	#1F1st	10.3	2.3	4.8	10	12	ロクロ,褐色	通
565	土師器皿	土	1109K	#1F1st	10.2	1.9	5.4	5	4	ロクロ,褐色	通
566	燒塗壺	土	1109K	#1F1st	7.3	1.9	-	12	-	蓋白質,黒色付蓋物	通?
567	燒塗壺	土	1109K	#1F1st	6.1	7.7	5.4	12	12	身白質,「朱漆朱伊錦」印	通
568	燒塗壺	土	1109K	#1F1st	5.4	6.0	2.9	12	12	身白質	通
569	燒塗壺	土	1109K	#1F1st	6.4	7.3	5.8	6	7	身白質,「朱漆朱伊錦」印	通
570	灰陶小瓶	陶	1109K	#1F1st	2.4	6.5	2.4	9	12	灰陶,神奈良	通
571	灰陶小瓶	陶	1109K	#1F1st	-	*4.9	2.5	-	12	灰陶,神奈良	通
572	壺	陶	1109K	#1F1st	4.4	2.4	2.7	12	12	灰陶	通
573	壺	陶	1109K	#1F1st	4.7	2.2	2.0	12	12	灰陶	通
574	壺	陶	1109K	#1F1st	32.0	8.9	*16.8	6	7	金子分類粘合器,口器	通
575	高釜	土	1109K	#1F1st	13.2	14.1	12.5	12	11	鉄木分類羽衣瓶等4個(決闘色)	通
576	高釜	土	1109K	#1F1st	15.4	*4.1	-	8	-	鉄木分類羽衣瓶等4個	通
577	高釜	土	1109K	#1F1st	-	*8.5	16.0	-	4	鉄木分類羽衣瓶等4個	通
578	玩真	土	1109K	#1F1st	幅5.5	高3.4	高4.7	-	-	土製,刮削型手斧,茶室(屋根)	通
579	玩真	土	1109K	#1F1st	3.5	1.3	-	12	-	土製,刮削型手斧U,蓋	通
580	玩真	土	1109K	#1F1st	幅4.1	幅3.2	-	-	-	土製,刮削型手斧	通
581	玩真	土	1109K	#1F1st	4.2	3.7	4.3	4	12	土製,刮削型手斧	通
582	玩真	土	1109K	#1F1st	高4.1	-	-	-	-	土製,手握り犬	通
583	玩真	土	1109K	#1F1st	高4.5	-	-	-	-	土製,手握り犬	通
584	玩真	土	1109K	#1F1st	高6.2	幅4.4	-	-	-	土製,手握り犬	通
585	玩真	土	1109K	#1F1st	高6.1	幅5.3	高7.9	-	-	鐵鋸,上鍛付(赤黒,緑),製作U,路	通
586	尾足蒸鍋	陶	085SK	#1F1st	13.0	7.5	6.1	10	12	鉄鋸,19c初	通
587	敷陶碗	陶	085SK	#1F1st	-	*3.6	5.7	-	5	鉄鋸,高台摩擦	通
588	卵形蒸鍋	陶	085SK	#1F1st	-	*6.2	5.9	-	5	鉄,灰陶棒分け,土器座面	通?
589	灰陶丸鍋	陶	085SK	#1F1st	7.7	4.6	2.4	1	12	灰陶	通
590	染付丸鍋	陶	085SK	#1F1st	-	*2.6	4.5	-	5	染付,繩文	通
591	新井淀窯	陶	085SK	#1F1st	-	*1.4	5.0	-	3	灰陶,17c後半	通
592	輪壳瓦	陶	085SK-716SK	#1F1st	13.2	3.2	6.9	12	12	灰陶,輪壳瓦,頂面,高台内「中」割書,17c第3四半期	通
593	輪壳瓦	陶	085SK	#1F1st	13.3	3.8	6.5	12	12	灰陶,スズ付輪,17c後半	通
594	輪壳瓦	陶	085SK	#1F1st	13.2	2.9	7.2	4	12	17c後半	通
595	輪壳丸鍋	陶	085SK	#1F1st	11.6	4.2	5.2	2	4	鉄鋸,19c初(混入)	通
596	灯明皿	陶	085SK	#1F1st	10.8	2.6	6.0	11	12	灰陶,底面凹切クズリ,19c初(混入)	通
597	香炉	陶	085SK	#1F1st	-	*4.3	8.4	3	1	鉄鋸(外面),灰陶(内面),鴻櫻形,三足付,17c後半	通
598	台付鉢	陶	085SK	#1F1st	-	*4.6	6.8	-	9	赤錆斑,高麗,17世紀初	通
599	鐵鋸	陶	085SK	#1F1st	-	*3.1	4.0	-	6	鐵鋸,高台内「口日」印,朝日模様	宇治?
600	鐵鋸	陶	085SK	#1F1st	-	*5.8	-	1	-	鉄鋸,17c後半	通
601	鐵鋸	陶	085SK	#1F1st	-	*9.0	-	1	-	鉄鋸,18c末(混入)	通
602	鐵鋸鉢	陶	085SK	#1F1st	27.0	*5.0	-	2	-	鉄鋸,鉄錆,鉄錆剥離し抜け,17c後半	通
603	米甕	土	085SK-067SK	#1F1st	13.0	18.4	16.0	12	12	鉄木分類羽衣瓶等4個	通
604	土師器皿	土	085SK	#1F1st	7.4	2.0	3.5	10	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
605	土師器皿	土	085SK	#1F1st	7.4	1.9	4.1	11	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
606	土師器皿	土	085SK	#1F1st	7.5	1.7	4.0	12	12	ロクロ,褐色	通
607	土師器皿	土	085SK	#1F1st	7.6	1.6	4.2	12	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
608	土師器皿	土	085SK	#1F1st	7.8	2.1	4.0	12	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
609	土師器皿	土	085SK	#1F1st	9.6	2.3	5.6	7	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
610	染付丸鍋	陶	166SK	#1F1st	10.8	7.2	4.5	2	12	染付	通
611	染付丸鍋	陶	166SK	#1F1st	10.5	7.5	4.0	1	12	染付	通
612	燒塗壺	陶	166SK	#1F1st	14.7	4.1	6.4	3	6	厚い白画面,黄入多い,18c半ば~後半	通
613	小杯	陶	166SK-125SK	#1F1st	6.9	4.3	2.9	7	12	染付,墨画,隨形	通
614	染付中盤	陶	166SK	#1F1st	21.7	*3.0	-	4	-	染付	通
615	灰陶壺	陶	166SK	#1F1st	3.8	1.2	-	12	-	灰陶,17c第2四半期	通
616	鐵鋸	陶	166SK	#1F1st	81.7	高6.2	幅3.6	-	-	鐵鋸,表裏墨,69.4g	通
617	鐵鋸	陶	166SK	#1F1st	81.8	高6.2	幅4.1	-	-	鐵鋸,表裏墨,*56.6g	通
618	燒塗壺	土	166SK	#1F1st	4.9	6.9	3.6	6	12	身A型,内面黒色	通
619	土師器皿	土	166SK	#1F1st	9.4	1.9	4.2	11	10	ロクロ,淡褐色,スズ付蓋	通
620	土師器皿	土	166SK	#1F1st	11.0	1.4	6.6	5	7	ロクロ,淡褐色,中央に穿孔,スズ付蓋	通
621	土師器皿	土	166SK	#1F1st	12.2	2.2	5.5	10	12	ロクロ,褐色,スズ付蓋	通
622	土師器皿	土	166SK	#1F1st	13.2	3.0	8.0	1	9	ロクロ,淡褐色,共込中央ユビナデ,底部に板状,キズ	通
623	変形圓盤	陶	124SK	#1F1st	12.7	4.8	4.2	5	12	灰陶,高台内に印	通
624	染付丸鍋	陶	166SK	#1F1st	9.8	5.3	3.9	2	3	染付	通
625	鉄鋸	陶	166SK	#1F1st	12.4	2.5	7.6	3	5	反鉄鋸,鉄鋸,17世紀の半	通

土器・陶磁器 (11)

E-no.	器種	種別	通串	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	片厚率 D/12	残存率 H/12	備考	墓地	
626	土師器皿	土	124SK	I#15s	11.4	2.3	5.4	11	12	口クロ.褐色.口縁周囲スズ付		
627	土師器皿	土	124SK	I#15s	10.8	2.5	5.6	11	12	口クロ.褐色.内面全体に施灰付蓋物		
628	土師器皿	土	124SK	I#15s	11.7	2.2	6.2	12	12	口クロ.褐色		
629	土師器皿	土	334SK	I#15s	13.9	3.2	7.0	11	12	口クロ.褐色.底部に施灰スズ付		
630	春伊か	陶	165SK	I#15s	-	*2.0	7.6	-	5	灰釉.鉢形.高台内に墨書き.19c初	原	
631	半胴	陶	082SK	I#15s	*22.0	18.6	*15.3	5	3	鉢形.(特徴).19c	原	
632	縄目向付	陶	716SK	I#15s	-	*6.1	-	-	17c後1四葉期	原		
633	土師器皿	土	716SK	I#15s	10.5	2.6	5.8	8	12	口クロ.褐色.スズ付	原	
634	灰陶瓶	陶	168SK	I#15r	8.6	3.6	-	4	-	灰釉.鉢形短脚.18c	原	
635	灰陶丸皿	陶	111SK	I#15r	-	*2.8	4.0	-	12	灰釉.鉢形.高台内墨書き.18c末	原	
636	有耳甕	陶	169SK	I#15t	5.0	7.7	4.6	9	6	鉢形.19c初	原	
637	陶壺香港	陶	16.8SK	I#15t	7.4	1.7	-	10	10	蓋B類	原	
638	竹筒型	陶	16.8SK	I#15t	12.0	2.7	5.6	2	5	鉢形	原	
639	榎か	陶	194SK	I#16g;17s	-	*3.4	-	1	-	榎付.内外面に施文.大型の榎か.19c初~中葉		
640	土瓶	陶	174G	I#16r	7.8	*8.5	-	1	-	灰釉.鉢形.19c初か	原	
641	染付甕	陶	025SK	I#16s	5.0	1.1	-	5	-	染付.人文字?	把	
642	加工円板	陶	025SK	I#16s	高2.8	幅2.3	厚0.8	-	-	鉢形板片.用脚研磨	原	
643	染付丸皿	陶	047SK	I#15t	10.0	4.8	3.8	1	6	染付.榎花らし	把	
644	裏物身	陶	047SD	I#04SK	I#15t	17.6	*9.5	-	3	-	灰釉.18c末	原
645	染付瓶	陶	047	I#15t	-	*10.7	8.9	-	6	染付	把	
646	灰陶丸皿	陶	070SK	I#15t	11.6	6.6	5.1	6	12	灰陶.鉢形.18c前半	原	
647	小鉢小豆伊	瓦窯	158SK	I#15q	21.5	*14.0	-	3	-	燒成はやや軟質.表面に細かな凹凸		
648	染付丸皿	陶	榎模	I#15t	8.3	4.2	2.3	3	12	染付	把	
649	染付丸皿	陶	株模2・三葉レリフ	I#15t	9.2	4.9	3.6	9	1	染付	把	
650	染付丸皿	陶	榎模	I#15t	-	*4.9	5.2	-	3	染付.花鳥文	把	
651	正葉型	陶	株模トレンチ	I#15s	11.0	6.5	6.3	11	16	染付.山茶文	原	
652	染付皿	陶	株模トレンチ	I#15s	-	-	-	-	-	染付	把?	
653	上絞付皿	陶	株模・榎模	I#15s	10.5	5.3	3.0	12	12	灰釉.上絞付(赤.青.緑).18c末	原	
654	上絞付碗	陶	株模トレンチ	I#15s	-	*4.5	2.9	-	12	灰釉.上絞付(緑).19c初	原	
655	乳頭器	陶	I#15s	-	*3.0	4.8	-	-	12	灰釉.19c初~中葉	原	
656	上絞付小瓶	陶	株模トレンチ	I#15s	-	*4.8	2.4	-	12	灰釉.上絞付(赤.緑).神仙鳥.19c初か	原	
657	灰陶風呂	陶	株模(北島屋)	I#15t	12.6	4.4	5.7	2	5	灰釉.眞理院.高台内「露」印	把	
658	修茶碗	陶	株模	I#15t	*12.5	6.3	4.6	3	6	灰釉.鉢形.鉢文	信	
659	乙羅茶碗	陶	株模	I#15s	10.4	*6.4	-	3	-	鉢形.19c初	原	
660	腰錐茶碗	陶	北島屋	I#15s	10.3	5.9	4.2	8	12	灰釉.鉢形.18c後半	原	
661	水滴	陶	株模	I#15s	-	3.5	6.3	-	1	鉢形.型打	原	
662	志野小覆	陶	株模トレンチ	I#15s	-	*3.5	5.2	-	4	志野焼.17世紀前半か	原	
663	鉢形皿	陶	株模トレンチ	I#15s	-	11.7	2.5	8	12	灰釉.鉢形	原	
664	梅文皿	陶	株模トレンチ	I#15s	-	*3.1	4.0	11	灰釉.鉢形.眞理院.18c末	原		
665	束腰次か	陶	株模トレンチ	I#15s	-	3.7	-	-	-	灰釉.瓶の小鉢で構成.18c末	原	
666	小杯	陶	I#14.15s	-	3.5	4.2	5	7	長石斑.底部回転ケヌリ	原		
667	舟形具	陶	株模	I#15s	8.0	3.5	5.4	12	灰釉.使用痕あり.18c中葉	原		
668	束腰	陶	株模	I#15s	4.6	2.2	2.4	7	12	灰釉	原	
669	束腰	陶	株模	I#15t	4.0	2.3	2.1	3	12	灰釉	原	
670	束腰	陶	株模	I#15t	4.0	2.1	2.0	12	12	灰釉	原	
671	灰陶瓶	陶	北島屋トレンチ	I#15r	下削邊 11.0	3.0	13.9	8	-	灰釉	原	
672	土瓶蓋	陶	北島屋	I#14.15s	6.8	1.5	-	6	-	灰釉	信?	
673	灰陶瓶	陶	株模	I#15s	6.0	1.5	-	11	-	灰釉	原	
674	志野丸皿	陶	株模	I#15s	8.6	2.0	5.2	5	12	志野.削込み高台.17世紀鶴芋	原	
675	灯明受皿	陶	株模	I#15t	10.8	2.3	5.9	9	12	灰釉.鉢形.19c初	原	
676	灯明受皿	陶	株模トレンチ	I#15t	11.2	1.7	5.5	7	6	灰釉.眞理院.19c初	原	
677	口片	陶	榎模	I#15t	17.4	9.7	7.1	5	12	灰釉.継輪ちらし.18c末	原	
678	側巻形容	陶	北島屋トレンチ	I#15s	10.2	*6.0	-	1	-	鉢形		
679	側巻形容	陶	株模	I#15s	12.6	7.2	8.3	3	5	灰釉.鉢形.眞理院.18c	原	
680	上瓶	陶	株模	I#15t	9.9	14.0	5.5	11	-	鉢形(特徴).眞理院(内面).19c初	原	
681	束腰トレンチ	陶	I#15s	3.1	19.0	6.2	12	12	灰釉.束腰.18c後半.18c初	原		
682	伝承御利	陶	北島屋志野土瓶	I#15s	3.9	*4.7	-	12	-	灰釉.見世利.眞理院	原	
683	手あぶり	陶	株模トレンチ	I#15s	10.4	-	12.4	4	3	三足付	原	
684	内瓦縦	陶	株模	I#15s	27.8	11.0	*14	8	7	鈴木力耕内瓦縦6盤	原	
685	五瓣	陶	株模トレンチ	I#15s	-	-	-	-	-	白色陶.断面方形	原	
686	傳燈香	陶	北島屋トレンチ	I#15s	6.3	10.1	-	8	12	舟形	原	
687	傳燈香	陶	I#22SK	I#15s	5.9	7.2	5.4	12	12	舟形.「鬼火伊織」刻印.内面黒色付	原	
688	土師器皿	陶	株模	I#15s	9.9	2.4	5.3	6	9	口クロ.褐色系.スズ付		
689	土師器皿	陶	株模	I#15t	8.4	2.8	4.9	5	5	口クロ.褐色系		
690	土師器皿	陶	株模	I#15t	7.2	1.4	3.9	12	12	口クロ.褐色	信?	
691	祝具	陶	東洋トレンチ	I#15t	3.8	*3.5	-	12	12	土製.祝具.製作U.土瓶		
692	祝具	陶	東洋トレンチ	I#15t	4.8	1.7	1.7	9	12	土製.祝具.紅皿		
693	祝具	陶	北島屋	I#14.15s	4.4	3.5	2.4	5	5	土製.祝具.手洗U.勺か		
694	祝具	陶	東洋トレンチ	I#15t	高4.0	-	-	-	-	土製.型盛り.鳥		
695	竹芯	陶	株模	I#15s	幅3.1	4.2	高4.0	-	-	青銅.人形(頭部欠損)	把	
696	祝具	陶	北島屋トレンチ	-	-	-	-	-	-	土製.型伸し.齐子面(板若)		

土器・陶器 (12)

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 □/12	残存率 △/12	備考	墓地
697	碗	土	北朝時代	I15+	高3.5	幅4.5	-	-	-	土製,表手あり,手捻り跡	
698	碗	土	東晉時代	I15+	高3.1	幅4.4	-	-	-	土製,表手なし,手捻り跡	
699	碗	土	北朝時代	I15+	高3.3	幅4.4	-	-	-	陶製,鉢形,表手なし,手捻り跡	
700	碗	土	北朝時代	I15+	高2.5	幅4.0	-	-	-	土製,型押し,柱	
701	梁村丸瓶	陶	Q27SD - 077SK	I18q	10.3	7.8	5.4	11	12	灰陶,表手,唐草文	梁
702	小判瓶	陶	Q27SD - 077SK	I18r	■7.0	1.6	-	5	6	印押,表手,唐草文	梁
703	無妻深口瓶	陶	602SD (高灰色土)	I18s	-	*3.2	5.6	-	3	染付	肥
704	腰鉢	陶	602SD	I18t	-	*4.0	-	1	-	灰陶,19cm初	肥
705	灰陶丸皿	陶	602SD	I18t	-	*1.8	4.3	-	4	灰陶	肥?
706	灰陶小杯	陶	602SD	I18t	6.0	3.4	2.1	5	12	灰陶	肥
707	灰陶深盤	陶	602SD (褐色底上)	I18r,s	-	*2.3	7.4	-	3	灰陶	肥
708	手あぶし	陶	602SD (高灰色土)	I18s	-	*4.0	-	1	-	灰陶,19cm初	肥
709	盤台	陶	トレンチ	I18t	-	*12.2	7.2	-	12	灰陶,19cm初~中層	肥
710	漆付丸瓶	陶	553SK	I15,16p	11.2	*4.1	-	2	-	梁付,no.214瓶蓋と文様類似	肥
711	打目瓶	陶	118SK	I17p,q	21.0	*3.1	*12.8	3	2	梁付	中國
712	蓋	陶	瓶蓋 (防空壕石灰ガラ)	I16n	9.8	11.7	-	4	-	無鉢,明褐色	
713	角瓶	陶	瓶蓋 (防空壕石灰ガラ)	I16n	-	*4.7	7.4	-	3	無鉢,明褐色	
714	鉢	陶	046SD	I17p	高14.9	2.3	幅10.7	-	-	無鉢,19cm初	肥
715	灰陶小瓶	陶	腰鉢 (O48SD)	I17t	2.1	4.7	2.5	12	12	灰陶,神具,19cm初	肥
716	漆付丸瓶	陶	腰鉢 (O48SD)	I17t	-	*1.9	4.2	-	8	梁付,ガラス模様,盒台内朱書き	肥
717	小瓶	土	048SD	I16q	6.0	1.7	5.0	5	12	身筒,「丁」,附印	
718	火鉢	陶	059SD	I16o	20.0	9.6	16.2	3	4	灰陶,表手丸	肥
719	平瓦	瓦	389SK	I15t	瓦30.5	幅8.5	高6.6	-	-	本瓦屋,擦し瓦	
720	丸瓦	瓦	389SK	I15t	瓦35.5	幅12.5~17.5	高6.0	-	-	本瓦屋,擦し瓦	
721	軒丸瓦	瓦	389SK	I15t	瓦34.5	16.7	幅17.2	-	-	本瓦屋,左巻三巴紋,唐文	
722	軒丸瓦	瓦	389SK	I15t	-	-	幅18.2	-	-	本瓦屋,左巻三巴紋,12字文	
723	丸瓦	瓦	389SK	I15t	瓦33.4	幅17.6	高6.0	-	-	本瓦屋	
724	軒桝瓦	瓦	389SK (下巻)	I15t	軒平厚4.6	丸厚8.6	-	-	-	左巻三巴紋,12字文	
725	軒桝瓦	瓦	389SK (下巻)	I15t	-	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
726	楕円瓦	瓦	381SK第2巻	I16n	-	-	丸厚12.6	-	-	本瓦屋,左巻三巴紋	
727	軒桝瓦	瓦	381SK	I16n	軒平厚4.3	丸厚9.7	-	-	-	左巻三巴紋,15字文	
728	軒桝瓦	瓦	381SK	I16n	軒平厚4.8	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
729	軒桝瓦	瓦	381SK (4~7巻)	I16n	軒平厚4.9	-	-	-	-	唐草文	
730	軒桝瓦	瓦	381SK	I16n	軒平厚4.5	丸厚8.8	-	-	-	三子葉紋,唐草文 (通化)	
731	軒桝瓦	瓦	381SK	I16n	軒平厚4.2	丸厚8.8	-	-	-	左巻三巴紋	
732	軒桝瓦	瓦	380SK	I15m	軒平厚4.6	丸厚8.9	-	-	-	左巻三巴紋,12字文,唐草文	
733	軒桝瓦	瓦	492SK	I15m	軒平厚4.5	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
734	軒桝瓦	瓦	492SK	I15m	軒平厚4.1	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
735	軒桝瓦	瓦	492SK	I15m	-	丸厚8.7	-	-	-	左巻三巴紋,12字文	
736	軒桝瓦	瓦	413SK	I16k	軒平厚4.8	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
737	軒桝瓦	瓦	413SK	I16k	軒平厚5.1	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
738	軒桝瓦	瓦	413SK	I16k	軒平厚5.0	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
739	軒桝瓦	瓦	413SK	I16k	軒平厚4.9	-	-	-	-	唐草文 (通化),○印「作」印あり	
740	軒桝瓦	瓦	413SK	I16k	軒平厚5.0	-	-	-	-	三子葉紋,唐草文	
741	飾り瓦	瓦	413SK	I16k	厚2.2	-	-	-	-	反りなし,茅丸あり	
742	飾り瓦	瓦	413SK	I16k	厚2.4	-	-	-	-	反りなし,茅丸あり	
743	飾り瓦	瓦	413SK	I16k	厚1.9	-	-	-	-	反りなし,断面クランク	
744	飾り瓦	瓦	413SK	I16k	厚2.0	-	-	-	-	反りなし,断面クランク	
745	飾り瓦	瓦	413SK	I16k	厚1.6	-	-	-	-	反りなし,○印「一」印	
746	平瓦	瓦	413SK	I16k	厚1.7	-	-	-	-	小口切頭,○印「一」印	
747	平瓦	瓦	413SK	I16k	厚2.1	-	-	-	-	小口切頭,○印「作」印	
748	平瓦	瓦	413SK	I16k	厚1.8	-	-	-	-	小口切頭,○印「作」印	
749	平瓦	瓦	413SK	I16k	厚1.8	-	-	-	-	小口切頭,○印「作」印	
750	通脊	磚	088SD	I16os	16.4	7.0	3.8	3	12	通脊瓦等,「三」,19cm~20cm前頭	
751	通脊	磚	088SD	I16os	7.0	7.1	4.6	6	5	上部「通脊」,19cm~20cm前頭	肥
752	磚	磚	088SD	I16os	11.2	5.6	4.2	7	12	橫括縫写進通脊,○印「作」印	肥

土器・陶器類 (13)

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
753 小瓶	罐	罐	048SD	#16o.n	-	*3.9	-	-	-	銅版面写合に「工三」,20c前期	
754 烟手付罐	罐	罐	048SD	#16o.n	10.8	5.7	5.4	10	12	銅版面写合に「工三」,20c前期	
755 大型罐	罐	罐	048SD	#16o.n	11.4	*8.3	-	3	-	銅版面写合に「工三」,20c前期	
756 集形器皿	無	048SD	#16o.o	20.1	20.9	18.8	10	12	衛生容器,19c後期~20c中期		
757 瓶	罐	罐	048SD	#17t	11.3	5.9	4.4	6	12	銅版面写合に「工三」,銅版面写合に「工三」,20c前期	
758 瓶	罐	罐	048SD	#17t	13.6	6.9	8.0	6	8	銅版面写合に「工三」,20c前期	
759 瓶	罐	罐	048SD	#17t	15.7	6.9	7.4	4	7	20c前中期	
760 盆	罐	罐	048SD	#17t	18.0	2.9	11.0	12	12	中央に銅版面写合に「工三」,20c前期	
761 盆	罐	罐	048SD	#17t	18.6	2.9	10.8	9	12	中央に銅版面写合に「工三」,底面に「東鏡」,20c前期	
762 土瓶蓋	無	048SD,焼出	#17t		10.4	3.2	-	9	-	裏面「大山」印,大正後,19c後期	大山
763 漆舟	漆	漆	048SD	#17t	7.0	7.5	4.4	12	12	朱上「鉢本」(丸に)番,19c後期~20c前期	
764 土瓶	無	048SD	#17p		8.3	11.6	9.6	9	10	綠色地,周縁に「イチヂン」,19c後期~20c中期	
765 大型瓶	罐	罐	048SD	#16n	11.3	9.4	6.7	2	5	銅版面写合と複数箇所,20c初期~中期	
766 銀瓶	罐	048SD・138SD	#16p.o		11.8	6.1	4.8	6	12	銅版面写合と複数箇所,19c後期~20c前中期	
767 手付片罐	罐	罐	048SD	#16.17q	10.5	5.5	5.3	10	12	銅版面写合と複数箇所,20c初期~中期	
768 瓶	罐	罐	048SD・118SK	#17o.s	11.0	5.5	4.2	12	10	20c前中期から	
769 瓶	罐	罐	048SD	#16r	11.2	5.7	4.3	4	5	クロム銀・裏面銀,底部にスタンプ「RC NORITAKE」,19c後期~中期	ノリタケ
770 集形器皿	罐	罐	048SD	#17p	7.8	11.6	9.8	3	5	19c後期~20c中期	
771 漆舟	漆	漆	048SD	#16o.n	6.6	7.1	3.8	6	12	上部に「落保」(「工三」,19c末~20c前期	
772 集形器皿	罐	048SD	#16r		19.2	7.8	5.0	11	12	衛生容器蓋,19c後期~20c中期	
773 集形器皿	罐	048SD	#16r		17.9	17.8	17.5	4	12	衛生容器蓋,19c後期~20c中期	
774 中皿	盤	048SD・118SK	#1617q		15.4	1.6	8.3	7	11	染付,高台内に角縁,19c後期~20c前中期	第7
775 瓶	罐	049SD	#16o		12.6	5.6	6.0	5	2	クロム銀・裏面銀,20c初期~中期	
776 瓶	罐	049SD	#16o		14.3	6.0	5.2	11	12	クロム銀・裏面銀,スタンプ「RC NORITAKE 呂三九」,20c初期~中期	ノリタケ
777 瓶	罐	罐	049SD	#15.15o	10.7	4.7	4.4	4	9	版金地,コバルト青,19c後期から	第7
778 漆舟	漆	漆	049SD	#15.15o	6.0	7.0	3.6	4	12	上部に「日製」,19c末~20c中期	
779 中皿	盤	049SD,焼出	#15.15o		14.2	2.3	7.6	6	12	模様,19c後期~20c初期	
780 中皿	盤	049SD	#15.15o		13.2	2.9	5.8	4	6	手描,19c後期から	
781 瓶	罐	047SK	#15t		11.8	5.1	3.8	2	12	板金地,スタンプ文?;19c後期~20c前中期から	
782 斧面か	罐	047SK	#15t		14.8	3.3	-	7	-	「名前」,鉢	
783 漆舟	漆	漆	387SK	#15t	7.6	6.0	3.8	3	8	染付,手描き,19c後期から	漆
784 漆舟	漆	漆	387SK	#15t	長20.7	2.7	短20.2	8	4	染付,型付成形,19c後期から	日本漆
785 漆舟	漆	漆	021SD	#16t	6.8	6.8	4.4	12	12	クロム銀・裏面銀,正面「日製」,20c初期~中期	日本漆
786 瓶	罐	001SD	#18m	-	-	-	-	-	-	20c初期~中期	ノリタケ
787 染付丸瓶	罐	072SK	#15q		10.3	4.6	4.2	10	12	板茶葉形,側面印刷,高台内に「梅花造」,19c後期~20c初期	
788 上給付鉢	盤	023.025SD	#16s		15.4	7.3	6.4	1	8	上給付文様,○内「TS」,19c後期~20c中期	
789 便利か	無	273SK	#15q		1.9	13.3	5.5	12	12	灰地,19c後期~20c中期	
790 便利か	無	655SK	#17o		2.3	*8.2	-	12	-	灰地,19c後期~20c中期	
791 瓶	土	030SK,埋込	#15s・15r.s		23.0	15.8	17.2	4	5	透明地(内底),スヌッペ裏,19c後期~20c中期	
792 萩生葉か	無	381SK	#16n		20.4	6.5	-	8	-	黒地,模様,19c後期~20c中期	漆
793 瓶	土	340SK	#16r		7.1	7.4	4.6	11	12	上部に「鉢本」(丸に)番,19c後期	
794 小瓶	土	340SK,深褐色土	#16n		8.1	4.5	3.8	8	12	銅版面写合,牡丹文(19c後期~20c中期)	
795 漆舟	漆	340SK	#17o		7.2	7.1	4.6	7	12	上給付「工三」,19c後期~20c中期	
796 漆舟蓋	漆	340SK,深褐色土	#16n		6.0	2.2	-	11	-	染付,手描き,19c後期~20c中期	
797 漆舟	漆	340SK,深褐色土	#16n		7.3	7.2	3.8	12	12	染付,手描き,19c後期~20c中期	
798 井	土	340SK	#15n		14.9	6.6	5.9	10	12	手描,鉢・コバルト,19c後期~20c中期	
799 井	土	340SK	#15n		14.6	5.5	6.2	6	12	手描,鉢・コバルト,19c後期~20c中期	
800 大型器皿	罐	342SK	#17r		13.6	*1.8	-	3	-	20c初期~中期	
801 瓶	罐	340SK,深褐色土	#16n		11.3	5.6	4.3	6	7	銅版面写合徹底,高台内「硬币」路,20c初期~中期	日本銀質 銀器
802 茶皿	漆	340SK,深褐色土	#16n		18.4	4.6	13.0	7	3	19c後期~20c中期	
803 片蓋	漆	比奈製茶葉地	#16n		13.7	3.9	-	8	-	コバルト青色二重圓錐,20c初期~中期	
804 井	土	340SK,深褐色土	#16n		15.5	7.3	5.7	6	10	コバルト青色二重圓錐,20c初期~中期	松村商店
805 井蓋	土	340SK,深褐色土	#16n		15.1	4.8	-	7	8	クロム銀・裏面銀,20c初期~中期	
806 井	土	340SK,深褐色土	#16n		16.8	7.9	6.4	4	7	クロム銀・裏面銀,高台内「萬」,20c初期~中期	
807 小杯	土	340SK,深褐色土	#16n		8.4	5.7	3.4	8	12	手描地模様,高台内スタンプ「味724」,20c中期	漆
808 井	土	340SK,深褐色土	#16n		3.0	12.0	4.6	12	12	底面シボ内「味765」,20c中期	漆
809 井	土	高岡製茶葉地			15.4	7.1	6.8	6	12	手描,鉢・コバルト,見立「萬」,19c後期~20c中期	
810 井	土	喜士屋制			14.8	7.1	6.5	11	12	手描,コバルト,19c後期~20c中期	
811 漆舟	漆	比奈製茶葉地			7.8	5.3	3.0	11	8	高台内「萬」,20c中期	
812 井蓋	土	喜士屋制			13.6	3.3	-	5	-	手描,コバルト,19c後期~20c中期	

土器・陶磁器 (14)

E-no.	名様	種別	造構	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	产地	
813	片	縦	赤土表面		15.6	6.2	5.8	1	12	手縫き、コバルト、19c後期～20c前期 灰釉、内面に朱？付、外腹上部「朝日」、19c後期		
814	酒杯	縦	1115K	#F15r	7.0	2.7	3.0	2	6			
815	酒杯	縦	神田	#F16s	7.7	3.1	3.0	10	12	高台内「曾沼」金乳、19c後期～20c前期		
816	小杯	縦	1365D	#F16g	6.8	4.9	3.9	5	9	高台内「内二作」、19c後期～20c前期		
817	鉢	縦	東京御器赤土表面		21.1	8.0	9.0	9	12	スターブ、海藻、若松文、19c後期～20c前期		
818	中皿	縦	3805K	#F15m	15.0	4.3	6.8	7	12	價絵、19c後期～20c前期		
819	中皿	縦	1965G	#F15g	13.9	3.3	7.6	1	12	價絵、19c後期～20c前期		
820	便器	縦	4045K	#F15l	-	-	-	-	-	手縫糸付、角印、19c後期		
821	便器	縦	4045K、赤土表面	#F15k	-	-	-	-	-	手縫糸付、鏡面形、19c後期		
822	小皿	縦	神田	#F16s	7.8	5.3	4.4	6	5	鉄輪ミクシング高台内○「INJ THU」、19c末～20c前中期 鉄輪ミクシング見込△「INJ THU」、19c末～20c前中期		
823	碗	縦	北壁	#F15q	11.3	5.1	3.7	8	12	鉄輪ミクシング側面△「△」、見込△「INJ THU」、19c末～20c前中期		
824	碗	縦	西壁		12.2	4.5	4.0	4	7	鉄輪ミクシング側面△「△」、見込△「INJ THU」、19c末～20c前中期		
825	碗	縦	北壁	#F15q	-	*4.4	4.6	-	12	鉄輪ミクシング側面○「INJ THU」、19c末～20c前中期		
826	碗	縦	復元(駒守塚石庭 ガラフ)	#F16n	10.8	5.7	4.0	6	7	鉄輪ミクシング側面○「INJ THU」、角印、20c前中期 日本健賀 御飯		
827	小杯	縦	神田		15.16,17n	8.4	5.9	4.7	1	5	鉄輪ミクシング裏面に「硬陶」角印、20c前中期か 日本健賀 御飯	
828	唐香	縦	株山・埋戻	#F16s	7.4	8.2	4.1	6	12	上級台内「丁」、エンボス○「兵」、口縁と高台 に鏡面、19c末～20c前中期		
829	鉢	縦	東京御器赤土表面		16.5	7.1	7.8	4	12	鉄輪ミクシング側面、19c後期～20c中期		
830	大型碗	縦			10.9	9.4	6.2	4	3	鉄輪ミクシング側面、19c後期～20c中期		
831	瓶	縦	復元	#F16r	11.4	5.8	6.5	6	6	クロ口縁、墨書き「NORTAKE」、20c前中期～中 ノリタケ		
832	皿	縦	北東部赤土表面		14.8	3.5	8.0	3	3	鉄輪ミクシング側面付、20c中期～中期		
833	皿	縦	神田	#F15t	18.8	2.8	11.0	4	7	見開口縁、墨書き「名古屋○松村」印、20c 松村陶器		
834	把手付鍋	縦	神田	#F18q	11.0	5.7	5.4	7	10	鉄輪ミクシング「工三」、20c前中期		
835	把手付鍋	縦	神田	#F17s	10.8	5.6	5.5	11	12	鉄輪ミクシング「工三」、20c前中期		
836	把手付鍋	縦	赤土表面		11.4	5.7	5.4	7	12	鉄輪ミクシング「工三」、20c前中期		
837	皿	縦	0495G	#F17t	18.8	3.0	11.3	8	12	20c中期～中期		
838	不規	縦	北壁	#F15g	-	-	-	-	-	19c前中期か		
839	筋茶碗	縦	088-089SD	#F16o	10.9	4.9	4.3	4	12	青、線織文、真田園、遺物15		
840	筋茶碗	縦	089SD	#F16n	11.7	5.0	4.0	9	12	鉄輪、写真図版 遺物15		
841	筋茶碗	縦	0465G	#F17p	11.4	5.2	4.0	6	2	手縫糸、写真図版 遺物15		
842	小杯	縦	0465D	#F16r	9.5	*4.4	-	5	-	灰、鉄輪、写真図版 遺物15		
843	筋茶碗	縦	0465G	#F16r	11.6	5.2	3.9	4	12	鉄輪ミクシング、写真図版 遺物15		
844	筋茶碗	縦	0905G	#F15o	11.5	4.9	-	4	2	ゴム足か		
845	丸瓶	縦	0215G	#F10t	9.1	*6.3	-	1	-	高台内「京萬風」、写真図版 遺物15		
846	筋茶碗	縦	北壁	#F14.15r	11.2	5.5	4.0	2	12	手縫糸、写真図版 遺物15		
847	筋茶碗	縦	新御埋戻		11.0	6.1	4.0	4	12	手縫糸、エンボス「祇40」、写真図版 遺物15	美	
848	ピン型繩子	縦	赤土		14.5		11.3			写真図版 遺物18		
849	/ノップ繩子	縦	赤土		2.8		4.2			写真図版 遺物18		
850	/ノップ繩子	縦	東トレンシ	#F16t	3.7		4.3			写真図版 遺物18		
851	/ノップ繩子	縦	0519K	#F16t	3.7		4.9			写真図版 遺物18		
852	繩子	縦	赤土		5.5		2.6			写真図版 遺物18		
853	繩子	縦	0215G	#F16t	6.6		4.2			写真図版 遺物18		
854	クリート繩子	縦	089SD	#F16p	8.6		4.2			写真図版 遺物18		
855	ピン型繩子	縦	089SD	#F16p	5.4		7.5			写真図版 遺物18		
856	耐火煉瓦	縦	赤土表面		-		22.5	10.6	5.9	「チ C.K.R」縞刷スタンプ		

ガラス製品

X-no.	分類1	分類2	品名	発色	気泡	迷透	グリッド	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	備考
1	薬瓶	一般用薬瓶		透明でわずかに赤色	細かい気泡	046SD	IF17p	0.9	*3.9	1.1	
2	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF16n	1.2	4.2	2.8	
3	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF16n	1.2	4.0	2.9	
4	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	1.5	4.0	2.6	最大6.4
5	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	1.5	4.4	2.2	最大6.2
6	文具瓶	インク瓶	桜花にSK	透明でわずかに真黄色	なし	046SD	IF16r	1.5	3.8	2.6	桜花に「SK」
7	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	細かい気泡	046SD	IF16r	1.5	4.2	4.1	
8	薬瓶	薬瓶	兵士長	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	0.9	6.1	2.4	
9	薬瓶	一般用薬瓶	ヨヂュムエキ	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046D	IF17o	0.9	6.6	2.1	「ヨヂュムエ 東京高田製」
10	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	1.2	8.4	4.2	日産付き
11	薬瓶	一般用薬瓶	美蘇水	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	1.1~	7.4	2.6	「美蘇水」
12	薬瓶	一般用薬瓶	美蘇水	半透明で真黄色	わざかにあり	046SD	IF17p	1.2	9.2	3.5	「美蘇水」
13	薬瓶	医薬品瓶		透明でわずかに青緑色	なし	046SD	IF17q	2.1	8.2	3.6	
14	薬瓶	医薬品瓶	薬にY	透明でわずかに青緑色	わざかにあり	046SD	IF17o	1.9	7.9	3.4	
15	板ガラス	鏡		透明でわずかに青緑色	なし	046D	IF17p	6.4X	厚0.6	-	角形板ガラス。ヤマ錦色ガラス。
16	薬瓶	一般用薬瓶	全治ホ	透明でわずかに青色	わざかにあり	340SK	IF16n	0.9	7.1	2.2	「全治ホ」
17	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに青緑色	わざかにあり	340SK	IF16n	3.8	4.5	4.7	スクリュー栓
18	文具瓶	インク瓶		透明	わざかにあり	340SK	IF15n	3.8	4.6	4.5	スクリュー栓
19	文具瓶	インク瓶		半透明で青緑色	なし	340SK	IF15n	4.6	4.4	5.0	スクリュー栓
20	薬瓶	医薬品用薬瓶		透明でわずかに青緑色	わざかにあり	340SK	IF15n	1.0	6.8	2.7	日産付、コルク栓付属
21	栓	医薬品の栓		透明でわずかに黄緑色	わざかにあり	340SK	IF16n	4.3	3.5	1.7	下部錠 栓
22	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	細かい気泡	340SK	IF17n	外径3.2	6.5	4.6	
23	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに青緑色	わざかにあり	340SK	IF15n	1.4	4.7	4.0	
24	調剤料瓶	ソース瓶	ハナソース	透明でわずかに青緑色	わざかにあり	340SK	IF16n	1.7	14.9	3.6	「ハナソース 防毒瓶」
25	調剤料瓶	不透明調剤料瓶		透明でわずかに青緑色	なし	340SK	IF16n	2.0	16.4	4.5	
26	薬瓶	医薬品瓶	J.M.&C	透明でわずかに黄緑色	細かい気泡	0895D	IF16p	1.2	7.0	3.6	「J.M.C」
27	化粧瓶	不明		不透明で白色	なし	0895D	IF16p	2.6	8.0	4.4	松竹付、スクリュー栓
28	板ガラス	鏡		透明でわずかに青緑色	なし	0895D	IF16p	4.9	厚0.2	-	円形板ガラス
29	文具瓶	インク瓶	MARUISHIRO SHIYOKAI	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	0895D	IF16p	1.4	5.1	3.9	「MARUISHIRO SHIYOKAI」
30	化粧クリーム瓶	サンタニエ		透明で白色	なし	342SK	IF17s	3.9	3.8	4.8	スクリュー栓
31	板ガラス	白いシズ		透明でわずかに青緑色	なし	142SK	IF17s	7.5	厚0.7	-	
32	薬瓶	医薬品瓶	津生	透明でわずかに赤色	なし	088SD	IF16n	1.1	5.7	1.5	「津生」
33	薬瓶	医薬品瓶		透明でわずかに青色	なし	051SK	IF16t	1.0	4.5	1.7	
34	化粧瓶	不明	COMBI	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	185SK	IF17n	0.6	7.4	3.6	「TKONBU」
35	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに青色	わざかにあり	023SD	IF16n	2.3	6.3	5.5	
36	文具瓶	インク瓶	丸善	透明でわずかに青緑色	多くあり	072SK	IF15q	1.4	3.8	4.8	○に「TM」
37	板ガラス	鏡		透明でわずかに青緑色	なし	070SK	IF15t	6.0X 10.0	厚0.6	-	角形板ガラス
38	薬瓶	医薬品瓶		透明でわずかに真黄色	なし	127SK	IF15r	1.6	5.9	3.7	
39	薬瓶	医薬品瓶	下里	半透明で白色	わざかにあり	110SK	IF15n	1.3	6.4	2.2	
40	化粧瓶	化粧水瓶	ホーカー凍	透明でわずかに青色	わざかにあり	203SD	IF15r	1.4	9.8	3.2	「ホーカー凍 蝶々」
41	化粧瓶	化粧クリーム瓶		透明でわずかに青緑色	わざかにあり	333SK	IF15t	6.0	2.5	5.8	スクリュー栓、クリーム容器、スクリュー栓
42	化粧瓶	化粧クリーム瓶	MIDO	半透明で白色	なし	158SK	IF15q	3.9	4.9	3.8	
43	乳製品瓶	牛乳瓶	耀水	透明でわずかに青緑色	わざかにあり	376SD	IF15p	1.0	15.2	4.2	日産付
44	調剤料瓶	軟瓶		半透明で青緑色	わざかにあり	001SD	IF17s	1.7	18.0	5.4	
45	医薬品瓶	一助用薬瓶	タムシリト	半透明で白色	わざかにあり	021SD	IF15r	0.9	5.1	1.8	
46	医薬品瓶	一助用薬瓶	崎元水	透明でわずかに青緑色	多くあり	東邦トレンド	IF15t	0.9	5.7	2.5	
47	薬瓶	一助用薬瓶		透明でわずかに青緑色	わざかにあり	農研	IF15t	1.1	6.2	-	
48	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	復元	IF15,16 ,17n	1.0	7.8	4.2	日産付
49	化粧瓶	不明	ロマン	透明でわずかに赤色	なし	機出	IF16t	裏1.1	5.5	2.8	春水ボン、スクリュー栓、キャップ付
50	化粧瓶	化粧水瓶	TELLIME	不透明で白色	なし	北星便	IF15t	1.9	9.8	6.0	「TELLIME 80c.c.」、スクリュー栓
51	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに真黄色	わざかにあり	北星	IF15n	1.4	4.4	2.5	最大6.5
52	文具瓶	インク瓶		半透明で青色	わざかにあり	復元	IF15,16 ,17n	3.2,内 17n 裏1.9	6.0	4.7	
53	文具瓶	インク瓶	ふくのり	透明でわずかに真黄色	わざかにあり	復元	IF16n	1.4	4.4	2.5	最大4.6
54	文具瓶	糊瓶	ふくのり	半透明で真黄色	多くあり	北星便	IF15t	4.3	4.5	4.8	「ふくのり」春水、スクリュー栓
55	化粧瓶	化粧クリーム瓶		不透明で白色	なし	表錠	IF15t	4.0	4.6	3.8	スクリュー栓

その他 (骨製品)

X-no.	種類1	材質	長 (cm)	短 (cm)	(cm)	注意	グリッド	備考
56	曲ブラシ	骨か	14.2	幅1.1	厚0.7	089SD	#F16p	4列
57	曲ブラシ	骨か	14.0	幅1.3	厚0.7	027SK	#F15r	
58	曲ブラシ	骨か	13.7	幅1.2	厚0.9	047SD	#F15s	
59	曲ブラシ	骨か	12.7	幅1.1	厚0.6	089SD	#F16o	4列
60	曲ブラシ	骨か	*10.6	幅1.1	厚0.6	127SK	#F15r	4列、ブラシ部欠損
61	曲ブラシ	セルロイド	14.1	幅1.1	厚0.5	複乱	#F15n	4列 + ブラシ部削子 内外商株式会社
62	曲ブラシ	セルロイド	*9.8	幅*0.9	厚0.4	複乱	#F15n	4列 (SUPERIOR QUALITY)
63	ボタン	骨か	01.6	-	厚0.35	047SD	#F15s	

金属製品 (1)

M-no.	器種	種類	計測1 (cm)	計測2 (cm)	計測3 (cm)	通過	グリッド	取上no.	備考
1	鍔か	鉄製品	長16.0	幅1.0	厚1.0	606SD+上層	#F16q	處理no.111	
2	鍔頭	鉄製品	-	幅1.2	厚1.2	603SD	#F17r	399	未処理
3	鍔板	鉄製品	長9.5	幅1.4	厚0.3	389SK	#F15i	77	處理no.92
4	錆り金具	鉄製品	長4.6	幅3.5	厚0.3	389SK上層	#F15s	處理no.42	
5	鍔頭	鉄製品	長9.5	幅1.0	厚0.6	389SK	#F15s	114	處理no.11
6	鍔頭	鉄製品	幅5.7	幅1.5	厚0.1	389SK	#F15i	處理no.9	
7	鍔首	鉄製品	長1.8	幅1.8	厚0.8	389SK	#F15i	106	處理no.10
8	鍔状合鍔遺物	鉄製品	長6.2	幅2.0	厚1.2	389SK	#F15s	未処理	
9	鍔	鉄製品	長7.7	幅1.2	厚0.6	389SK	#F15i	未処理	
10	鍔	鉄製品	-	幅1.5	厚0.8	389SK	#F15i	未処理	
11	鍔	鉄製品	-	幅1.2	厚0.5	389SK	#F15i	未処理	
12	鍔	鉄製品	長9.5	幅2.0	厚0.6	466SE	#F15k	處理no.112	
13	鍔	鉄製品	長9.0	幅0.6	厚0.6	466SE	#F15k	處理no.112	
14	鍔	鉄製品	長5.1	幅1.0	厚0.6	466SE	#F15k	處理no.112	
15	鍔	鉄製品	長5.5	幅1.4	厚0.6	466SE	#F15k	處理no.112	
16	鍔首	鉄製品	長3.2	幅1.4	厚0.9	110SK	#F15t	處理no.5	
17	合鍔遺物	鉄製品	長7.0	幅2.4	厚0.9	110SK	#F15t	處理no.113	
18	鍔	鉄製品	長6.7	幅1.7	厚1.0	110SK	#F15t	處理no.113	
19	鍔	鉄製品	長4.0	幅0.9	厚0.7	110SK	#F15t	處理no.113	
20	鍔	鉄製品	長3.9	幅1.0	厚0.8	110SK	#F15t	處理no.113	
21	鍔	鉄製品	-	幅0.9	厚0.9	110SK	#F15t	處理no.113	
22	合鍔遺物	鉄製品	長7.1	幅2.2	厚1.0	110SK	#F16n	462	處理no.111
23	鍔頭	鉄製品	-	-	-	492SK	#F15p	467	處理no.13
24	鍔口	鉄製品	長7.9	幅1.0	-	087SD	#F17n	-	處理no.2
25	鍔か	鉄製品	幅2.7	厚0.5	-	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
26	鍔か	鉄製品	幅2.5	厚0.7	-	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
27	鍔溝	鉄製品	長4.5	幅4.0	厚1.5	492SK	#F15m	686	處理no.120
28	鍔	鉄製品	長7.3	幅1.2	厚0.6	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
29	鍔	鉄製品	長6.0	幅0.8	厚0.8	492SK (北西)	#F15m	-	未処理
30	鍔	鉄製品	-	幅1.0	厚0.6	492SK (北西)	#F15m	-	未処理
31	鍔	鉄製品	-	幅0.9	厚0.7	492SK (北西)	#F15m	-	未処理
32	鍔	鉄製品	長5.0	幅1.4	厚0.9	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
33	鍔	鉄製品	長3.9	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
34	鍔	鉄製品	長2.5	幅0.8	厚0.5	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
35	鍔	鉄製品	長2.6	幅1.0	厚0.7	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
36	鍔	鉄製品	長3.5	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
37	鍔	鉄製品	-	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
38	鍔	鉄製品	-	幅0.7	厚0.7	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
39	鍔	鉄製品	-	幅0.7	厚0.7	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
40	鍔	鉄製品	幅1.5	幅0.7	厚0.7	492SK (西ベルト)	#F15m	-	未処理
41	鍔頭 (周)	鉄製品	長11.4	幅0.9	厚0.9	045SD	#F17t	-	處理no.20
42	鍔頭 (一体型) か	鉄製品	-	幅0.7	厚0.3	046SD	#F17p	-	處理no.1
43	鍔口	鉄製品	長7.1	幅0.9	-	未上場所	-	-	處理no.15
44	フィゴの羽口	鉄製品	外径7.3	孔径7.3	厚3.1	110SK	#F15t	-	北陸トレレン
45	重複橢形鉄渾	金属	長8.1	幅6.2	厚3.6	604SD	#F16s	-	
46	重複橢形鉄渾	金属	長10.5	幅8.6	厚5.3	492SK	#F15m	426	
47	橢型鉄渾	鉄製品	長5.2	幅4.6	厚2.0	466SE	#F15k	-	處理no.112
48	重複橢形鉄渾	金属	長4.9	幅3.7	厚3.1	110SK	#F15t	-	
49	瓶	アルミ	15.0	3.5	8.0	340SX (赤褐色土)	#F16n	-	
50	瓶	アルミ	16.0	5.0	9.0	340SX (赤褐色土)	#F16n	-	
51	閉闇式ケース	鉄製品	長5.0	幅3.7	厚0.6	更翌トレレン	#F16t	-	處理no.64
52	記録留め具	鈎か	長3.8	幅1.2	厚0.6	606SD+上層黒色土	#F15q	-	處理no.32
53	錆状塊	鉄製品	長11.2	幅1.0	厚0.1	089SD	#F16p	-	處理no.109
54	ベルト金具	鉄製品	長4.0	幅4.0	厚0.1	376SK	#F15p	-	處理no.41
55	ベルト金具	鉄製品	長2.1	幅3.0	厚0.1	046SD	#F17p	-	處理no.1
56	ベルト金具	鉄製品	長1.9	幅2.5	厚0.1	264SK	#F17k	-	未処理
57	ベルト金具	鉄製品	長3.2	幅2.1	厚0.3	265SD	#F15r	-	處理no.31
58	錆状塊	鉄製品	徑2.5	厚0.1	-	089SD	#F16p	55	處理no.27
59	ボタン	鉄製品	徑2.4	厚0.8	-	340SX	#F15n	-	處理no.45
60	ボタン	鉄製品	徑2.3	厚0.6	-	127SK	#F15r	-	處理no.39

金属製品（2）

M-no.	種類	種別	計測1 (cm)	計測2 (cm)	計測3 (cm)	適格	グリッド	取上.no.	備考
61	ボタン大	鋼製品	径2.4	厚0.5	204SD	IF15r		机理.no.31	
62	ボタン	鋼製品	径2.3	厚0.6		機出II	IF16q		机理.no.53
63	ボタン	鋼製品	径2.4	厚0.6		機出II	IF16t		机理.no.64
64	ボタン	鋼製品	径2.0	厚0.5	340SX	IF15n		机理.no.45	
65	ボタン	鋼製品	径1.4	厚0.4		機出II	IF18q		机理.no.53
66	研磨口金具	鋼製品	径6.8	厚0.8	342SX	IF17r		机理.no.49	
67	研磨口金具	鋼製品	径5.7	厚0.8	127SK	IF15r		机理.no.39	
68	燈籠（一体型）	鋼製品	長11.5	幅0.9	厚0.9	機出II	IF15s		机理.no.19
69	燈籠（一体型）	鋼製品	長9.3	幅0.9	厚1.0	046SD	IF17p		机理.no.1
70	こしきの目金？	鋼製品	径11.0	厚0.1		機出II	IF14s		机理.no.103
71	L字計金	鋼製品	長13.0	幅0.1	387SK	IF15i	180	机理.no.88	
72	計金	鋼製品	長20.0	幅0.1	387SK	IF15i	639	机理.no.90	
73	計金	鋼製品	長9.4	幅0.2	085SK	IF15s,t		机理.no.86	
74	計金	鋼製品	長5.8	幅2.8	厚0.4	492SK	IF15m	350	机理.no.96
75	計金金具	鋼製品	長3.5	幅4.1	厚0.1	127SK	IF15r		机理.no.39
76	計金金具	鋼製品	長4.1	幅4.1	厚0.1	0260SA	IF18q		机理.no.40
77	計金ゲー	鋼製品	長1.0			機出II	IF17x		机理.no.105 「一等客室八号」 誌
78	計金	鋼製品	長6.7	幅4.0	厚0.6	342SK	IF17r		机理.no.49
79	計金	鋼製品	長5.6	幅0.4		118SK	IF17q		机理.no.38
80	計金金具	鋼製品	長4.9	幅0.5		機出II	IF16t		机理.no.51
81	計金？	鋼製品		幅1.5		340SX	IF15n		机理.no.47
82	計金？	鋼製品	長6.7	幅3.2	厚0.2	118SK	IF17p		机理.no.37
83	計金金具	鋼製品	長10.0	幅0.4		機出II	IF15p		机理.no.55
84	計金金具	鋼製品	長8.5	幅0.5	厚0.1	389SK	IF15i		机理.no.91
85	拍車	鋼製品	長12.0	幅5.8	厚1.2	機出II	IF16s		机理.no.61
86	拍車	鉄製品	長15.6	幅10.3	厚1.9	機出II	IF16s		机理.no.126
87	拍車	鉄製品	-	幅9.2	厚1.0	340SX (美緑色土)	IF16n		机理.no.122
88	合体	鉄製品	長8.1	幅2.7	厚2.3	089SD	IF16p		机理.no.108
89	自重	鉄製品	長21.6	幅17.2	厚1.0	046SD	IF16r		机理.no.107
90	角導	鉄製品	長26.6	幅2.2	厚2.0	413SK	IF16k	800	机理.no.143
91	脚軸	鉄製品	長12.5	幅12.2	厚1.0	機出II			机理.no.137
92	脚軸	鉄製品	長13.1	幅13.1	厚1.0	機出II			机理.no.137
93	脚軸	鉄製品	長12.4	幅6.6	厚0.8	機出II			机理.no.137
94	脚軸	鉄製品	長13.5	幅13.4	厚0.8	機出II			机理.no.137
95	脚軸	鉄製品	長14.7	幅14.1	厚1.0	機出II			机理.no.137
96	脚軸	鉄製品	長14.2	幅13.8	厚1.2	機出II			机理.no.130
97	脚軸	鉄製品	長14.1	-	厚1.1	089SD	IF16p		机理.no.138
98	脚軸	鉄製品	長15.0	幅12.2	厚1.4	285SK	IF17i		机理.no.116
99	脚軸	鉄製品	長12.5	幅11.8	厚1.1	機出II			机理.no.137
100	脚軸	鉄製品	長14.4	幅12.4	厚1.2	機出II			机理.no.136
101	真水通栓	鋼製品			294SD	IF17i			机理.no.66
102	真水通栓	鋼製品			149SK	IF16m			机理.no.68
103	真水通栓	鋼製品			387SK	IF15i	568		机理.no.76
104	真水通栓	鋼製品			329SK	IF16i			机理.no.71
105	真水通栓	鋼製品			204SK	IF15r			机理.no.70
106	真水通栓	鋼製品			381SK (4~7層)	IF16n			机理.no.72
107	真水通栓	鋼製品			387SK	IF15i	87		机理.no.73

石製品

S-no.	種類	石材	適格	グリッド	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	取上.no.
1	石頭	下呂石	118SK	IF17q	2.2	幅1.7	厚0.4	無基	
2	打割石斧	ホルンフェルス	605SD	IF17,1Br	11.2	幅4.2	厚1.3		779
3	基石		004SK	IF15t	幅2.2	厚0.6	-	白(磁器)型作り	
4	基石	凝灰質泥岩	095SK	IF17n	幅2.1	厚0.45	-	黒	
5	礫	真羽	432SK (上層)	IF15,1Br	*10.7	幅5.0	厚1.9		
6	礫	沈質基岩	122SK	IF15s	*5.5	幅6.1	厚1.6		
7	礫石	凝灰質泥岩	334SK	IF15s	4.1	幅2.2	厚1.3	研磨面三角形	398
8	礫石	凝灰質砂岩	088SD	IF16n,o	*7.3	幅6.1	厚2.4		
9	礫石	沈質基岩	389SK	IF15i	16.1	幅5.4	厚1.1		109
10	礫石	凝灰質泥岩	110SK	IF15t	*6.9	幅4.7	厚1.2		
11	礫石	沈質基岩	389SK (上層)	IF15i	*11.7	幅5.3	厚1.7		



1 調査区南東隅

(駐車場右側が南辺土塁、側を外堀がめぐる、
北西から)

2 調査区全景

(下面、戦国期の堀はベルトを残した状態、
西から)





3



4



5

3 戰国期の堀

(中央の南北溝が 605SD, 北から)

4 堀 (605SD 北壁での断面, 南から)

5 堀 (605SD ベルト断面, 北から)

6 溝 (606SD-e 地点断面, 南から)



7 上面 東半部分（戦国期の堀・区画溝の検出状況、北から）／8 溝（東西にのびる 603SD、東から）／
9 溝（南北にのびる 606SD,603SD と T 字に接続する、南から）／10 溝断面（603SD 東壁にて、西から）／
11 溝断面（606SD-a 地点、北から）／12 溝断面（606SD-c 地点、南から）



13 下面 完掘状況（戦国期の堀・区画溝、北東から）

14 溝断面（607SD、東から）

15 堀断面（606SD-f 地点北壁にて、南から）

16 溝完掘状況（607SD、西から）



17 屋敷境の溝と柱穴列
(496SD、画面左の壁面に境の済麻廻後に掘削された土坑 070SK,110SK がみえる、北から)
18 調査区北東隅壁面
(庶民土坑の重複が著しい、南から)



19 土坑完掘状況 (085SK、北から)
20 土坑遺物出土状況
(085SK ベルト南側部分、東から)



21 調査区北西部 廃棄土坑群

(瓦瀬 413SK は明治期、西から)

22 土坑 遺物出土状態

(492SK、北から)

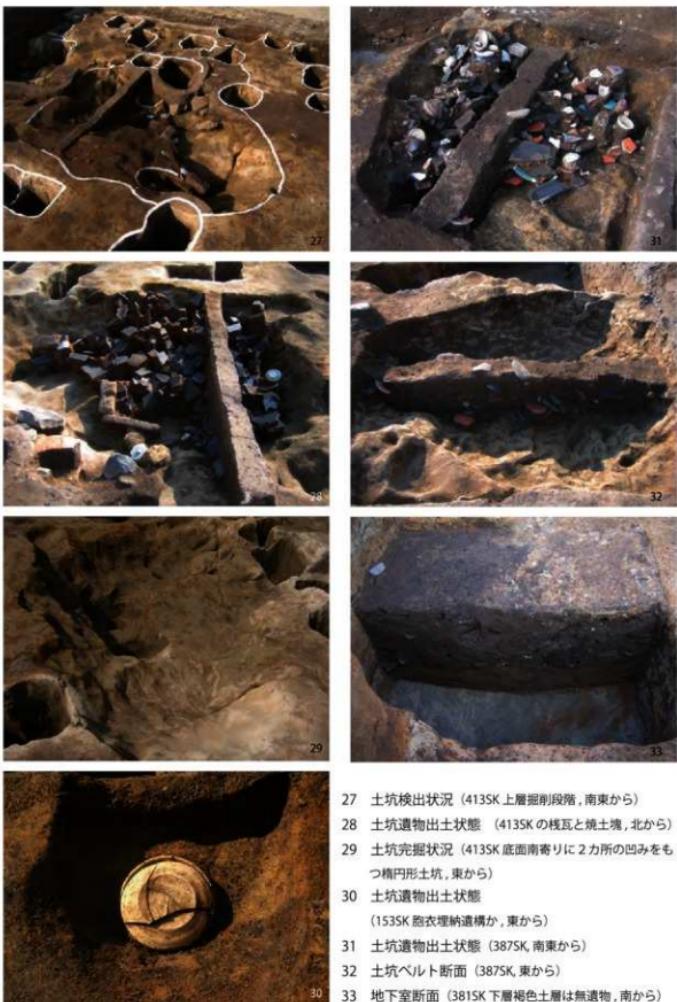
23 土坑断面 (389SK、南東から)

24 土坑完掘状況と調査区北壁
(387SK, 492SK 付近、南から)

25 土坑完掘状況と調査区北壁
(389SK、南から)

26 土坑遺物出土状態と壁面
(380SK、南から)







34 地下室完掘状況 (381SK, 南東から)

35 下層遺物出土状態 (381SK, 東から)



36



38



39



37



40



41



42



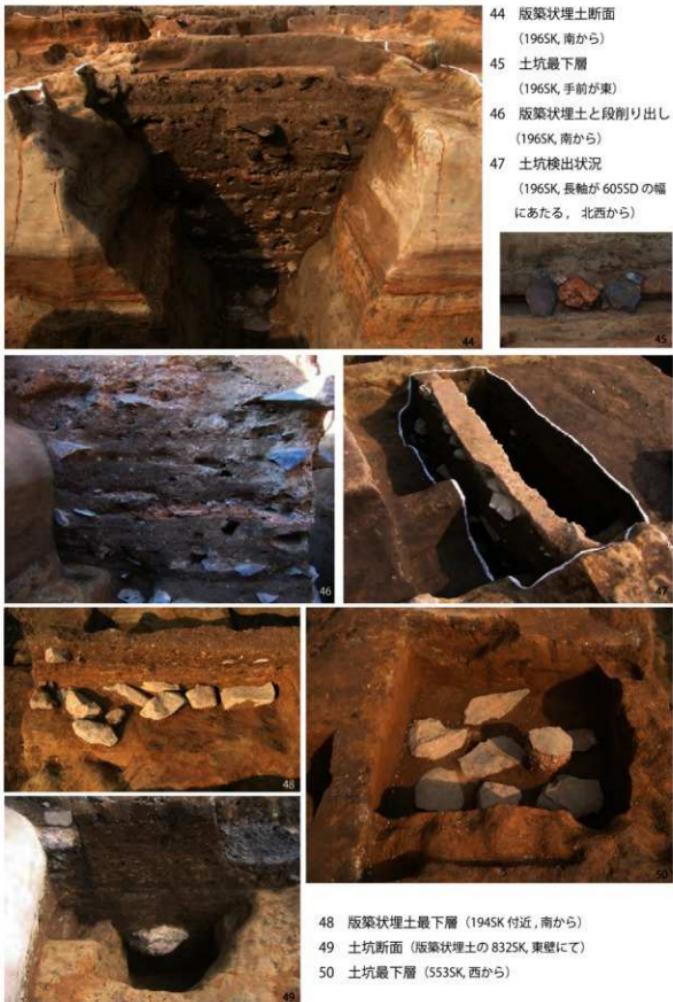
43

36 磚石を伴う土坑 (460SK, 北から) / 37 磚石を伴う土坑 (120SK, 北から)

38 磚石を伴う土坑 (326SK, 南から) / 39 磚石を伴う土坑 (412SK, 東から)

40 磚石を伴う土坑 (421SK, 東から) / 41 磚石を伴う土坑 (408SK, 南から)

42 磚石を伴う土坑 (409SK, 東から) / 43 磚石を伴う土坑 (495SK, 北から)





51 溝完掘状況 (026SD・027SD 重複, 東から)

52 溝断面 (東壁 026SD・027SD 付近, 西から)

53 調査区南東隅壁面 (西から)

54 調査区南壁面 (606SD 付近, 北から)

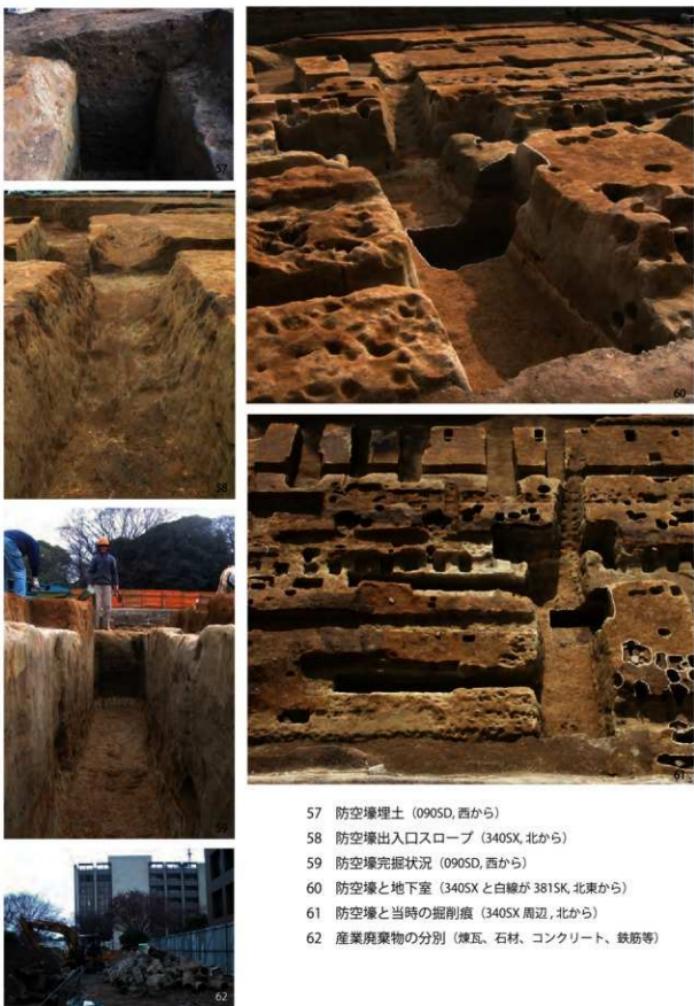


55 石材廃棄 掘出状況

(001SD・002SD, 北西から)

56 石材廃棄状況 部分 (001SD, 北から)



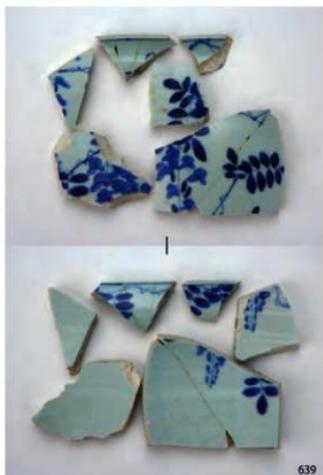












639



327



215



448



32



330



116



115





















721



385



726



856



789



474



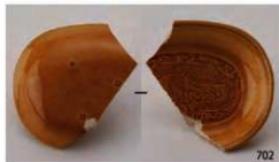
762



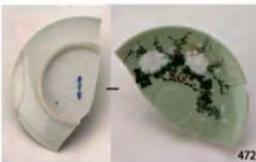
1



2



702



472











ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき							
書名	名古屋城三の丸遺跡 VIII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第161集							
編著者名	武部真木(編集)・鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭剛・藤山誠一・川添和曉							
編集機関	財團法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 調査期間	調査 面積 m ²	調査原因		
なごやじょう 名古屋城 さんのまる 三の丸	あいちはんなごやし 愛知県名古屋市 なか（さん）のまる 中区三の丸一丁目	23106	007027	35度 10分 43秒 (世界測地系による)	136度 53分 54秒 2006.11 ～2007.3	1,089 名古屋高等 ・地方・簡易 裁判所合 増築		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
名古屋城 三の丸遺跡	城館跡	戦国時代 江戸時代 近代	堀・区画溝・井戸 ・土坑・防空壕	近世陶磁器、土器 近代陶磁器 金属製品	旧陸軍関連遺構			
文書番号	発掘届出(18埋セ第37号) 通知(18教生第1275号) 終了届(18埋セ第105号) 発見届・保管証(18埋セ第105号) 監査結果通知(19教文第10-3号)							
要約	戦国期那古野城に開達する堀、溝等を確認し、近世では南面する武家屋敷の屋敷表の範囲、および道の一部が明らかになった。明治以降この地を占有した陸軍第三師団に開達する遺物、防空壕跡などを確認した。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集

名古屋城三の丸遺跡Ⅷ

2008年3月31日

編集・発行 財團法人愛知県教育・スポーツ振興財團
愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 新日本法規出版株式会社